

茨城県教育財団文化財調査報告第99集

(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

小山遺跡  
八幡前遺跡

平成7年3月

茨城県住宅供給公社  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第99集

(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

こ やま  
小山遺跡  
はちまんまえ  
八幡前遺跡

平成7年3月

茨城県住宅供給公社  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、国の全国総合開発計画のもとで進められている地方中核都市の育成整備に関連して、地方にとって住みよく、豊かな、しかも個性のある地域の振興を目指しています。その一環として茨城県住宅供給公社は、つくば学園都市に隣接し、筑波山の水と緑に恵まれた真壁町南椎尾地区に、住宅団地の建設を計画しました。建設予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県住宅供給公社から記録保存をするための調査の委託を受け、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成5年4月から9月にかけて調査を行った小山遺跡と八幡前遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として広く活用されますことを希望致します。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である茨城県住宅供給公社からいただいた御協力に対し、感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、真壁町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 磯田 勇

# 例 言

- 1 本書は、平成5年度に茨城県住宅供給公社の委託により、財団法人茨城県教育財団が調査を実施した真壁郡真壁町に所在する小山遺跡・八幡前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 小山遺跡、八幡前遺跡の調査及び整理に関する教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫	平成3年7月～平成6年3月	
	小 林 秀 文	平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
埋蔵文化財部部長代理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
	主任調査員	川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主任調査員	海老澤 稔	平成6年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	係 長	大 高 春 夫	平成6年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調査第一班長	小 泉 光 正	平成5年4月～平成6年3月
	主任調査員	上 野 修 生	平成5年4月～平成5年9月調査
	調 査 員	吹 野 富 美 夫	平成5年4月～平成5年9月調査
整 理 課	課 長	阿久津 久	平成5年4月～
	調 査 員	吹 野 富 美 夫	平成6年7月～平成7年3月整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第3章第2節「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 4 土器に塗彩された赤色顔料の同定について、大久保浩二氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター)に玉稿をいただいた。分析結果は付章として報告する。
- 5 本書の作成にあたり、齋藤孝正氏(文化庁)、藤原妃敏氏・森幸彦氏(福島県立博物館)、松本茂氏・吉田秀亮氏(福島県文化センター)、瓦吹堅氏・斎藤弘道氏(茨城県立歴史館)、比田井克仁氏(中野区立歴史民俗資料館)、柴山栄一氏・星龍象氏(真壁町歴史民俗資料館)、浅井哲也氏(太田第一高等学校)、鈴木素行氏・白石真理氏・佐々木義則氏・稲田健一氏(ひたちなか市文化・スポーツ振興公社)に御指導をいただいた。
- 6 出土遺物については、真壁町教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

8 遺跡の概略

ふりがな	(かしょう)まかべまちみなみしいおちくじゅうたくだんちじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書題	小山遺跡・八幡前遺跡							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	吹野 富美夫							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 0292(25)6587							
発行年月日	1995(平成7)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
こやまいせき 小山遺跡	まかべまちおおざいお 真壁町大字椎尾 あざこやま 字小山1998番地	08503	36度 14分 46秒	140度 4分 20秒	19930401 ～ 19930930	1,006	南椎尾地区住宅 団地開発事業に 伴う発掘調査	
はちまんまいせき 八幡前遺跡	まかべまちおおざいお 真壁町大字椎尾 あざはちまんまえ 字八幡前1756番 地					7,232		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小山遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	4軒	弥生式土器 紡錘車		平安時代の墨書土器	
	古墳	古墳時代	竪穴住居跡	1軒	土師器			
		平安時代	古墳	1基				
		平安時代	竪穴住居跡	4軒	土師器, 須恵器			
		時期不明	土坑	1基				
		時期不明	土坑	7基				
八幡前遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡	26軒	土師器, 須恵器		古墳時代の遺物包含層 古墳時代の置竈	
			竪穴遺構	2基	土製品(羽口, 土鈴)			
			土坑	20基	鉄製品(鉄斧)			
			井戸	1基	石製模造品			
		平安時代	溝状遺構	3条	土製模造品			
			平安時代	竪穴住居跡	3軒	土師器		平安時代の墨書土器
			時期不明	竪穴住居跡	5軒			
			土坑	42基				
井戸	3基							
		時期不明	溝	3条				

# 目 次

序	
例言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 地区設定と遺構・遺物の記載方法	7
第1節 地区設定	7
第2節 遺構・遺物の記載方法	7
第4章 小山遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 弥生時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
2 古墳時代の遺構と遺物	18
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 古墳	19
3 平安時代の遺構と遺物	22
(1) 竪穴住居跡	22
(2) 土坑	31
4 その他の遺構と遺物	32
(1) 土坑	32
(2) 溝	35
5 遺構外出土遺物	36
第4節 まとめ	41
第5章 八幡前遺跡	43
第1節 遺跡の概要	43
第2節 調査方法と基本層序	43
1 調査方法	43
2 基本層序	43
第3節 遺構と遺物	47
1 弥生時代の遺構と遺物	47

(1) 土坑	47
2 古墳時代の遺構と遺物	48
(1) 竪穴住居跡	48
(2) 竪穴遺構	106
(3) 土坑	120
(4) 井戸	142
(5) 溝状遺構	145
(6) 遺物包含層	148
3 平安時代の遺構と遺物	151
(1) 竪穴住居跡	151
4 その他の遺構と遺物	156
(1) 竪穴住居跡	156
(2) 土坑	160
(3) 井戸	166
(4) 溝	167
(5) 焼土遺構	168
5 遺構外出土遺物	169
第4節 まとめ	173
付章 自然科学分析	177
八幡前遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料について	177

写真図版

## 插图目次

第1图 周边遺跡分布图 …………… 4	第36图 第3号住居跡 …………… 50
第2图 調査区呼称方法概念图 …………… 7	第37图 第4号住居跡 …………… 51
第3图 小山・八幡前遺跡地区設定图 …………… 8	第38图 第5号住居跡 …………… 52
第4图 小山遺構配置图 …………… 10	第39图 第5号住居跡出土遺物 …………… 53
第5图 小山遺跡基本土層图 …………… 11	第40图 第6・7号住居跡(1) …………… 54
第6图 第1号住居跡 …………… 13	第41图 第6・7号住居跡(2) …………… 55
第7图 第1号住居跡出土遺物 …………… 13	第42图 第6号住居跡出土遺物(1) …………… 56
第8图 第2号住居跡 …………… 14	第43图 第6号住居跡出土遺物(2) …………… 57
第9图 第2号住居跡出土遺物 …………… 15	第44图 第6号住居跡出土遺物(3) …………… 58
第10图 第3・4号住居跡 …………… 16	第45图 第7号住居跡出土遺物 …………… 61
第11图 第3号住居跡出土遺物 …………… 17	第46图 第8号住居跡 …………… 63
第12图 第9号住居跡 …………… 17	第47图 第8号住居跡出土遺物 …………… 63
第13图 第4号住居跡出土遺物 …………… 19	第48图 第11号住居跡 …………… 64
第14图 第1号墳 …………… 20	第49图 第12・13号住居跡 …………… 66
第15图 第1号墳 …………… 21	第50图 第12号住居跡出土遺物 …………… 67
第16图 第1号墳出土遺物 …………… 22	第51图 第13号住居跡出土遺物 …………… 68
第17图 第5号住居跡 …………… 23	第52图 第18号住居跡 …………… 69
第18图 第5号住居跡出土遺物 …………… 24	第53图 第18号住居跡出土遺物 …………… 69
第19图 第6号住居跡 …………… 25	第54图 第19号住居跡 …………… 71
第20图 第6号住居跡出土遺物 …………… 26	第55图 第19号住居跡出土遺物 …………… 72
第21图 第7・8号住居跡 …………… 28	第56图 第20号住居跡 …………… 73
第22图 第7号住居跡出土遺物 …………… 29	第57图 第20号住居跡出土遺物 …………… 74
第23图 第8号住居跡出土遺物 …………… 30	第58图 第22号住居跡 …………… 75
第24图 第3号土坑・出土遺物 …………… 31	第59图 第22号住居跡出土遺物 …………… 76
第25图 土坑 …………… 33	第60图 第23号住居跡 …………… 77
第26图 第2・3号溝 …………… 36	第61图 第24号住居跡 …………… 78
第27图 遺構外出土遺物(1) …………… 37	第62图 第24号住居跡出土遺物 …………… 79
第28图 遺構外出土遺物(2) …………… 38	第63图 第25号住居跡 …………… 79
第29图 遺構外出土遺物(3) …………… 39	第64图 第27号住居跡 …………… 81
第30图 遺構外出土遺物(4) …………… 40	第65图 第27号住居跡出土遺物 …………… 81
第31图 八幡前遺構配置图 …………… 44	第66图 第28号住居跡 …………… 82
第32图 遺物包含層基本土層图 …………… 45・46	第67图 第28号住居跡出土遺物 …………… 83
第33图 八幡前遺跡基本土層图 …………… 47	第68图 第29号住居跡 …………… 85
第34图 第7号土坑・出土遺物 …………… 48	第69图 第29号住居跡出土遺物 …………… 86
第35图 第2号住居跡 …………… 49	第70图 第30号住居跡 …………… 88



第71图	第30号住居跡出土遺物(1)·····	89	第108图	第46号土坑・出土遺物·····	134
第72图	第30号住居跡出土遺物(2)·····	90	第109图	第52号土坑・出土遺物·····	135
第73图	第30号住居跡出土遺物(3)·····	91	第110图	第56・59号土坑・出土遺物·····	136
第74图	第31号住居跡·····	94	第111图	第61号土坑・出土遺物·····	137
第75图	第31号住居跡出土遺物(1)·····	95	第112图	第62号土坑・出土遺物·····	138
第76图	第31号住居跡出土遺物(2)·····	96	第113图	第66号土坑・出土遺物·····	139
第77图	第31号住居跡出土遺物(3)·····	97	第114图	第67号土坑・出土遺物·····	140
第78图	第33号住居跡·····	99	第115图	第69号土坑・出土遺物·····	141
第79图	第33号住居跡出土遺物·····	100	第116图	第1号井戸・出土遺物·····	142
第80图	第36号住居跡·····	100	第117图	溝状遺構(1)·····	144
第81图	第36号住居跡出土遺物·····	101	第118图	溝状遺構(2)·····	145
第82图	第37号住居跡·····	102	第119图	第3号溝状遺構出土遺物·····	145
第83图	第37号住居跡出土遺物·····	102	第120图	第5号溝状遺構出土遺物·····	147
第84图	第39号住居跡·····	103	第121图	遺物包含層·····	148
第85图	第39号住居跡出土遺物(1)·····	104	第122图	遺物包含層出土遺物(1)·····	149
第86图	第39号住居跡出土遺物(2)·····	105	第123图	遺物包含層(2)·····	150
第87图	第1号豎穴遺構·····	106	第124图	第1号住居跡·····	151
第88图	第1号豎穴遺構出土遺物·····	108	第125图	第1号住居跡出土遺物·····	152
第89图	第2号豎穴遺構·····	109	第126图	第16・17号住居跡·····	153
第90图	第2号豎穴遺構出土遺物(1)·····	111	第127图	第17号住居跡出土遺物·····	154
第91图	第2号豎穴遺構出土遺物(2)·····	112	第128图	第21号住居跡·····	155
第92图	第2号豎穴遺構出土遺物(3)·····	113	第129图	第21号住居跡出土遺物·····	156
第93图	第2号豎穴遺構出土遺物(4)·····	114	第130图	第9号住居跡·····	156
第94图	第2号豎穴遺構出土遺物(5)·····	115	第131图	第34号住居跡·····	158
第95图	第2号豎穴遺構出土遺物(6)·····	116	第132图	第35号住居跡·····	158
第96图	第2号豎穴遺構出土遺物(7)·····	117	第133图	第40号住居跡·····	159
第97图	第8号土坑・出土遺物·····	121	第134图	土坑(1)·····	162
第98图	第19号土坑・出土遺物·····	122	第135图	土坑(2)·····	163
第99图	第20号土坑・出土遺物·····	124	第136图	土坑(3)·····	164
第100图	第22号土坑・出土遺物·····	125	第137图	土坑(4)·····	165
第101图	第23・24号土坑・出土遺物·····	126	第138图	井戸·····	166
第102图	第30号土坑・出土遺物(1)·····	128	第139图	第1号溝·····	167
第103图	第30号土坑出土遺物(2)·····	129	第140图	第1号焼土遺構·····	168
第104图	第30号土坑出土遺物(3)·····	130	第141图	遺構外出土遺物(1)·····	169
第105图	第35・36号土坑・出土遺物·····	130	第142图	遺構外出土遺物(2)·····	170
第106图	第37号土坑・出土遺物·····	132	第143图	遺構外出土遺物(3)·····	171
第107图	第45号土坑・出土遺物·····	132			

## 表 目 次

表 1 小山遺跡・八幡前遺跡周辺遺跡一覧表 …… 5	表 4 土坑一覧表……………160
表 2 小山遺跡住居跡一覧表 ……30	表 5 井戸一覧表……………166
表 3 八幡前遺跡住居跡一覧表……………159	

## 写真図版目次

P L 1 遺跡周辺航空写真	P L 23 第46号土坑遺物出土状況, 第16号土坑土層断面
P L 2 小山遺跡遠景(北から), 小山遺跡全景	P L 24 第 8 号土坑遺物出土状況
P L 3 第 1 号住居跡全景, 第 2 号住居跡全景	第35・36号土坑土層断面
P L 4 第 3 号住居跡全景, 第 4 号住居跡全景	第49・60土坑全景
P L 5 第 5 号住居跡全景, 第 6 号住居跡全景	P L 25 第 2 号溝状遺構, 第 5 号溝状遺構
P L 6 第 7・8 号住居跡全景, 第 1 号墳周溝	P L 26 第 7 号土坑, 第 6・8・18・19・20号住居跡出土遺物
P L 7 第 2 号住居跡遺物出土状況, 第 5 号土坑全景, 第 3 号土坑遺物出土状況	P L 27 第 6・19・22・28・30号住居跡出土遺物
P L 8 第 1・2・6 号住居跡, 第 3 号土坑, 遺構外出土遺物	P L 28 第 8・28・30・31号住居跡出土遺物
P L 9 第 6・7・8 号住居跡, 第 1 号墳出土遺物	P L 29 第28・30・31号住居跡出土遺物
P L 10 八幡前遺跡全景(西から), 八幡前遺跡全景(東から)	P L 30 第30・31・33・36・37号住居跡出土遺物
P L 11 遺物包含層土層断面, 第 5 号住居跡全景	P L 31 第31・37・39号住居跡出土遺物
P L 12 第 6・7 号住居跡全景, 第 6 号住居跡P <sub>1</sub> 遺物出土状況	P L 32 第31号住居跡, 第 1 号竪穴遺構出土遺物
P L 13 第19号住居跡全景, 第20号住居跡全景	P L 33 第39号住居跡, 第 1 号竪穴遺構出土遺物
P L 14 第22号住居跡全景, 第24号住居跡全景	P L 34 第 1・2 号竪穴遺構出土遺物
P L 15 第25号住居跡全景, 第28号住居跡全景	P L 35 第 2 号竪穴遺構出土遺物
P L 16 第30号住居跡全景, 第30号住居跡竈	P L 36 第 2 号竪穴遺構出土遺物
P L 17 第31号住居跡全景, 第31号住居跡竈	P L 37 第 2 号竪穴遺構出土遺物
P L 18 第17号住居跡全景, 第21号住居跡全景	P L 38 第23・30・35・45号土坑出土遺物
P L 19 第 9 号住居跡全景, 第 2 号竪穴遺構全景	P L 39 第19・45・46・52・56・62土坑, 第 5 号溝出土遺物
P L 20 第 1 号竪穴遺構遺物出土状況	P L 40 第 3・5 号溝状遺構, 遺物包含層, 第 1・17 号住居跡, 第 1 号井戸, 遺構外出土遺物
P L 21 第 2 号竪穴遺構遺物出土状況	
P L 22 第19号土坑遺物出土状況, 第30号土坑遺物出土状況	



上 作業風景(小山遺跡), 下 作業風景(八幡前遺跡)

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、国の全国総合開発計画のもとで進められている地方中核都市の育成整備について、地方にとって住みよく、豊かな、しかも個性のある地域振興が図らなければならないと考えている。真壁町は、中世以降真壁城を中心として栄え、今日では地方の中核都市であるつくば学園都市に隣接して発展しているため、水と緑豊かな真壁町にふさわしい街づくりが必要となってきた。そこで、茨城県住宅供給公社は、真壁町椎尾に住宅団地建設の計画を立案した。

茨城県住宅供給公社は、平成4年4月9日、真壁町教育委員会に対し南椎尾地区住宅団地建設予定地内における「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」の照会をした。真壁町教育委員会は、茨城県教育委員会へその対応を依頼した。これに対し、茨城県教育委員会は4月に現地踏査を5月に試掘調査を実施し、その結果、開発予定地内に小山遺跡(1,006㎡)と八幡前遺跡(7,232㎡)の存在を確認した。茨城県教育委員会は、平成4年6月25日に真壁町教育委員会を通じ、小山遺跡と八幡前遺跡が存在する旨を茨城県住宅供給公社に回答した。茨城県住宅供給公社は、平成4年12月8日、茨城県教育委員会にその取り扱いについての協議を求めた。茨城県教育委員会は、平成5年1月8日、茨城県住宅供給公社に対し現状保存が困難であることから記録保存をする旨の回答を行い、埋蔵文化財の調査機関として茨城県教育財団を紹介した。

茨城県住宅供給公社と茨城県教育財団は、小山遺跡と八幡前遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、平成5年4月から9月まで小山遺跡と八幡前遺跡の発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

小山遺跡と八幡前遺跡の発掘調査は、平成5年4月1日から平成5年9月30日までの半年間にわたって実施した。以下、調査経過の概要について記述する。

- 4月上旬 発掘調査を開始するための諸準備を行う。現場事務所や倉庫の設置・調査器材の搬入・作業員募集等を実施する。13日から作業員を投入して、諸施設の整備・小山遺跡と八幡前遺跡の伐開作業を開始した。
- 4月下旬 16日に八幡前遺跡において、発掘調査の円滑な推進と安全を祈願して、鍬入れ式を挙行了た。同日午後より、試掘調査を開始する。その結果、小山遺跡では、弥生時代の住居跡の他、微高地を巡るように弧状の溝が確認された。八幡前遺跡では、多数の住居跡の他、広範囲に堆積している遺物包含層が確認された。
- 5月上旬 小山遺跡は表土が10～12cmと浅く、重機を導入すると遺構が破壊される恐れがあるため、人力による表土除去及び遺構確認調査を実施した。弧状の溝は古墳の周溝であり、その覆土中に平安時代の住居跡3軒がつけられていることを確認する。
- 5月下旬 17日より、八幡前遺跡において重機による表土除去及び遺構確認調査を開始した。遺物包含層については、土層観察用のベルトを残し調査を進めた。遺物包含層の最深部は地表から2 mに達し、古墳時代の遺物を多量に包含していることを確認する。

- 6月上旬 2日より小山遺跡の遺構調査を開始する。降雨により現場作業を中止する日が多く調査の進行が滞る。4日には基準点の測量杭打ちを委託して実施する。
- 6月下旬 22日より小山遺跡の遺構調査に並行して、八幡前遺跡の遺構調査を開始する。
- 7月上旬 八幡前遺跡の遺物包含層上層を調査中、住居跡等の遺構を確認する。遺物包含層中の遺構調査後、さらに下層を調査することになる。
- 7月下旬 八幡前遺跡の遺物包含層下層の状況を確認するため重機でサブトレンチを入れ基底面まで掘り込んだ。その結果、住居跡2軒、竪穴遺構1基、土坑3基を確認する。
- 8月上旬 小山遺跡の調査は、補足調査を除いて12日に終了する。八幡前の調査は住居跡10軒台に進み、溝の調査も開始した。
- 8月下旬 八幡前遺跡の調査は住居跡20軒台に進み、土坑の調査を開始する。土坑は古墳時代後期のものが多く土師器等が多量に出土した。
- 9月上旬 八幡前遺跡の調査は住居跡30軒台に進む。雨天の日が多く、標高の低い調査区南部に位置する遺構の底面からは水が湧き、調査の支障となる。11日には八幡前遺跡において現地説明会を実施する。
- 9月下旬 20日には航空写真撮影を実施し、27日から撤収作業の準備を開始する。28日には遺構調査が終了した。現場事務所では諸帳簿や諸記録の点検、調査区では安全対策を行い、30日には現場事務所を閉鎖した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

小山遺跡と八幡前遺跡は、真壁町椎尾に所在する。真壁町は、茨城県の中西部を南北に連なる筑波山塊の西側にあり、真壁台地の中央部に位置する。町域は、東西約8km、南北約8kmで、面積は63.66km<sup>2</sup>である。東は八郷町、西は協和町と明野町、南はつくば市、北は大和村に接している。

真壁町は桜川の中流域にあたり、観音川をはじめとする支流が桜川にそそいでいる。真壁町の地形は、東から筑波山塊・筑波山西縁丘陵・山麓緩斜面・筑波山西縁台地・桜川低地・真壁台地に分けることができる。

筑波山塊は、八溝山地の南部に位置し、茨城県のほぼ中央部を南北に走る山塊である。筑波山塊の最高峰は、標高875.9mの筑波山で、双耳の孤立峰としてひときわ高くそびえている。筑波山を構成するのは、白亜紀に貫入した深成岩類である。標高500m以上の頂上付近には角閃ハンレイ岩が、中腹から丘陵部には筑波型花崗岩が分布する。

小山遺跡と八幡前遺跡が立地するのは、桜川左岸にある筑波山塊西縁台地の第1中位段丘である。その構成層は、シルトの薄層を挟む河成砂礫層で、その上を中部に鹿沼パミス層（KP）のみられる関東ローム層がおおっている。台地縁辺部は、鹿沼軽石層を含む関東ローム層の下部まで侵食されている部分が多い。

両遺跡が立地する台地縁辺部には、桜川にむけて開口する小支谷が入り込んでおり、谷を挟んで南に小山遺跡が北に八幡前遺跡が分布している。小山遺跡の調査区は、標高32～34mの舌状台地先端部に位置し、尾根状の残丘地形となっている。遺跡西側の台地下は桜川低地であり、台地と低地との比高差は約6mである。八幡前遺跡の調査区は、標高30～34mの舌状台地南縁部に位置し、北が高く南にむかって緩やかに傾斜している。遺跡周辺の現況は、台地上は畑、谷地は水田として利用されている。

#### 参考文献

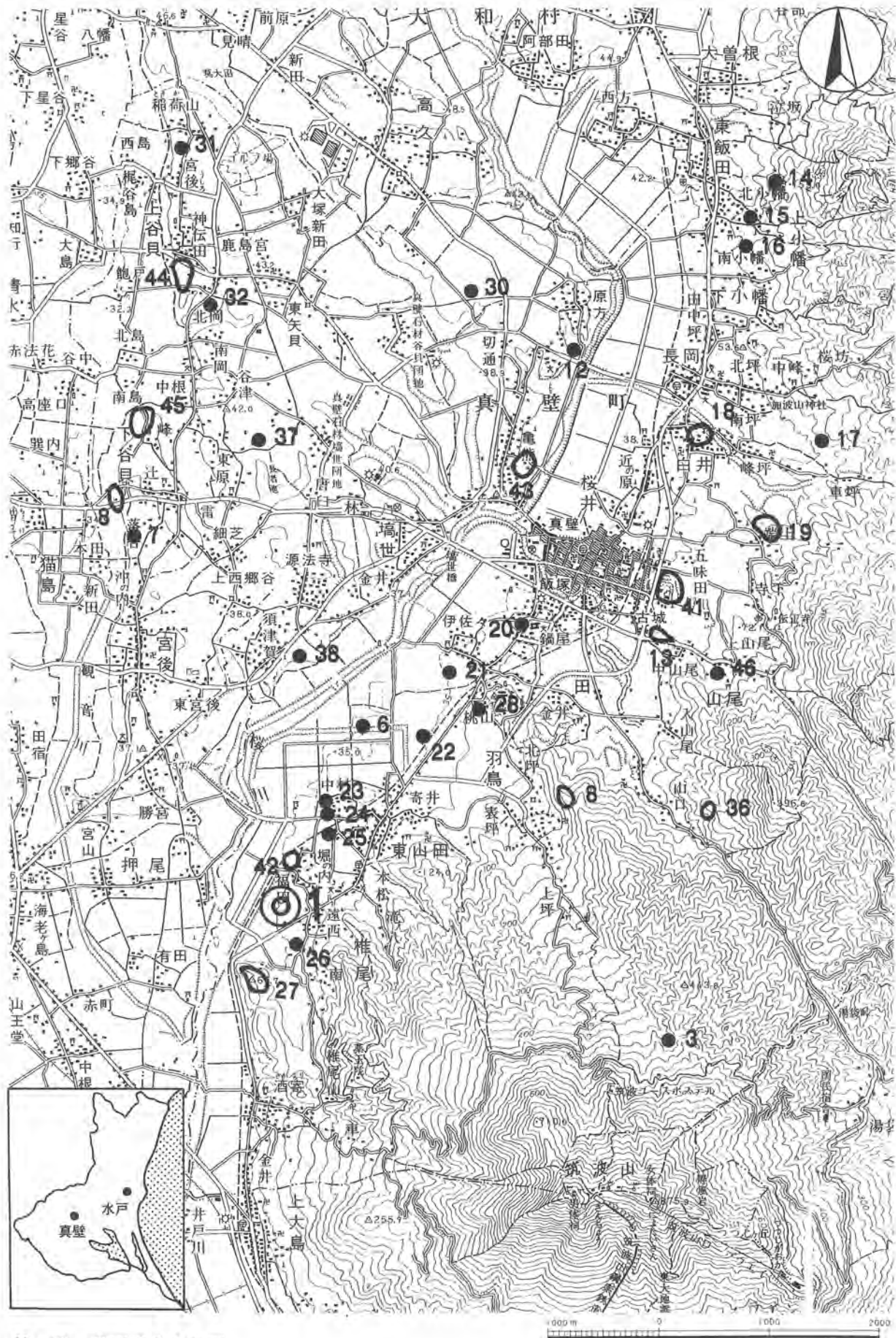
- (1) 茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 真壁』 1983年 1月

### 第2節 歴史的環境

真壁町は、『茨城県遺跡地図<sup>(1)</sup>』によると38遺跡が分布している。しかし現在までのところ、真壁町内の遺跡調査発掘例は少ない。1980年に真壁町史編纂委員会により御祓立場遺跡<sup>(2)</sup>の発掘調査が行われたのが最初である。そのほか、1981年に真壁城跡発掘調査会により真壁城本丸跡<sup>(3)</sup>が、同年真壁町教育委員会により、高内遺跡<sup>(4)</sup>と熊の宮遺跡<sup>(5)</sup>の調査が実施されている。

旧石器時代の遺跡としては、今まで真壁町内に確認されていない。近隣の調査された遺跡としては、関城町西原遺跡<sup>(6)</sup><2>がある。西原遺跡のソフトローム層から頁岩製の石核や剥片等が出土している。

縄文時代の遺跡は、9遺跡が確認されている。早期の遺跡としては、山麓緩斜面に立地する御祓立場遺跡<3>がある。御祓立場遺跡は、標高約400mの筑波山山麓涌水点の凹地に位置し、田戸下層式土器と茅山下層式土器等が出土している。前期から後期にかけての遺跡は台地上あるいは低地に立地している。東塚遺跡<4>からは前期の諸磯式土器が、日月遺跡<5>・鞆戸遺跡<6>・太夫台遺跡<7>・高内遺跡<8>・長者池遺跡<9>・平塚



第1図 周辺遺跡分布図

表1 小山遺跡・八幡前遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代						番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代					
			旧	縄	弥	古	奈平	鎌室				旧	縄	弥	古	奈平	鎌室
1	小山・八幡前遺跡	(当遺跡)	○	○	○	○	○	○	24	仙原塚古墳	2294				○		
2	西原遺跡		○	○	○	○			25	北原古墳	2295				○		
3	御祓立場遺跡	6238		○					26	大柳古墳	2296				○		
4	東塚遺跡			○					27	松石古墳群	2297				○		
5	日月遺跡	2300		○	○		○		28	羽鳥天神塚古墳群	2298				○		
6	鞆戸遺跡	2301		○	○				29	元寺家古墳群	4034				○		
7	太夫台遺跡	2302		○	○				30	原方の円境塚	2280				○		
8	高内遺跡	2303		○	○				31	八幡山古墳	2287				○		
9	長者池遺跡			○					32	鹿島宮古墳	2288				○		
10	平塚遺跡			○					33	三の塚古墳	2289				○		
11	酒寄遺跡			○					34	桜塚古墳					○		
12	熊の宮遺跡	2299			○	○			35	甲山古墳					○		
13	中坪遺跡	6237				○			36	山尾権現山廃寺	6239					○	○
14	若林古墳群	2281				○			37	下谷貝廃寺	2305					○	
15	車塚古墳	2281				○			38	源法院廃寺	2304					○	
16	十石塚古墳	2283				○			39	日月廃寺	2306					○	
17	隠坊塚古墳	2284				○			40	平良兼館跡	2308					○	
18	白井中坪古墳群	2285				○			41	真壁城跡	2307						○
19	端上古墳群	2286				○			42	椎尾城跡	2309						○
20	おふじ権現古墳	2290				○			43	亀熊城跡	2310						○
21	吾妻塚古墳	2291				○			44	谷貝城跡	2311						○
22	平塚古墳	2292				○			45	谷貝峯城跡	2312						○
23	北椎尾天神塚古墳	2293				○			46	真壁氏墓地	6236						○

遺跡<10>からは中期の加曾利E式土器が、酒寄遺跡<11>からは後期の加曾利B式土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、熊の宮遺跡<12>・中坪遺跡<13>・日月遺跡<5>・鞆戸遺跡<6>・太夫台遺跡<7>・高内遺跡<8>が確認されている。熊の宮遺跡では後期の住居跡2軒が調査されている。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。特に古墳及び古墳群が多く、真壁町内だけで20遺跡ある。真壁町における古墳及び古墳群は、加波山西麓群・筑波山北麓群・観音川流域群の3群に分けることができる。加波山西麓群には、若林古墳群<14>・車塚古墳<15>・十石塚古墳<16>・隠坊塚古墳<17>・白井中坪古墳群<18>端上古墳群<19>がある。筑波山北麓群には、おふじ権現古墳<20>・吾妻塚古墳<21>・平塚古墳<22>・北椎尾天神塚古墳<23>・仙原塚古墳<24>・北原古墳<25>・大柳古墳<26>・松石古墳群<27>・羽鳥天神塚古墳<28>・元寺家古墳群<29>がある。観音川流域群には原方の円境塚<30>・八幡山古墳<31>・鹿島宮古墳<32>・三の塚古墳<33>があ



る。今回調査した小山遺跡は、大柳古墳<26>と同じ台地上にあり、古墳群が形成されていたことが考えられる。

近隣の調査された古墳としては、つくば市桜塚古墳<34>とつくば市甲山古墳<35>がある。<sup>(7)</sup>桜塚古墳は全長約30mの前方後円墳で、内部主体は長大な割竹形木棺を内蔵する粘土槨である。埴輪および葺石等は確認されていない。棺内からは、鏡・勾玉・管玉・ガラス製小玉・琥珀製丸玉・石釧・短剣・編物等が出土している。甲山古墳は、直径30mの円墳である。主体部は箱式石棺で、2基がL字形に配列されている。棺内からは、直刀・鉄鎌・刀子・ガラス小玉・滑石製白玉・青銅製鋌金具等が出土している。

古墳時代の集落跡の調査例は極めて少なく、熊の宮遺跡<12>で4軒の竪穴住居跡が確認されたのみである。出土した土器は、甕・坏・高坏・埴・器台で、古墳時代中期に比定されている。

奈良・平安時代には、寺院跡や城館跡がみられる。寺院跡には山尾権現山廃寺<36>・下谷貝廃寺<37>・源法院廃寺<38>がある。山尾権現山廃寺では、1980年に地表面のみの確認調査が実施されており、中門・金堂・講堂・塔といった主要伽藍の礎石が確認されている。下谷貝廃寺では新治廃寺と同範の軒丸瓦が出土している。源法院廃寺からは、<sup>(10)</sup>熨斗瓦が多く出土している。日月廃寺<39>については、源法寺廃寺に伴う瓦窯跡の可能性がある。城館跡には、平良兼の館とされる平良兼館跡<40>がある。

鎌倉・室町時代には、真壁城跡<41>を中心に城館跡等がつくられる。真壁城跡の関連遺跡としては、椎尾城跡<42>・亀熊城跡<43>・谷貝城跡<44>・谷貝峯城跡<45>・山尾権現山廃寺跡<36>がある。真壁城については、1174年(承安3年)に多気重幹の四男真壁六郎長幹が入部したとの説があり、それ以降から1602年(慶長7年)に十七代房幹が出羽角館に移されるまで真壁氏の居城であった。また、1981年の本丸跡調査では、本丸内に堀が確認され改築されたことが判明している。

明治時代以降、真壁町は石材産地としての地位を確立し、近年では石材加工産業の町として発展している。

※ 遺跡名の次の〈 〉内の数字は、表1・第1図の該当遺跡番号と同じである。

## 註・参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年 3月
- (2) 真壁町史編纂委員会 『真壁町史料 考古資料編Ⅰ』 1980年 10月
- (3) 真壁城跡発掘調査会 『真壁城跡』 1983年 3月
- (4) 真壁町史編纂委員会 『真壁町史料 考古資料編Ⅱ』 1982年 12月
- (5) 真壁町教育委員会 『熊の宮遺跡発掘調査報告書』 1984年 3月
- (6) 関城町教育委員会 『西原遺跡発掘調査報告書』 1988年 3月
- (7) 筑波大学 『筑波古代地域史の研究』 1982年 3月
- (8) 真壁町史編纂委員会 『真壁町史料 考古資料編Ⅲ』 1989年
- (9) 高井梯三郎 『常陸國新治郡上代遺跡の研究』 1944年
- (10) 茨城県立歴史館 「茨城県における古代瓦の研究」『学術調査報告書4』 1994年 3月

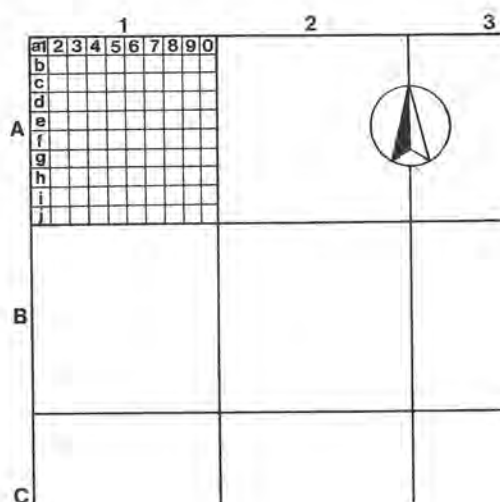
## 第3章 地区設定と遺構・遺物の記載方法

### 第1節 地区設定

小山遺跡・八幡前遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し、X軸(南北)27,520m、Y軸(東西)21,400mの交点を基準とし、この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a<sub>1</sub>区」、「B2b<sub>2</sub>区」のように呼称した。

なお、基準点の杭打ち測量は、財団法人茨城県建設技術公社に委託して実施した。



第2図 調査区呼称方法概念図

### 第2節 遺構・遺物の記載方法

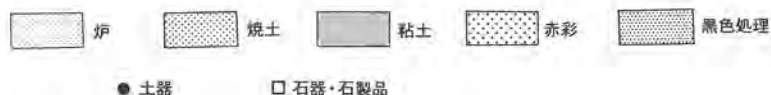
本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

#### (1) 使用記号

遺構 住居跡—S I 竪穴遺構—S X 土坑—S K 井戸—S E 溝状遺構・溝—S D 焼土遺構—F  
ピット—P r

遺物 土器—P 土製品—D P 石器・石製品—Q 金属製品—M 拓本土器—T P

#### (2) 遺構・遺物の実測図中の表示

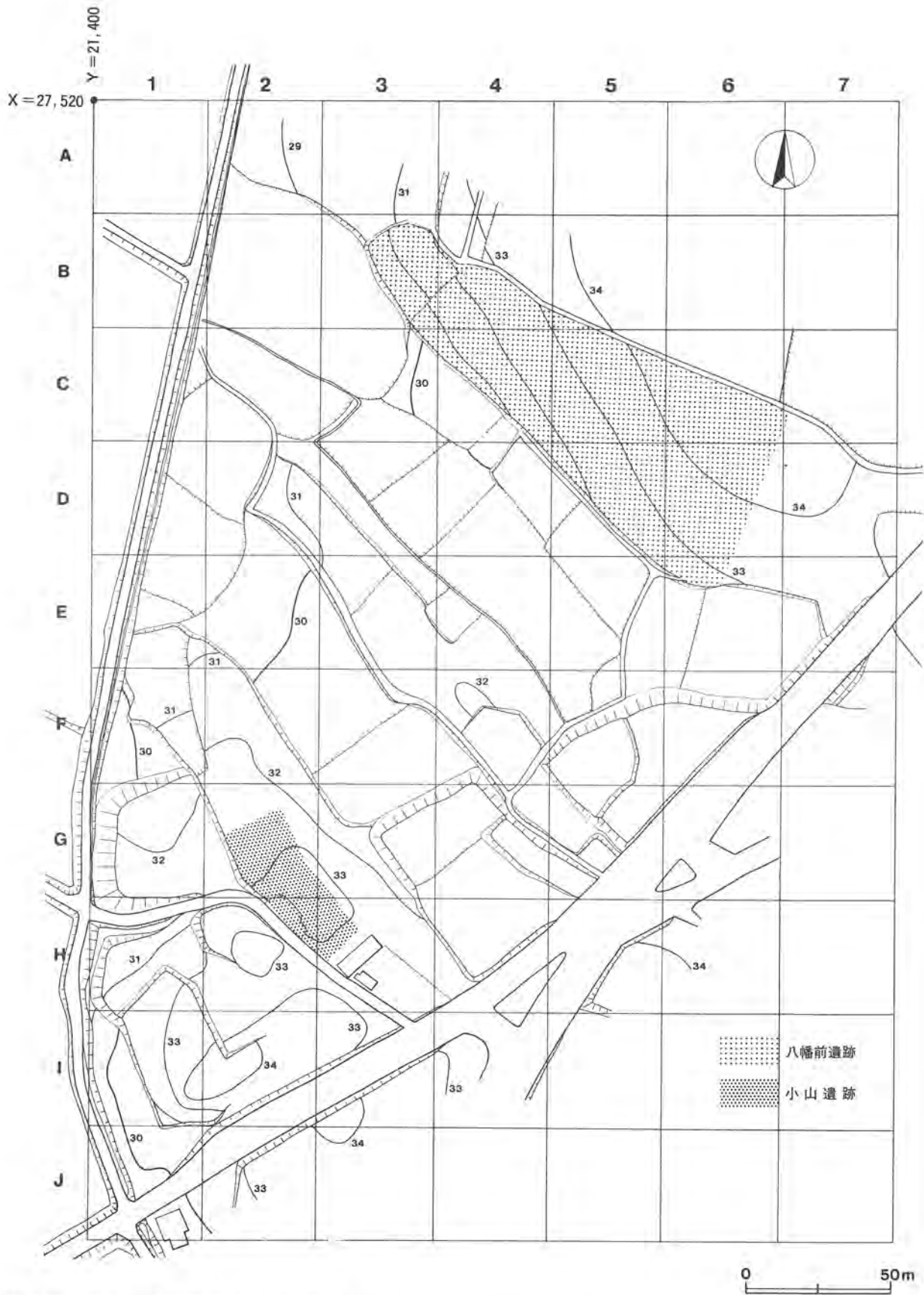


#### (3) 土層の分類

土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。

#### (4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

- ① 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- ② 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にスケールで表示した。
- ③ 「主軸方向」は、炉・竈をとおる軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北



第3図 小山・八幡前遺跡地区設定図

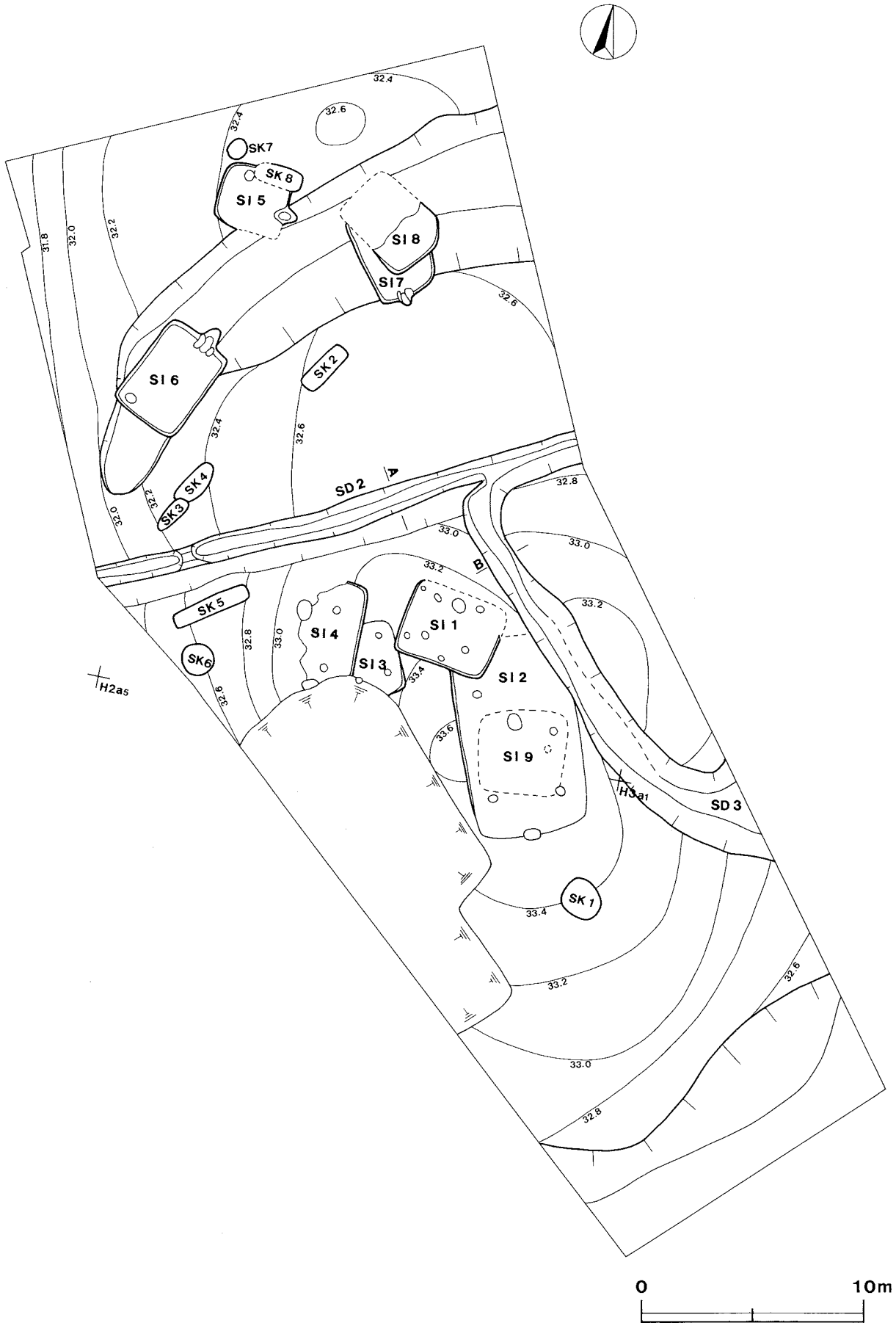
からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

(例 N-10°-E, N-10°-W) なお, [ ] を付したものは推定である。

- ④ 計測値は, A-口径 B-器高 C-底径 D-高台・脚部径 E-高台・脚部高 F-胴部径とし, 単位はcmである。なお, 現存値は ( ) で, 推定値は [ ] を付して示した。



八幡前遺跡 (南から)



第4図 小山遺構配置図（等高線は基底面の標高）

# 第4章 小山遺跡

## 第1節 遺跡の概要

小山遺跡は、桜川左岸にある筑波山塊西縁台地の第1段丘に立地する、弥生時代から平安時代にかけての集落跡及び古墳である。今回の調査区は、南北約50m、東西約20m、面積1,006㎡で、舌状台地の先端部に位置している。現況は雑種地で、最近まで畑として利用されていた。西側の低地は水田であり、台地との比高は6mである。また、北側の谷津の対岸に八幡前遺跡が隣接している。

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡4軒、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡4軒、古墳1基、土坑8基、溝2条である。古墳は墳丘がすでになく、平安時代の竪穴住居跡は古墳周溝の覆土中につくられている。

出土遺物は、縄文土器片28点、弥生土器片1430点、埴輪片5点、土師器片2241点、須恵器片20点、土師質土器片3点、陶磁器24点、石器22点、古銭3点、鉄滓2点が出土している。旧石器時代の遺物は遺構外遺物としてナイフ形石器と剥片が、弥生時代の遺物は広口壺や紡錘車が、古墳時代の遺物は甕・壺・坏・埴輪が、平安時代の遺物は甕・長頸瓶・坏（墨書土器）などが出土している。

## 第2節 基本層序

小山遺跡の北側平坦部（G2c<sub>1</sub>区）にテストピットを設け、深さ約1.5mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した。遺構確認面及び土取り部断面を観察すると、標高33.20m付近に鹿沼パミス（KP）が堆積しており、それ以下の標高のところでは流失している。今回調査したテストピットには、標高が低いため鹿沼パミスは確認できなかった。なお、V層からXII層まではハードローム層であるが、色調・含有物・粘性により細分した。

第I層 暗褐色土。礫粒を中量含む。さらに、耕作土(a)と暗褐色土(b)に分けることができる。

第II層 褐色土。ローム粒を多量含む。

第III層 褐色ローム。

第IV層 鹿沼パミス

第V層 褐色ローム。VI層との境は不整合である。

第VI層 黄褐色ローム。V層より粘性がある。

第VII層 褐色ローム。白色スコリアを含む。VI層より粘性がある。

第VIII層 黄褐色ローム。VII層より硬質で、粘性がある。

第IX層 黄褐色ローム。VIII層より色調が明るい。

第X層 褐色ローム。礫粒を少量含む。

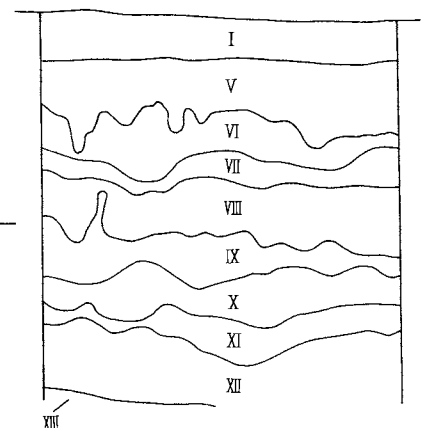
第XI層 にぶい黄褐色ローム。スコリアを含む。

第XII層 にぶい黄褐色ローム。小礫・スコリアを多量含む。

第XIII層 灰オリーブ色粘土。雲母・礫粒を多量含む。

32.7m —

31.7 —



第5図 小山遺跡基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡4軒が確認された。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

##### (1) 竪穴住居跡

###### 第1号住居跡（第6図）

位置 調査区の中央部，G2i<sub>s</sub>区。

重複関係 本跡は、第2・3号住居跡と重複している。本跡が第2・3号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.36m，短軸(3.64)mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は最深部が18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁は流失している。

壁溝 西壁下と南壁下の一部に付設している。上幅8～28cm，深さ4～6cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦であり、中央部付近を特に踏み固めている。北側の一部は流失している。

ピット 7ヶ所（P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径28～40cmの円形で、深さ44～75cmである。規模や配列から、支柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は、底面が双円形であることから、柱を立て直した可能性がある。P<sub>5</sub>は、径28cmの円形で、深さ30cmである。P<sub>5</sub>は、南壁際中央に位置することから出入りロピットと考えられる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は、径24～30cmの円形で、深さ29～35cmである。深度が浅く、西壁際に位置することから、補助柱穴と考えられる。

炉 1ヶ所。床面中央部北壁寄りに付設する地床炉である。暗赤褐色の焼土が4cm程堆積しており、炉床面は赤変硬化している。

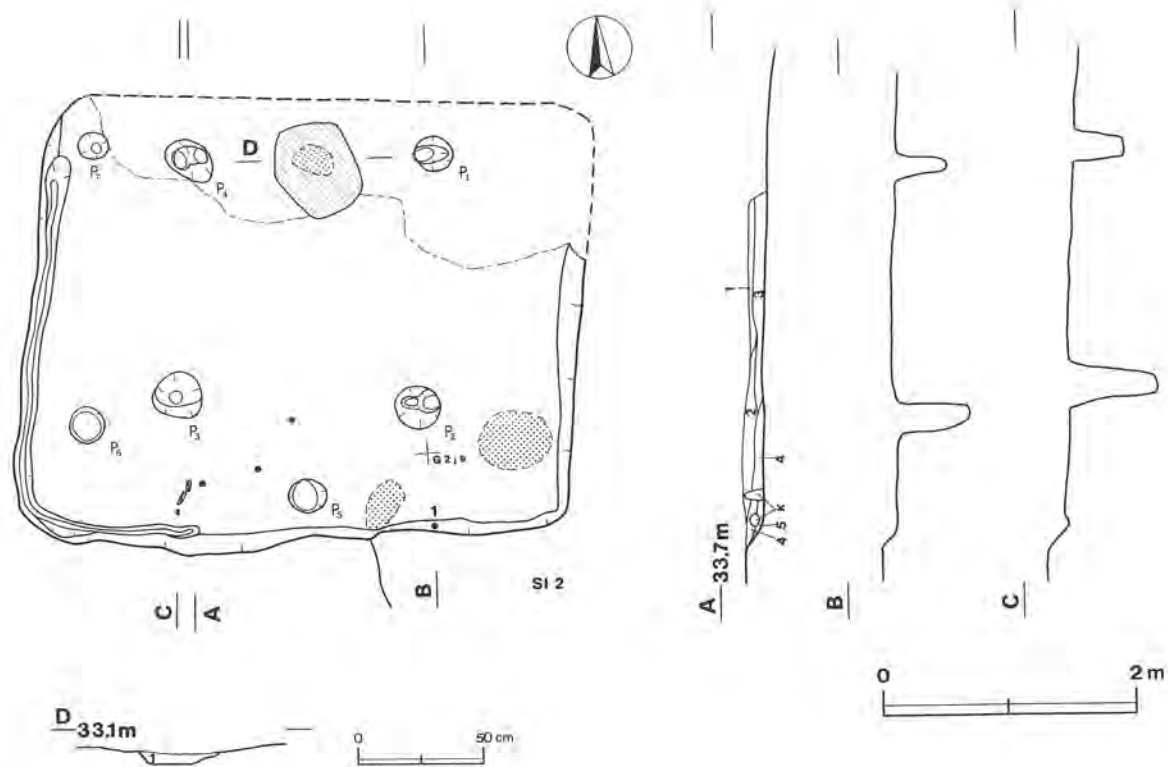
覆土 5層からなり、炭化材が南壁寄りの第4層上面から出土している。また、その周辺には、焼土や炭化物が第4層上面から床面にかけて堆積している。第1層は、ローム粒を多量に含む暗褐色土である。第2層は、ローム粒を中量含む暗褐色土である。第3層は、ローム粒・ロームブロックを多量、炭化物を少量含む褐色土である。第4層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む褐色土である。第5層は、ロームブロックを多量、焼土粒・炭化物を中量含む暗褐色土である。

遺物 弥生土器片9点，土師器片4点が出土している。第7図1の広口壺は、南壁際第5層下部から出土している。土師器片は、混入したものである。

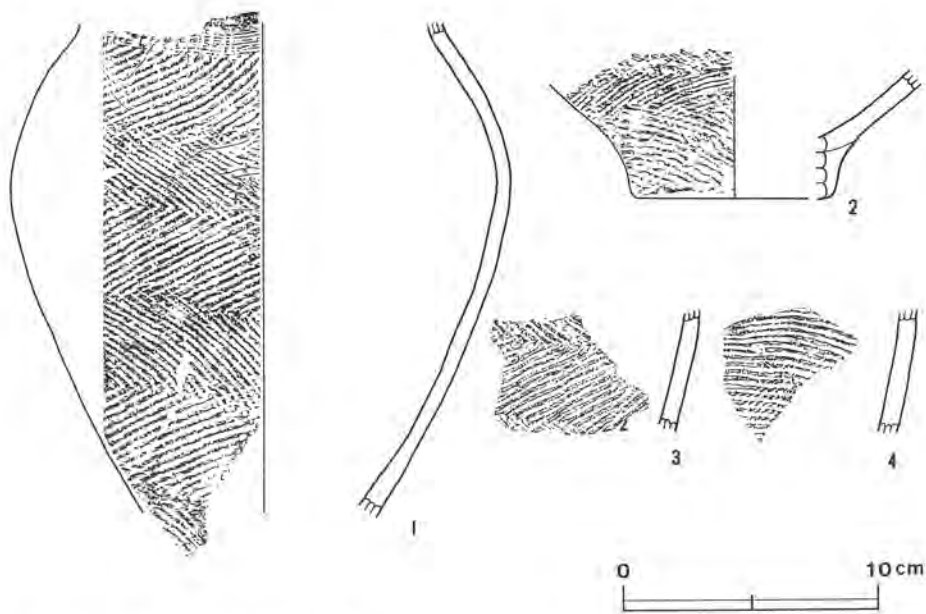
所見 本跡は、炭化材・焼土の状況から焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、1の広口壺が第5層下部から出土していることから、弥生時代後期と考えられる。

##### 第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	広口壺 弥生式土器	F〔19.8〕	頸部から底部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。最大径は胴部上半にある。胴部には、附加条1種（附加2条）の原体により、羽状縄文を構成させている。頸部には、櫛歯状工具を押し引きした横位の簾状文を施している。歯の数は7本である。	石英・長石 暗褐色 良好	P1 20% 第5層 胴部上半煤付着
2	広口壺 弥生式土器	C〔7.6〕	底部破片。底部はやや厚みがあり、外反して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の原体により、羽状縄文を構成させている。	石英・長石 にぶい橙色 良好	TP2・4 10% 第1層



第6図 第1号住居跡



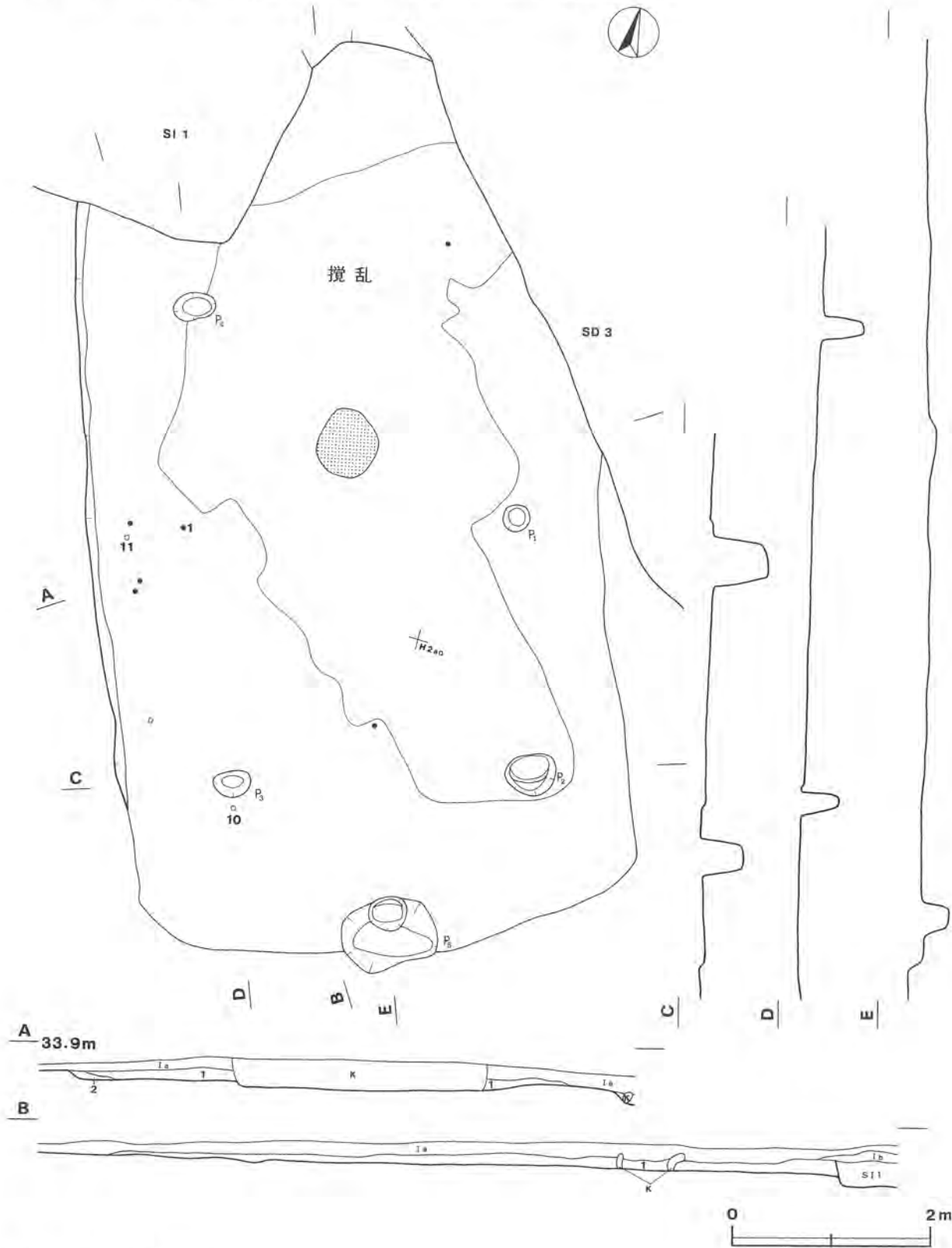
第7図 第1号住居跡出土遺物



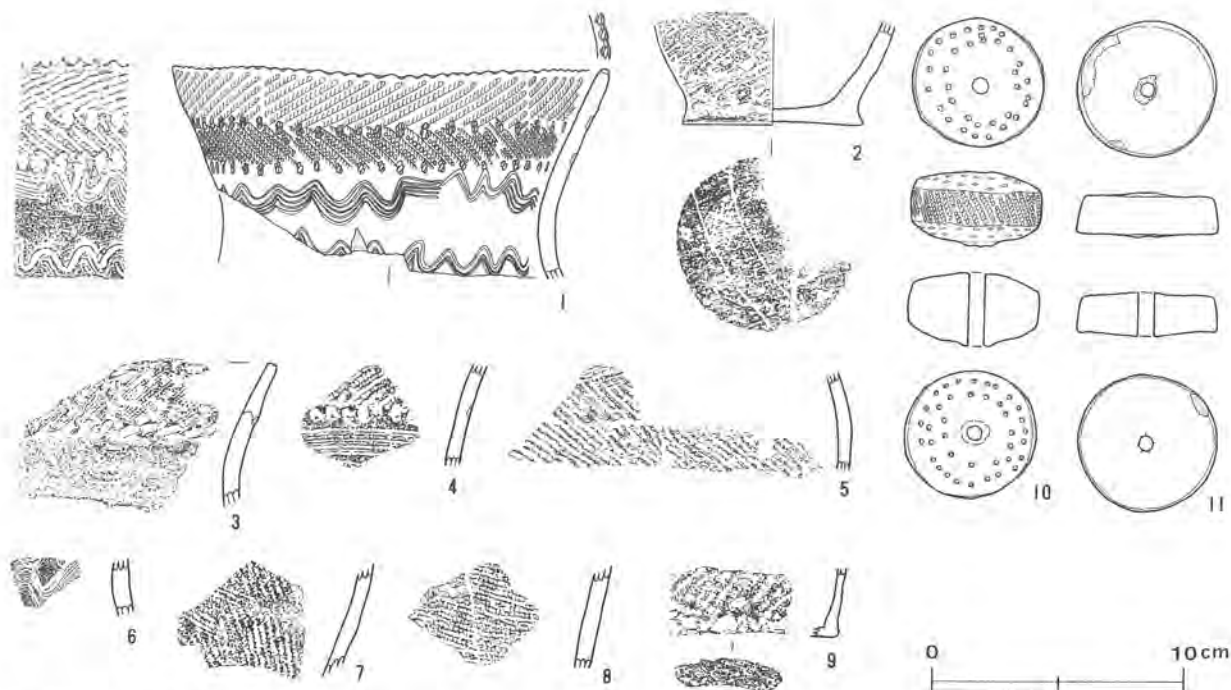
第2号住居跡（第8図）

位置 調査区の中央部，G2j<sub>a</sub>・H2a<sub>9</sub>区。

重複関係 本跡は，第1・9号住居跡と重複している。第1号住居跡が本跡を掘り込んでいることから本跡が古く，本跡が第9号住居跡の覆土上を貼床にしていることから本跡が新しい。



第8図 第2号住居跡



第9図 第2号住居跡出土遺物

規模と平面形 長軸(9.30)m, 短軸(5.20)mで, 大型の隅丸長方形である。

主軸方向 N-23°-W

壁 西壁だけが残存しており, 最深部は16cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 中央部が攪乱されているため, 残存状態は不良である。残存部は, ほぼ平坦でよく踏み固められている。

ピット 5ヶ所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は, 長径28~52cm・短径28~41cmの楕円形あるいは円形で, 深さ42~64cmである。規模や配置から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は, 長径94cm・短径64cmの楕円形で, 深さ12cmである。P<sub>5</sub>の底面には, 径36~38cmの楕円形で, 住居跡床面からの深さが20cmの子ピットがある。P<sub>5</sub>は, 出入り口ピットと考えられる。

炉 1ヶ所。床面中央部に付設する, 地床炉である。長径70cm・短径60cmの楕円形で, 深さ8cmである。炉内には, 赤褐色焼土が堆積しており, 炉底面は赤変硬化している。

覆土 2層からなるが, 東側と南側は覆土が流失し, 表土のみが堆積している。第1層は, ローム粒を多量, 炭化物を少量含む暗褐色土である。第2層は, ローム粒・炭化物を多量に含む暗褐色土である。

遺物 縄文土器片1点, 弥生土器片26点, 紡錘車2点, 土師器片10点が出土している。第9図1の広口壺は, 西壁寄りの第1層上部から出土している。紡錘車(第9図10・11)は床面から出土している。縄文土器片と土師器片は, 混入したものである。

所見 本跡は, 中央に地床炉を持つ大型の住居跡である。本跡の時期は, 出土遺物と第1号住居跡より古いことから, 弥生時代後期と考えられる。

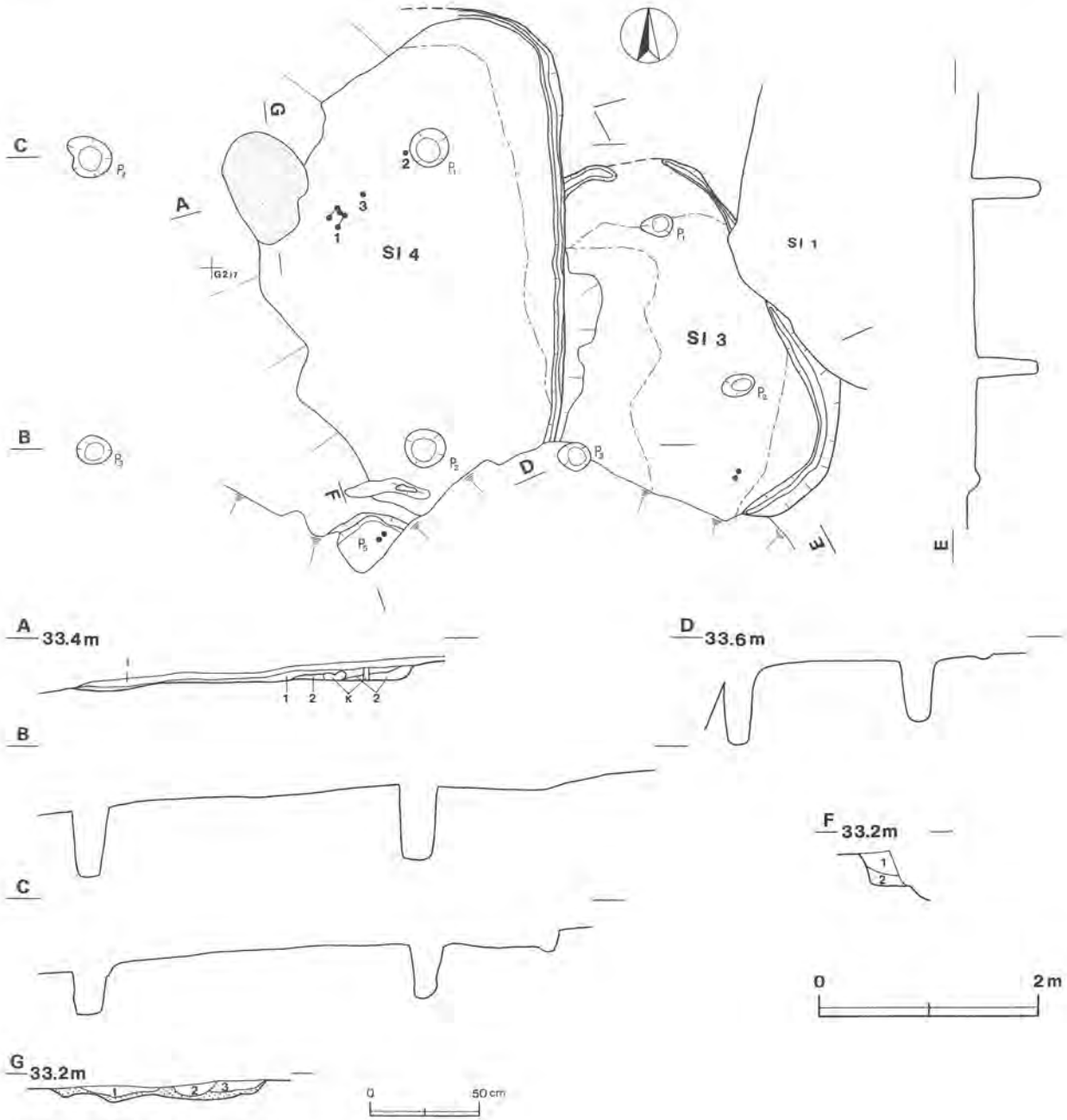
第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.2	外反する口縁部から頸部の破片。口縁部には, 無節と附加条1種(附加2条)の原体により羽状縄文を施し, 縄の原体による二段の刺突を加えている。頸部には, 櫛歯状工具により波状文を施している。歯の数は5本である。口唇部には, 縄の原体により刻みが施されている。	石英・長石 暗褐色 良好	P4 20% 第1層
2	広口壺 弥生式土器	C 7.0	底部破片。附加条1種(附加2条)の原体により, 羽状縄文を構成させている。底部に木葉痕がある。	石英・長石 暗褐色 良好	P5 10% 第1層

第3号住居跡（第10図）

位置 調査区の中央部，G2j<sub>3</sub>区。

重複関係 本跡は，第1・4住居跡と重複している。第1・4号住居跡が本跡を掘り込んでいるため，本跡が古い。



第10図 第3・4号住居跡

規模と平面形 本跡は、第4号住居跡と土取りの攪乱に掘り込まれているため、東半分のみが残存している。南北3.64 m、東西(2.60) mで、隅丸方形と推定される

壁 南東コーナー壁だけが残存している。深さは8 cmで、傾斜して立ち上がる。

壁溝 北壁下の一部を除き、残存部を全周している。上幅10~28 cm、深さ5 cmで、断面形はU字状である。

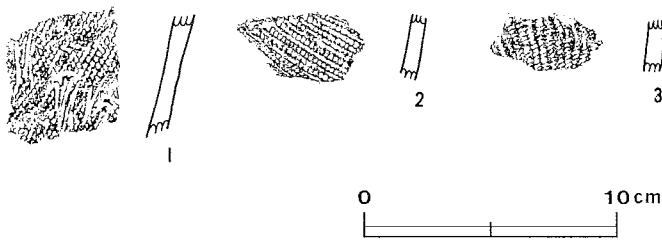
床 ほぼ平坦であり、よく踏み締められている。

ピット 3ヶ所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。長径28~32 cm・短径20~26 cmの楕円形で、深さ57~70 cmである。本跡は、4本柱と考えられるが、4本目の柱穴は確認できなかった。

覆土 1層からなり、南東コーナー付近だけに堆積している。第1層は、ローム粒・炭化物を多量に含む極暗褐色土である。床面上は、炭化物が薄く堆積している。

遺物 縄文土器片5点、弥生土器片11点、土師器1点が出土している。縄文土器片と土師器片は、混入したものである。

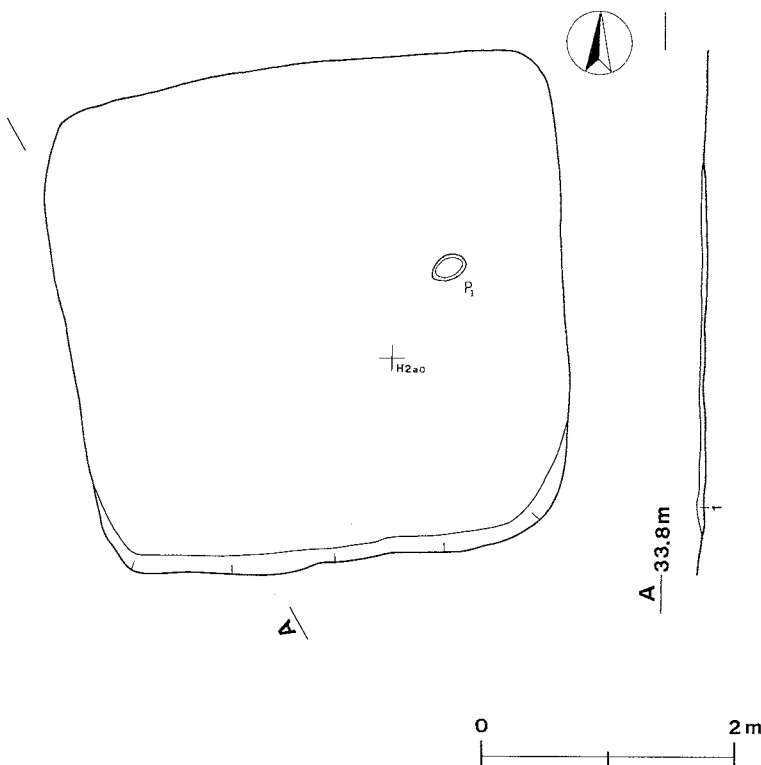
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。



第11図 第3号住居跡出土遺物

### 第9号住居跡 (第12図)

位置 調査区の中央部, G2j<sub>9</sub>区。



第12図 第9号住居跡

**重複関係** 本跡は、第2号住居跡と重複している。第2号住居跡が本跡の覆土上を貼床としているため、本跡が古い。

**規模と平面形** 本跡の北側床面は第2号住居跡床面と標高が一致することから、本跡がさらに北側に広がる可能性があるが、東西4.06m・南北(3.94)mの隅丸方形と推定される。

**壁** 南壁が一部残存しており、深さ3cmで、傾斜して立ち上がる。

**床** 全体に堅く踏み締められている。

**ピット** 1ヶ所(P<sub>1</sub>)。長径30cm・短径21cmの楕円形で、深さ64cmである。

**覆土** 1層からなり、第2号住居跡の貼床としたものである。第1層は、ロームブロック・ローム粒を多量に含む褐色土である。

**所見** 出土遺物がなく本跡の時期は特定できないが、本跡の直上を第2号住居跡の貼床としていることから本跡と第2号住居跡との大きな時間差はないと考えられるため、弥生時代後期の住居跡と推定される。

## 2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、前期の住居跡1軒、古墳1基を確認した。古墳については、周溝北部を第1号溝、周溝南部を第4号溝として呼称し調査した。本跡は、馬の背状の地形を巡るようにつくられていること、埴輪が出土することから、古墳と判断した。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第4号住居跡(第10図)

**位置** 調査区の中央部、G2i<sub>7</sub>区。

**重複関係** 本跡は、第3号住居跡と重複している。本跡が第3号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

**規模と平面形** 西側が斜面のため流失し、南側は土取りにより攪乱されているため、住居跡の東側だけが残存している。規模は不明であるが、柱穴の配置から一辺5.40m程の隅丸方形と推定される。

**主軸方向** N-5°-W

**壁** 東壁のみが残存しており、深さは18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床** 東側半分が残存している。平坦で、全体的に踏み締まりがある。

**ピット** 4ヶ所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径32~38cmのほぼ円形で、深さ43~65cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

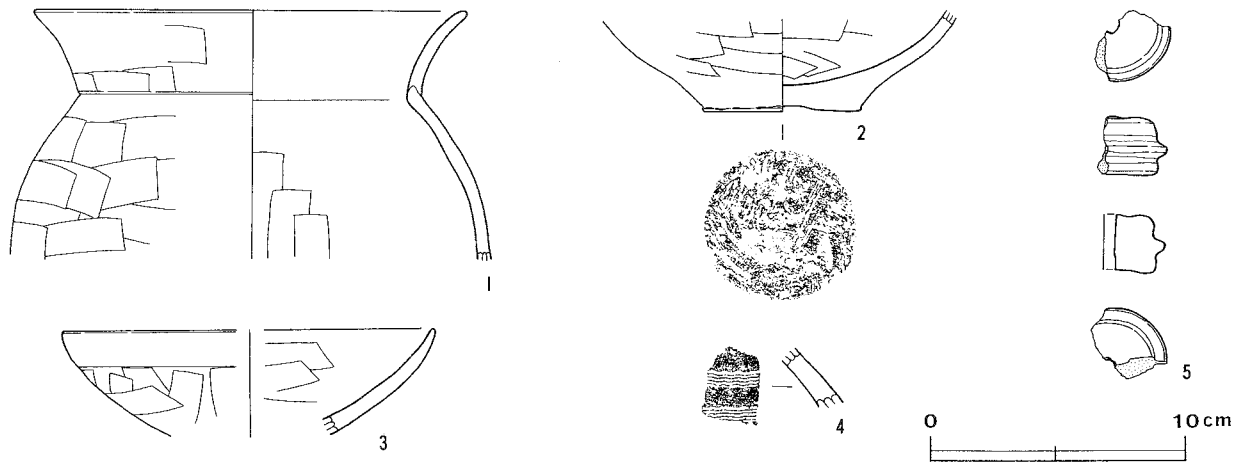
**炉** 1ヶ所。柱穴間の中央北寄りに付設する、地床炉である。長径105cm・短径72cmの楕円形で、深さ9cmである。炉の平面形は瓢箪形であるが、土層の観察では切り合いはなく、炉の造り直しはない。

**貯蔵穴** 南側に1ヶ所(P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ軸線よりは床面中央寄りに位置している。土取りによる攪乱で南半分がないため、規模及び平面形は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層からなる。第1層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土である。北側には、弧状に囲むように高さ5cm程の高まりが確認されている。

**覆土** 2層からなり、自然堆積である。第1層は、ローム粒を多量に含む暗褐色土である。第2層は、ローム粒・ロームブロックを多量、焼土粒・炭化物を少量含む褐色土である。

遺物 縄文式土器片1点、弥生式土器片17点、土師器片70点、紡錘車1点が出土している。第13図1と2の甕と3の高坏は、床面から出土している。壺の肩部破片（第13図4）と紡錘車（第13図5）は、覆土の第1層から出土している。縄文土器片と土師器土器片は、混入したものである。

所見 本跡の時期は、第13図1と2の甕と3の高坏が床面から出土していることから、古墳時代前期と考えられる。



第13図 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	甕 土師器	A 17.0 B (10.0)	口縁部から体部の破片。体部の最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石にぶい褐色良好	P 7 15% 床面
2	甕 土師器	C 6.2	底部から胴部の破片。平底。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石暗赤褐色普通	P 8 10% 床面
3	高坏 土師器	A [14.6] B ( 4.3)	坏部破片。坏体部は外傾し、口縁部はわずかに内彎する。	坏体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石黒褐色良好	P 6 10% 床面

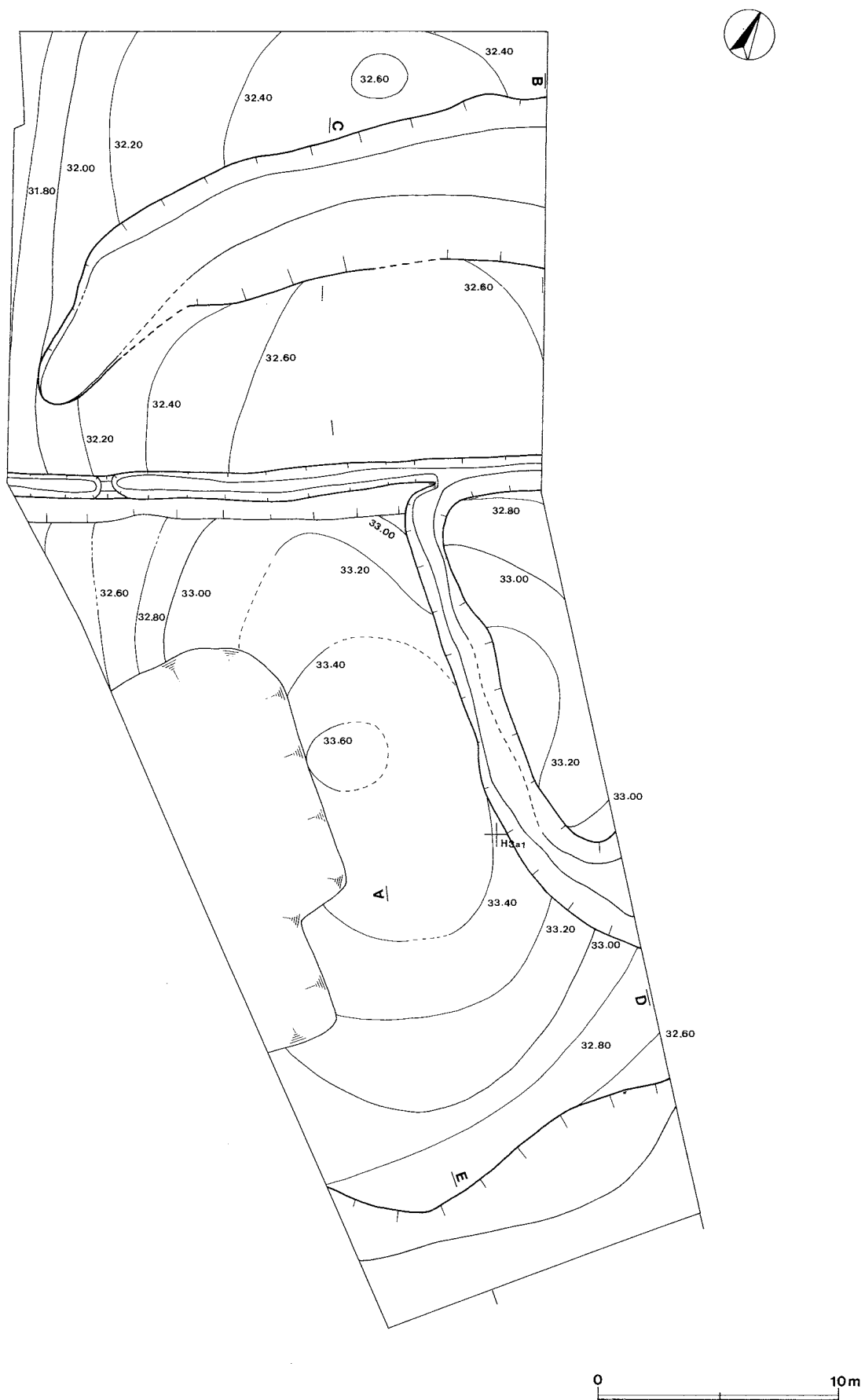
## (2) 古墳

### 第1号墳（第14・15図）

位置 調査区の中央部、G2・G3・H2・H3区。北西にのびる舌状台地の先端部に位置する。

重複関係 第1～9号住居跡と重複している。第1～4・9号住居跡は弥生時代後期と古墳時代前期の住居跡であり、本墳が新しい。第5～8号住居跡は平安時代の住居跡で、墳丘北側部の周溝覆土中を床面としているため、本墳が古い。

墳丘 本墳は、畑地の耕作等で削平されており、原状をとどめていない。墳丘と考えられる馬の背状台地の頂部に土層観察用のベルトを残し封土の確認を試みたが、封土は確認できなかった。第I a層は耕作土で、ローム粒を多量に含む極暗褐色土である。第I b層は、ローム粒を多量に含む暗褐色土である。封土は、ベルト以外の地点でも確認されなかった。墳丘上には弥生時代後期の第1・2・3号住居跡と古墳時代前期の第4号住



第14図 第1号墳（等高線は基底面の標高）





居跡が確認されていることから、原地形を利用しその上に墳丘を構築したと考えられる。

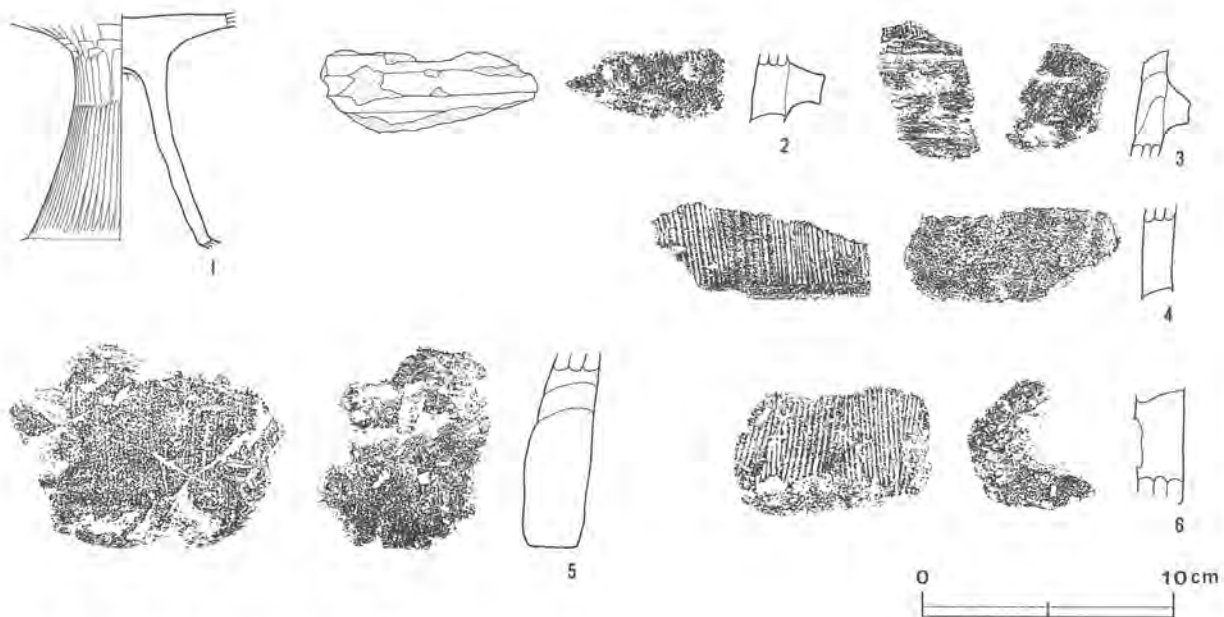
**墳形と規模** 墳形と墳丘の規模については、周溝の内径から径38mの円墳と推定される。ただし、墳丘西側の調査区外に微高地があり、別の墳形になる可能性もある。

**主体部** 主体部は、調査区内では確認できなかった。

**周溝** 周溝は、墳丘と考えられる台地の頂部を囲むように掘りこんでおり、断面形は挿鉢形である。墳丘北側部では上幅7.2m・底面幅3.6mで、確認面からの深さは0.8mである。墳丘南側部は、調査区域外であるため不明である。墳丘西側部では、周溝底面と地山が一致するため、周溝が続くかどうかは不明である。墳丘東側部にトレンチを設定し調査したが、周溝は確認できなかった。

**遺物** 高坏の脚部（第16図1）が墳丘北側部周溝の第5層から、埴輪片（第16図2～6）はG2h<sub>9</sub>・G2h<sub>6</sub>区の表土から出土している。埴輪片は周溝からの出土ではないため本墳に伴わない可能性があるが、墳丘部からの出土であるため本墳に伴う遺物と判断した。

**所見** 本墳の時期は、埴輪の出土が少ないことから古墳時代後期後葉と考えられる。



第16図 第1号墳出土遺物

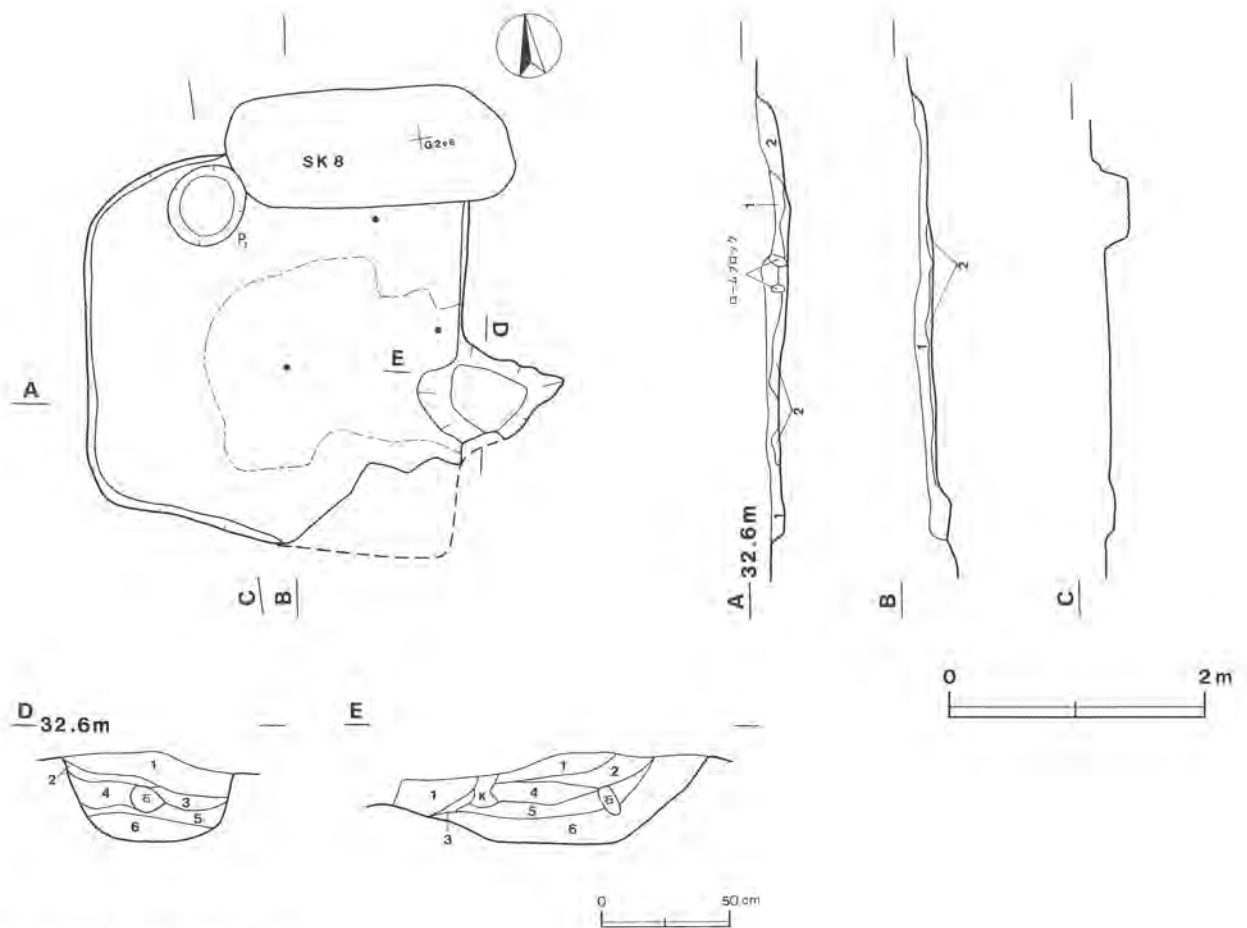
### 3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡4軒、土坑1基を確認した。竪穴住居跡は、すべて古墳の周溝覆土上面から掘り込んでいる。第3号土坑は、第6号住居跡に近接しており、墨書土器が出土している。第8号住居跡については、第7号住居跡の調査終了後に住居跡であることが判明したため、住居跡西側部分を確認することができなかった。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第5号住居跡（第17図）

**位置** 調査区の北部、G2e<sub>3</sub>区。



第17図 第5号住居跡

**重複関係** 本跡は、第1号墳と第8号土坑と重複している。本跡が第1号墳の北側周溝覆土中を床面にして  
いるため、本跡が新しい。第8号土坑が本跡を掘り込んでいるため、本跡が古い。

**規模と平面形** 一辺約3.0mの隅丸方形と推定される。

**主軸方向** N-102°-E

**壁** 深さは最大で12cmで、外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦であり、中央部がよく踏み締められている。

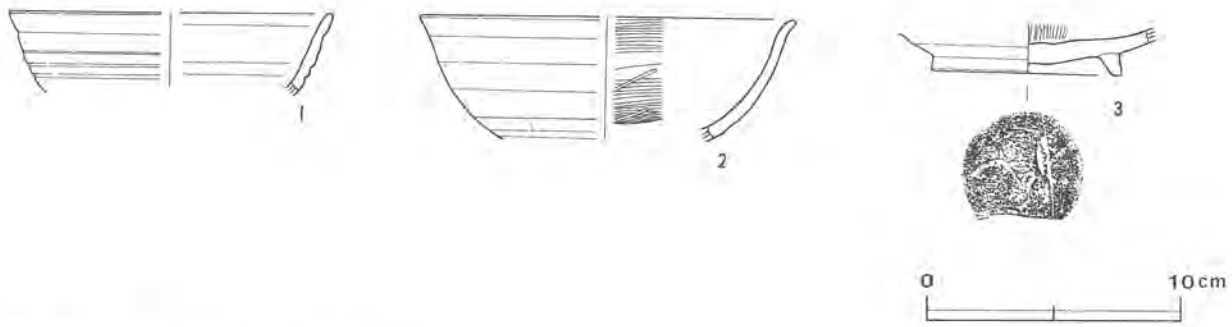
**ピット** 北西コーナーに1ヶ所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は、径57~64cmのほぼ円形で、深さ20cmである。位置と法量から貯  
蔵穴と考えられる。柱穴と考えられるピットは、確認できなかった。

**竈** 東壁に付設され、煙道は壁よりも80cm程突出させている。火床面は床を9cm程掘りくぼめている。袖は、  
遺存してはいないが、竈付近の覆土には灰白色粘土ブロックの含有量が多い。竈内覆土は、6層からなる。第  
1層は、ローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒子・焼土粒子・焼土中ブロックを少  
量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒子を少量・焼土粒子を中量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒子・焼土  
粒子を微量含む暗褐色土。第5層は、ローム粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第6層は、ローム粒  
子を少量・焼土粒子を微量含む暗褐色土である。

**覆土** 2層からなり、自然堆積である。第1層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む褐色土。第2層は、  
ローム粒を中量、灰白色ロームブロック・炭化物を微量含む暗褐色土である。

**遺物** 弥生式土器片3点、土師器片27点が出土している。第18図1の坏は、床面から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から10世紀前葉である。



第18図 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	坏土師器	A 12.8] B( 3.4)	体部破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面磨き。	礫粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P10 10% 床面
2	坏土師器	A 14.8] B( 4.9)	体部破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。	礫粒・スコリア 黄褐色 普通	P 9 30% 竈覆土
3	高台付坏土師器	D 7.5 E 0.9	底部破片。平底に、短い高台が付く。	底部回転ヘラ削り。内面磨き。	礫粒・スコリア 橙色 普通	P11 20% 覆土

### 第6号住居跡（第19図）

位置 調査区の北部，G2g<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は、第1号墳と重複している。本跡が第1号墳の北側周溝を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.80 m、短軸3.20 mの隅丸長方形。

主軸方向 N-23°-E

壁 深さは最大で40cmで、ほぼ垂直に立ちあがる。竈のある北壁の傾斜は、緩やかである。

床 ほぼ平坦であり、中央部に踏み締まりがある。

ピット 1ヶ所（P<sub>1</sub>）。P<sub>1</sub>は南西コーナーに位置し、長軸60cm・短軸50cmの楕円形で、深さ16cmである。位置と規模から貯蔵穴と考えられる。

竈 北壁に付設され、煙道は北壁よりも66cm程突出させている。火床面は平坦であり焼土の堆積はないが、火床面は赤変硬化している。天井部はすでになく、両袖は角柱状の花崗岩を補強材とし、灰白色粘土でつくられている。竈内の覆土は、5層からなる。第1層は、ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・ロームブロック・焼土粒・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・灰白色粘土粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・焼土粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第5層は、ローム粒・焼土粒・礫粒を中量含む灰白色粘土である。

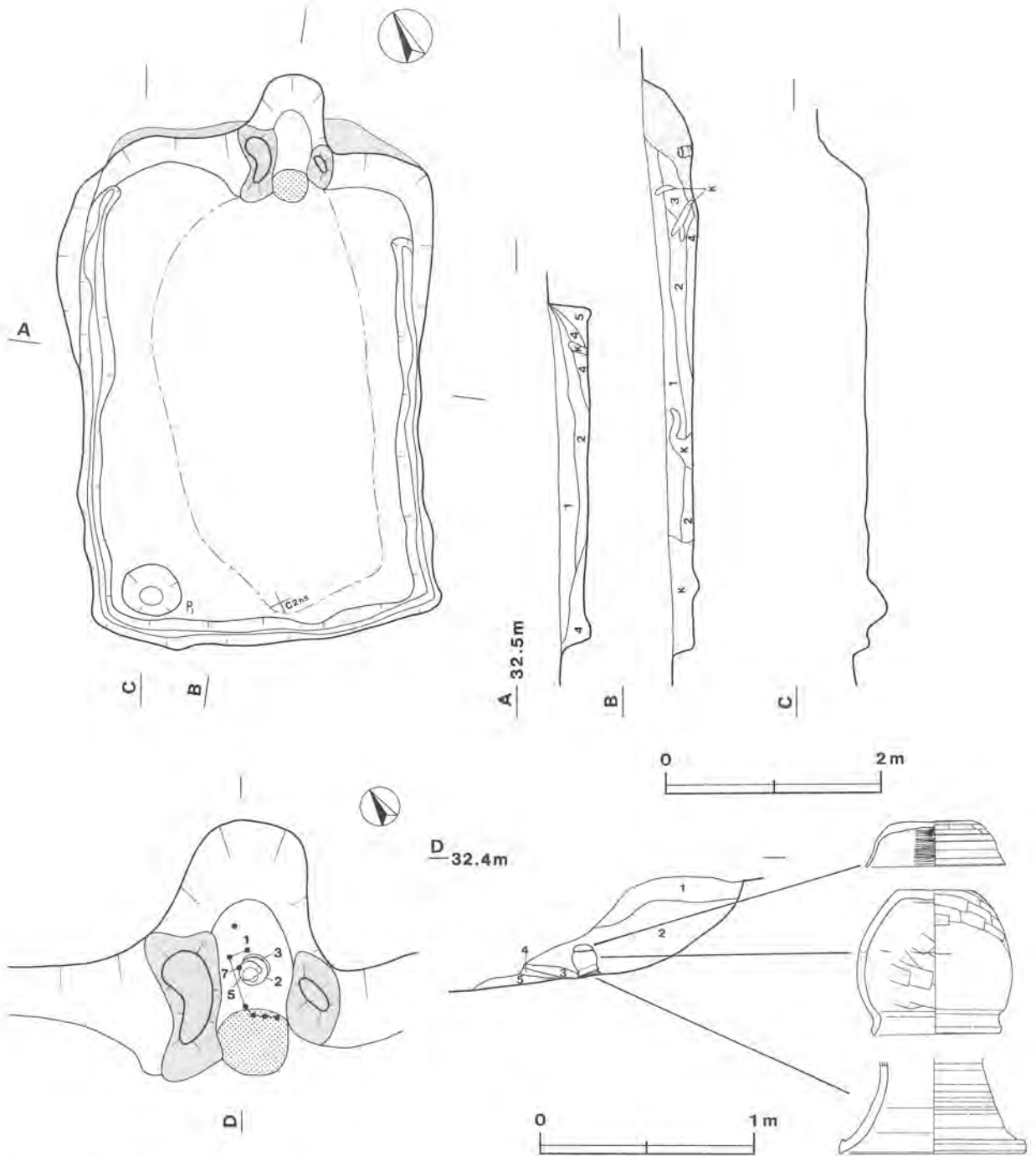
棚状遺構 竈両側の床面から36cm程の壁面に、灰白色粘土を貼り平坦面を作出している。平坦面は20~36cmの幅があり、棚状部分の土層をみると立ちあがり確認された。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・ロームブロックを多量、焼土粒を微量含む極暗褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロックを多量、灰白色粘土粒を微量含む褐色土。第4層は、ローム粒・ロームブロックを多量、焼土粒を少量含む暗褐色土。第5層は、ロー

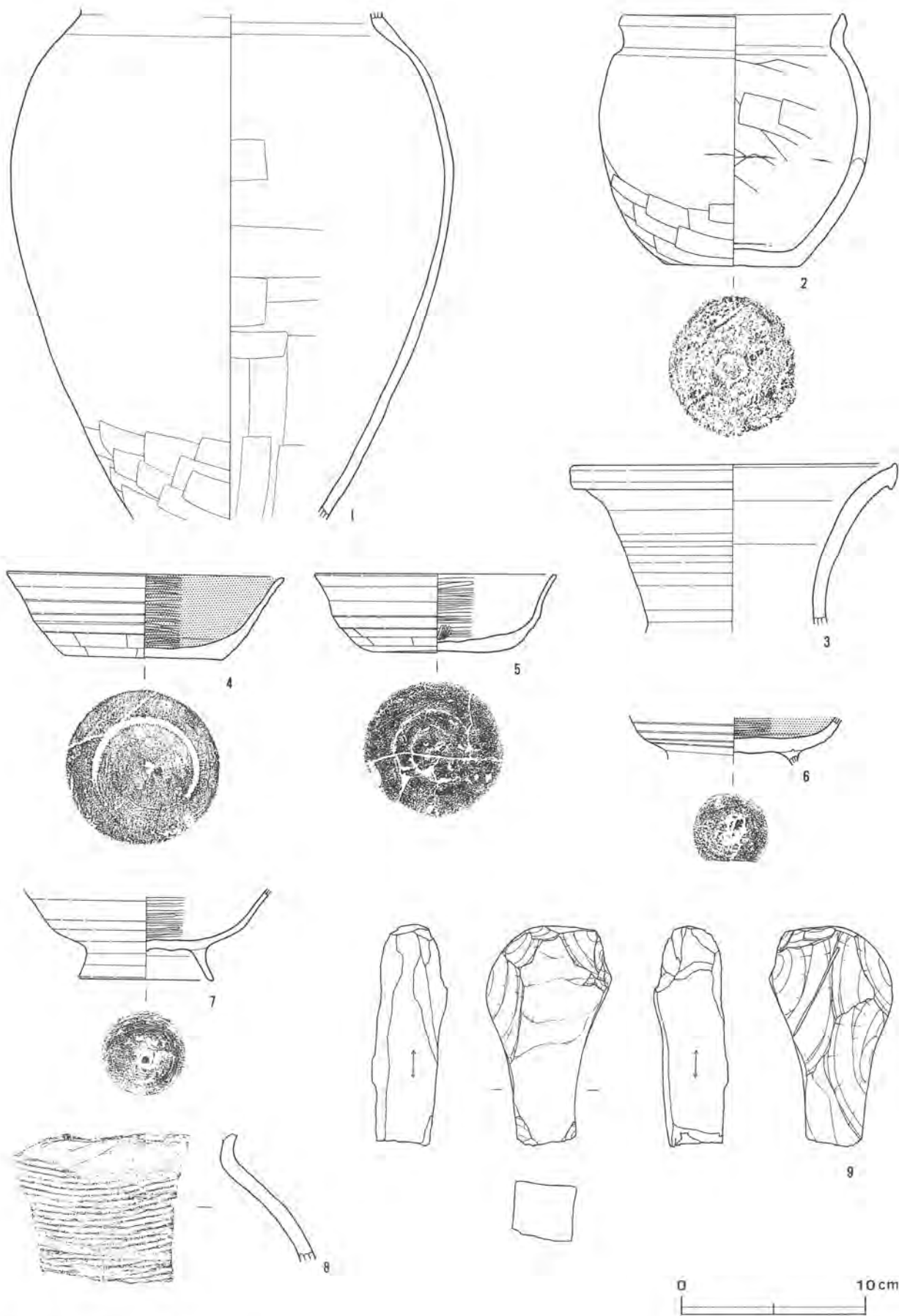
ム粒多量に含む褐色土である。

遺物 土師器片117点、須恵器片7点、砥石1点が出土している。竈の火床面からやや煙道よりに、第20図3の長頸瓶の口頸部に倒位に置いた上に2の甕と5・7の坏が倒位に重ねた状態で出土している。4の坏は確認面から、須恵器甕の肩部破片（第20図8）は覆土から、砥石（第20図9）は床面から出土している。

所見 本跡は、竈の両脇に棚状遺構を有する住居跡である。本跡の時期は、竈内から出土した遺物から10世紀前葉と考えられる。



第19図 第6号住居跡



第20图 第6号住居跡出土遺物

第 6 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	甕 土師器	F 24.0	体部破片。体部は長い倒卵形で、最大径は体部上位にある。	体部外面ナデ。体部外面下部ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	石英・長石 橙色 良好	P17・18 25% 竈底面
2	小型甕 土師器	A 11.6 B 13.8 C 7.0	平底。体部は球形で、最大径は体部上位にある。口縁部は外傾する。口縁端部は上方につまみ上げている。	体部外面ナデ。体部外面下部ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ	石英・長石 にぶい黄褐色 良好	P16 70% 竈底面逆位
3	長頸瓶 須恵器	A 17.8 B (13.7)	体部欠損。頸部は外反し、口縁端部は上下に突出する。	頸部内・外面横ナデ。	石英・長石 黄灰色 良好	P19 30% 竈底面逆位
4	坏 土師器	A 15.0 B 4.6 C 8.6	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。内面黒色処理。	礫粒・スコリア 褐色 普通	P12 80% 確認面
5	坏 土師器	A [13.2] B 4.3 C 7.2	平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部外面ナデ。体部内面磨き。	礫粒・スコリア 橙色 普通	P13 80% 竈内逆位
6	高台付坏 土師器	B (2.2)	底部破片。高台欠損。平底に、高台が付く。	底部回転ヘラ切り。高台接合部には接合のための沈線を施している。体部内面磨き。内面黒色処理。	礫粒・スコリア 赤褐色 普通	P14 20% 覆土
7	高台付坏 土師器	D 7.3 E 1.7	体部から底部の破片。平底に「ハ」の字状に広がる高台が付く。	底部回転ヘラ切り。体部内面磨き。	礫粒・スコリア 明赤褐色 普通	P15 30% 竈内逆位

第 7 号住居跡 (第21図)

位置 調査区の北部、G2e7区。

重複関係 本跡は、第 1 号墳と第 8 号住居跡と重複する。本跡が第 1 号墳の周溝覆土中を床面としているため本跡が新しく、第 8 号住居跡が本跡を掘り込んでいるため本跡が古い。

規模と平面形 長軸 [4.20 m] ・短軸 3.04 m の隅丸長方形である。北東コーナーは緩やかにカーブするため北壁は南壁よりも短い。

主軸方向 N-138°-E

壁 西壁及び北壁の一部は第 8 号住居跡に掘り込まれて残存していないが、壁は最大で 40cm あり、傾斜して立ち上がる。

床 西側は、第 8 号住居跡に掘り込まれているため残存していない。地山を床面としている部分はよく踏み締められているが、周溝覆土中を床面としている部分は踏み締まりは弱く、残存状態は不良である。

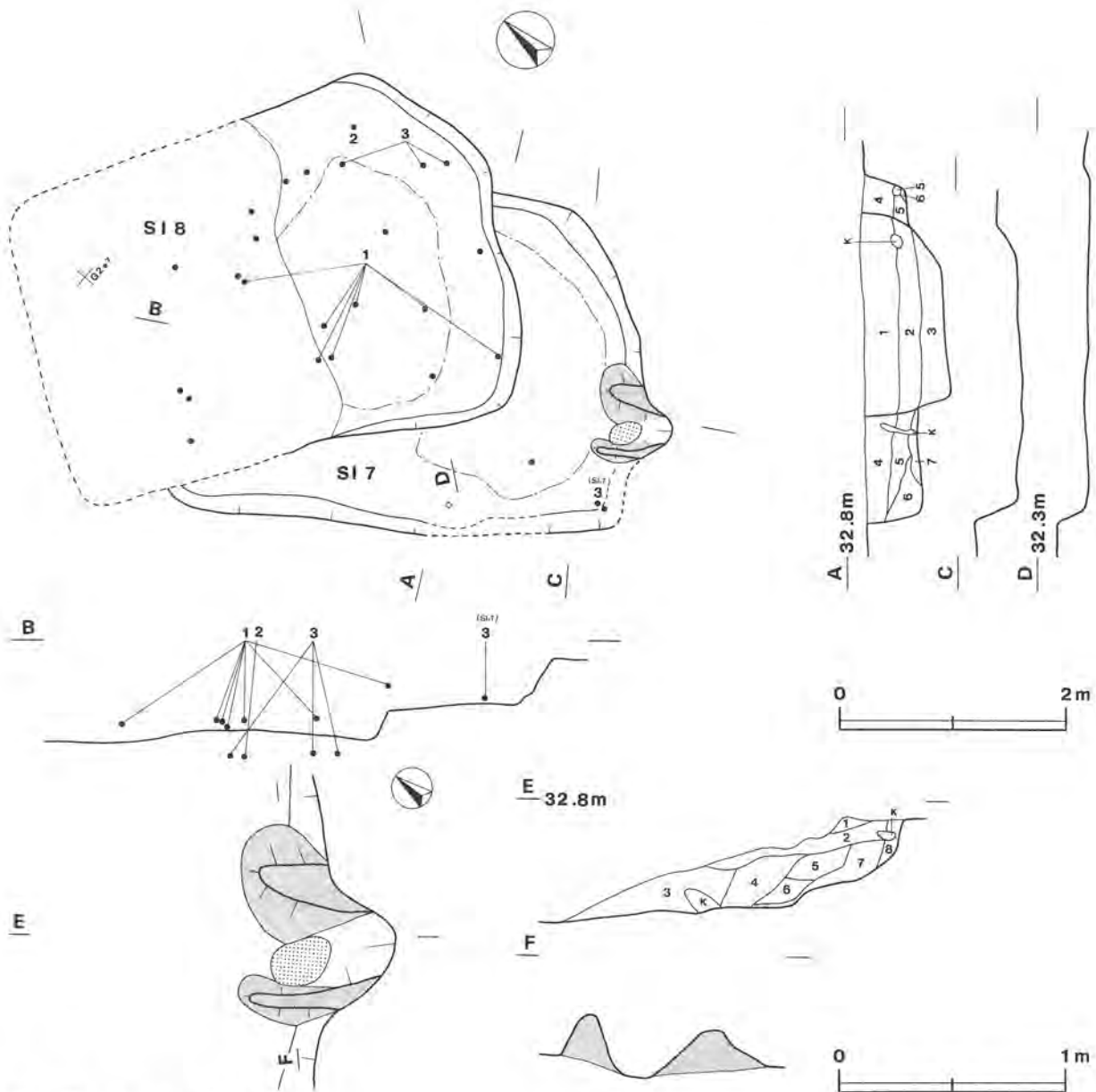
竈 東壁に付設され、煙道は東壁よりも 30cm 程突出させている。両袖は角柱状の花崗岩と第 22 図 1 の羽釜を補強材とし、灰白色粘土でつくられている。火床面はほぼ平坦であり、煙道は緩やかに立ち上がる。覆土は、8 層からなる。第 1 層は、ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第 2 層は、灰白色粘土粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第 3 層は、ローム粒・ロームブロックを少量、炭化物を微量含む暗褐色土。第 4 層は、灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック・焼土粒を少量含む暗褐色土。第 5 層は、灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロックを中量、焼土粒を少量含む暗褐色土。第 6 層は、焼土粒・焼土ブロックを多量、灰白色粘土粒を少量含む暗褐色土。第 7 層は、焼土粒・炭化物を多量、灰白色粘土粒を微量含む暗褐色土。第 8 層は、炭化物を多量、焼土粒・砂粒を中量含む暗褐色土である。

覆土 4 層 (第 5 層～第 8 層) からなり、自然堆積である。第 5 層は、ローム粒・ロームブロックを多量、灰白色粘土粒・炭化物を微量含む黒褐色土。第 6 層は、ローム粒・ロームブロック・灰白色粘土粒を中量、炭化物を少量含む極暗褐色土。第 7 層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土。第 8 層は、ローム粒・

ロームブロックを中量含む極暗褐色土である。

遺物 縄文土器片1点, 弥生土器片4点, 土師器片329片, 須恵器片2点, 施釉陶器片1点が出土している。第22図1の羽釜は竈右袖の補強材として出土し, 3の坏が第7層から出土している。砥石(第22図5)は, 床面から出土している。縄文土器片と弥生土器片は, 混入したものである。

所見 本跡は, 東壁に竈を付設する住居跡である。本跡の時期は, 出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

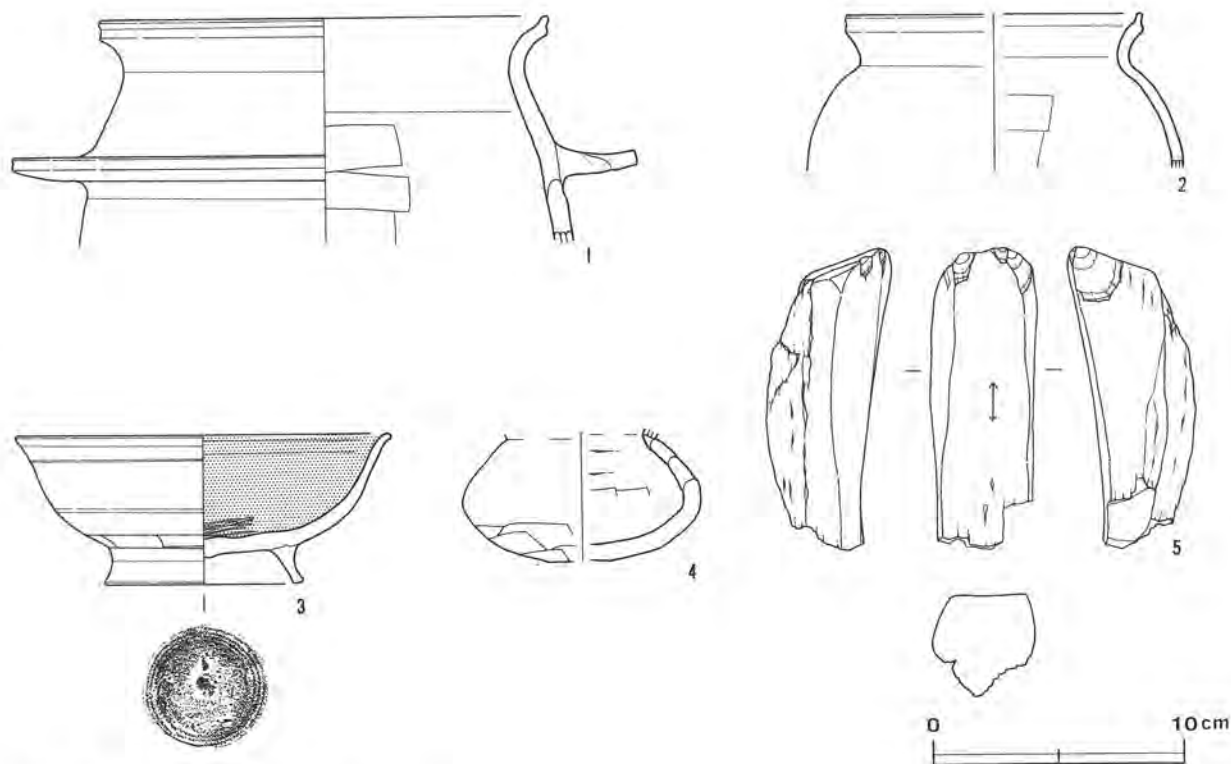


第21図 第7・8号住居跡

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	羽釜 土師器	A 18.0 B( 9.1)	口縁部から体部上位の破片。頸部は外反し, 口縁端部は上方につまみ上げている。体部上位に鈎が付く。	体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 明赤褐色 良好	P24 20% 竈右袖補強材
2	小型甕 土師器	A[12.8] B( 6.3)	口縁部から体部上位の破片。頸部は外反し, 口縁部は外傾する。口縁端部は上方につまみ上げている。	体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 良好	P23 10% 覆土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	高台付坏土師器	A 15.0 B 6.0 C 8.0	平底に、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	礫粒・スコリアにふい褐色普通	P20 40% 第7層
4	小型壺土師器	C 2.5 F 9.6	平底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反する。	体部外面下部ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	礫粒・スコリア明赤褐色良好	P22 40% 覆土



第22図 第7号住居跡出土遺物

### 第8号住居跡（第21図）

位置 調査区の北部，G2e区。

重複関係 本跡は，第1号墳と第7号住居跡と重複している。本跡が第1号墳周溝覆土中を床面としており，本跡が第7号住居跡を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸〔4.30〕m・短軸3.24mの隅丸長方形である。北東コーナーは緩やかにカーブするため，北壁は南壁よりも短い。

壁 壁高は最大で52cmある。壁は，傾斜して立ち上がる。

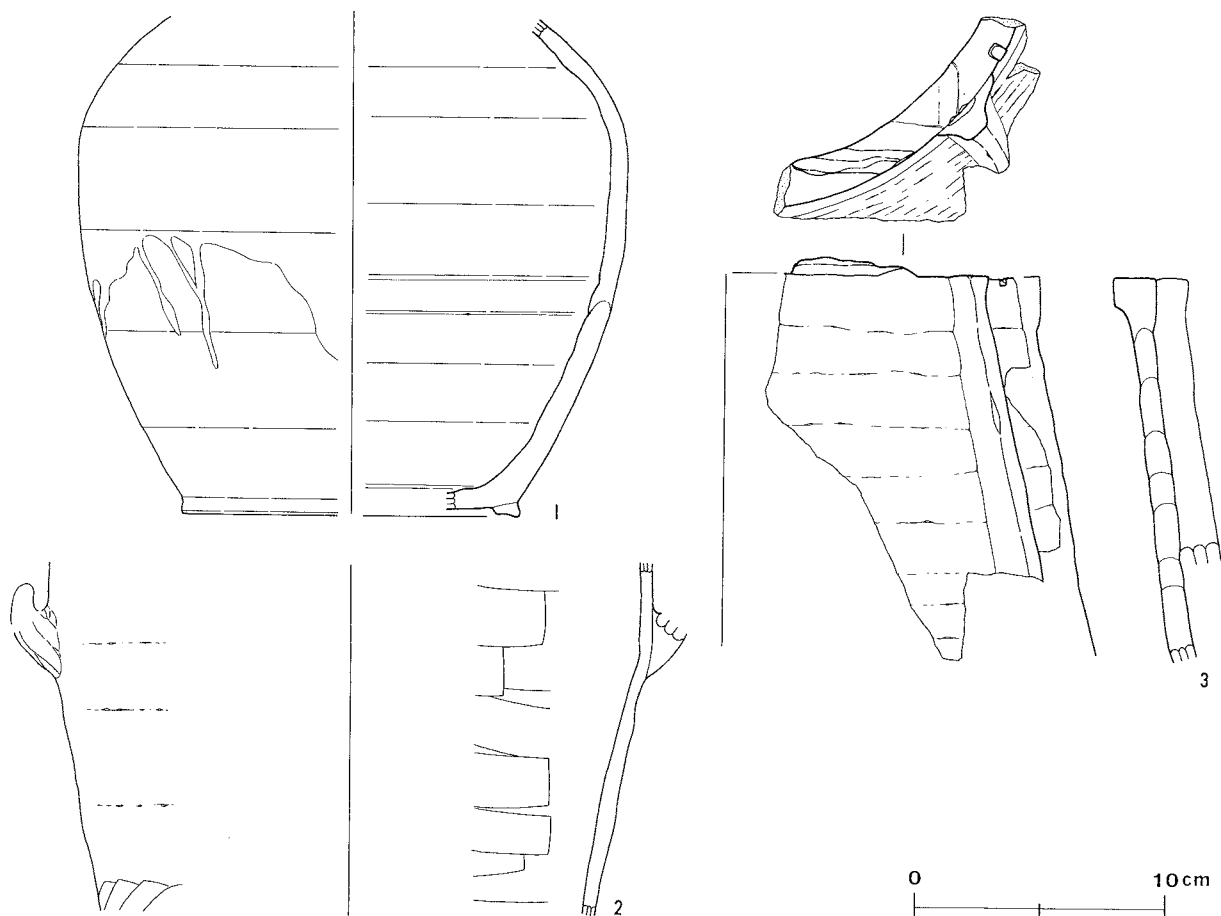
床 西側は確認できなかった。ほぼ平坦であり，中央部はよく踏み締められている。

覆土 3層（第1層～第3層）からなり，自然堆積である。第1層は，ローム粒・砂粒を少量，炭化物を微量含む極暗褐色土。第2層は，ローム粒・砂粒を中量，炭化物を少量含む極暗褐色土。第3層は，ローム粒・ロームブロックを多量，灰白色粘土粒を少量含む暗褐色土である。

遺物 土師器片26点，施釉陶器片18点が出土している。施釉陶器片18点は折戸53号窯併行の二川窯産のもので，第23図1の長頸瓶である。第23図1の長頸瓶と2の甌と3の置庵は，床面と第3層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から10世紀前葉と考えられる。





第23図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	長頸瓶 施釉陶器 (二川窯産)	D[13.6] E 0.6 F[22.0]	体部から底部の破片。平底に、外面 端部で接地する短い高台が付く。体 部の最大径は、体部上位にある。	体部内・外面横ナデ。肩部に刷毛塗 りにより施釉。	長石・礫粒にぶい 灰色 良好 釉は灰オリーブ色	P25 30% 第2・3層
2	甌 土師器	B(14.2) F[24.0]	体部破片。体部上位が直線的で、最大 径は体部上位にある。体部上位に 小型の把手が付く。	体部外面下部へら削り。体部内面へ ラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P26 20% 床面
3	置 土師器	A[25.0]	体部上端部破片。口縁上端部は平坦 で、内側に肥厚している。体部外面 には縦位の突帯を持つ。	体部内・外面に輪積み痕を残す。体 部内・外面ナデ。	石英・長石 赤褐色 普通	P27 10% 床面

表2 小山遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設				伊・電 覆土	出土遺物	備考		
						床面	土柱	穴蔵	穴ピット				入口	
1	G 2 i <sub>a</sub>	N-11°-E	隅丸長方形	4.36 × (3.64)	18	平坦	4	-	2	1	1	自然	弥生土器	弥生後期 第2・3号住居跡と重複 焼失家屋
2	G 2 j <sub>a</sub>	N-23°-W	隅丸長方形	(9.30) × (5.20)	16	平坦	4	-	-	1	1	自然	弥生土器, 紡錘車	弥生後期 第1号住居跡と重複
3	G 2 j <sub>a</sub>	-	[隅丸方形]	3.64 × (2.60)	8	平坦	3	-	-	-	-	自然	弥生土器	弥生後期 第1・4号住居跡と重複
4	G 2 i <sub>a</sub>	N-5°-W	[隅丸長方形]	(5.40) × (5.40)	18	平坦	4	1	-	-	1	自然	土師器, 紡錘車	古墳前期 (4世紀前葉) 第3号住居跡と重複
5	G 2 e <sub>a</sub>	N-102°-E	隅丸方形	[3.0] × [3.0]	12	平坦	-	1	-	-	1	自然	土師器	平安 (10世紀前葉) 第8号土坑と重複
6	G 2 g <sub>a</sub>	N-23°-E	隅丸長方形	4.80 × 3.20	40	平坦	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器 (長頸瓶)	平安 (10世紀前葉)
7	G 2 e <sub>7</sub>	N-138°-E	隅丸長方形	[4.20] × 3.04	40	平坦	-	-	-	-	1	自然	土師器, 砥石	平安 (10世紀前葉) 第8号住居跡と重複
8	G 2 e <sub>7</sub>	-	隅丸長方形	[4.30] × 3.24	52	平坦	-	-	-	-	-	自然	土師器, 施釉陶器 (長頸瓶)	平安 (10世紀前葉) 第7号住居跡と重複
9	G 2 j <sub>a</sub>	-	隅丸方形	4.06 × (3.94)	3	平坦	-	-	1	-	-	自然	弥生土器	弥生後期 第2号住居跡と重複

(2) 土坑

第3号土坑 (第24図)

位置 調査区の北部, G2i<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は, 第4号土坑と重複している。本跡が第4号土坑を掘り込んでいるため, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸 [1.86]m・短軸0.54mの長楕円形である。

長軸方向 N-37°-E

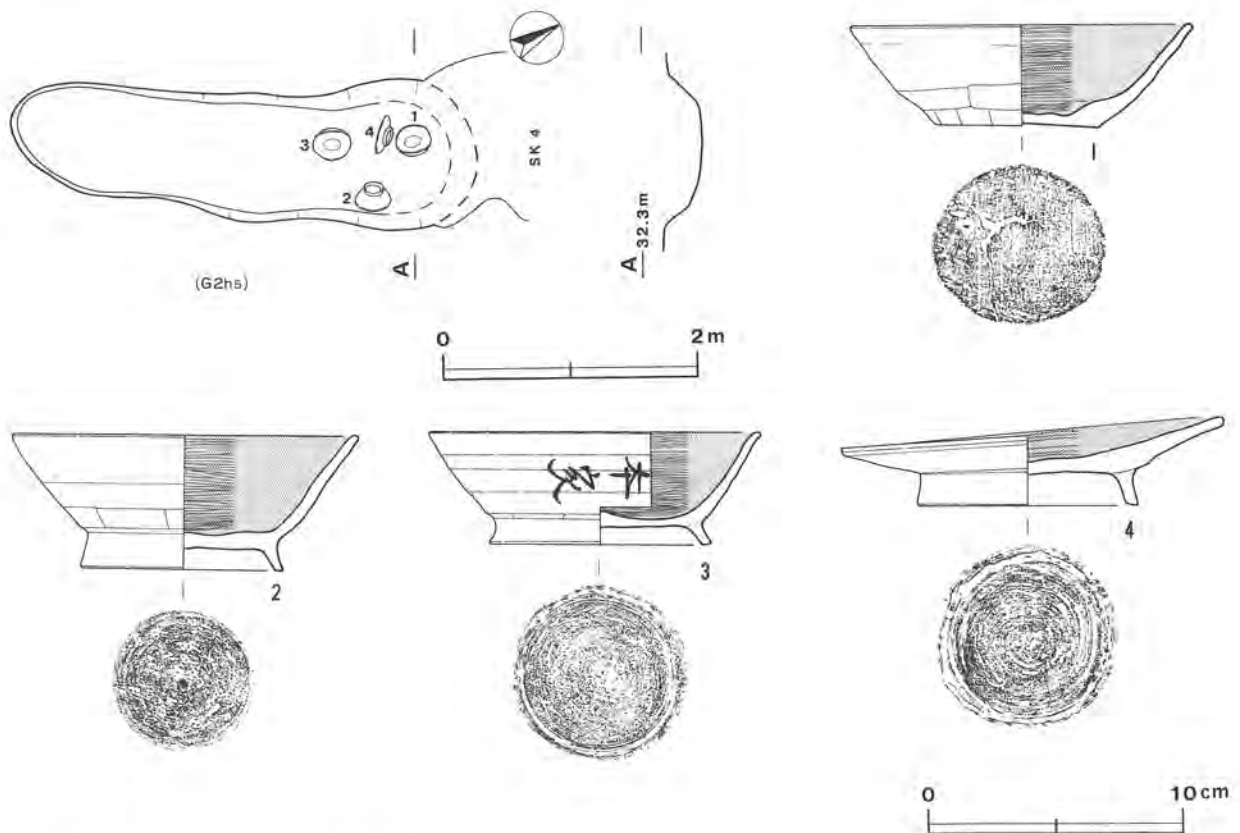
壁 深さは最大で12cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。北側の壁は, 立ち上がりは緩やかである。

底面 ほぼ平坦で, やや縮まりがある。

覆土 1層からなる。第1層は, ローム粒・ロームブロックを中量含む暗褐色土である。自然堆積か人為堆積かは不明である。

遺物 土坑北端の底面及び覆土下層から, 第24図1~4の高台付杯・杯・皿が出土している。

所見 本跡は, 完形の杯類4点を北端底面に副葬した土坑墓の可能性はある。本跡の時期は, 出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第24図 第3号土坑・出土遺物

### 第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	坏 土師器	A 13.6 B 4.0 C 6.4	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部静止ヘラ切り。体部外面下部手持ちヘラ削り。体部内面磨き。内面黒色処理。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P28 90% 第1層下部
2	高台付坏 土師器	A 13.7 B 5.3 C 8.0	平底に、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。内面黒色処理。	石英・長石・スコリア 橙色 良好	P29 90% 第1層下部
3	高台付坏 土師器	A 13.7 B 4.5 C 8.8	平底に、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。内面黒色処理。	石英・長石・スコリア 橙色 良好	P30 90% 第1層下部 体部横位墨書
4	高台付坏 土師器	A 15.1 B 2.9 C 8.6	平底に、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。内面黒色処理。	石英・長石・スコリア 暗赤褐色 普通	P31 90% 第1層下部

## 4 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期不明の土坑7基と溝2条を確認した。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

### (1) 土坑

#### 第1号土坑（第25図）

位置 調査区の南部、H2b<sub>0</sub>区。

規模と平面形 長軸1.90m・短軸1.66mの隅丸方形。

壁 二段となり、深さは上段底面まで10cmで、下段底面まで70cmある。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状で、締まっている。

覆土 5層からなり、第1層は上段部のみに堆積している。第1層は、ローム粒を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土。第4層は、ローム粒を微量含む暗褐色土。第5層は、ローム粒を中量、ロームブロックを少量含む褐色土である。

所見 本跡は、断面形が二段となる土坑である。時期や性格については、不明である。

#### 第2号土坑（第25図）

位置 調査区の北部、G2g<sub>0</sub>区。

規模と平面形 長軸2.40m・短軸70cmの隅丸長方形。

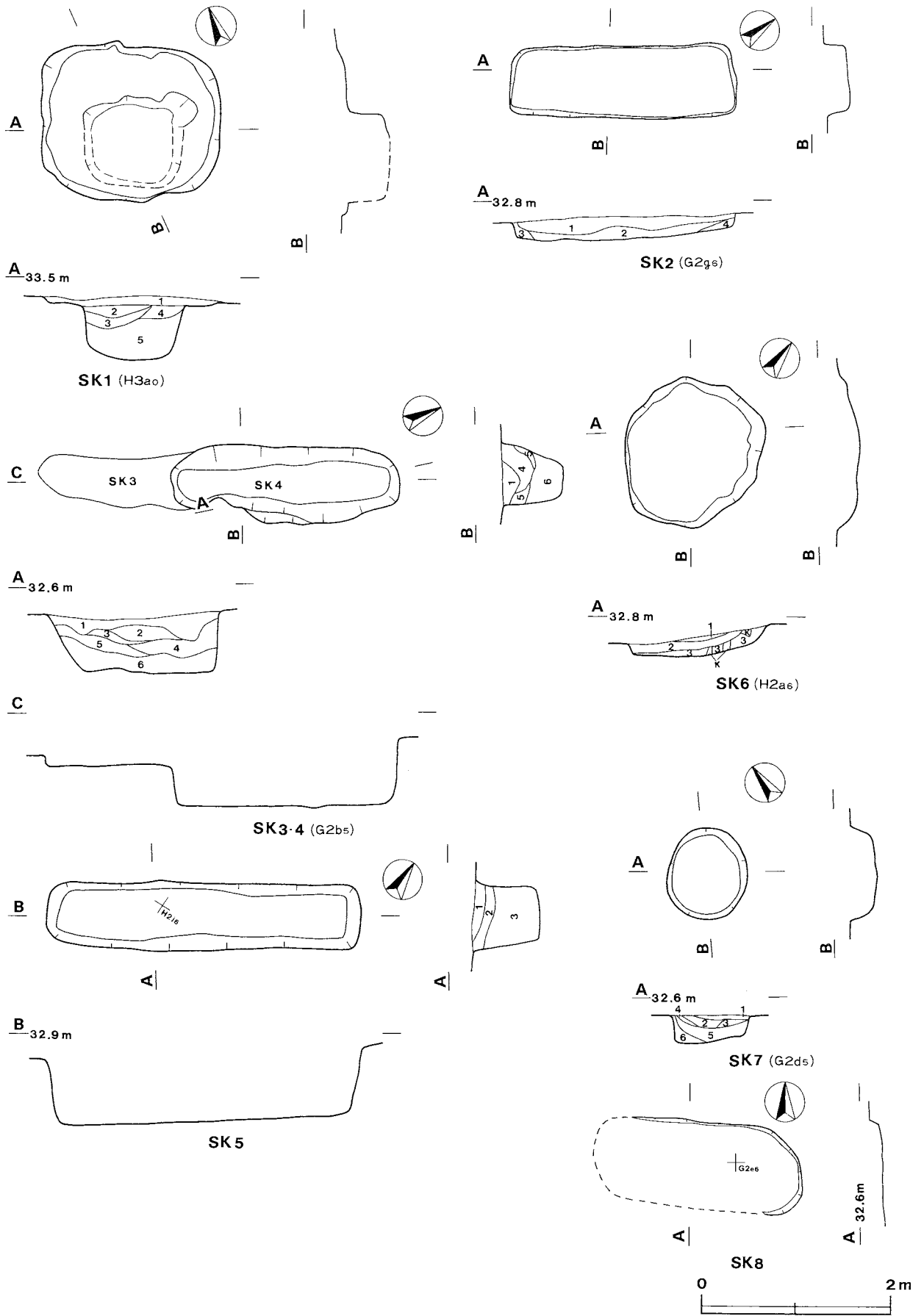
長軸方向 N-36°-E

壁 深さは26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で、締まっている。

覆土 3層からなる。第1層は、ローム粒を中量、ロームブロックを少量、焼土小ブロック・炭化物を微量含む褐色土。第2層は、ローム粒を多量含む褐色土。第3層は、ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む褐色土である。

所見 本跡は、平面形が隅丸長方形の土坑である。時期や性格については、不明である。



第25图 土坑

#### 第4号土坑（第25図）

位置 調査区の北部，G2h<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は，第3号土坑と重複する。第3号土坑が本跡を掘り込んでおり，本跡が古い。

規模と平面形 長軸2.46 m・短軸0.80 mの長楕円形。

長軸方向 N-25°-E

壁 深さは73cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で，締まっている。

覆土 4層からなる。第1層は，ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第2層は，ローム粒を少量含む褐色土。第3層は，ローム粒・ロームブロックを多量に含む褐色土。第4層は，ローム粒を少量含む褐色土である。

所見 本跡は，平面形が長楕円形で，深さがある土坑である。時期や性格については，不明である。

#### 第5号土坑（第25図）

位置 調査区の中央部，H2i<sub>6</sub>区。

規模と平面形 長軸3.36 m・短軸0.74 mの長方形。

長軸方向 N-56°-E

壁 深さは70cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で，締まっている。

覆土 3層からなる。第1層は，ローム粒子を中量，ロームブロックを少量含む褐色土。第2層は，ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・ロームブロックを中量含む褐色土である。

所見 本跡は，平面形が長方形で，壁が垂直に立ち上がる土坑である。時期や性格については，不明である。

#### 第6号土坑（第25図）

位置 調査区の中央部，G1j<sub>6</sub>区。

規模と平面形 径1.46～1.64 mの楕円形。

壁 深さは20cmで，傾斜して立ち上がる。

底面 皿状で，ほぼ平坦である。

覆土 3層からなる。第1層は，ローム粒を少量含む暗褐色土。第2層は，ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒を多量に含む褐色土である。

所見 本跡は，平面形が楕円形の土坑である。時期や性格は，不明である。

#### 第7号土坑（第25図）

位置 調査区の北部，G2d<sub>5</sub>区。

規模と平面形 径84～98cmの楕円形。

壁 深さは25cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状で，ほぼ平坦である。

覆土 6層からなる。第1層は，ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第2層は，ローム粒を中量，ロームブロックを少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・ロームブロックを褐色土。第4層は，ローム粒を

中量を含む褐色土。第5層は、ローム粒を多量、炭化物を微量含む褐色土。第6層は、ローム粒を多量に含むにぶい褐色土である。

所見 本跡は、平面形が楕円形の土坑である。時期や性格は、不明である。

#### 第8号土坑（第25図）

位置 調査区の北部，G2d<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は、第5号住居跡と重複している。本跡が第5号住居跡を掘りこんでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸（2.24）m・短軸（0.92）mの長楕円形。

長軸方向 N-96°-E

壁 西壁と南壁は、確認できなかった。深さは10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状で、ほぼ平坦である。

覆土 1層からなる。第1層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む褐色土である。

所見 本跡は、平面形が楕円形の土坑である。時期や性格については、不明である。

### (2) 溝

#### 第2号溝（第4・26図）

位置 調査区の中央部，G2i<sub>5</sub>区～G2g<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は、第1号墳と第3号溝と重複する。本跡が第1号墳と第3号溝を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と形状 調査できた範囲で、全長23.0m・上幅1.0～1.40m・下幅0.25～0.60mである。断面形は逆台形状で、深さは0.30mである。調査区西側の溝底面には、高まりがある。

方向 N-65°-Eで、直線的である。地籍図の境界とほぼ一致する。

覆土 4層からなる（A）。第1層は、ローム粒を少量含む褐色土。第2層は、ロームを多量に含む褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む褐色土。第4層は、ローム粒・ロームブロックを少量含む褐色土である。

所見 本跡の時期は不明であるが、地籍図の境界とほぼ一致することから根きり溝と考えられる。

#### 第3号溝（第4・26図）

位置 調査区の中央部，G2g<sub>5</sub>区～H3a<sub>2</sub>区。

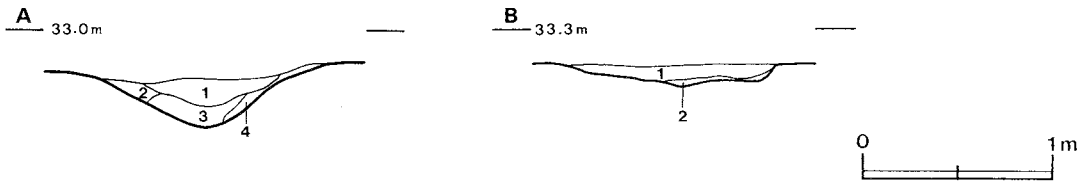
重複関係 本跡は、第1号墳と第2号溝と重複する。本跡が第1号墳を掘り込んでいるため本跡が新しく、第2号溝が本跡を掘り込んでいるため本跡が古い。

規模と形状 調査できた範囲で、全長24.0m・上幅1.30～5.40m・下幅0.6～2.90mである。断面形は逆台形状で、深さは0.10～0.46mである。

方向 調査区内では、弧状に延びている。溝の北側は第2号溝と重複し、南側は幅広となり東に屈折する。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含む褐色土である。

所見 本跡の時期は不明であるが、根きり溝の可能性はある。



第26図 第2・3号溝

## 5 遺構外出土遺物

本跡からは、遺構外から旧石器時代から中世にかけての遺物が出土している。出土遺物は、遺構の覆土に流れ込んだと判断できたものは遺構外に含め、時代ごとに掲載した。縄文時代と弥生時代の土器については、次のように分類した。

- 第I群 縄文時代前期後葉の土器
- 第II群 縄文時代中期前葉の土器
- 第III群 縄文時代中期後葉の土器
- 第IV群 弥生時代後期前葉の土器
- 第V群 弥生時代後期中葉の土器
- 第VI群 弥生時代後期後葉の土器

### 旧石器時代（第27図1～4）

1は、ナイフ形石器で、先端部が欠損している。石材は頁岩である。素材は縦長剥片で、基部に打瘤部がある。表面に残された打撃方向は裏面と一致するが、表面の右側縁の打撃方向は右上方から加えている。基部周辺には細かい調整加工を施している。

2～4は剥片である。石材は頁岩で、表面に残された打撃方向は裏面と一致する。

### 縄文時代（第28図）

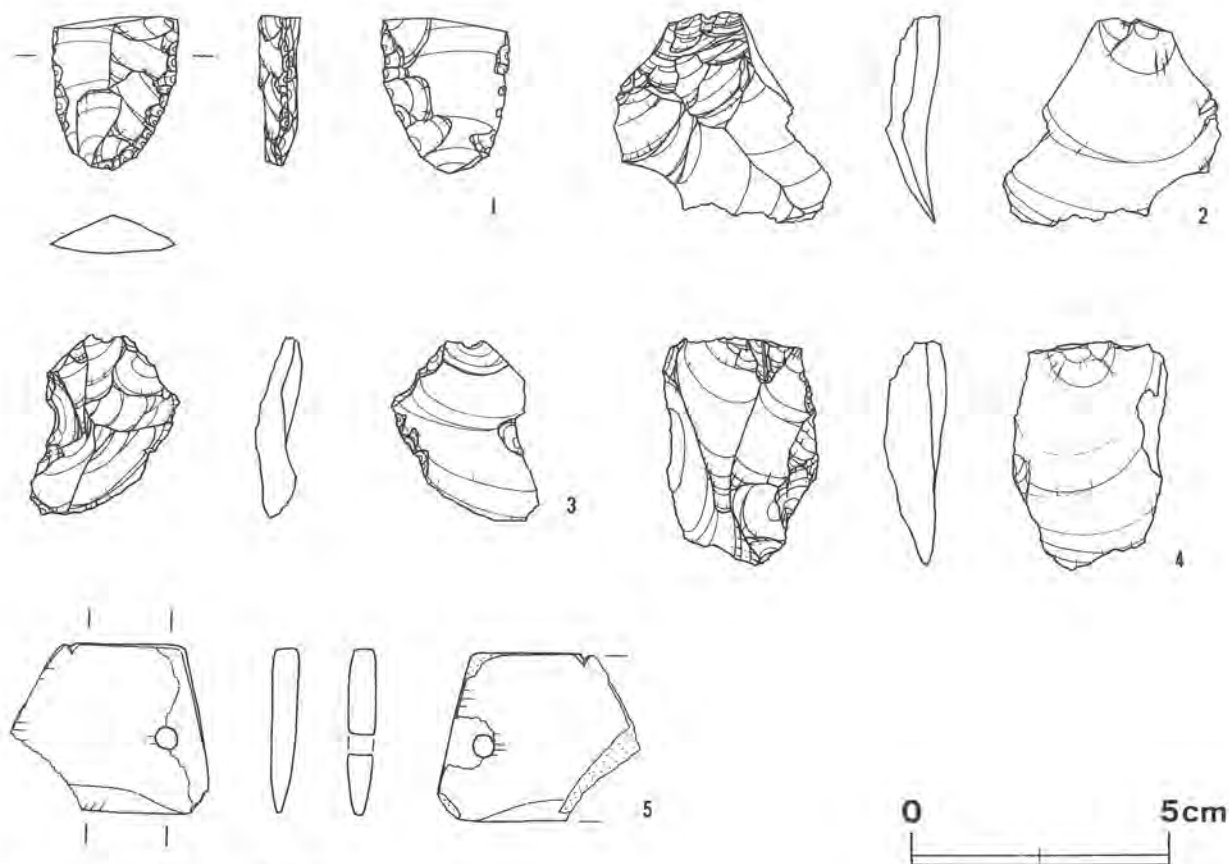
第I群 1～4は口縁部破片で、半截竹管の凹面により平行沈線文あるいは結節平行沈線文を施している。1の口唇部には刻みを施しており、4は波状口縁である。1～4は浮島I～II式土器である。

第II群 5はLRの結節単節縄文を横位に施した胴部破片である。5は下小野式土器である。6～8は内彎する口縁部破片である。6は棒状工具により結節沈線文を施している。7は単節縄文を地文とし、楕円形棒状文内に爪形文を施している。8は沈線と刺突による連続「コ」の字状文を施している。6・7は阿玉台式土器、8は中峠式土器である。

第III群 9・10は単節縄文を地文とした胴部破片である。9は沈線を垂下させている。10は垂下させた沈線間を磨り消している。9は加曾利E I式土器、10は加曾利E II式土器である。

### 弥生時代（第28・29図）

第IV群 頸部に沈線あるいは平行沈線により文様を施したものである。11は一本単位の沈線により山形文を施している。12～14は平行沈線により、12は山形文を、13は波状文を、14は縦位に区画後連弧文を施している。



第27図 遺構外出土遺物(1)

第V群 複合口縁で、段部に刻みや刺突を施すものである。頸部の文様と器種により7類に分類した。

1類 無文帯を持つもの。15は段部に刻みを施した無文の口縁部破片で、口唇部には縄文を回転施文している。16~18は口縁部と口唇部に附加条1種（附加2条）の縄文を施している。16の段部には刺突を、17の段部には刻みを施している。18は内面にも施文が及んでおり、段部は刻みを施している。19は頸部に口縁部と同じ縄文を施しており、無文帯の有無は不明である。

2類 櫛歯状工具で山形文を施すもの。21~23は頸部破片で、歯の数は21が5本、22が6本である。

3類 櫛歯状工具で連弧文を施すもの。24の歯の数は8本である。

4類 櫛歯状工具で波状文を施すもの。25の歯の数は7本である。

5類 櫛歯状工具で平行条線文を施すもの。20は口縁部破片で、26~29は頸部破片である。20の段部には刺突を施している。30の頸部文様は不明であるが、胴部の縄文は羽状構成していない。

6類 縄圧痕文を縦位に施すもの。31は附加条1種（附加2条）の縄文で施している。

7類 蓋。32は2段の段部に刺突を施している。

第VI群 単純口縁で、口縁部に2段の刺突を施すものである。部位と頸部の文様により3種に分類した。

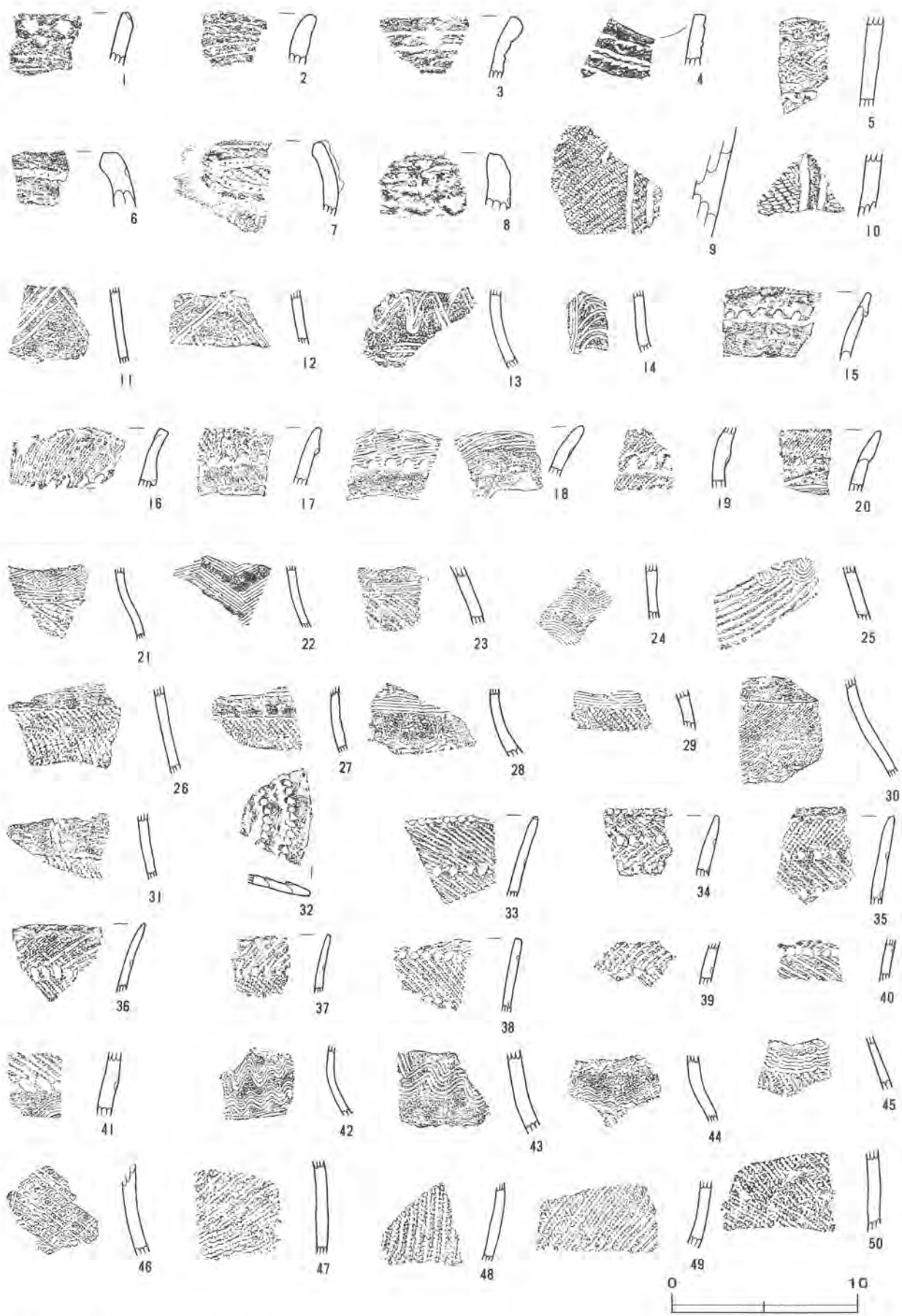
1類 口縁部。33~40は附加条1種（附加2条）の縄文を施した口縁部破片である。刺突は縄文原体で加えている。33・34の口唇部には縄文原体で刻みを施し、35~37の口唇部には縄文を施文している。

2類 頸部に櫛歯状工具で波状文を施すもの。41は口縁部破片で、縄文原体で刺突している。42は歯の数が5本、43は歯の数が8本である。

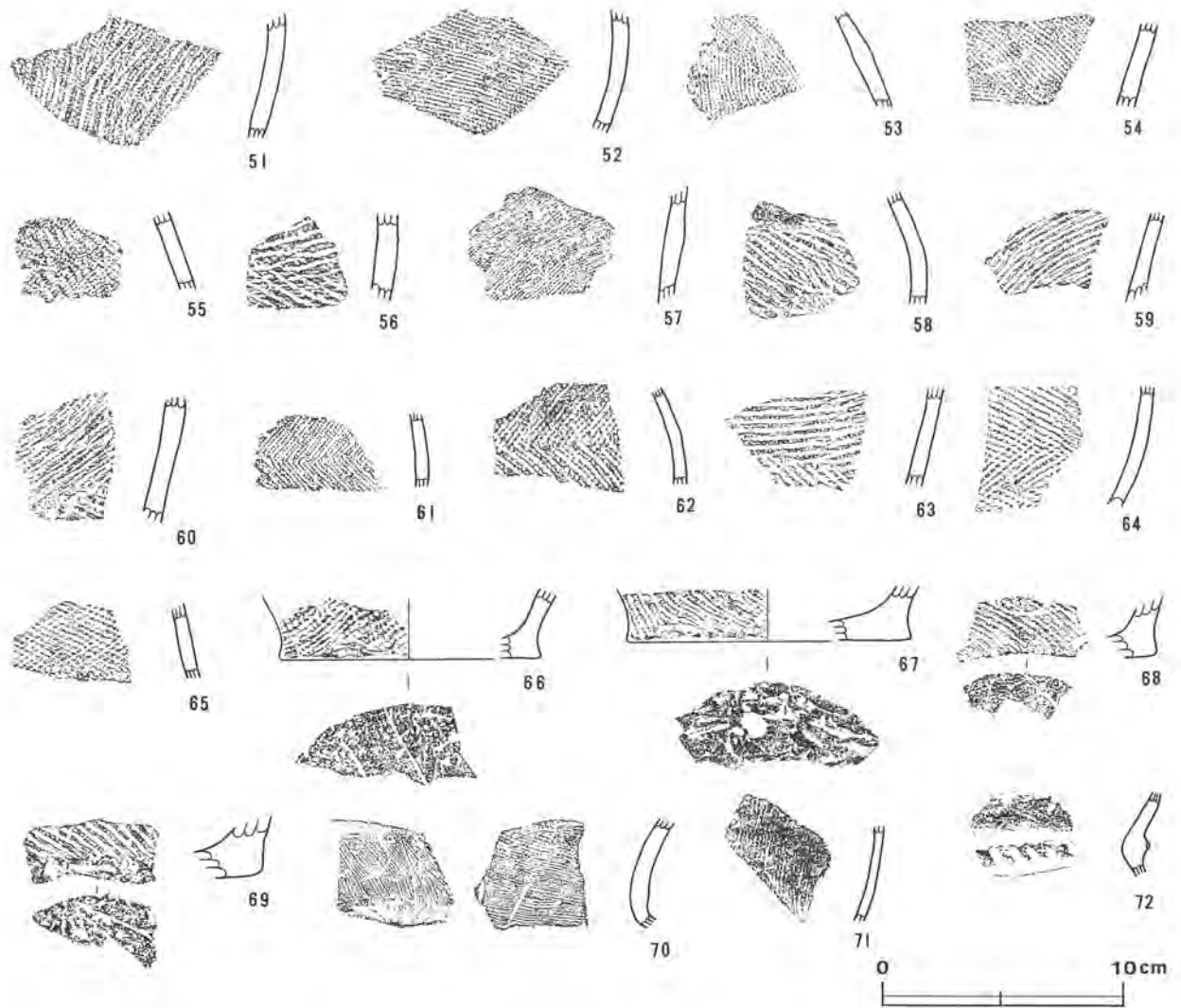
3類 頸部に櫛歯状工具で細かい波状文を施すもの。44は歯の数が7本、45は歯の数が5本である。

4類 頸部に1本単位の細沈線で格子目文を施すもの。46は縦位の区画後、格子目文を施している。





第28図 遺構外出土遺物(2)



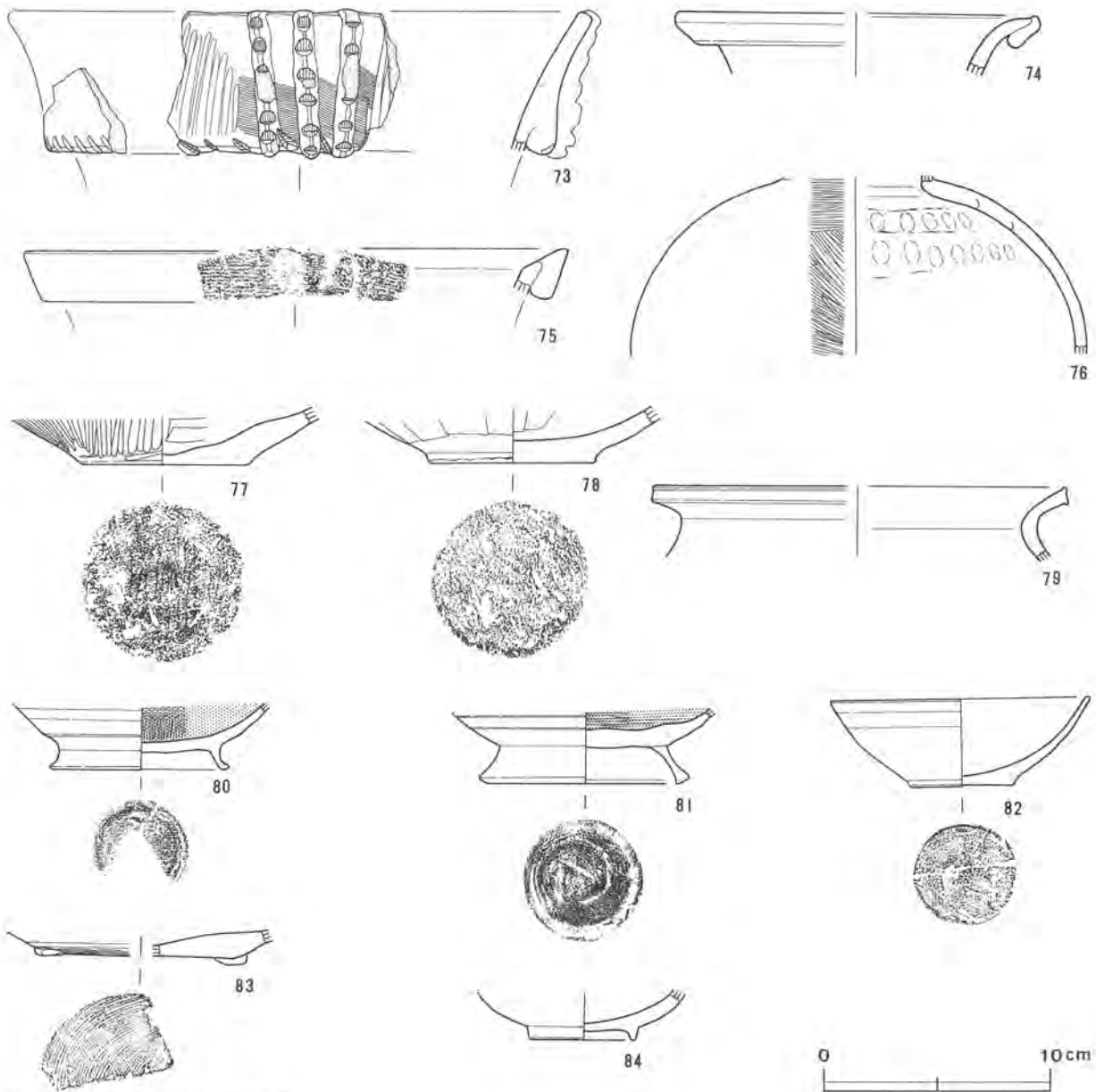
第29図 遺構外出土遺物(3)

胴部 47は附加条1種(附加1条)の縄文を施している。48~52は附加条1種(附加2条)の縄文を施している。50・51は施文方向を変えている。53は撚糸文を、54・55は単節縄文を施している。56は附加条2種の縄文で羽状を構成している。57~59は附加条1種(附加2条)の縄文を施したものである。57には軸縄が観察でき、軸縄と附加縄ともに条が細い。60は直前段反撚の縄文を施している。61~64は附加条1種(附加2条)の縄文により羽状を構成している。61・62は軸縄が明瞭であるが、63・64は不明瞭である。65は附加条2種の縄文により羽状を構成している。

底部 66は単節縄文を、67~69は附加条1種(附加2条)の縄文を施した底部破片である。66・68・69には木葉痕がある。

#### 古墳時代(第27・29・30図)

70・71は内外面にハケ目調整を施したもので、70が口縁部破片、71が胴部破片である。72は壺の頸部破片で、屈折部には刻みを施した突帯を巡らしている。73は複合させた口縁部破片で、ハケ目調整後に磨きを施している。ハケ状工具による刻みを施した棒状浮文を3本1単位付け、口縁下端にも刻みを加えている。74・75は複合させた口縁部破片で、75の口縁部にはハケ目調整を施している。76は埴の胴部破片で外面には磨きを施して



第30図 遺構外出土遺物(4)

いる。77・78は甕の底部破片で、77の外面には磨きを、78の外面にはヘラ削りを施している。

第27図5は、剣形の大型石製模造品である。滑石製で、基部に1ヶ所貫通孔を穿っている。基部と峰部の境に刻みを施し、刃部は両側から研磨している。

#### 平安時代（第30図）

79は甕の口縁部破片である。口縁端部は上下に突出させている。80・81は「ハ」の字状に高台の付く坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、内面を黒色処理している。

#### 中世（第30図）

82は土師質土器の坏で、底部は回転系切りで切り離している。83は瀬戸産の盤で、底部は回転系切りで切り離している。内面を施釉し、底部には獣足の上端部が残っている。84は瀬戸産の高台の付く碗である。

## 第4節 まとめ

小山遺跡の調査成果を時代ごとにまとめておきたい。

### 旧石器時代

頁岩製のナイフ形石器と剝片が表土から出土している。ナイフ形石器は、縦長剝片を素材とし打面を残して基部を調整するもので、東京都はけうえ遺跡第Ⅳ中層<sup>(1)</sup>と東京都野川中洲北遺跡東区第Ⅳ中～下層<sup>(2)</sup>のものと共通性がある。

### 縄文時代

縄文時代の遺構は確認していない。前期後葉の浮島Ⅰ～Ⅱ式土器、中期前葉の下小野式土器・阿玉台Ⅱ～Ⅳ式土器・中峠式土器、中期後葉の加曾利ⅤⅡ～Ⅲ式土器が表土から出土している。

### 弥生時代

3期に分けることができる。

#### 第1期（後期前葉）

本期の遺構は確認していない。広口壺の頸部には、沈線あるいは平行沈線で山形文・波状文・縦位区画後連弧文を施している。新池台遺跡第11・17号住居跡<sup>(3)</sup>からは縦位区画後山形文や波状文を施した土器が、餓鬼塚遺跡<sup>(4)</sup>からは縦位区画後連弧文を施した土器が出土しており、本期との共通性がある。

#### 第2期（後期中葉）

本期の遺構は確認していない。広口壺は有段口縁で、頸部には無文帯を持つもの（第Ⅴ群1類）と櫛歯状工具で文様を施すものがある。櫛歯状工具による文様には、山形文（第Ⅴ群2類）・連弧文（第Ⅴ群3類）・波状文（第Ⅴ群4類）・平行条線文（第Ⅴ群5類）がある。蓋は2段の複合口縁である。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文を施すものが多い。屋代B遺跡第9・33号住居跡出土土器<sup>(5)</sup>と文様組成の共通性がある。本群土器は、2段の複合口縁のものがあること、櫛歯状工具による連弧文（第Ⅴ群3類）を施すものがあること、附加条1種（附加2条）の縄文が施されることから二軒屋式土器と考えられ、鈴木編年のⅡ段階と位置付けることができる<sup>(6)(7)</sup>。

#### 第3期（後期後葉）

第1・2号住居跡に代表される時期である。2号住居跡は平面形が長方形で、中央に炉を持つ大型住居跡である。出土遺物は、広口壺と紡錘車である。2段の刺突を加えている単純口縁の広口壺には、頸部に櫛歯状工具により波状文を施すもの（第Ⅵ群2類）と細かい波状文を施すもの（第Ⅵ群3類）とがある。胴部には、附加条1種（附加2条）の縄文で羽状を構成させている。熊の宮遺跡出土遺物<sup>(8)</sup>と共通性がある。串状工具による格子目文を施すもの（第Ⅵ群6類）は、髭釜遺跡第32号住居跡出土土器<sup>(9)</sup>と共通性がある。本群土器は、鈴木編年のⅢ段階に位置付けることができる。

### 古墳時代

2期に分けることができる。

## 第1期（前期）

第4号住居跡の時期である。第4号住居跡は、貯蔵穴が柱穴を結ぶ軸線より床面中央寄りに位置していることと出土遺物から4世紀前葉と考えられる<sup>(10)</sup>。また、遺構外出土遺物として複合口縁に棒状浮文を施した大廓系の壺が出土している。

## 第2期（後期）

第1号墳の時期である。第1号墳は円墳と推定される。当遺跡は大柳古墳と同じ台地上にあることから、古墳群を形成していることが考えられる。出土した埴輪片は5片と少なく、突帯は下向きに突出する。本期は、埴輪の出土が少ないことから6世紀後葉と考えられる。

## 平安時代

第5～8号住居跡と第3号土坑の時期である。住居跡は、いずれも第1号墳周溝覆土を掘り込んで構築している。竈は、第5・6号住居跡が北壁に、第7号住居跡が東壁に付設している。第6号住居跡竈の両壁には、灰白色粘土で構築した棚状遺構が確認された。遺物は、第8号住居跡から二川窯産の折戸53窯式に比定される長頸瓶と置竈が、第3号土坑から外面体部に「卒家」と墨書された高台付坏が出土している。本期は、第3号土坑が9世紀後葉に、第5・6・7・8号住居跡が10世紀前葉に位置付けることができる。

## 中世

中世の遺構は確認していないが、時期不明とした土坑が該当する可能性がある。遺物は、表土から瀬戸産の四足盤・碗が出土している。

## 註・参考文献

- (1) 阿部祥人他 『はけうえ』 国際基督教大学考古学研究センター 1980年3月
- (2) 千葉寛他 『野川中洲北遺跡』 小金井市教育委員会 1989年3月
- (3) 和田雄次 「新池台遺跡」 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2』 茨城県教育財団調査報告第17集 茨城県教育財団 1983年3月
- (4) 伊東重敏 『常陸国餓鬼塚遺跡調査報告』 1980年9月
- (5) 鈴木美治 「屋代B遺跡」 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団調査報告第40集 茨城県教育財団 1987年3月
- (6) 鈴木正博 「「十王台式」理解のために(1)」 『常総台地』 7 1976年3月
- (7) 鈴木正博 「栃木「先史土器」研究の課題(一)」 『古代』 第89号 1990年3月
- (8) 真壁町教育委員会 『熊の宮遺跡発掘調査報告書』 1984年3月
- (9) 井上義安 『髭釜一鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一』 1980年3月
- (10) 土生朗治 「貯蔵穴の移動について—寄居・うぐいす平遺跡の古墳時代前期の堅穴式住居跡の構造変化—」 『研究ノート』 3号 茨城県教育財団 1994年6月
- (11) 斎藤孝正 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」 『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』 古代の土器研究会第3回シンポジウム 1994年9月
- (12) 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月

## 第5章 八幡前遺跡

### 第1節 遺跡の概要

八幡前遺跡は、桜川左岸にある筑波山塊西縁台地の第1段丘に立地する、旧石器時代から中世にかけての集落跡である。今回の調査区は、南北約140m、東西約50m、面積7,232㎡で、舌状台地の南縁部に位置している。現況は雑種地で、最近まで畑として利用されていた。西側の低地は水田であり、台地との比高は6mである。また、南側の谷津の対岸に小山遺跡が隣接している。

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代後期の土坑1基、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡26軒・竪穴遺構2基・土坑20基・井戸1基・溝状遺構3条・遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡3軒、時期不明の土坑42基・井戸3基・溝3条・焼土遺構1基である。遺物包含層は標高の低い調査区南半部に堆積しており、そこで確認した遺構の半数はその遺物包含層中を床面としている。

出土遺物は、遺物収納コンテナで106箱程で、縄文土器片15点、弥生土器片1120点、土師器片27070点、須恵器片47点、鉄製品（鉄斧・刀子片）3点、土師質土器片3点、陶磁器片27点、石器6点、古銭3点である。旧石器時代の遺物は遺構外遺物として石核と剥片が、弥生時代の遺物は広口壺と紡錘車が、古墳時代の遺物は甕・壺・坏・埴輪・置竈・土鈴が、平安時代の遺物は羽釜・坏（墨書土器）などが出土している。

### 第2節 調査方法と基本層序

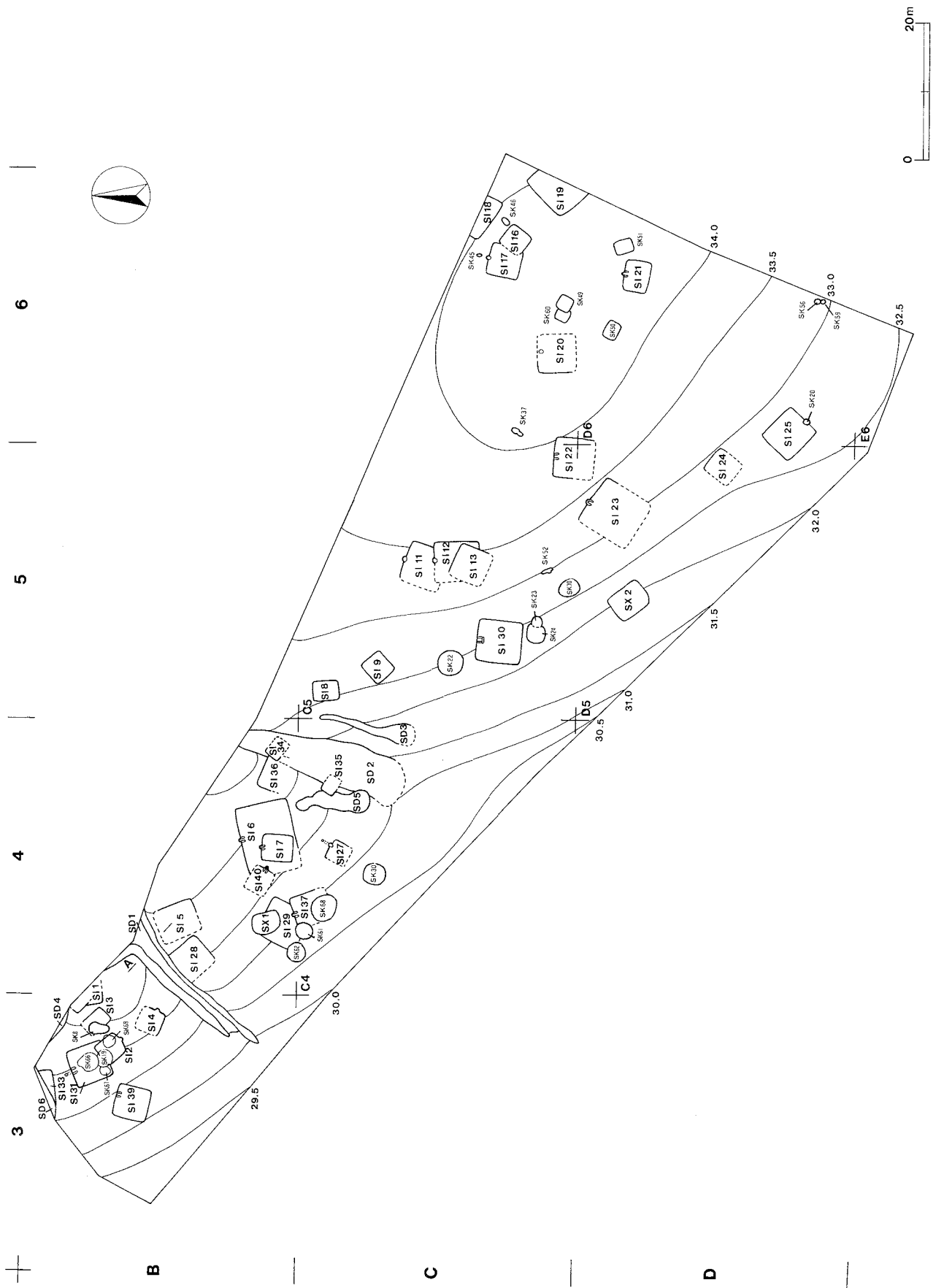
#### 1 調査方法

八幡前遺跡の試掘調査において、谷津に面する調査区南半部に遺物包含層が堆積していることを確認した。今回の調査では、遺物包含層の堆積土中及び堆積土下に遺構が存在することが考えられたため、遺物包含層が堆積している主要な部分に土層観察用ベルトを残し調査を進めた。遺物包含層は、調査時に遺物包含層第1・2・3・4層としたが、後に第II a・II b・II c・II d層と改めた。遺物包含層と溝状遺構から出土した遺物については、土層観察用ベルトの調査で得られた層序を参考に、層ごとに取り上げることに努めた。

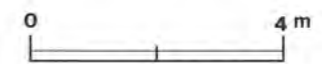
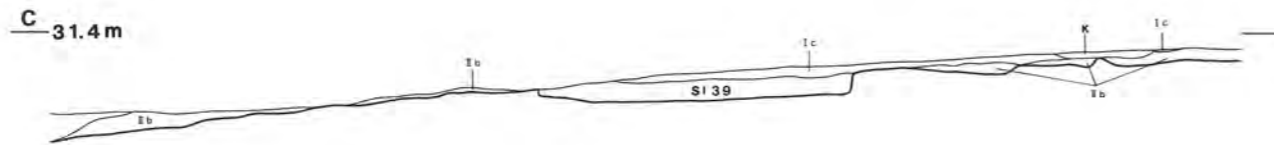
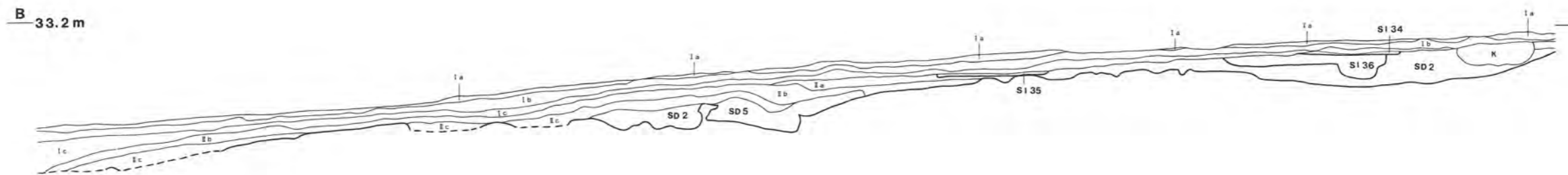
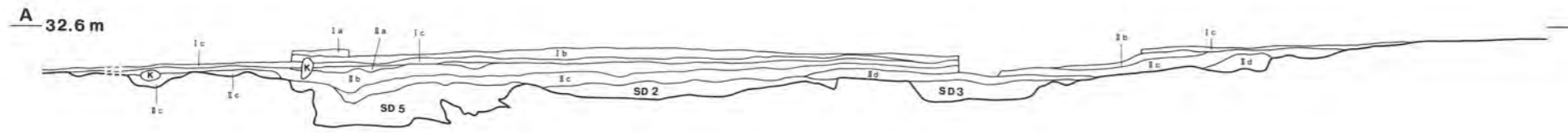
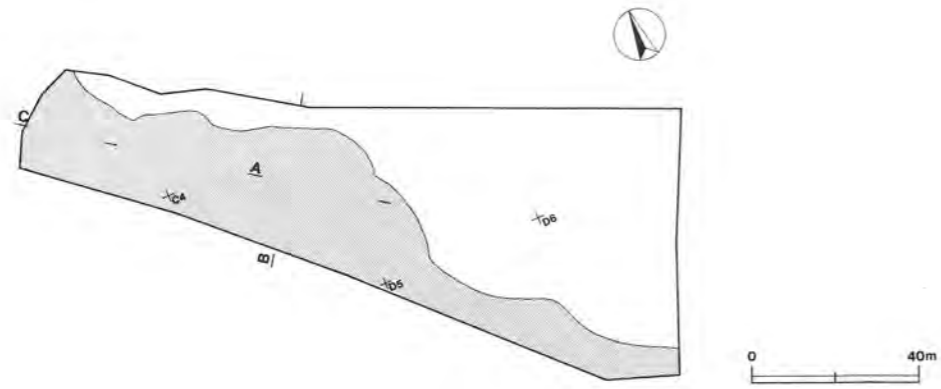
地山である関東ローム層の層序については、調査区中央部（C5f<sub>5</sub>区）にテストピットを設け、深さ約1.8mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した。

#### 2 基本層序

今回の調査区で確認した基本土層は、表土（第I a～I c層）、遺物包含層（第II a～II d層）、関東ローム層（第III～XI層）、常総粘土層（第XII層）、河成砂礫層（第XIII層）で、18層にわたる。表土は、第I a・b層が調査区全体に堆積し、第I c層は遺物包含層が堆積する調査区の南西部に分布する。表土は、縄文時代から平安時代にかけての土器片を包含している。遺物包含層は、調査区の南西部に堆積し、古墳時代の遺物を主体に包含している。土質は、粘土の含有率が高く、乾くと硬化する粘質土である。関東ローム層は平行堆積しており、調査区南側の谷津に向かうにつれて深く流失している。そのため、関東ローム層上部層は標高の高い調査区北東部のみに残っている。鹿沼パミス（KP）は、標高33.80m付近に堆積しており、今回調査したテストピット（C5f<sub>5</sub>区）では確認できなかった。以下、調査で確認した各基本土層について列挙する。



第31図 八幡前遺構配置図 (等高線は基底面の標高)



第32図 遺物包含層基本土層図 (スクリーントーンは遺物包含層の範囲)



第I a層 褐色土。耕作土である。ローム粒を微量含む。礫粒を少量含む。

33.8 m —

第I b層 褐色土。ローム粒・礫粒を微量含む。

第I c層 褐色土。ローム粒・礫粒を少量含む。

第II a層 暗褐色土～黒褐色土。ローム粒・礫粒を少量含む。

第II b層 暗褐色土～黒褐色土。ロームブロック・灰白色粘土ブロック・礫粒を少量含む。

33.0 —

第II c層 暗褐色土～黒褐色土。ローム粒・礫粒を少量含む。

第II d層 暗褐色土。灰白色ローム粒・礫粒を中量含む。

第III層 褐色ローム。

第IV層 黄褐色パミス。鹿沼パミス（KP）。

第V層 褐色ローム。

第VI層 黄褐色ローム。VI層より粘性がある。

第VII層 褐色ローム。白色スコリアを含む。VII層より粘性がある。

第VIII層 黄褐色ローム。VIII層より硬質で、粘性がある。

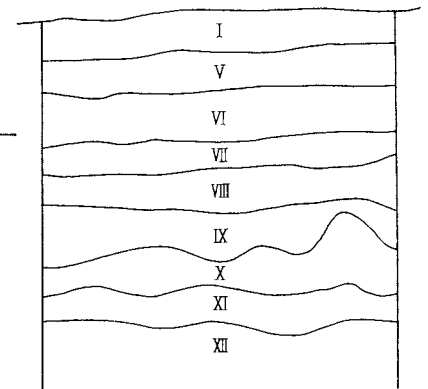
第IX層 黄褐色ローム。IX層より色調が明るい。

第X層 褐色ローム。礫粒を少量含む。

第XI層 にぶい黄褐色ローム。スコリア・少礫を少量含む。

第XII層 灰オリーブ色粘土。雲母・礫粒を多量に含む。

第XIII層 灰色混礫砂層。



第33図 八幡前遺跡基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の土坑を1基確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

##### (1) 土坑

###### 第7号土坑（第34図）

位置 調査区の北部，B4i<sub>8</sub>区。

規模と平面形 長軸1.64 m・短軸1.56 mの方形。

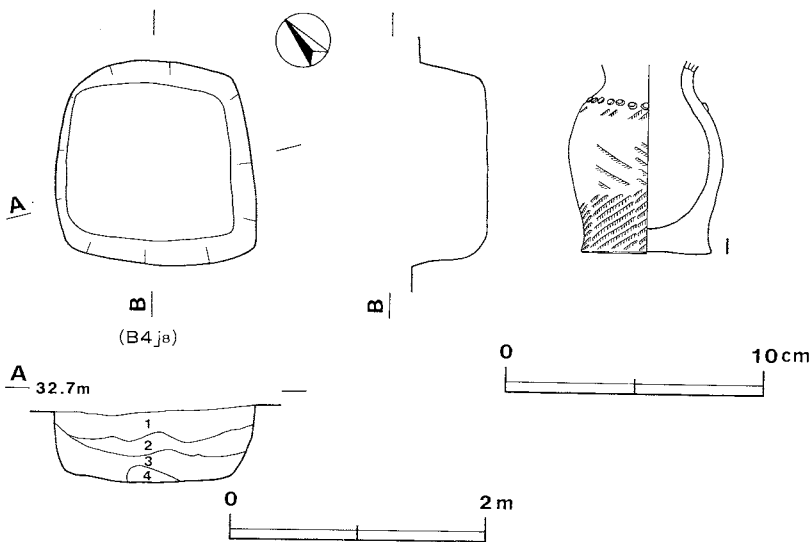
壁 深さは60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で、やや締まりがある。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒を中量、ロームブロックを少量、焼土粒・炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロックを中量、ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ロームブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒を多量、ロームブロック・粘土粒を少量含む明褐色土である。

遺物 第34図1の小型壺が覆土中より出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。



第34図 第7号土坑・出土遺物

第7号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	小型壺 弥生式土器	C 5.0 F 6.0	口縁部欠損。最大径は胴部中位。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はわずかに外反する。胴部は、無節のLとRの原体により羽状縄文を構成する。頸部と胴部の境には、ボタン状の貼瘤を巡らしている。	石英・長石 にふい橙色 普通	P333 70% 覆土

## 2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡26軒、竪穴遺構2基、土坑20基、井戸1基、溝状遺構3条、遺物包含層を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第2号住居跡（第35図）

位置 調査区の北部，B3d<sub>3</sub>区。

確認状況 遺物包含層である第II b層上面で確認する。

重複関係 本跡は、第31号住居跡と第69号土坑と重複している。本跡は第31号住居跡と第69号土坑の覆土上層を床面としており、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.58 m・短軸4.20 mの不整形方形。

主軸方向 N-126°-E

壁 壁高は10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 遺物包含層である第II b層下部及び第31号住居跡覆土上層を床面としている。ほぼ平坦であるが、踏み締まりは弱い。

ピット 柱穴等のピットは確認していない。

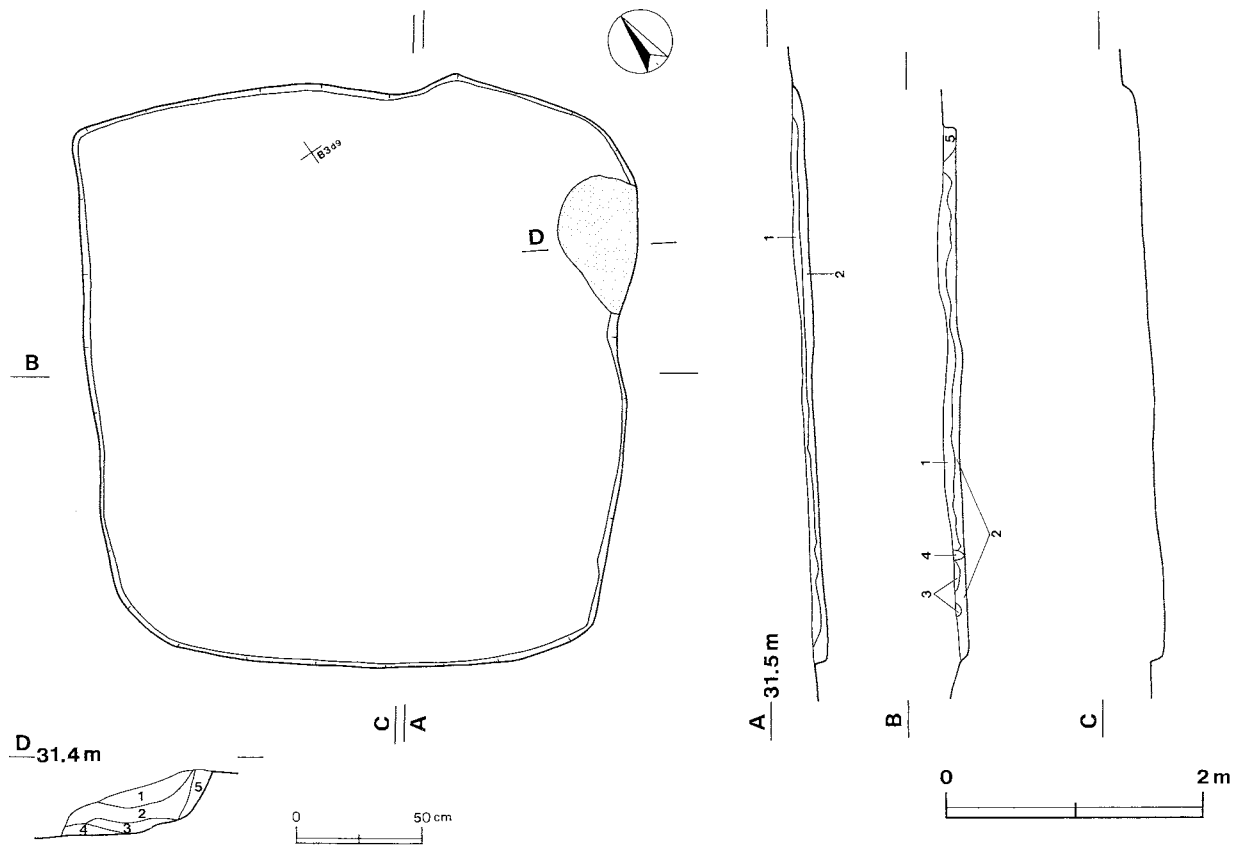
竈 南東壁北寄りに付設する。袖部は確認していない。火床面は床面と一致し、煙道は壁よりわずかに突出して緩やかに立ち上がる。覆土は、5層からなる。第1層は、焼土ブロックを中量、炭化物・礫粒を少量含む暗

褐色土。第2層は、焼土ブロック・炭化物を中量含む暗褐色土。第3層は、焼土ブロック・炭化物を多量に含む暗褐色土。第4層は、焼土ブロックを多量、炭化物を少量含む暗褐色土。第5層は赤褐色焼土である。

覆土 5層からなる。第1層は、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む暗褐色土。第3層は、焼土ブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・焼土粒を微量含む褐色土。第5層は、ローム粒を中量、焼土粒を微量含む褐色土である。

遺物 本跡から古墳時代の土師器片363点が出土している。

所見 本跡は、南東壁に竈を付設する住居跡である。本跡の時期は、時期を決定できる遺物の出土がないため明確にはできないが、第31号住居跡覆土上層を床面にしており古墳時代以降の遺物が混入していないことから、7世紀前葉と考えられる。



第35図 第2号住居跡

### 第3号住居跡（第36図）

位置 調査区の北部，B3d<sub>0</sub>区。

重複関係 本跡は、第8号土坑と重複している。本跡は第8号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸〔3.60〕m・短軸2.54mの長方形と推定される。

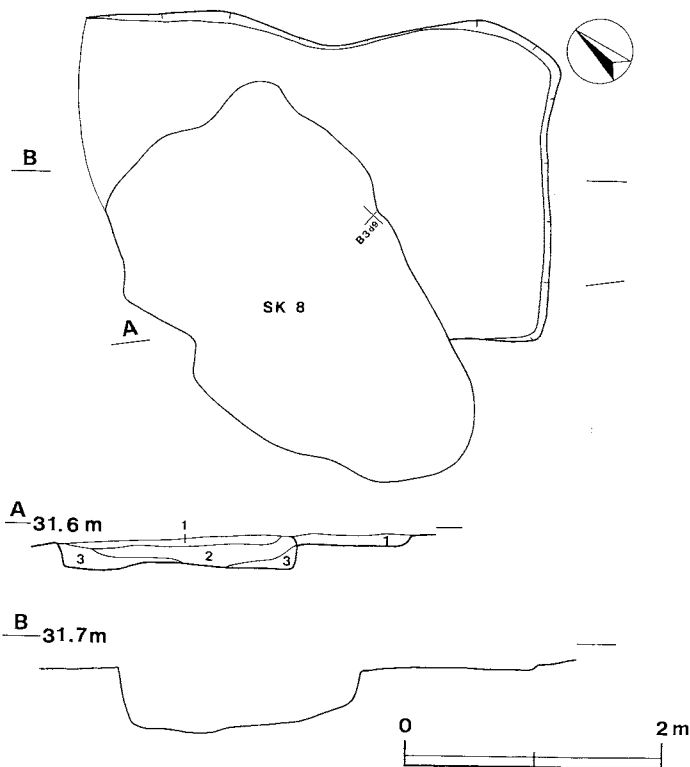
長軸方向 N-46°-W

壁 北東壁と南北壁だけが残存している。壁高は10cmで、傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、踏み締めりは弱い。

ピット 柱穴等のピットは確認していない。

覆土 1層からなる。第1層は、礫粒を中量、炭化物を微量含む褐色土である。



第36図 第3号住居跡

遺物 本跡からは、古墳時代の土師器片114点が出土している。

所見 本跡の時期は、第8号土坑に掘り込まれていることから6世紀代と考えられる。

#### 第4号住居跡（第37図）

位置 調査区の北部、B3e<sub>9</sub>区。

確認状況 遺物包含層である第II b層上面で確認する。

規模と平面形 長軸〔4.20〕m・短軸〔3.60〕mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-112°-E

壁 東壁だけが残存している。壁高は16cmで、傾斜して立ち上がる。

床 遺物包含層である第II b層下部を床面にしている。ほぼ平坦であるが、踏み締まりは弱い。

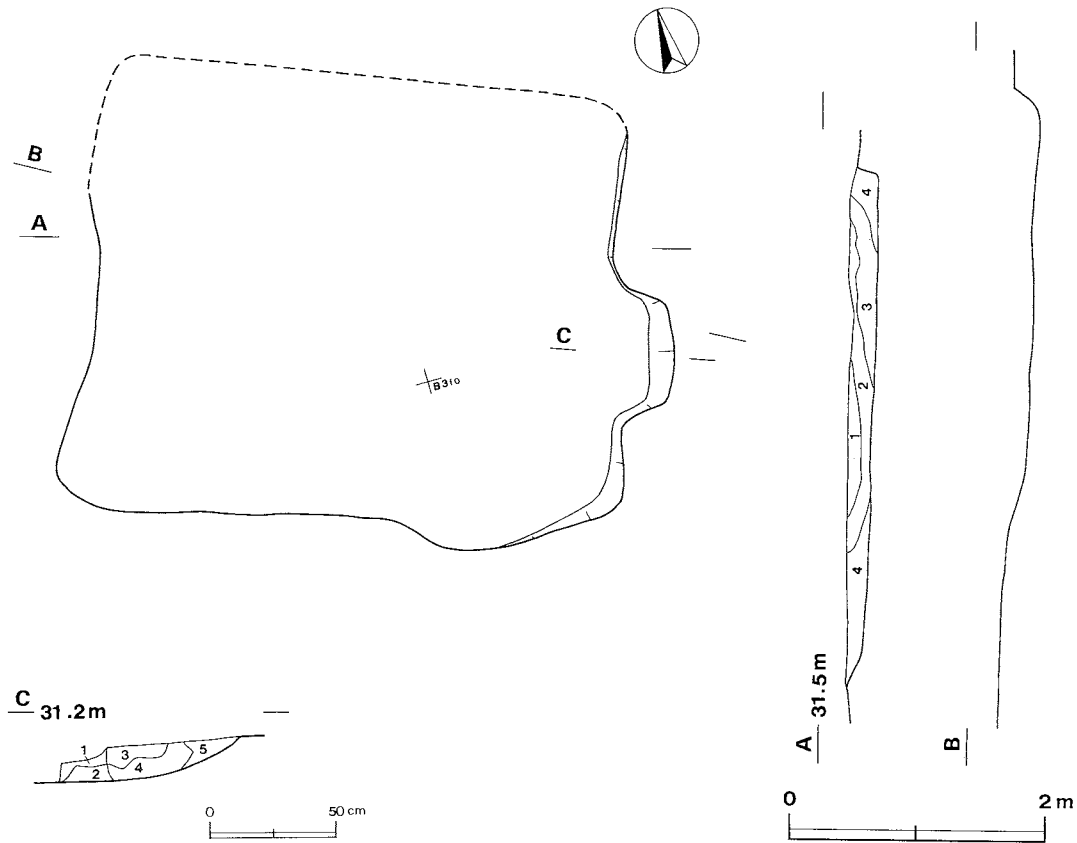
ピット 柱穴等のピットは確認していない。

竈 東壁のほぼ中央に付設している。袖部は確認していない。火床面は床面と一致し、煙道部は壁より44cm程突出させ緩やかに立ち上がる。覆土は5層からなる。第1層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む褐色土。第3層は、焼土ブロックを多量、炭化物を中量、ローム粒を少量含む暗赤褐色土。第4層は、焼土ブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土。第5層は、炭化物を中量、焼土粒を少量含む褐色土である。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・礫粒を中量含む灰褐色土。第3層は、ローム粒・礫粒を中量含む暗褐色土。第4層は、ロームブロック・ローム粒・礫粒を多量に含む褐色土である。

遺物 本跡から古墳時代の土師器片580点と須恵器片2点が出土している。

所見 本跡の時期は、平面形及び主軸方向が第2号住居跡と近似することから、7世紀前葉と考えられる。



第37図 第4号住居跡

第5号住居跡（第38図）

位置 調査区の北部，B4f<sub>3</sub>区。

規模と平面形 住居跡西側半分が流失しているため規模は不明であるが，平面形は隅丸方形と推定される。

壁 東壁と南壁の一部が残存している。壁高は10cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁と南壁下に残存している。上幅約20cm・下幅約12cmで，深さ6～18cmである。

床 東側半分が残存している。床面はほぼ平坦で，中央部付近に踏み縮まりがある。

ピット 1ヶ所。P<sub>1</sub>は，長径36cm・短径26cmの楕円形で，深さ14cmである。

炉 2ヶ所（炉A・炉B）。炉Aは床面中央に位置し，長径80cm・短径56cmの楕円形で，深さは12cmである。

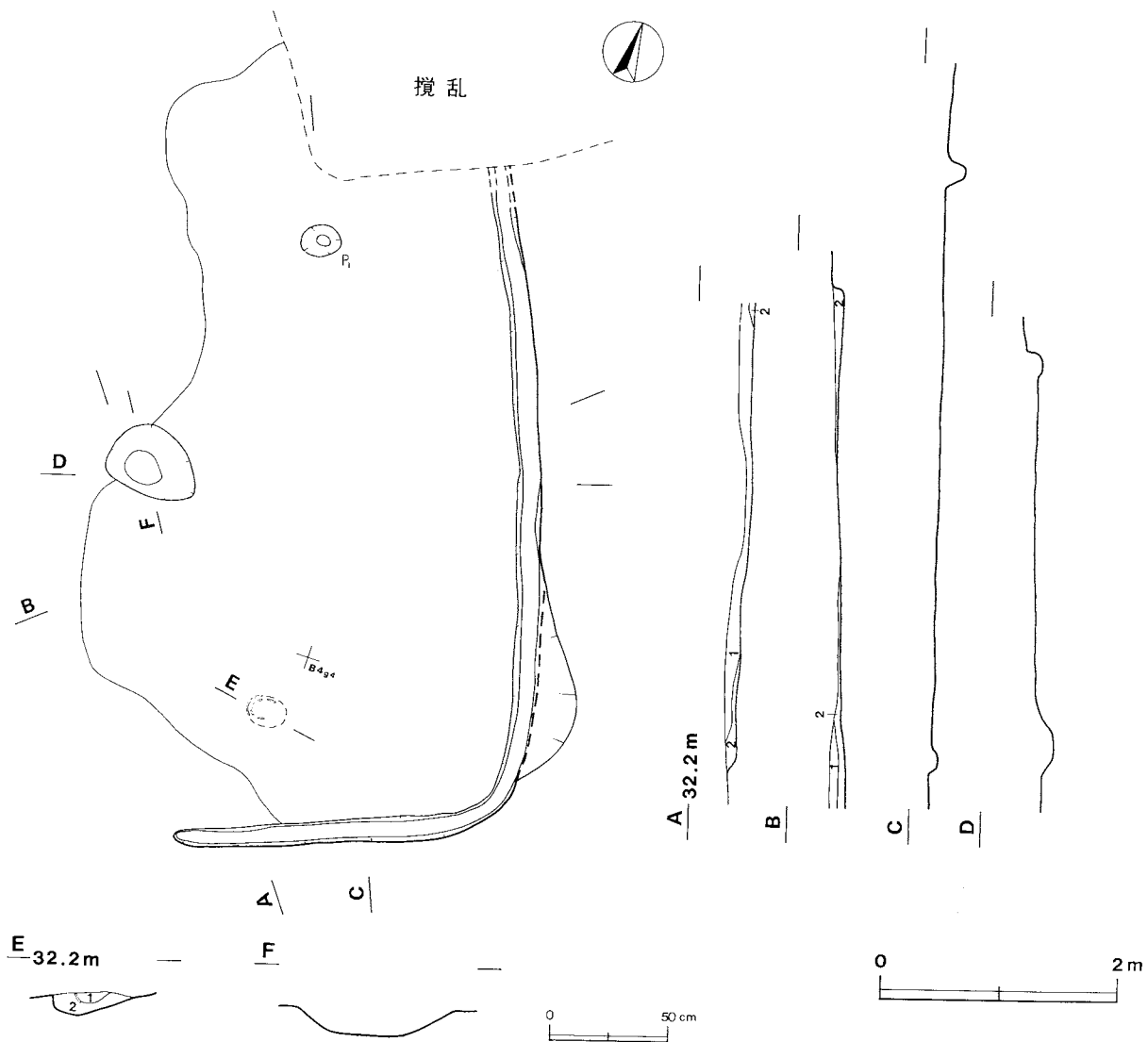
覆土は1層からなる。第1層は，礫粒を中量含む赤褐色焼土である。炉Bは南壁寄りに位置し，長径34cm・短径24cm楕円形で，深さ8cmである。覆土は2層からなる。第1層は，焼土粒・礫粒を少量含む褐色土である。

第2層は，礫粒を中量含む赤褐色土である。

覆土 2層からなる。第1層は，ローム粒・礫粒を中量含む褐色土である。第2層は，ローム粒・礫粒・炭化物を中量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片7点，土師器片367点，須恵器片2点，土製品片2点，陶磁器片5点が出土している。第39図1・2の甕と3の坏は，床面から出土している。3の置竈は，覆土上層からの出土であり，混入した可能性がある。弥生土器片と陶磁器片は混入したものである。

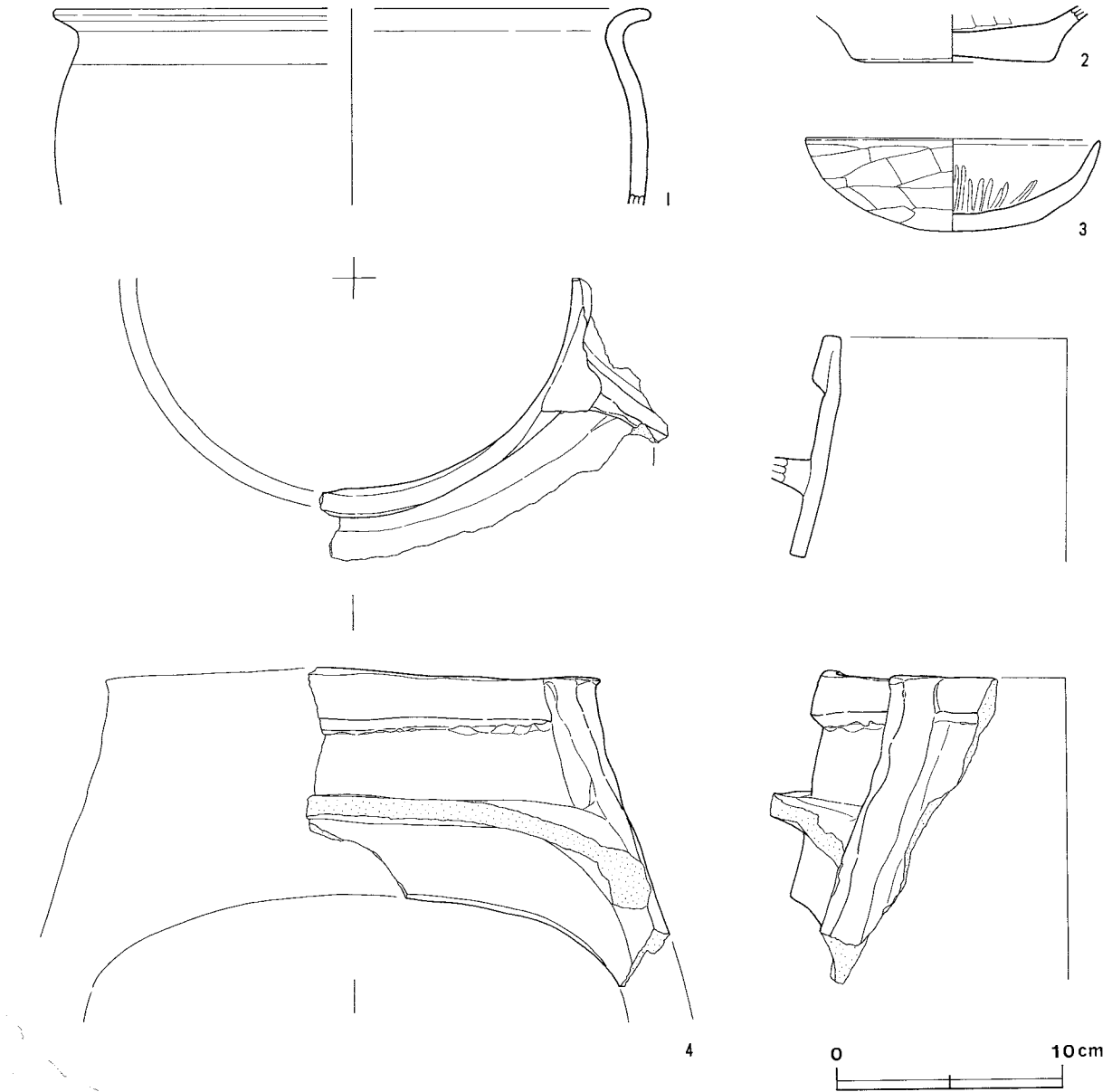
所見 本跡の時期は，床面から第39図1の甕と3の坏が出土していることから，7世紀前葉と考えられる。



第38図 第5号住居跡

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	甕 土師器	A[25.5]	口縁部破片。体部上位は直線的で、口縁部は外方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒にぶい 橙色 普通	P17 15% 床面
2	甕 土師器	C 9.0	底部破片。平底。	内面ヘラナデ。	石英・長石・砂粒 明赤褐色 普通	P18 5% 床面
3	坏 土師器	A 13.1 B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P14 75% 床面
4	置 土師器	A[22.0]	上端部から焚口部破片。上端部は隆帯を巡らし、上端部から突帯を垂下させる。焚口部上部には庇が付く。	内・外面ナデ。	石英・長石にぶい 橙色 普通	P19 10% 覆土下層



第39図 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第40・41図）

位置 調査区の中央部，B4i<sub>5</sub>～B4j<sub>7</sub>区。

確認状況 本跡の大部分は遺物包含層である第IIb層上面で，北壁のみを関東ローム層下部である第V・VI層で確認する。南壁と西壁は確認できず，南西部は床面のみが残存している。

重複関係 本跡は，第7号住居跡と第40号住居跡と重複する。本跡は第7号住居跡と第40号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

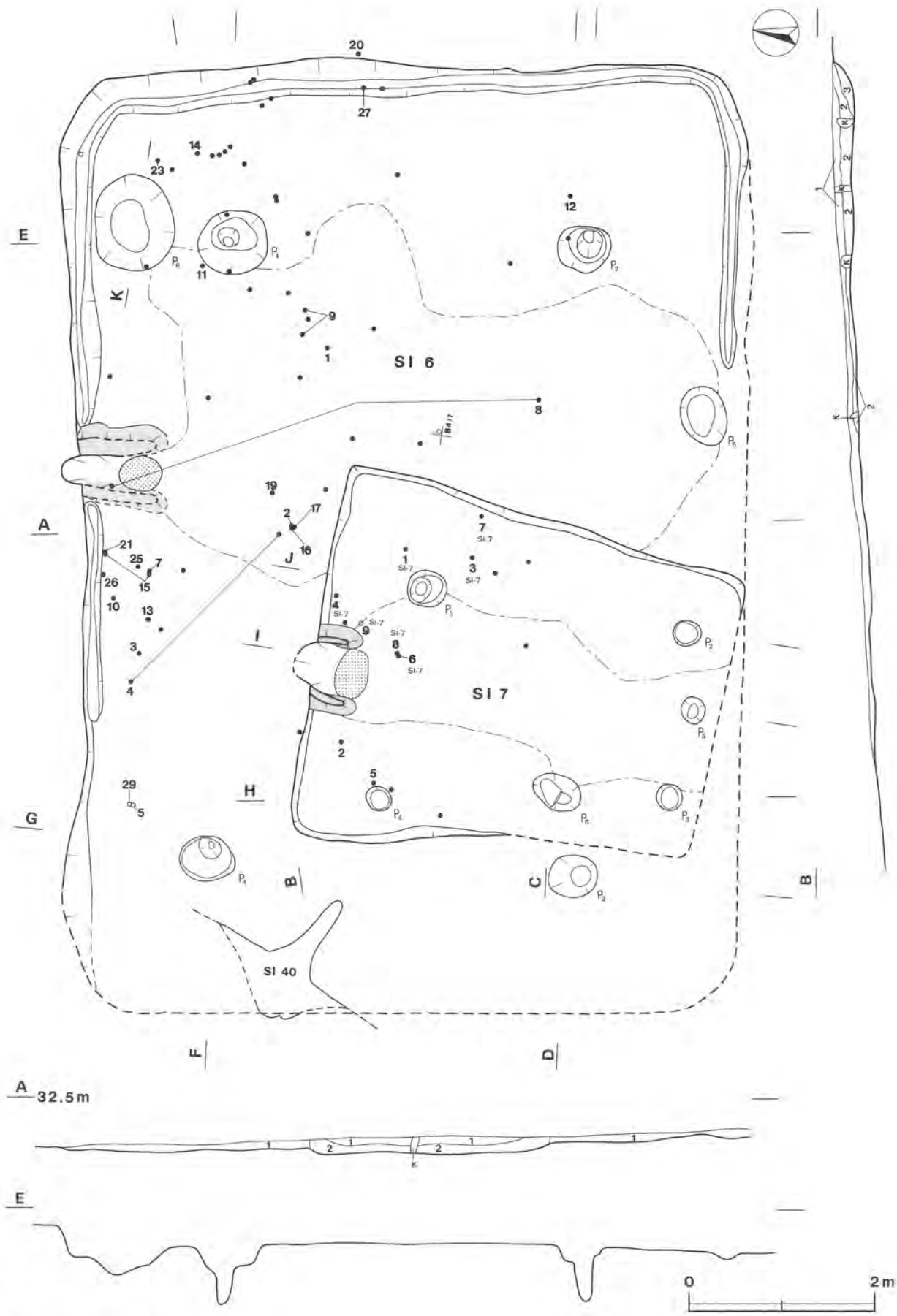
規模と平面形 長軸10.20m・短軸7.30mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-12°-W

壁 東壁・北壁及び南壁の一部が残存している。壁高は最大で36cmで，傾斜して立ち上がる。

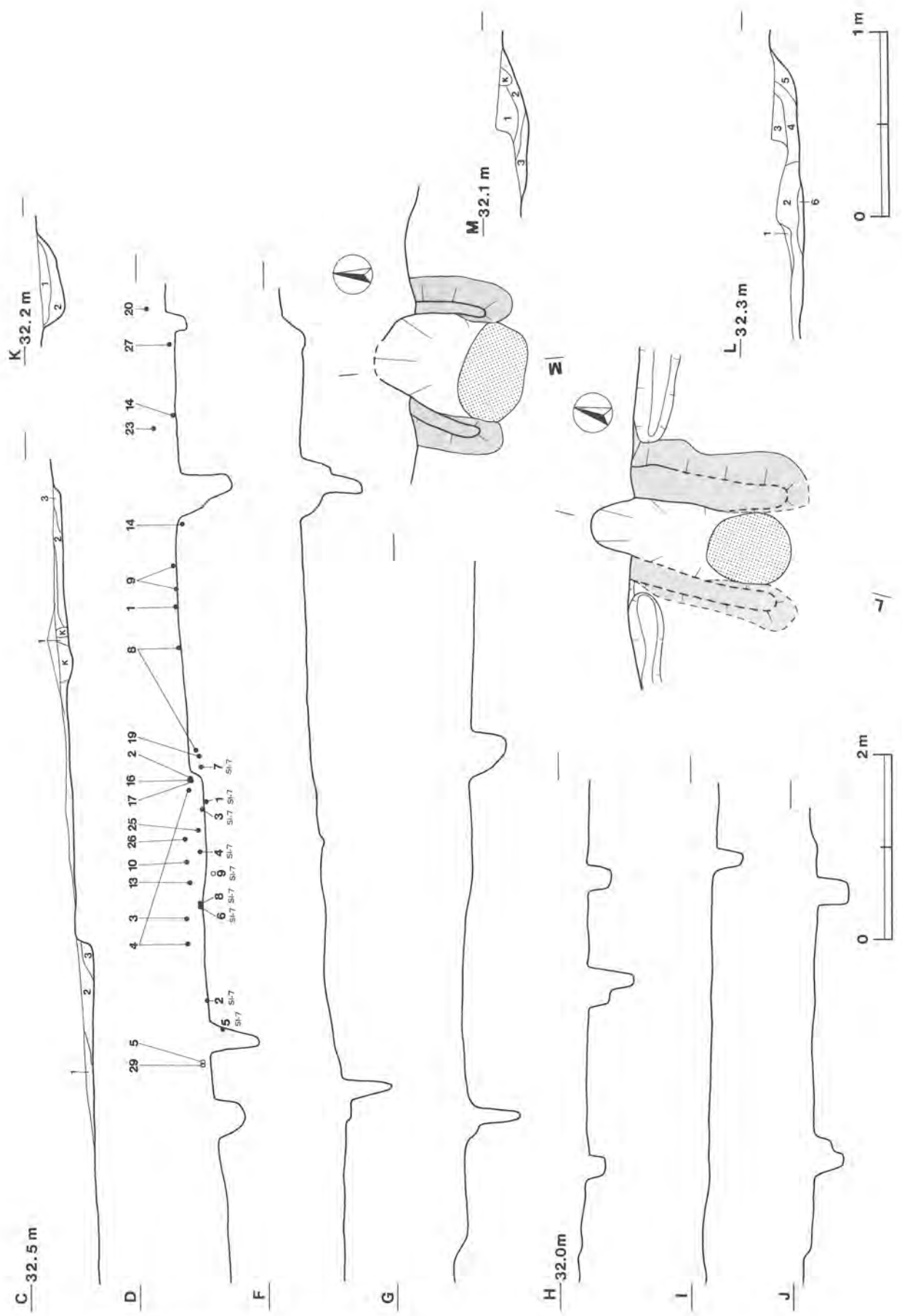
壁溝 東壁下と南壁・北壁下の一部に残存している。上幅約24cm・下幅約14cmで，深さ約10cmである。

床 床面は平坦であり，床面中央部はよく踏み締めている。

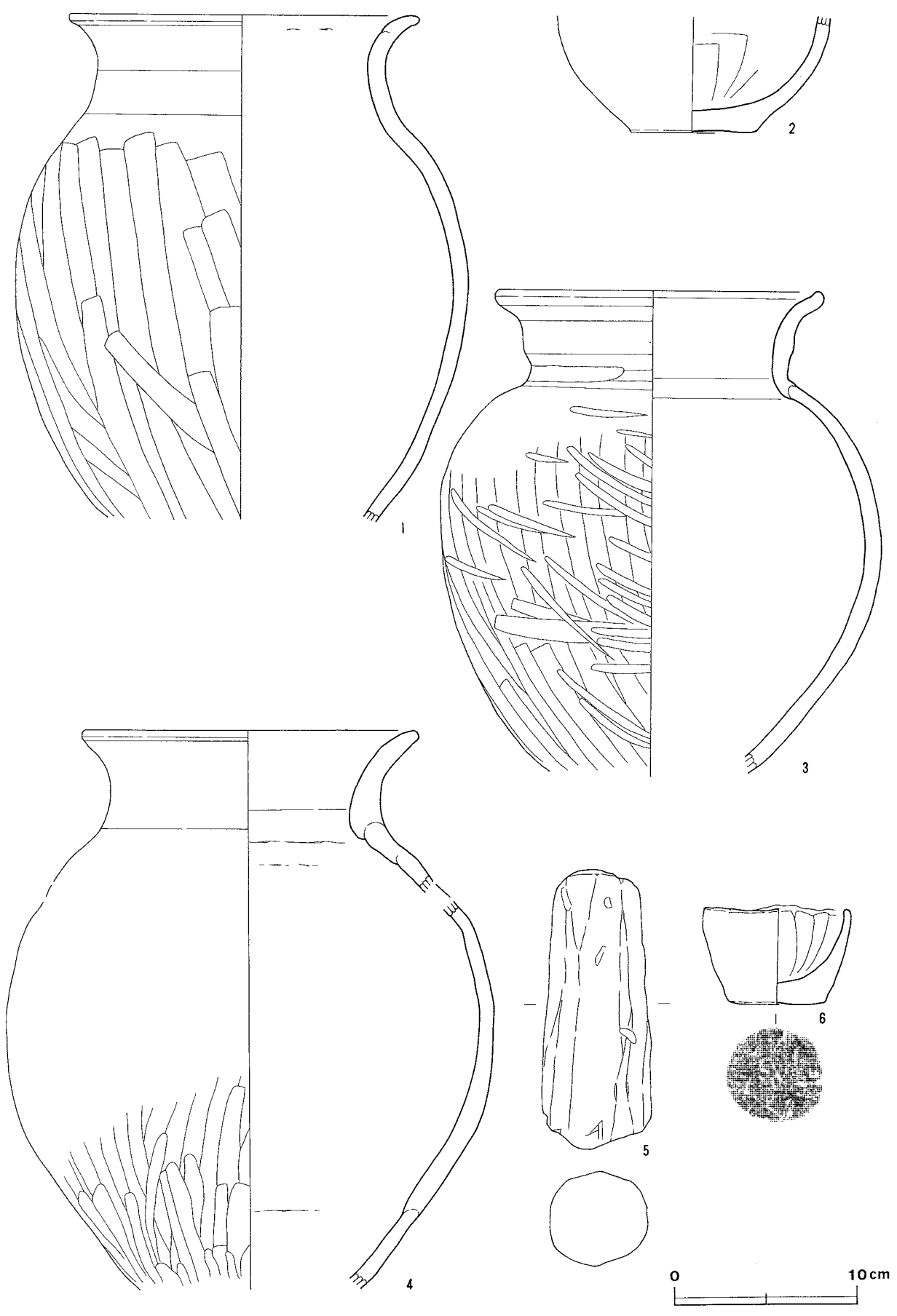


第40図 第6・7号住居跡(1)

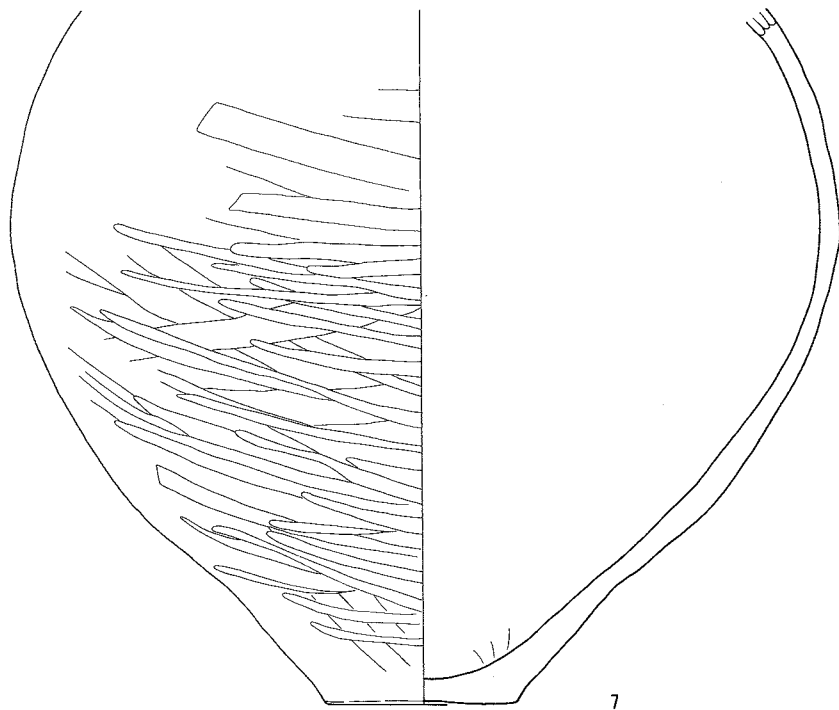




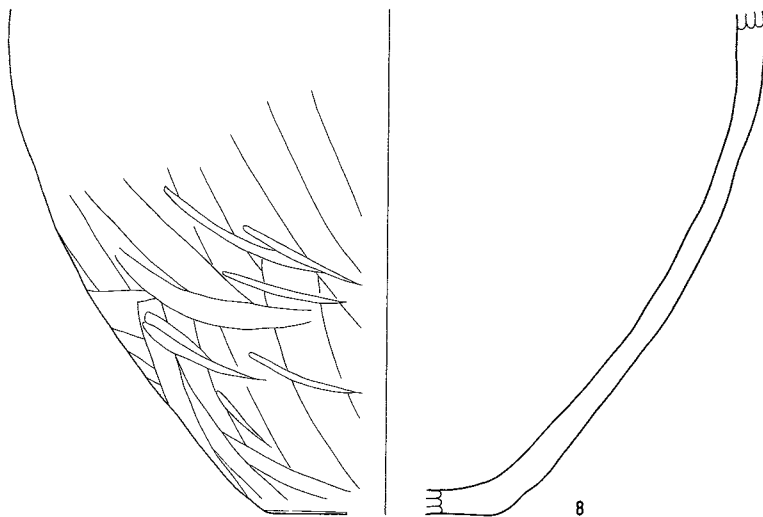
第41图 第6・7号住居跡(2)



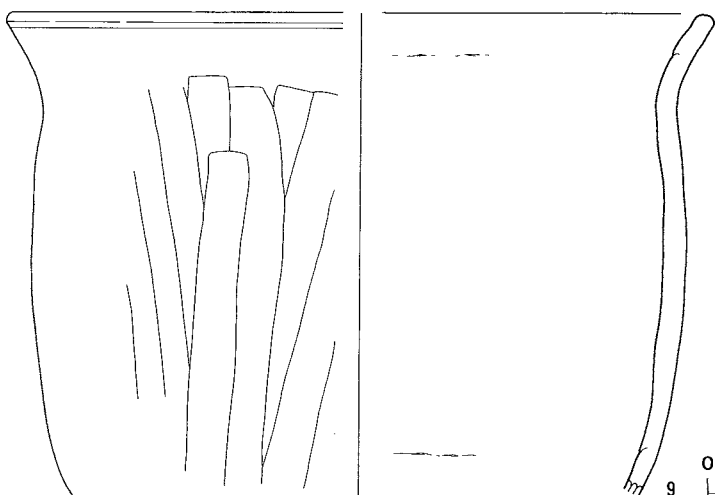
第42図 第6号住居跡出土遺物(1)



7



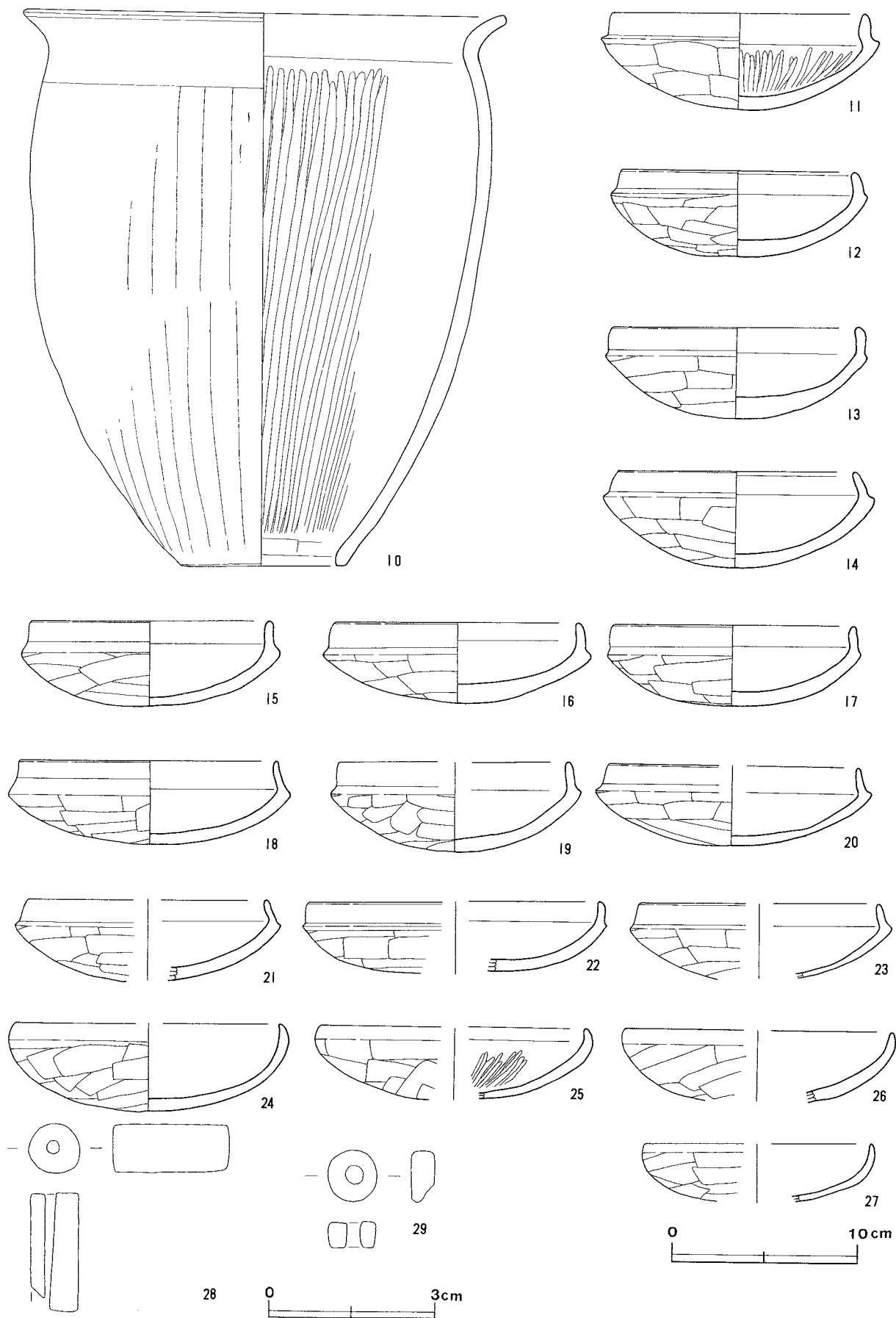
8



9



第43图 第6号住居跡出土遺物(2)



第44図 第6号住居跡出土遺物(3)

ピット 5ヶ所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径54~76cm・短径46~70cmの楕円形で、深さ40~66cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は、断面が2段となっている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、規模や配置から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は南壁際中央に位置し、長径68cm・短径50cmの楕円形で、深さ22cmである。P<sub>5</sub>は、出入り口ピットと考えられる。

貯蔵穴 1ヶ所 (P<sub>6</sub>)。P<sub>6</sub>は北東コーナー付近に位置し、長径106cm・短径85cmの楕円形で、深さ26cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は傾斜して立ち上がる。覆土は2層からなる。第1層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を中量含む褐色土である。

竈 北壁に付設し、煙道は壁外に20cm程突出している。両袖は灰白色粘土・礫粒を多量に含む暗褐色土で構築し、火床面は床面を2cm程掘りくぼめている。覆土は6層からなる。第1層は、焼土ブロック・礫粒を多量に含む赤褐色土。第2層は、焼土ブロック・焼土粒を多量、炭化物・礫粒を中量含む暗赤褐色土。第3層は、焼土粒を多量、礫粒を中量、炭化物を少量含む暗赤褐色土。第4層は、焼土粒・礫粒を中量含む暗赤褐色土。第5層は、焼土粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第6層は、焼土粒・礫粒を少量含む赤褐色土である。

覆土 3層(第4~6層)からなる。第4層は、ローム粒・礫粒・焼土粒・炭化物を中量含む褐色土。第5層は、ローム粒・礫粒・焼土粒・炭化物を少量含む褐色土。第6層は、ロームブロック・ローム粒・礫粒を多量、焼土粒・炭化物を微量含む褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片40点、土師器片1289点、須恵器片3点、土製支脚1点(第42図5)、管玉1点(第44図28)、白玉1点(第44図29)、不明土製品片4点が出土している。第42図1・4の甕、第43図7の甕と9の甕、第44図12・14・19・20・23・25の坏は床面から出土している。第42図6のミニチュア土器は、P<sub>1</sub>に埋納させた状態で出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は、竈を北壁に付設する大型住居跡である。本跡の時期は、床面から第44図12・14・19・20・23・25の坏が出土していることから6世紀後葉と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 土師器	A 19.4 B(27.8)	体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部は内傾し、口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母にぶい橙色普通	P39 80% 床面
2	甕 土師器	C 7.0	底部破片。平底。	内面ヘラナデ。	石英・長石・砂粒にぶい褐色普通	P44 10% 第1層
3	甕 土師器	A 18.1 B(26.3)	底部欠損。体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部は直立し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒赤褐色普通	P40 80% 第1層
4	甕 土師器	A 18.7 B(30.8)	底部欠損。体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部は内傾し、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ磨き。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石明赤褐色普通	P41 30% 床面
6	ミニチュア土器 土師器	A 8.1 B 5.3 C 5.0	平底。体部は直立して立ち上がる。	体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。	長石・砂粒明褐色普通	P45 100% P1覆土
第43図 7	甕 土師器	B(27.4) C 7.6	口縁部欠損。体部は倒卵形で、体部中位に最大径がある。	体部外面ヘラナデ後ヘラ磨き。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石赤褐色普通	P42 30% 床面
8	甕 土師器	B(20.3) C(8.8)	体部上半部欠損。体部は倒卵形で、体部中位に最大径がある。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ磨き。内面ナデ。	石英・長石・雲母にぶい赤褐色普通	P43 25% 竈覆土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	甌 土師器	A[30.2] B[19.5]	底部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	P46 20% 床面
第44図 10	甌 土師器	A 26.2 B 30.3 C 8.9	無底式。体部は倒卵形で、体部上半部は直線的に立ち上がる。口縁部は強く外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ヘラナデ後、ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P430 95% 第1層
11	坏 土師器	A 13.2 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P20 100% 覆土
12	坏 土師器	A 12.6 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P21 100% 床面
13	坏 土師器	A 12.5 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P22 90% 第1層
14	坏 土師器	A 12.9 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P23 100% 覆土
15	坏 土師器	A 13.2 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P24 95% 第1層
16	坏 土師器	A 13.2 B 4.5	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	長石・雲母・砂粒 口縁部内・外面横ナデ。	にぶい赤褐色 普通	P25 80% 第1層
17	坏 土師器	A[13.0] B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P26 75% 第1層
18	坏 土師器	A 14.0 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 橙色 普通	P27 70% 貯蔵穴覆土
19	坏 土師器	A[12.6] B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	P28 80% 床面
20	坏 土師器	A[13.6] B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P29 50% 床面
21	坏 土師器	A[13.0] B(4.4)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 明赤褐色 普通	P33 30% 第1層
22	坏 土師器	A[16.2] B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 橙色 普通	P32 30% 覆土
23	坏 土師器	A(13.0) B(4.1)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・雲母 橙色 普通	P34 10% 床面
24	坏 土師器	A[14.4] B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P30 40% 覆土
25	坏 土師器	A[14.3] B(4.0)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P31 30% 床面
26	坏 土師器	A[14.4] B(3.9)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P35 20% 第1層
27	坏 土師器	A[12.0] B(3.2)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・雲母・砂粒 橙色 普通	P36 20% 覆土

第7号住居跡（第40・41図）

位置 調査区の中央部，B4j<sub>6</sub>区。

確認状況 第6号住居跡の覆土上面で確認する。

重複関係 本跡は，第6号住居跡と重複する。本跡は第6号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.42 m・短軸4.04 mの隅丸長方形である。

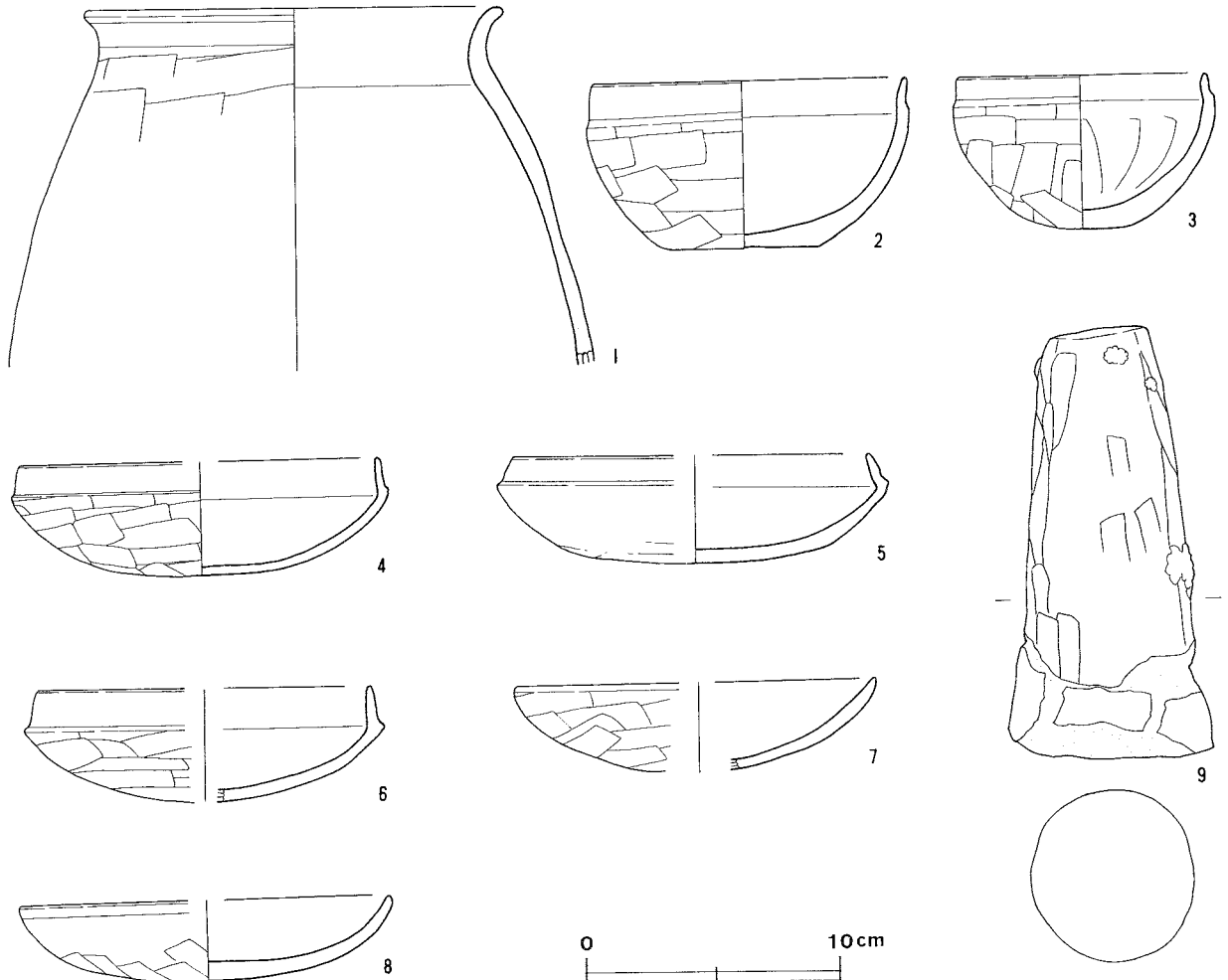
主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は20cmで，傾斜して立ち上がる。

床 床面は平坦で，中央部に踏み締まりがある。

ピット 6ヶ所(P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径29~42cm・短径38~40cmの円形で，深さ23~34cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は南壁際中央に位置し，長径30cm・短径26cmの楕円形で，深さ30cmである。P<sub>5</sub>は，出入り口ピットと考えられる。P<sub>6</sub>は，長径60cm・短径40cmの楕円形で，深さ48cmである。断面形は2段となる。P<sub>6</sub>は柱穴と考えられるが，第6号住居跡に伴う可能性もある。

竈 北壁に付設され，煙道を壁よりも約40cm突出させている。袖部は，礫粒を多量に含んだ灰白色粘土で構築している。火床面は床面よりも約2cm掘りくぼめ，煙道は緩やかに立ち上がる。覆土は，3層からなる。第1層は，焼土粒を少量，礫粒を多量に含む褐色土で，下部が赤変硬化していることから天井部崩落土と考えられる。第2層は，焼土ブロック・焼土粒を多量含む褐色土。第3層は，焼土ブロック・炭化物を多量含む暗褐色土である。



第45図 第7号住居跡出土遺物

覆土 3層（第1～3層）からなる。第1層は、ローム粒・礫粒・焼土粒・炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む褐色土。第3層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片14点、土師器片279点、土製支脚（第45図9）が出土している。第45図1の甕と2・3・4・5・7の坏は、床面から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、床面から第45図2・3・4・5・7の坏が出土したことから、6世紀末葉と考えられる。

### 第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	A[16.9] B(14.7)	口縁部から胴部破片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。	体部外面へらナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒にぶい黄褐色普通	P57 30% 床面
2	碗 土師器	A 12.7 B 6.8 C 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P55 80% 床面
3	碗 土師器	A 10.0 B 8.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒にぶい褐色普通	P56 60% 床面
4	坏 土師器	A[14.2] B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P50 50% 床面
5	坏 土師器	A[14.2] B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面へら削り（剝落）。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒にぶい橙色普通	P51 70% 床面
6	坏 土師器	A[13.4] B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は直立する。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 橙色 普通	P54 30% 覆土
7	坏 土師器	A[14.5] B(3.6)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は尖る。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 40%	P52 40% 床面
8	坏 土師器	A[15.0] B 3.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は尖る。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母にぶい黄橙色普通	P53 30% 覆土

### 第8号住居跡（第46図）

位置 調査区の中央部、C5b<sub>2</sub>区。

確認状況 遺物包含層である第II a層上面で確認する。

規模と平面形 長軸3.66m・短軸2.76mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-3°-W

壁 壁高は11cmで、傾斜して立ち上がる。

床 床の大半は遺物包含層である第II b層下部を床面としているため、踏み締まりは弱い。

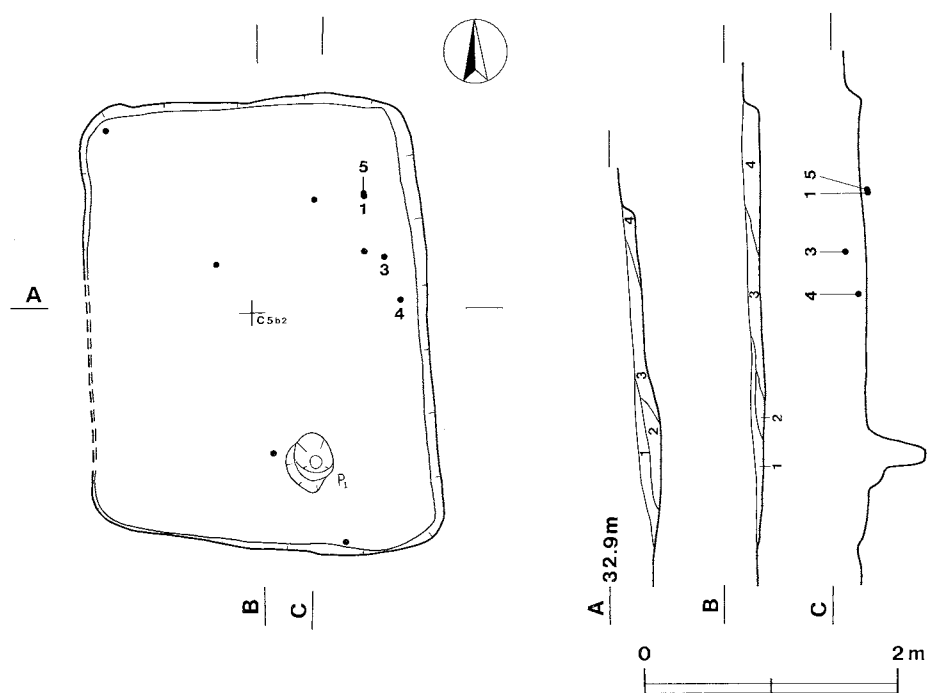
ピット 1ヶ所。P<sub>1</sub>は、長径50cm。短径38cmの楕円形で、深さ48cmである。断面形は南側に段がある。

覆土 4層からなる。第1層は、ロームブロック・ローム粒を中量、焼土粒・炭化物を微量含む褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒・炭化物を少量含む褐色土。第3層は、ロームブロック・ローム粒を中量、焼土粒・炭化物を微量含む褐色土。第4層は、ロームブロック・ローム粒を多量、炭化物を微量含む褐色土である。

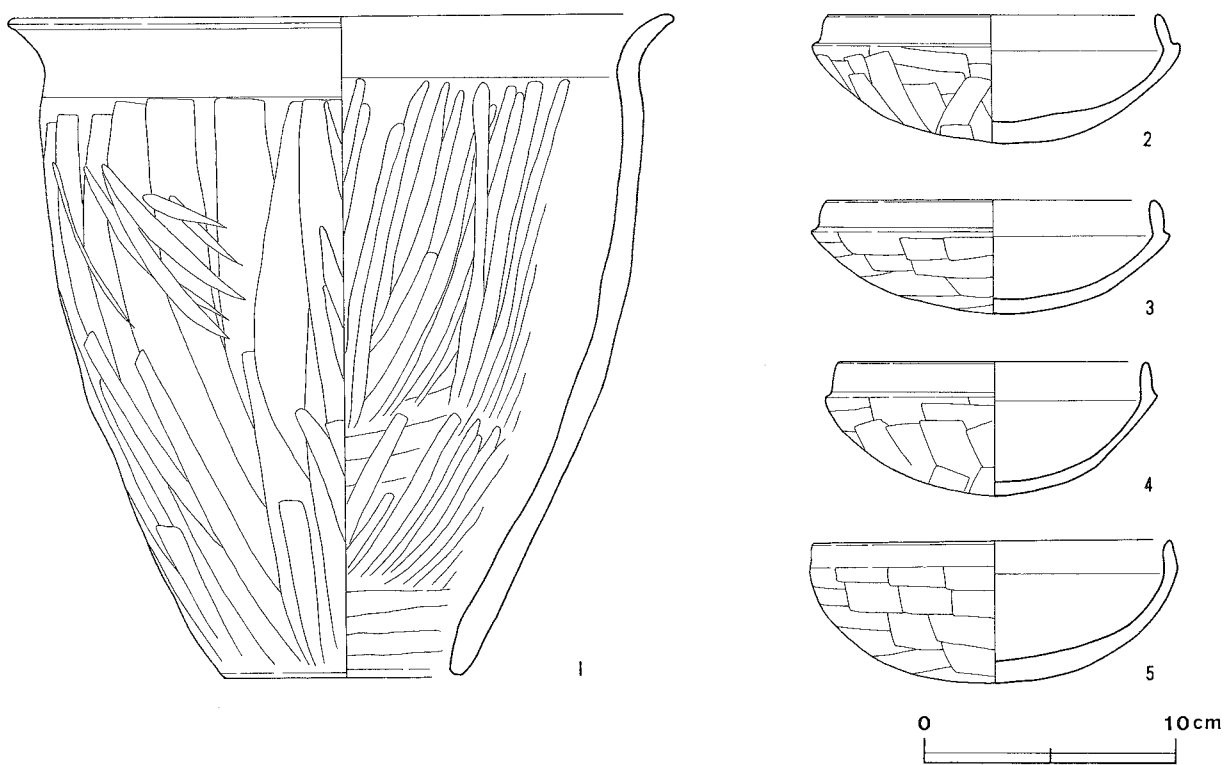


遺物 本跡から、弥生土器片1点、土師器片22点が出土している。第47図1の甕と2～5の坏は、覆土から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第46図 第8号住居跡



第47図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

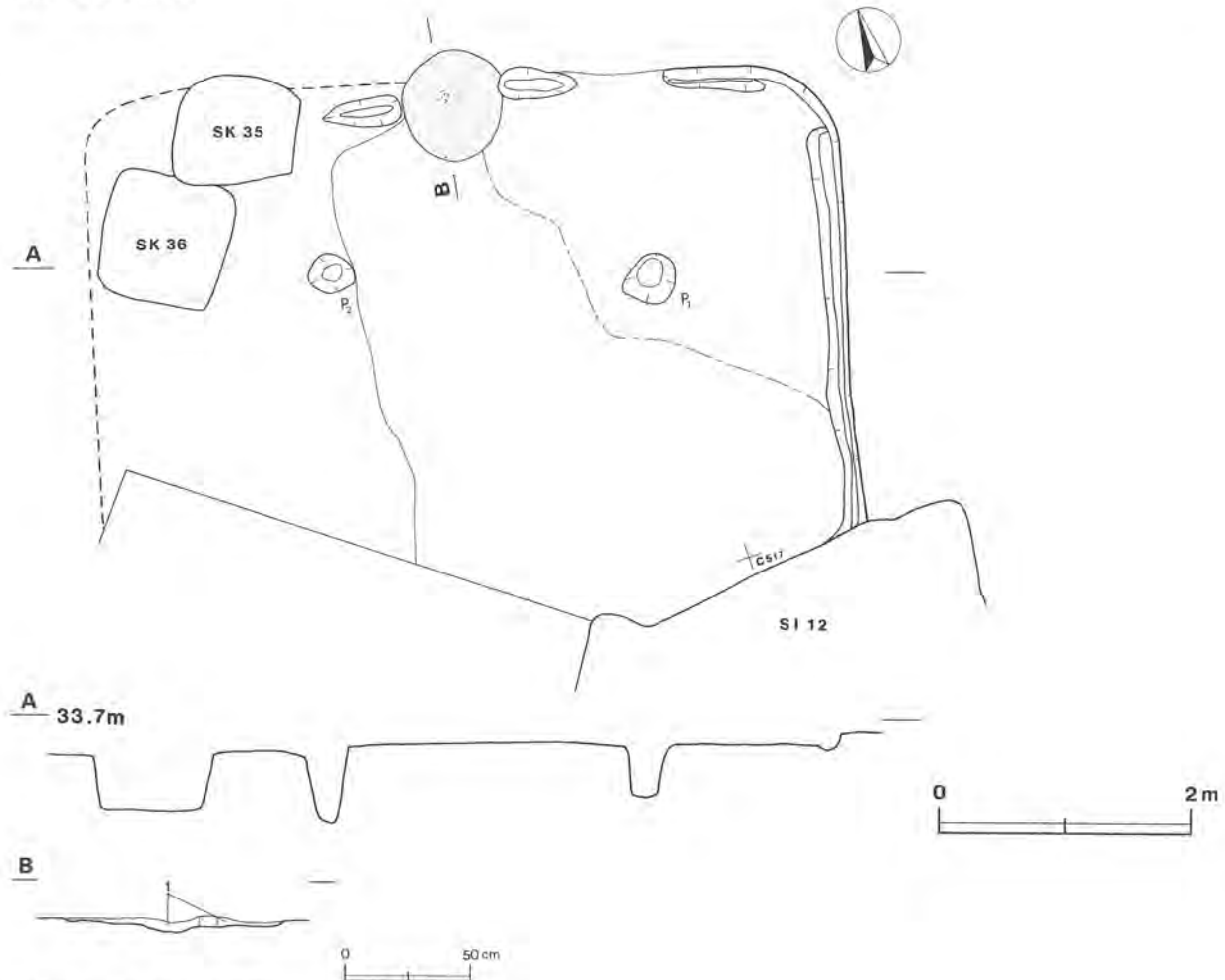
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	甗 土師器	A [26.6] B 26.4 C 9.6	無底式。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外方に開く。	体部外面ヘラナデ後、一部に磨き。体部内面ヘラナデ後、磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 橙色 普通	P65 70% 覆土
2	坏 土師器	A 13.2 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	P60 98% 覆土
3	坏 土師器	A 13.2 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい黄橙色 普通	P61 100% 覆土
4	坏 土師器	A 12.4 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 橙色 普通	P62 100% 覆土
5	坏 土師器	A 14.4 B 6.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P63 100% 覆土

第11号住居跡（第48図）

位置 調査区の中央部、C5e区。

重複関係 本跡は、第12号住居と重複する。本跡は第12号住居跡に掘り込まれているため、本跡が古い。

規模と平面形 本跡の南側を第12号住居跡に掘り込まれているため規模は不明であるが、東西6.02mの隅丸方形と推定される。



第48図 第11号住居跡

主軸方向 N-16°-E

壁 東壁だけが残存している。壁高は10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁下と竈両側に残存している。上幅約20cm・下幅約8cmで、深さ約5cmである。

床 西側の床は流失している。平坦であり、中央部に踏み締まりがある。

ピット 2ヶ所。P<sub>1</sub>は、長径47cm・短径38cmの楕円形で、深さ35cmである。P<sub>2</sub>は、長径38cm・短径30cmの楕円形で、深さ60cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、支柱穴と考えられる。本跡は4本柱と考えられるが、確認できたのは2ヶ所だけである。

竈 北壁に付設している。竈は下部まで流失しており、火床部だけが残存している。火床面は床面より5cm程掘りくぼめ、火床部のやや北側に土製支脚を設置している。覆土は1層からなる。第1層は、炭化物を少量含む明赤褐色焼土である。

覆土 1層からなり、東側だけに堆積している。第1層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を微量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片1点、土師器片44点、土製支脚片1点が出土している。

所見 本跡の時期は、規模と主軸方向が重複する第12号住居跡とほぼ一致することから5世紀末葉と考えられる。

#### 第12号住居跡（第49図）

位置 調査区の中央部、C5f<sub>6</sub>区。

重複関係 第11号住居跡と第13号住居跡と重複する。本跡は、第11号住居跡を掘り込んでいるため本跡が新しく、第13号住居跡に掘り込まれているため本跡が古い。

規模と平面形 第13号住居跡に西側を掘り込まれているため東西方向の長さは不明であるが、南北6.76mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-1°-E

壁 東壁だけが残存している。壁高は16cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西側は不明であるが、東・南・北壁下で確認する。上幅約20cm・下幅約10cmで、深さ6cmである。

床 平坦で、中央部に踏み締まりがある。

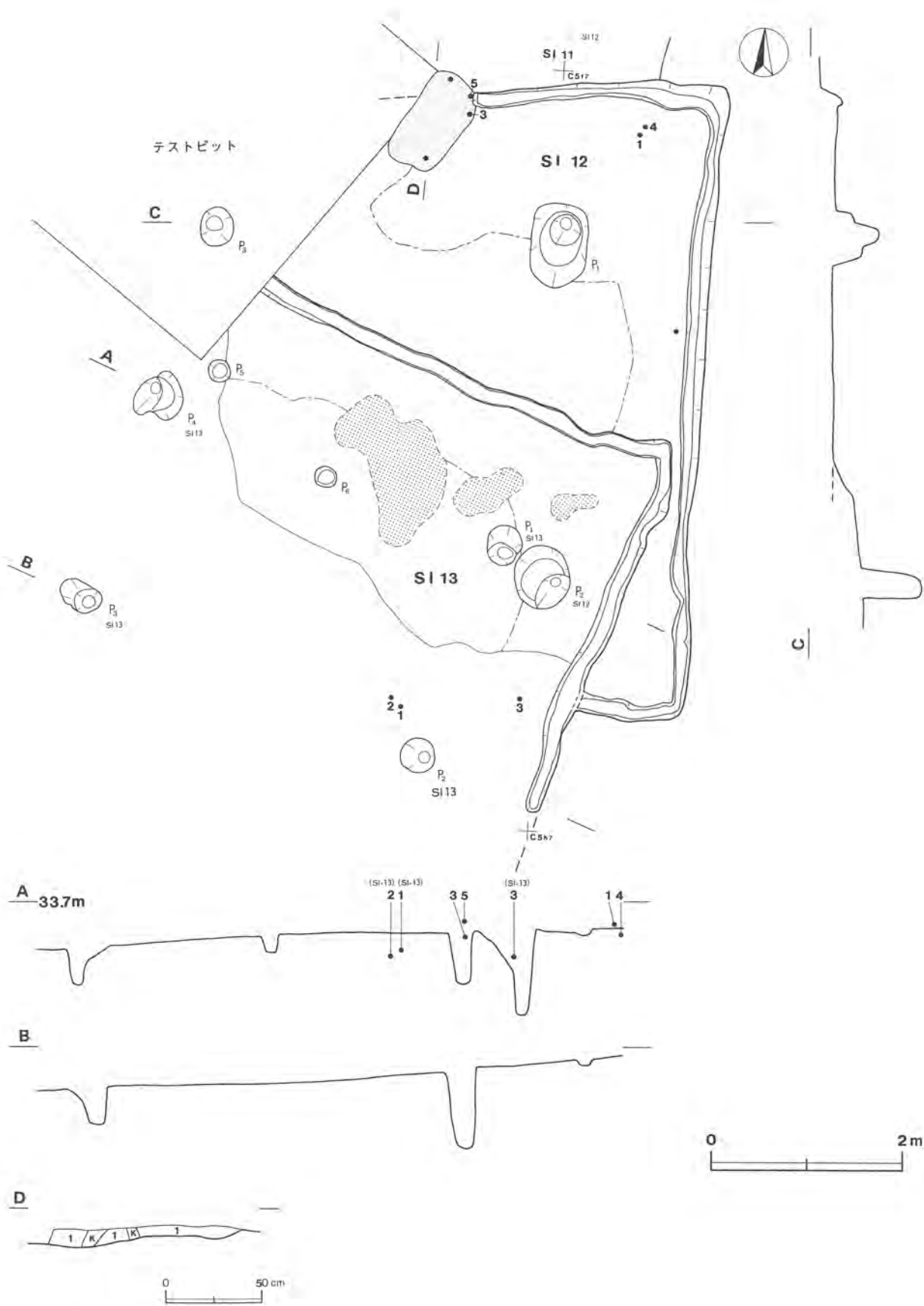
ピット 3ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、長径30~80cm・短径32~58cmの楕円形で、深さ48~50cmである。4本目のピットは確認していないが、4本柱と考えられる。

竈 北壁に付設する。竈下部まで流失しており、火床部だけが残存している。覆土は1層からなる。第1層は、灰白色粘土粒を少量含む暗赤褐色焼土である。

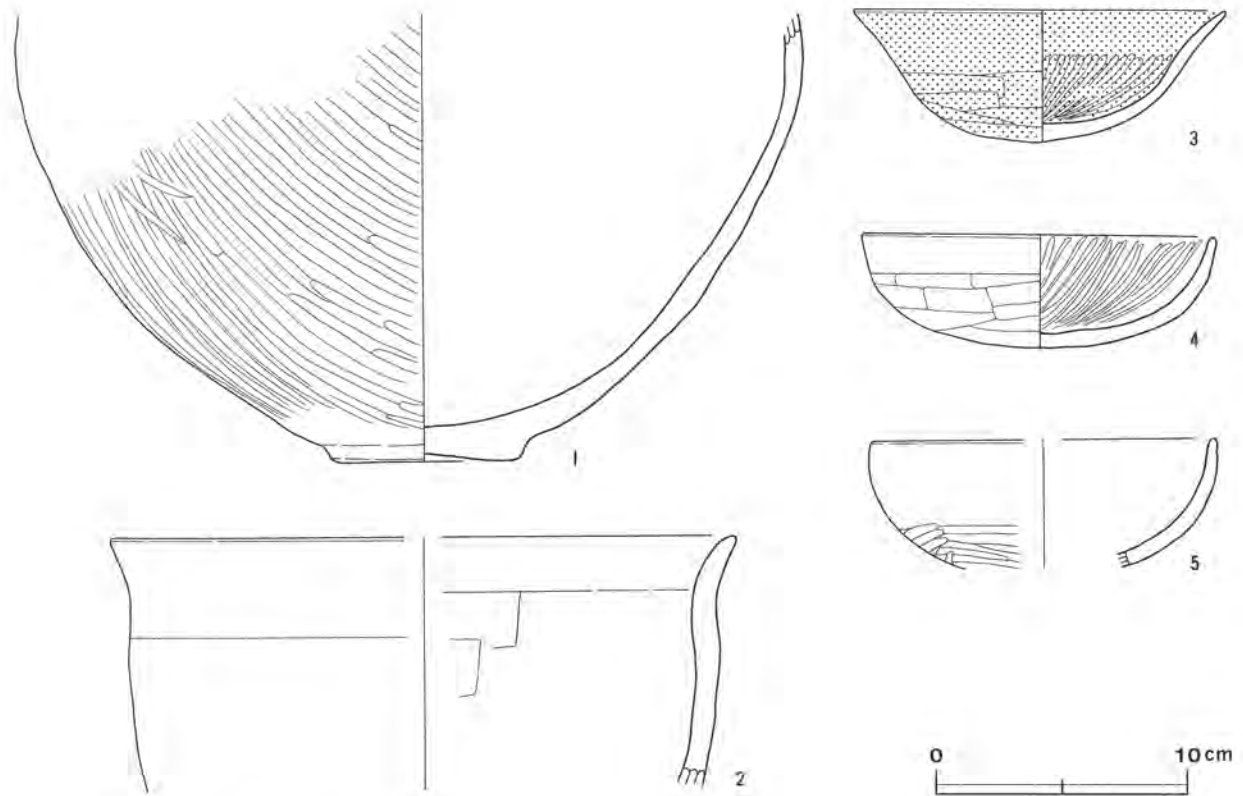
覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒を中量、焼土粒・炭化物を微量含む褐色土。第2層は、ローム粒を多量含む褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片15点、土師器片180点が出土している。第50図3・5の坏は、床面から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、第50図3・5の坏が床面から出土していることから5世紀末葉と考えられる。



第49図 第12・13号住居跡



第50図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	甕 土師器	B(18.0) C 7.0	平底で、底部が突出する。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒にぶい橙色普通	P73 40% 覆土
2	甕 土師器	A[15.0] B(10.3)	口縁部から体部破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面へラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母明褐色普通	P74 10% 覆土
3	杯 土師器	A 15.0 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面へラ削り。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩	石英・長石・スコリア赤色普通	P70 95% 床面
4	杯 土師器	A 14.2 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へラ削り。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒橙色普通	P71 80% 覆土
5	杯 土師器	A[13.8] B( 5.2]	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母橙色普通	P72 25% 床面

第13号住居跡（第49図）

位置 調査区の中央部，C5g<sub>a</sub>区。

重複関係 第12号住居跡と重複する。本跡は第12号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡の大半は流失しているため規模は不明であるが，平面形は隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-18°-E

壁溝 東側と北側だけに残存する。上幅16~30cm・下幅14~18cmで，深さ約6cmである。

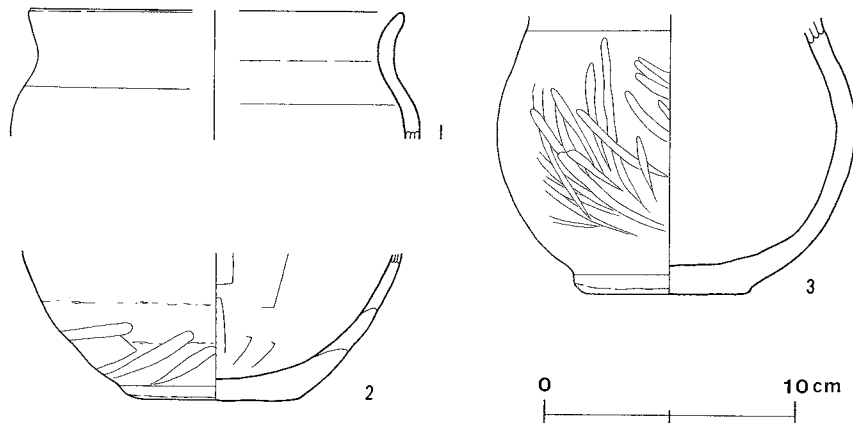
床 北側だけが残存している。平坦で，中央部に踏み締まりがある。床面の一部には焼土が堆積している。

ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径38~50cm・短径18~36cmの楕円形で，深さ36~86cmである。

覆土 1層からなり、北東側だけに堆積している。第1層は、焼土ブロック・炭化物を多量に含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片26点、土師器片283点が出土している。第51図1～3の小型甕は、床面から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は、床面に焼土が堆積していることから焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。



第51図 第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	小型甕 土師器	A[14.6] B(5.2)	口縁部破片。頸部は内彎し、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒にぶい赤褐色良好	P77 10% 床面
2	小型甕 土師器	B(6.0) C 6.9	底部破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。1と同一個体の可能性がある。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	石英・長石・砂粒明赤褐色普通	P76 10% 床面
3	小型甕 土師器	B(11.3) C 7.3	平底。底部は突出する。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。	石英・長石にぶい赤褐色普通	P75 30% 床面

### 第18号住居跡 (第52図)

位置 調査区の東部、C6g区。本跡の北側は、調査区外である。

重複関係 第14号土坑と重複する。本跡は第14号土坑に掘り込まれているため、本跡が古い。

規模と平面形 本跡の大半が調査区外であるため南北方向の長さは不明であるが、東西6.84mの隅丸方形と推定される。

壁 壁高は7cmで、傾斜して立ち上がる。

壁溝 南壁中央部では確認できず、それ以外では全周する。上幅8～20cm・下幅4～13cmで、深さ約4cmである。

床 ほぼ平坦であるが、踏み締まりは弱い。

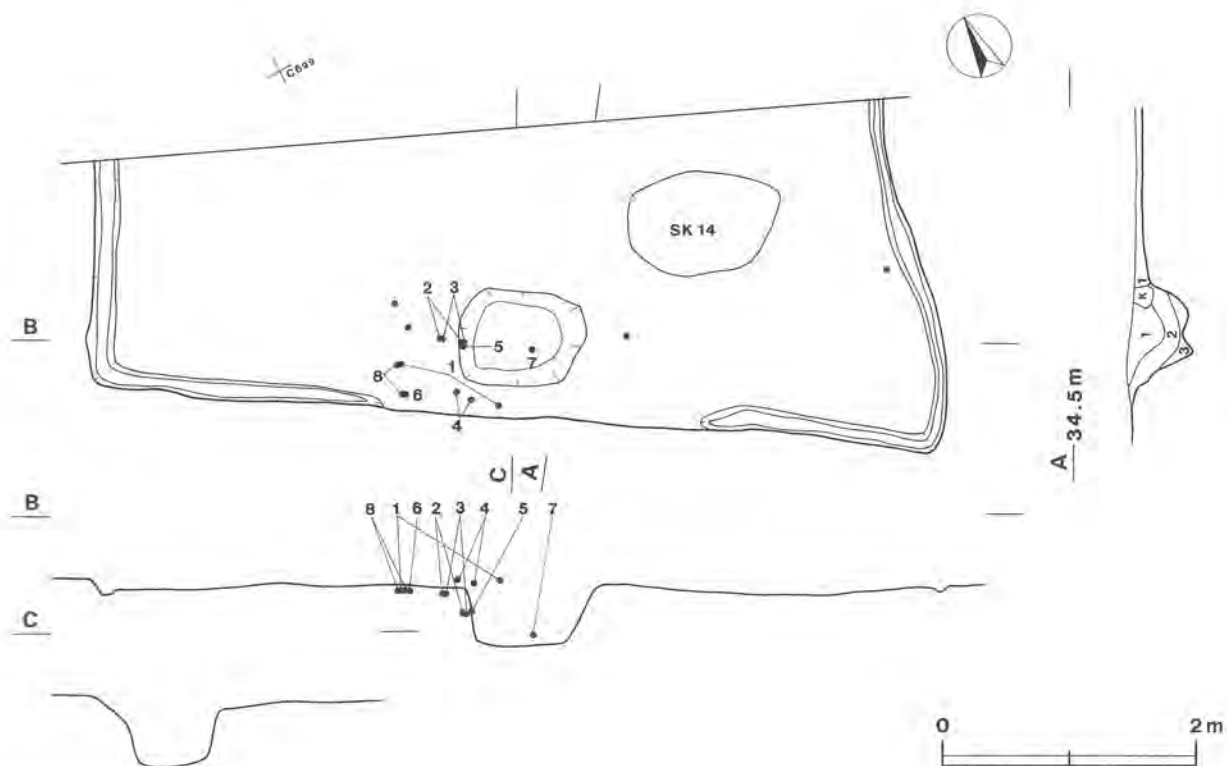
ピット 1ヶ所。P<sub>1</sub>は、長径101cm・短径74cmで、深さ32cmである。底面は起伏がある。覆土は3層からなる。

第1層は住居跡覆土第1層と同一層で、ローム粒を少量、炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・灰白色粘土粒を多量に含む暗褐色土である。P<sub>1</sub>は南壁際中央に位置するが、性格は不明である。

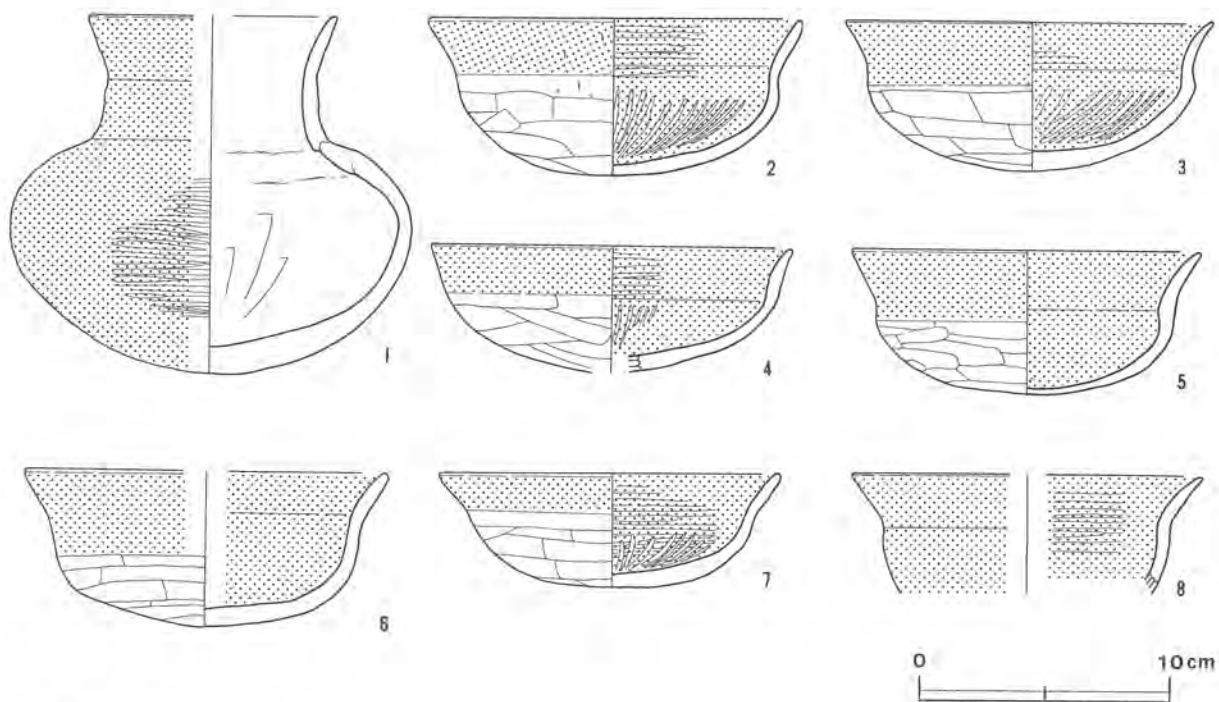
覆土 1層からなる。第1層は、ローム粒を少量、炭化物を微量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片3点、土師器片70点、陶器片1点が出土している。第53図1の坩、2・3・6・8の坏は床面から出土している。弥生土器片と陶器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、第53図2・3・6・8の坏が床面から出土していることから6世紀初頭と考えられる。



第52図 第18号住居跡



第53図 第18号住居跡出土遺物

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	埴 土師器	A[10.0] B 14.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部が直立する。口縁部は外傾する。	体部外面磨き。体部内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。	砂粒 橙色 普通	P97 40% 床面
2	坏 土師器	A 15.0 B 6.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部がくびれる。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナ デ後、放射状の磨き。口縁部内・外 面横ナデ。外面口縁部・内面赤彩。	雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P91 80% 床面
3	坏 土師器	A 15.0 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部がくびれる。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 放射状の磨き。口縁部内・外面横ナ デ。外面口縁部・内面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P92 90% 床面
4	坏 土師器	A 14.6 B [5.1]	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に稜がある。口縁部は 外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 放射状の磨き。口縁部内・外面横ナ デ。外面口縁部・内面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P95 85% 覆土
5	坏 土師器	A 14.0 B 5.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部がくびれる。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面 口縁部・内面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P94 90% P <sub>1</sub> 覆土
6	坏 土師器	A[14.6] B 6.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部がくびれる。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面 口縁部・内面赤彩。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P224 60% 床面
7	坏 土師器	A 13.8 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部がくびれる。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 放射状の磨き。口縁部内・外面横ナ デ。外面口縁部・内面赤彩	砂粒・スコリア 明赤褐色 良好	P96 100% P <sub>1</sub> 覆土
8	坏 土師器	A[14.2] B(4.8)	口縁部破片。頸部はくびれ、口縁部 は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後、 磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・ 外面赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	P93 30% 床面

第19号住居跡（第54図）

位置 調査区の東部，C6j<sub>0</sub>区。本跡の東側は，調査区外である。

重複関係 第57号土坑と重複する。本跡は第57号土坑に掘り込まれているため。本跡が古い。

規模と平面形 本跡の東側は調査区外であるため規模は不明であるが，一辺約7.60mの隅丸方形と推定される。

壁 南西壁だけが残存している。壁高は10cmで，傾斜して立ち上がる。

壁溝 北東壁側では確認できず，それ以外では全周する。上幅30～48cm・下幅18～38cmで，深さ8～12cmである。

床 ほぼ平坦で，全体的に踏み締まりがある。

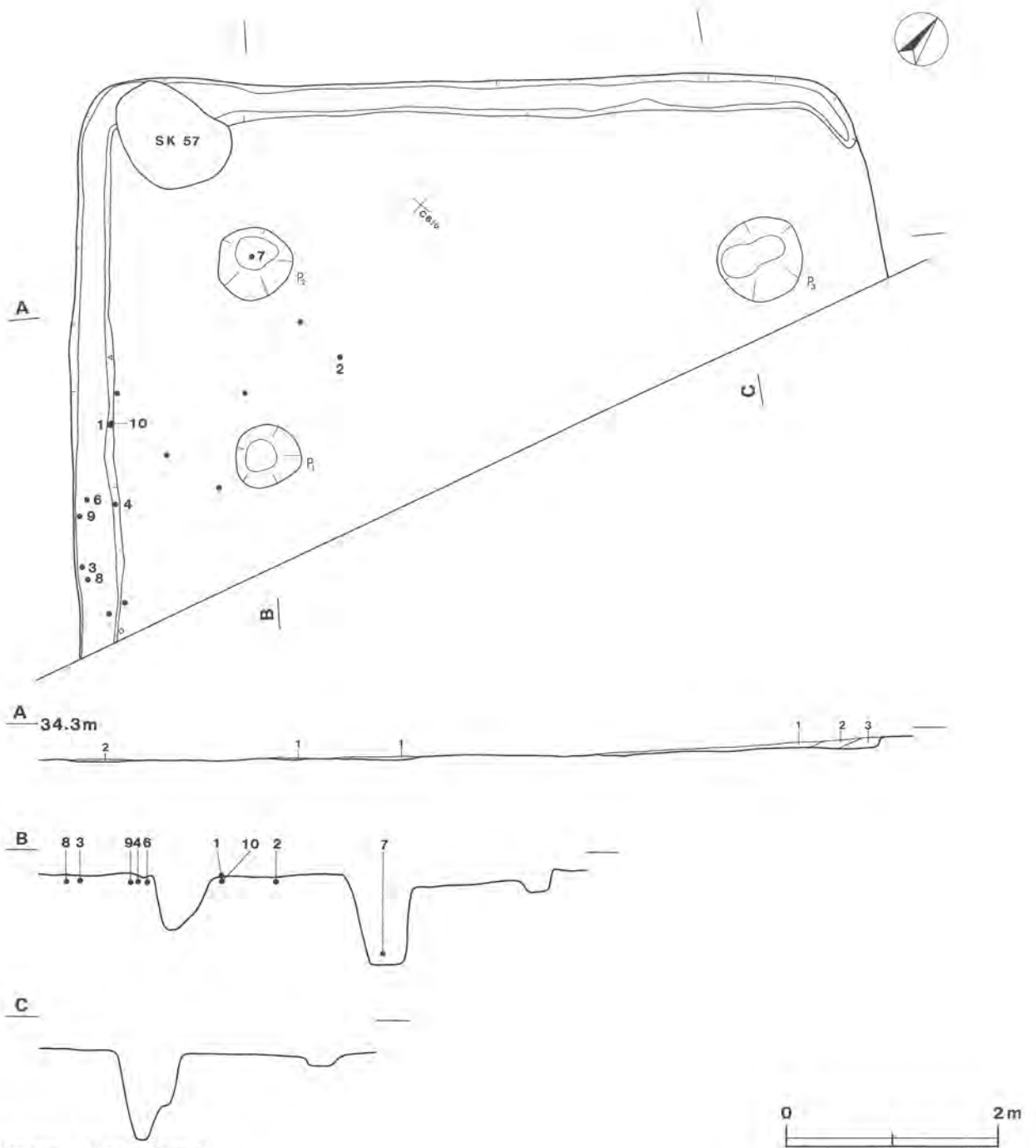
ピット 3ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は，径58～80cmの円形で，深さ54～84cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は，規模や配列から支柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。第1層は，ローム粒を少量含む暗褐色土。第2層は，ローム粒を少量，焼土粒を微量含む褐色土。第3層は，ローム粒を少量含む褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片12点，土師器片190点，須恵器片3点が出土している。第55図1・2・4の甕と8・9の坏と10の須恵器甕は，床面から出土している。第55図3の甕と6の坏は，壁溝底面から出土している。

所見 本跡の時期は，第55図3の甕と6の坏が壁溝底面から，第55図10の須恵器甕が床面から出土していることから，5世紀末葉と考えられる。



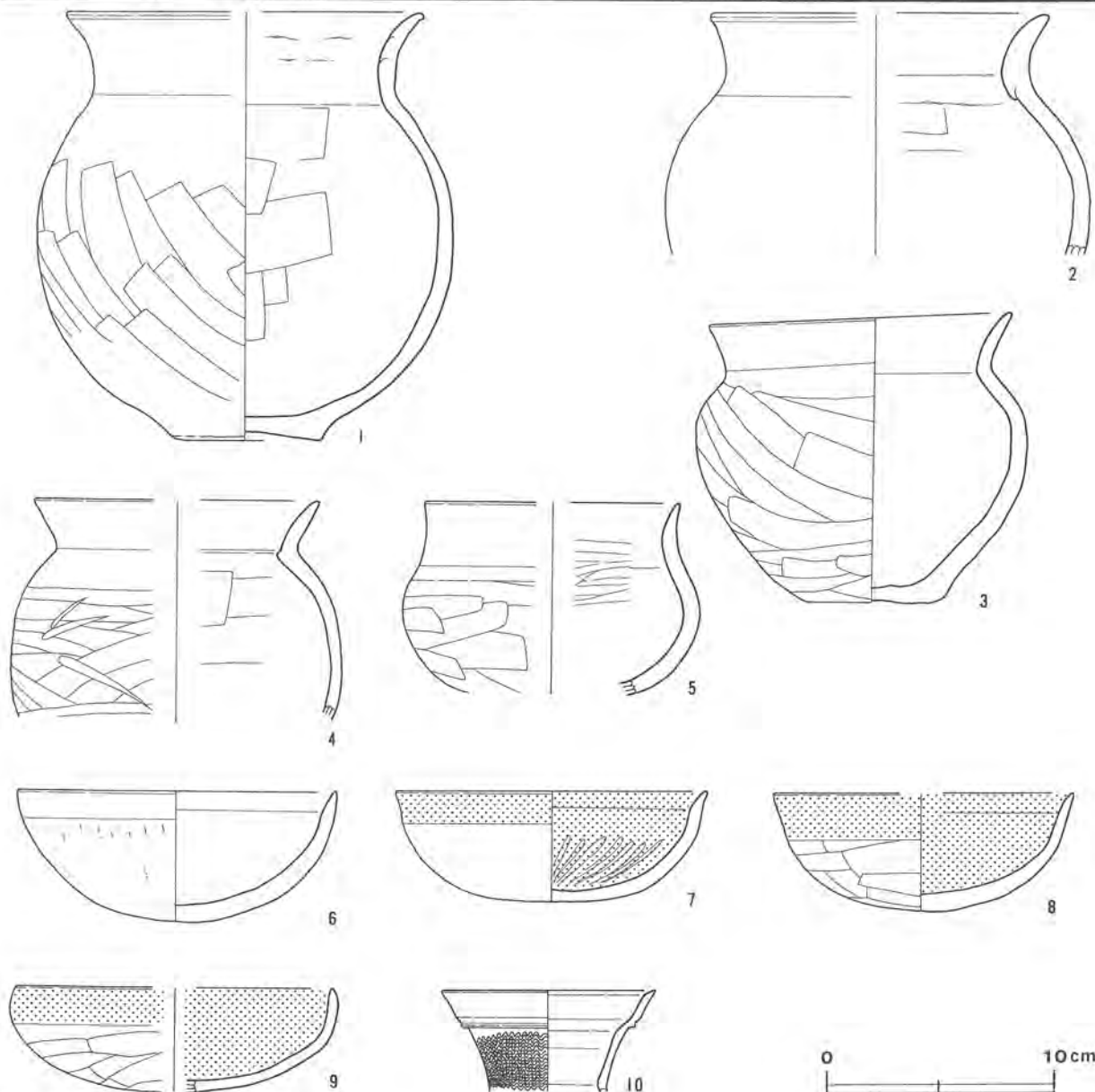


第54図 第19号住居跡

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	小型甕 土師器	A[16.0] B(19.1)	平底。体部は球形で、頸部はほぼ直立する。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒にぶい黄橙色普通	P103 50% 床面
2	小型甕 土師器	A[14.8] B(10.8)	体部上半部破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色普通	P106 10% 床面
3	小型甕 土師器	A 13.4 B 13.1 C 5.9	平底。体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒にぶい褐色普通	P104 70% 壁溝底面
4	小型甕 土師器	A[12.6] B( 9.8)	体部上半部破片。頸部は「く」の字状に外反し、頸部内面に突出した稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒にぶい橙色普通	P105 30% 床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	短頸壺 土師器	A[11.4] B( 8.5)	体部上半部破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 橙色 普通	P102 30% 覆土
6	坏 土師器	A 14.2 B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 赤褐色 普通	P98 100% 壁溝底面
7	坏 土師器	A 14.0 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。口縁部内面に稜がある。	体部外面ナデ。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部・内面赤彩。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P99 80% P <sub>2</sub> 覆土
8	坏 土師器	A[13.0] B 3.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口唇部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部内面赤彩。	石英・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P100 50% 床面
9	坏 土師器	A[14.7] B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部内面赤彩。	長石・スコリア 橙色 普通	P101 25% 床面
10	感 須 患 器	A[ 9.5] B( 4.5)	口頸部破片。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は外傾する。	内・外面ナデ。頸部には櫛状工具による波状文を施している。	砂粒 灰色 良好	P206 10% 床面



第55図 第19号住居跡出土遺物

第20号住居跡（第56図）

位置 調査区の東部, C6j区。

確認状況 遺構確認調査で本跡の床面だけを確認する。

重複関係 本跡は, 第63号土坑と重複している。本跡の東側が流失しているため, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡の東側は流失しており規模は不明であるが, 南北約5.50mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-4°-E

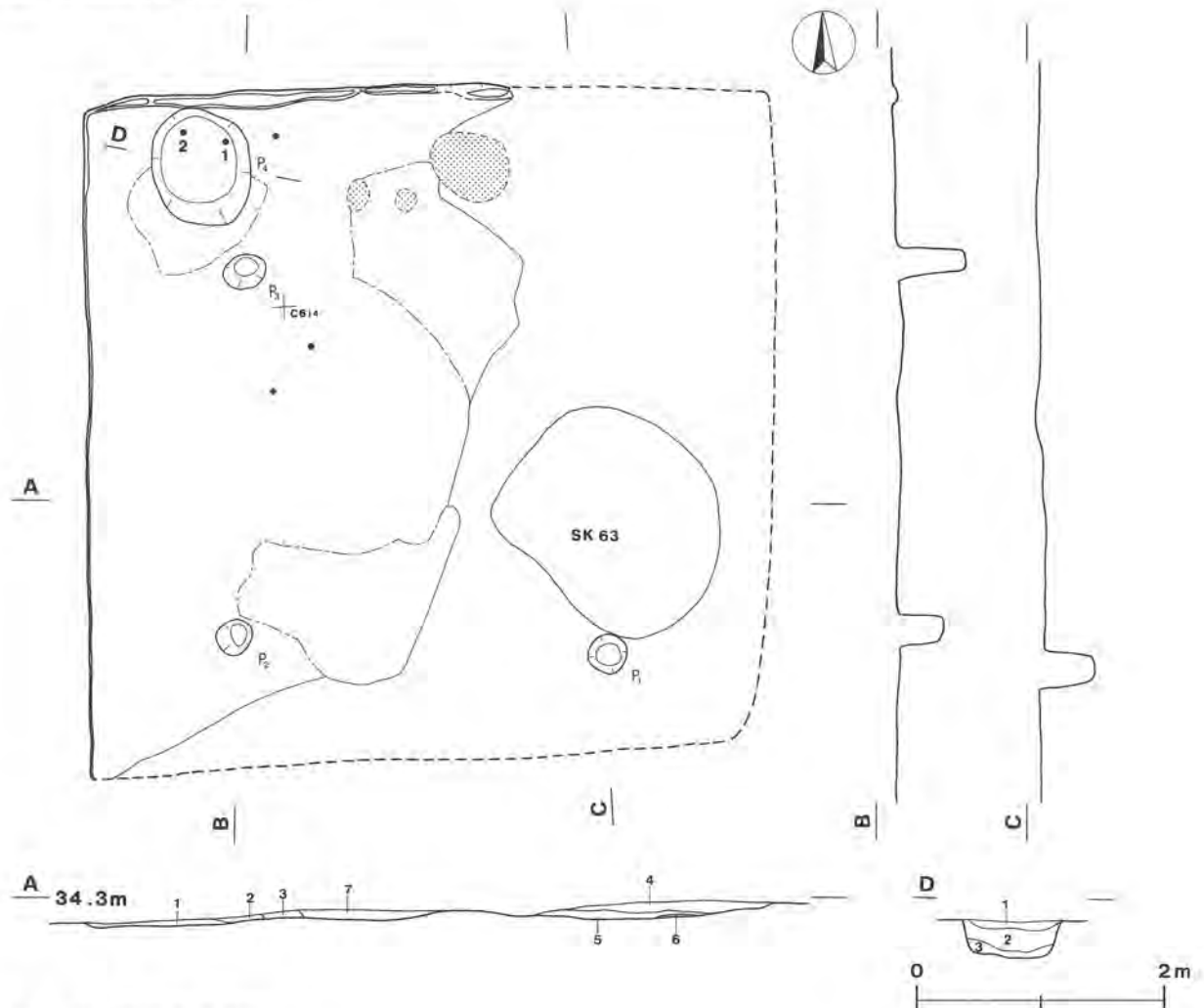
壁 西壁の一部が残存している。壁高は4cmで, 傾斜して立ち上がる。

壁溝 北壁下に残存している。上幅8~14cm・下幅4~10cmで, 深さ6cmである。

床 西側半分が残存している。平坦で, 中央部に踏み締まりがある。北側中央部床面に焼土が堆積している。

ピット 3ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は, 径28~32cmで, 深さ24~52cmである。本跡は4本柱と考えられるが, 3ヶ所だけを確認している。

貯蔵穴 1ヶ所。P<sub>4</sub>は北東コーナー付近に位置し, 長径100cm・短径80cmの楕円形で, 深さ30cmである。覆土は3層からなる。第1層は, 焼土粒を少量含む灰白色粘土で, 上面はよく締まっている。第2層は, ローム粒を中量, ロームブロック・焼土粒・灰白色粘土粒を少量含む褐色土。第3層は, ローム粒を中量, 焼土粒を少量含む褐色土である。P<sub>4</sub>は, 第1層が粘土であることから本跡より古い遺構である可能性もあるが, その位置から貯蔵穴と考えられる。



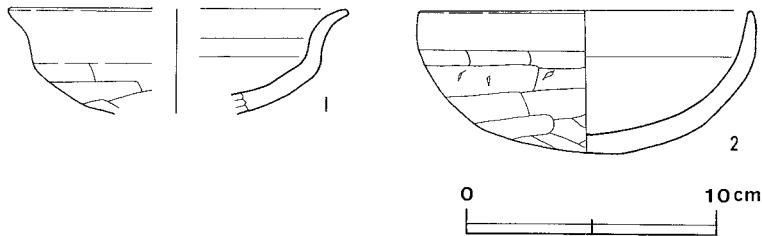
第56図 第20号住居跡

竈 北壁際中央部に火床部だけが残存している。覆土は灰を多量に含む赤褐色焼土である。

覆土 1層からなり、西側だけに堆積している。第1層は、ローム粒を中量、焼土粒を微量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片9点、土師器片156点、須恵器片2点が出土している。第57図2の坏はP<sub>4</sub>の底面から出土している。弥生土器片と1の坏は、混入したものである。

所見 本跡の時期は、第57図2の坏がP<sub>4</sub>底面から出土していることから5世紀末葉と考えられる。



第57図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	坏 土師器	A(13.6) B(4.2)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P108 20% 覆土
2	坏 土師器	A 13.4 B 5.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P107 80% P <sub>4</sub> 底面

### 第22号住居跡（第58図）

位置 調査区の東部，C5j<sub>0</sub>区。

規模と平面形 南壁は流失しているが、東西6.18m・南北5.74mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-7°-E

壁 南壁は流失しているが、それ以外の壁はわずかに残存している。壁高は18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁と北壁下に残存している。上幅12~26cm・下幅6~16cmで、深さ16cmである。

床 平坦で、全体的に踏み締まっている。

ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径72~104cmの楕円形で、深さ40~54cmである。断面形は、開口部が開く形である。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、支柱穴と考えられる。

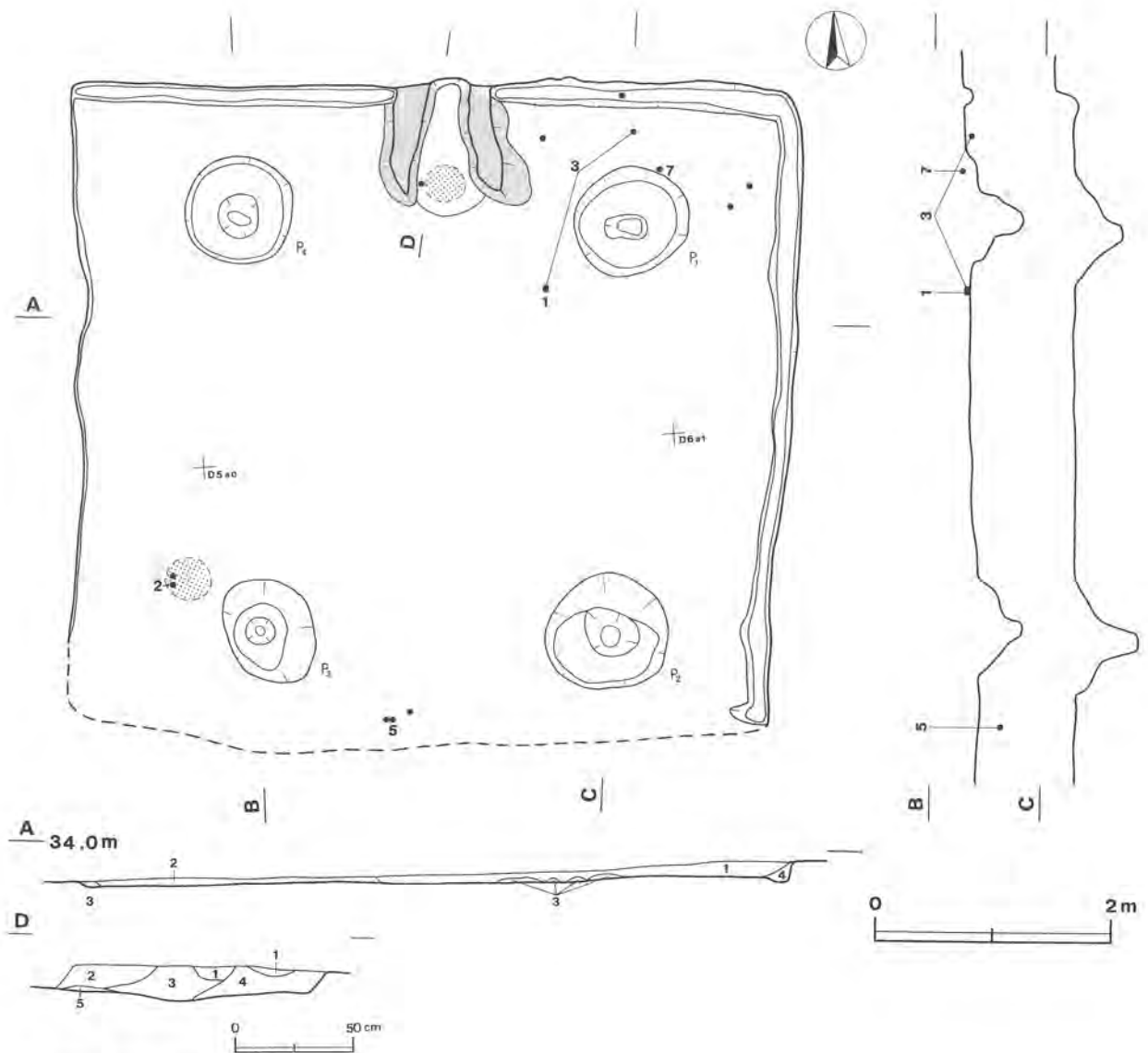
竈 北壁に付設され、竈下部だけが残存している。両袖は、礫粒を多量に含む灰白色粘土で構築している。火床面は床面と一致し、煙道部底面はほぼ平坦で、先端で傾斜して立ち上がる。覆土は5層からなる。第1層は焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土で、下部が赤変硬化していることから煙道天井部と考えられる。第2層は、焼土粒を多量に含む暗赤褐色土。第3層は、焼土粒を多量、灰白色粘土粒を少量含む暗赤褐色土。第4層は、焼土粒・灰白色粘土粒を少量含む暗褐色土。第5層は暗褐色焼土で、火床部にあたる。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒を中量、焼土粒を少量含む褐色土。第2層は、ローム粒を中量、焼土粒を少量含む褐色土。第3層は、ローム粒を多量に含む明褐色土。第4層は、ローム粒・鹿沼パミス粒を少量含む褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片19点、土師器片171点、須恵器片1点が出土している。第59図1の甕，2の高坏，

3の甌、5の坏は、床面から出土している。

所見 本跡の時期は、第59図5の坏が床面から出土していることから5世紀末葉と考えられる。

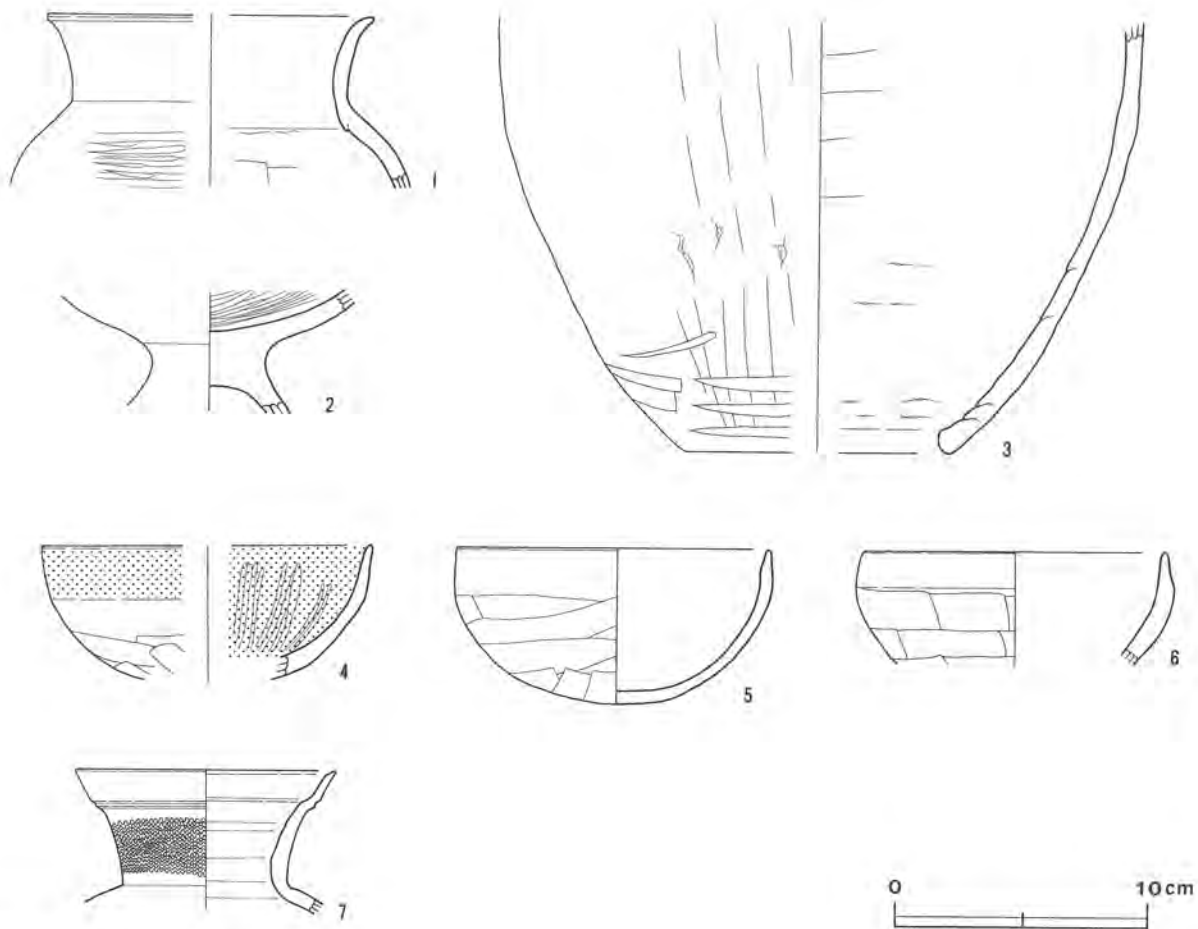


第58図 第22号住居跡

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甌 土師器	A[13.0] B(6.8)	体部上半部破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は外方に突出する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ	石英・長石 橙色 普通	P114 10% 床面
2	高坏 土師器	B(5.8)	坏部から脚部の破片。脚部は大きく開き、坏部は内彎して立ち上がる。	外面ヘラナデ。坏部内面ナデ後、放射状の磨き。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P113 20% 床面
3	甌 土師器	B(17.5) C[10.8]	無底式。体部は内彎して立ち上がる	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色普通	P115 30% 床面
4	坏 土師器	A[13.2] B(5.4)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・スコリア 橙色 普通	P110 30% 甌覆土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	杯 土師器	A 12.5 B 6.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P111 40% 床面
6	杯 土師器	A 12.1 B (4.5)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。	石英・砂粒 明赤褐色 普通	P112 30% 竈覆土
7	甕 須恵器	A [10.4] B (5.3)	口頸部破片。頸部は「く」の字状に立ち上がり、口縁部との境は突出した稜がある。口縁部は外傾する。	内・外面ナデ。頸部外面は櫛歯状工具による波状文を施している。	長石・砂粒 灰色 良好	P116 15% 覆土



第59図 第22号住居跡出土遺物

### 第23号住居跡（第60図）

位置 調査区の東部，D5a<sub>8</sub>～D5a<sub>9</sub>区。

確認状況 遺構確認面で竈底面と床面の一部を確認する。本跡の南側は、流失している。

規模と平面形 壁の一部と柱穴と考えられるピットの配置から、一辺7.60mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-37°-E

壁 北東壁の一部が残存している。壁高は10cmで、傾斜して立ち上がる。

床 北側の一部が残存している。中央部に踏み縮まりがある。

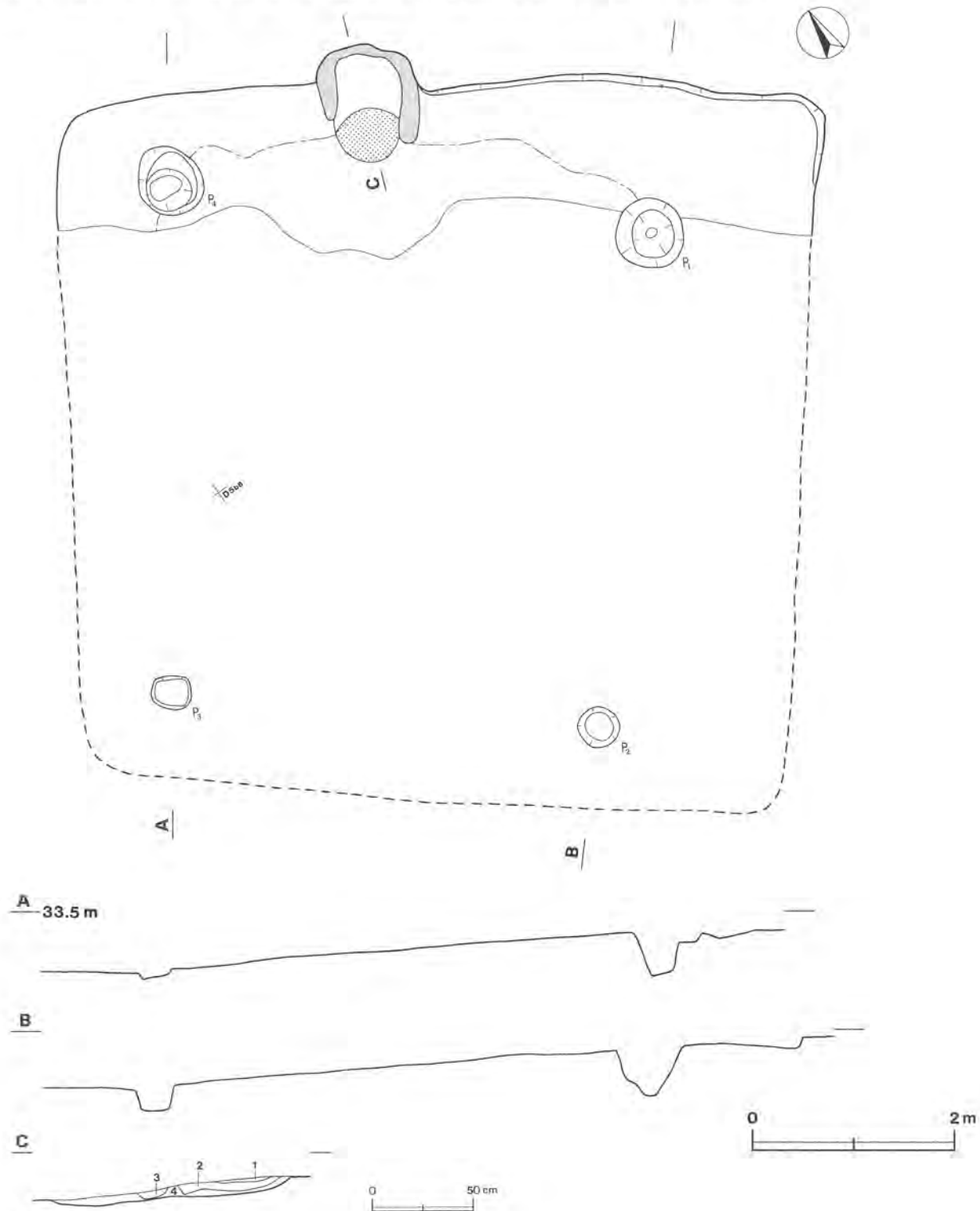
ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径40～74cm・短径34～68cmの楕円形で、深さ6～50cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、主柱穴と考えられる。

竈 北東壁に付設する。竈底面近くまで流失しており、遺存状態は不良である。火床面は床面より5cm程掘り

くぼめ、煙道部底面は平坦で先端で緩やかに立ち上がる。火床部北側には、土製支脚が設置されていた痕跡がある。覆土は4層からなる。第1層は、焼土粒を少量含む褐色土。第2層は、焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土。第3層は、灰白色粘土粒・焼土ブロックを少量含むにぶい褐色土。第4層は、焼土ブロック・焼土粒を少量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、本跡に伴う遺物はないが、本跡の形態から6世紀代と考えられる。



第60図 第23号住居跡

第24号住居跡（第61図）

位置 調査区の東部，D5f<sub>0</sub>区。

確認状況 遺構確認面において，本跡の北側だけを確認する。

規模と平面形 本跡の南側は流失しているため規模は不明であるが，柱穴と考えられるピットの配列から一辺約4.30mの隅丸方形と推定される。

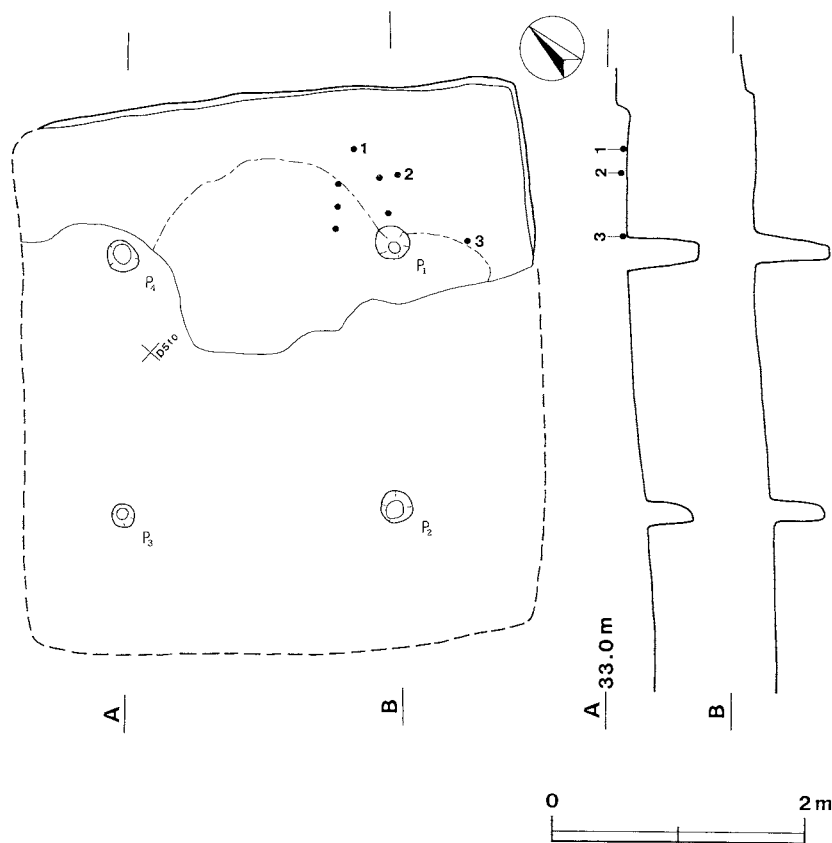
壁 北東壁と南東壁の一部が残存している。壁高は最大で11cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 北側だけが残存している。中央部に踏み締まりがある。

ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径16～28cmの楕円形で，深さ38～60cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，支柱穴である。

遺物 本跡から，土師器片30点が出土している。第62図3 坏は，覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は，第62図3の坏が覆土下層から出土していることから5世紀末葉と考えられる。

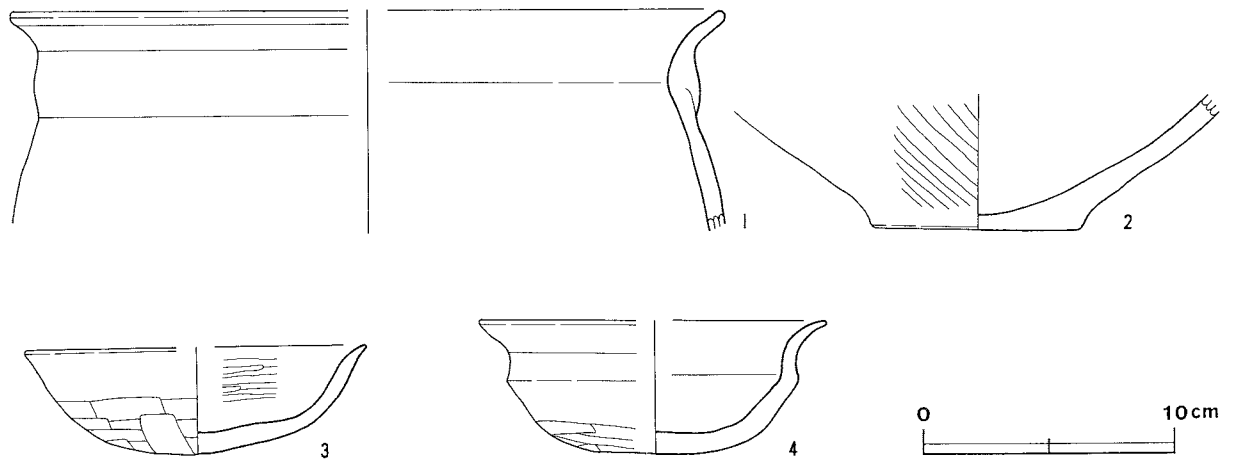


第61図 第24号住居跡

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	甕 土師器	A[28.7]	口縁部破片。体部上位は直線的で，口縁部は外方に開く。頸部は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色普通	P120 10% 覆土下層
2	甕 土師器	C 8.4	底部破片。平底。	外面ナデ後，磨き。内面ナデ。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	P119 10% 覆土下層
3	坏 土師器	A[13.8] B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P117 75% 覆土下層
4	坏 土師器	A[14.1] B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部横ナデ。	石英・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P118 30% 覆土上層





第62図 第24号住居跡出土遺物

第25号住居跡（第63図）

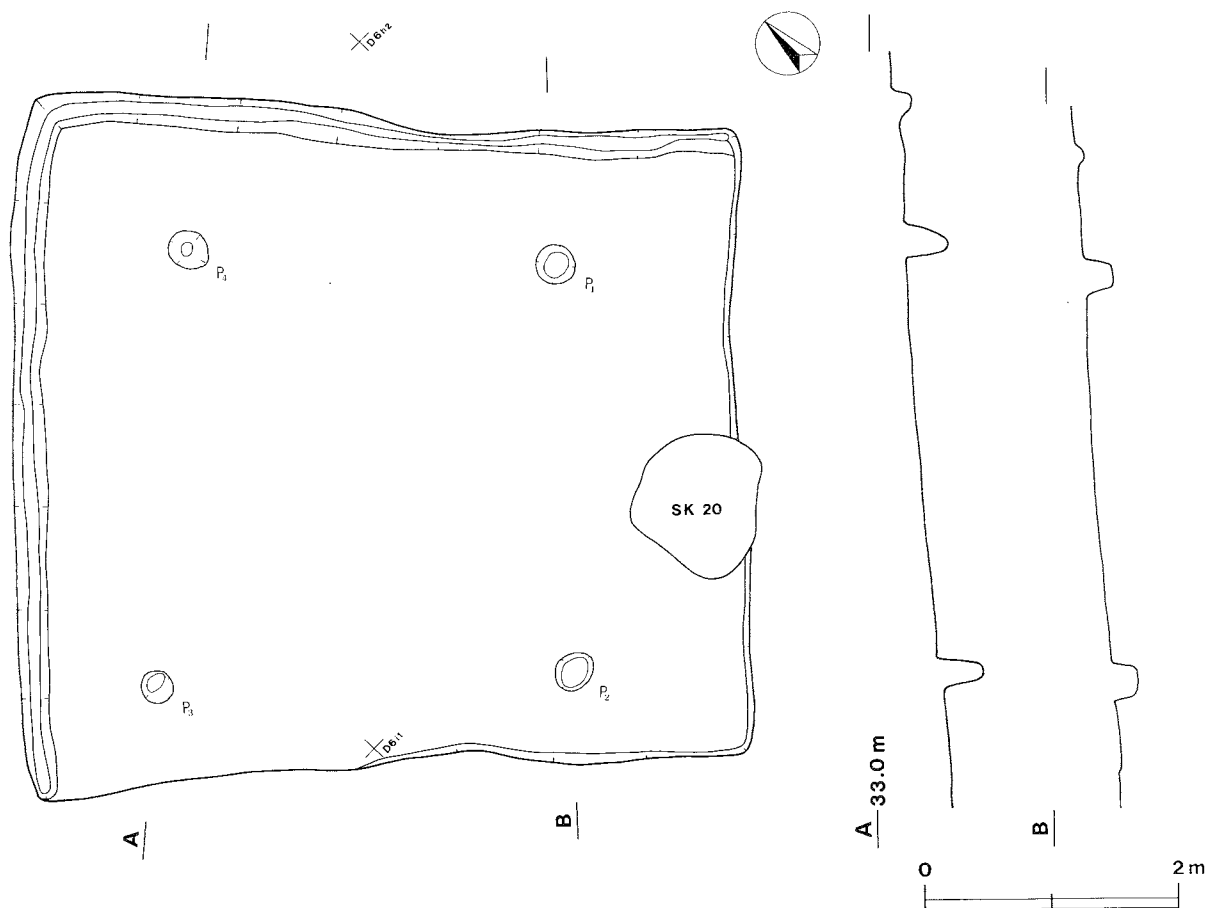
位置 調査区の東部，D6h<sub>1</sub>区。

確認状況 遺構確認調査で床面だけを確認する。

重複関係 第20号土坑と重複する。本跡は，第20号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.86 m・短軸5.68 mの隅丸方形である。

壁 壁高は最大で8 cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。



第63図 第25号住居跡

壁溝 北東壁下と北西壁下に確認する。上幅10～28cm・下幅3～13cmで、床面からの深さは3～8cmである。

床 平坦で、南に緩やかに傾斜している。

ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径27～34cmの楕円形で、深さ20～36cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、支柱穴と考えられる。

遺物 本跡から、弥生土器片1点、土師器片11点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、5世紀末葉と考えられる第20号土坑に掘り込まれていることから、5世紀代と考えられる。

#### 第27号住居跡（第64図）

位置 調査区の中央部、C4a区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で竈を確認する。

規模と平面形 西壁と南壁が確認できなかったため規模は不明であるが、一辺約3.10mの方形と推定される。

主軸方向 N-30°-E

壁 北東壁と南東壁の一部を確認する。壁高は最大で18cmで、傾斜して立ち上がる。

床 遺物包含層である第IIb～IIc層を床面にし、平坦でわずかに踏み締まりがある。

ピット 9ヶ所（P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>は、径9～60cmの楕円形で、深さ38～52cmである。柱穴と考えられるが、配列に規則性はないため本跡に伴わないピットの可能性もある。

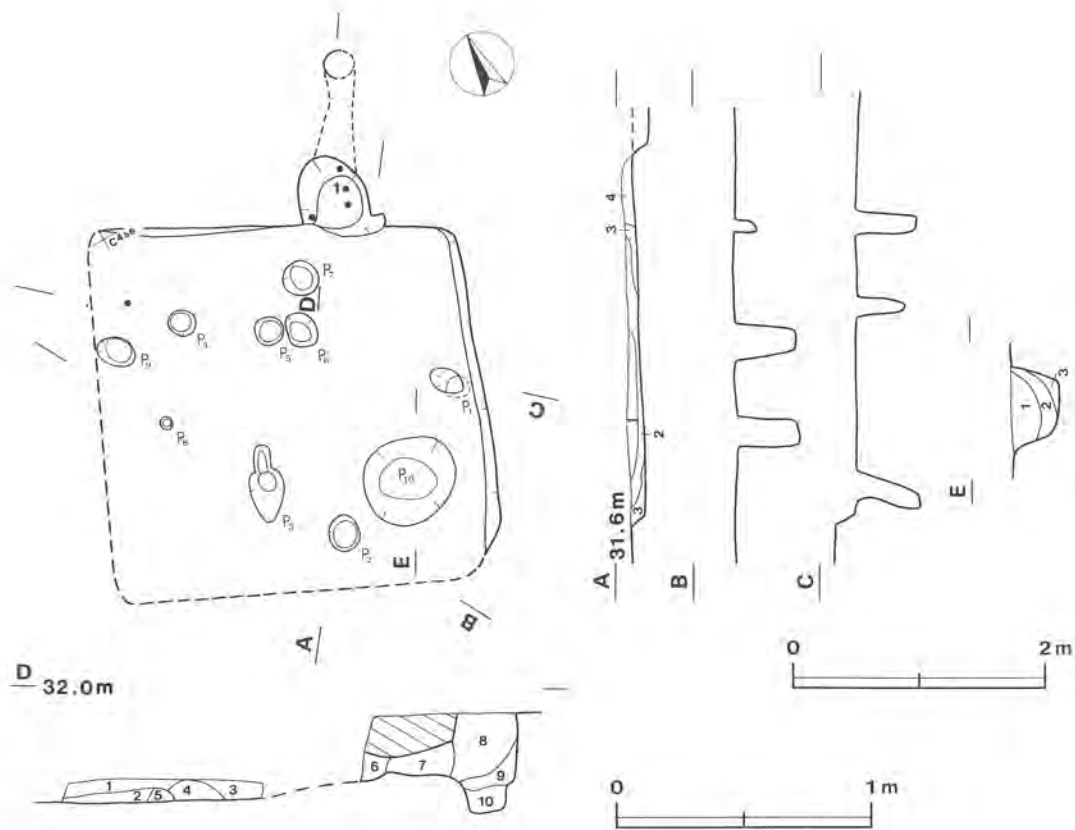
貯蔵穴 1ヶ所（P<sub>10</sub>）。P<sub>10</sub>は南東コーナー付近に位置し、径68～78cmの楕円形で、深さ51cmである。底面はほぼ平坦である。覆土は3層からなる。第1層は、ロームブロック・ローム粒・炭化物を少量、焼土粒を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量、焼土粒・炭化物を微量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒を中量含む暗褐色土である。

竈 北東壁に付設する。煙道部は、地山のローム層下部をトンネル状に掘り込み竪坑と横坑を連結させて造っている。遺存状態は良好である。火床面は床面をわずかに掘りくぼめ、煙道部底面でわずかに立ち上がり横坑より深い竪坑に至る。火床面及び煙道壁面は赤変硬化している。袖部は確認していない。覆土は10層からなる。第1層は、ローム粒・焼土粒を中量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量含む黒褐色土。第3層は、ローム粒を中量、焼土ブロック・焼土粒を少量含む褐色土。第4層は、ローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土。第5層は、ローム粒を少量、焼土粒を少量含む褐色土。第6層は、ローム粒を多量、焼土粒を中量含むにぶい褐色土。第7層は、焼土粒を多量・ローム粒を中量含む明赤褐色土。第8層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む褐色土。第9層は、ローム粒を多量含む褐色土。第10層は、ローム粒を多量含む明褐色土である。

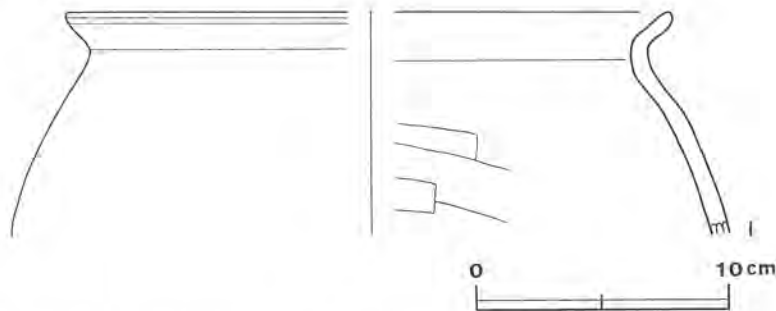
覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を少量含む黒褐色土。第2層は、礫粒を中量、ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、礫粒を少量、ローム粒を微量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒を多量、礫粒を中量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片1点、土師器片36点が出土している。第65図1の甕は竈火床面から出土している。弥生土器片は、混入したものである。

所見 本跡は、竈煙道部を竪坑と横坑を連結させて造っている住居跡である。本跡の時期は、第65図1の甕が竈火床面から出土したことから、7世紀前葉と考えられる。



第64図 第27号住居跡



第65図 第27号住居跡出土遺物

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	甕 土師器	A[24.0] B(9.0)	体部上半部破片。体部は内傾して立ち上がり、頸部は外反する。口縁部は短く、外傾する。	体部外面ナデ。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 橙色 普通	P122 5% 竈火床面

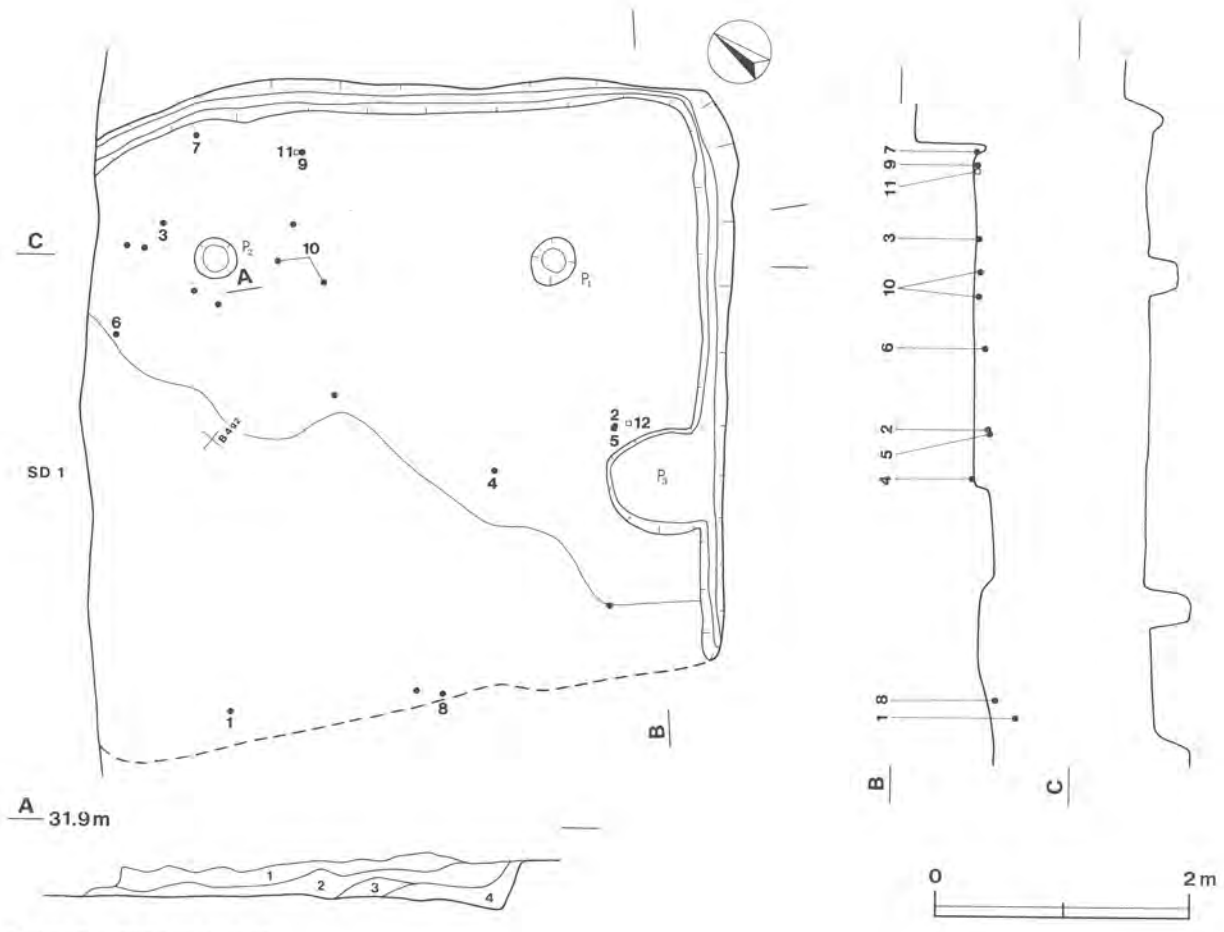
第28号住居跡（第66図）

位置 調査区の西部，B4g<sub>2</sub>区。

確認状況 遺物包含層である第IIb層上面で確認する。

重複関係 第1号溝と重複する。本跡は第1号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

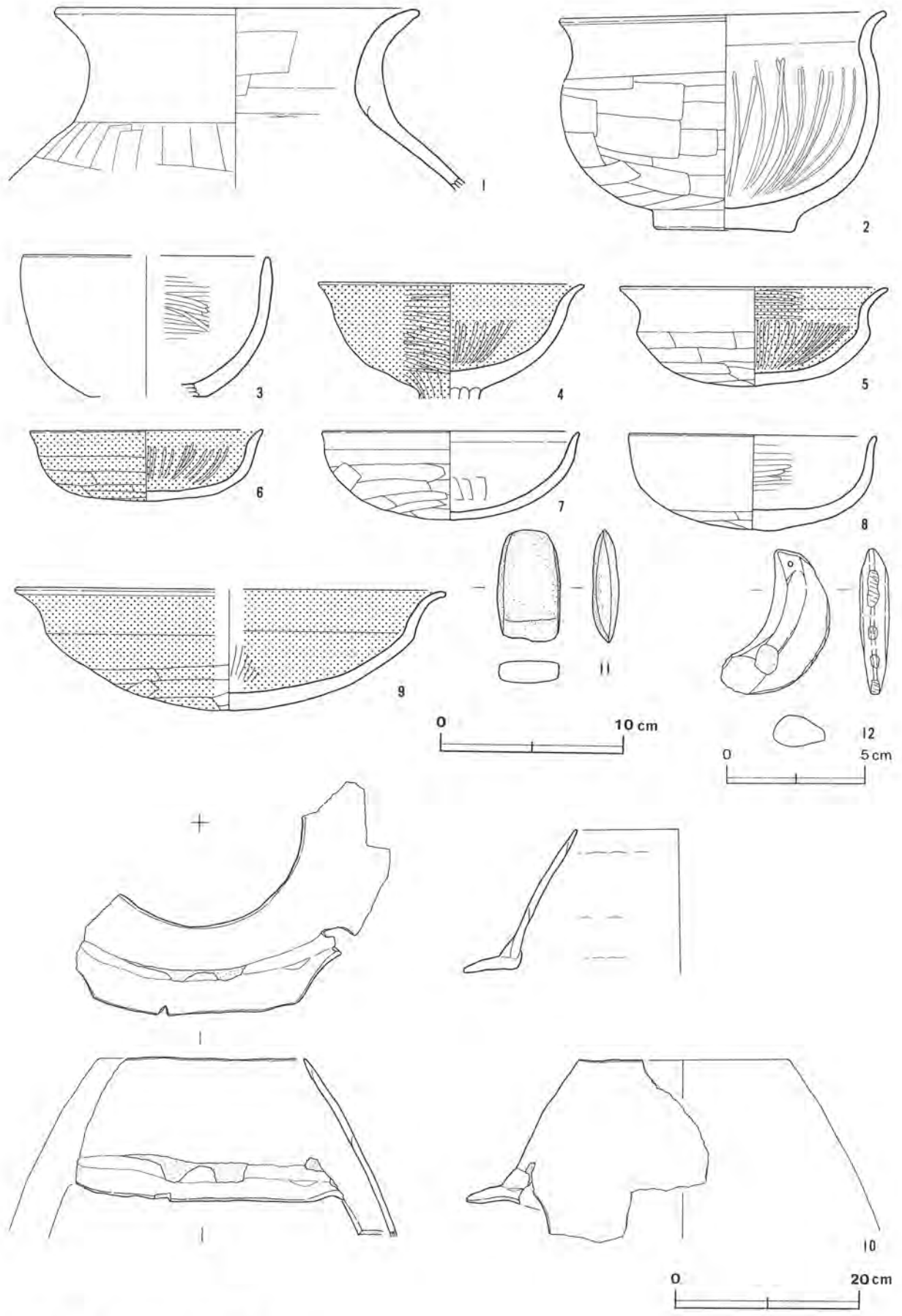
規模と平面形 本跡は，北西側を第2号溝に掘り込まれ西側が流失しているため規模は不明であるが，一辺約5.60mの隅丸方形と推定される。



第66图 第28号住居跡



第28号住居跡遺物出土状況



第67図 第28号住居跡出土遺物

壁 北東壁と南東壁の一部が残存している。壁高は最大で45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北東壁と南東壁下に残存している。上幅11～34cm・下幅4～11cmで、床面からの深さ6～8cmである。

床 遺物包含層である第II b～II c層と混礫砂層である第Ⅷ層を床面とし、東側だけが残存している。平坦で、中央部に踏み締りがある。

ピット 3ヶ所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、径34～41cmの楕円形で、深さ26～35cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、支柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は南東壁際中央部に位置し、径84cmの不整形円で、深さ10cmである。P<sub>3</sub>の底面は、壁高の底面と一致している。P<sub>3</sub>は、位置から出入りロピットと考えられる。

覆土 4層からなる。第1層は、礫粒を少量、炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロック・礫粒を中量含む暗褐色土。第3層は、灰白色粘土ブロック・礫粒を多量、炭化物を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・礫粒・炭化物を中量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片43点、古墳時代の土師器片402点、平安時代の土師器片1点、磨製石斧（第67図11）が出土している。第67図1の甕、4の高坏、7・8の坏は、床面から出土している。P<sub>3</sub>の北側床面には、第67図5の坏を正位に置いた上に2の鉢を逆位に伏せ、その脇から子持ち勾玉形石製模造品（第67図12）が出土している。12の子持ち部は研磨されている。10の置竈は、第2層から出土している。弥生土器片と平安時代の土師器片は、混入したものである。

所見 本跡の時期は、第67図5・7・8の坏が床面から出土したことから6世紀初頭と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	甕 土師器	A 20.0 B (10.0)	頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P131 20% 床面
2	鉢 土師器	A 17.9 B 12.2 C 7.6	平底で、底部は突出する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P130 90% 床面
3	碗 土師器	A(13.4) B( 7.7) C( 6.4)	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。	雲母・スコリア 橙色 普通	P127 20% 覆土
4	高坏 土師器	A(14.6) B( 6.2)	坏部破片。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。内・外面赤彩。	雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P129 50% 床面
5	坏 土師器	A(14.9) B( 5.5)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内彎する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。内面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P123 95% 床面
6	坏 土師器	A 12.8 B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後放射状に磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	雲母・砂粒 橙色 普通	P126 80% 覆土
7	坏 土師器	A 14.2 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P125 95% 床面
8	坏 土師器	A(13.7) B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口唇部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P124 80% 床面
9	大型坏 土師器	A(23.8) B 6.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P128 50% 覆土
10	置竈 土師器	A(22.8) B(20.0)	上端部から焚口部破片。体部は内傾して立ち上がる。焚口部の上部に庇が付く。	内・外面ナデ。	石英・長石 にぶい黄褐色 普通	P132 20% 第2層

第29号住居跡（第68図）

位置 調査区の中央部，B4i区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。遺物包含層である第IIb層上面から掘り込んでいる。

重複関係 第37号住居跡と第1号竪穴遺構と重複する。本跡は第37号住居跡と第1号竪穴遺構に掘り込まれており，本跡が古い。

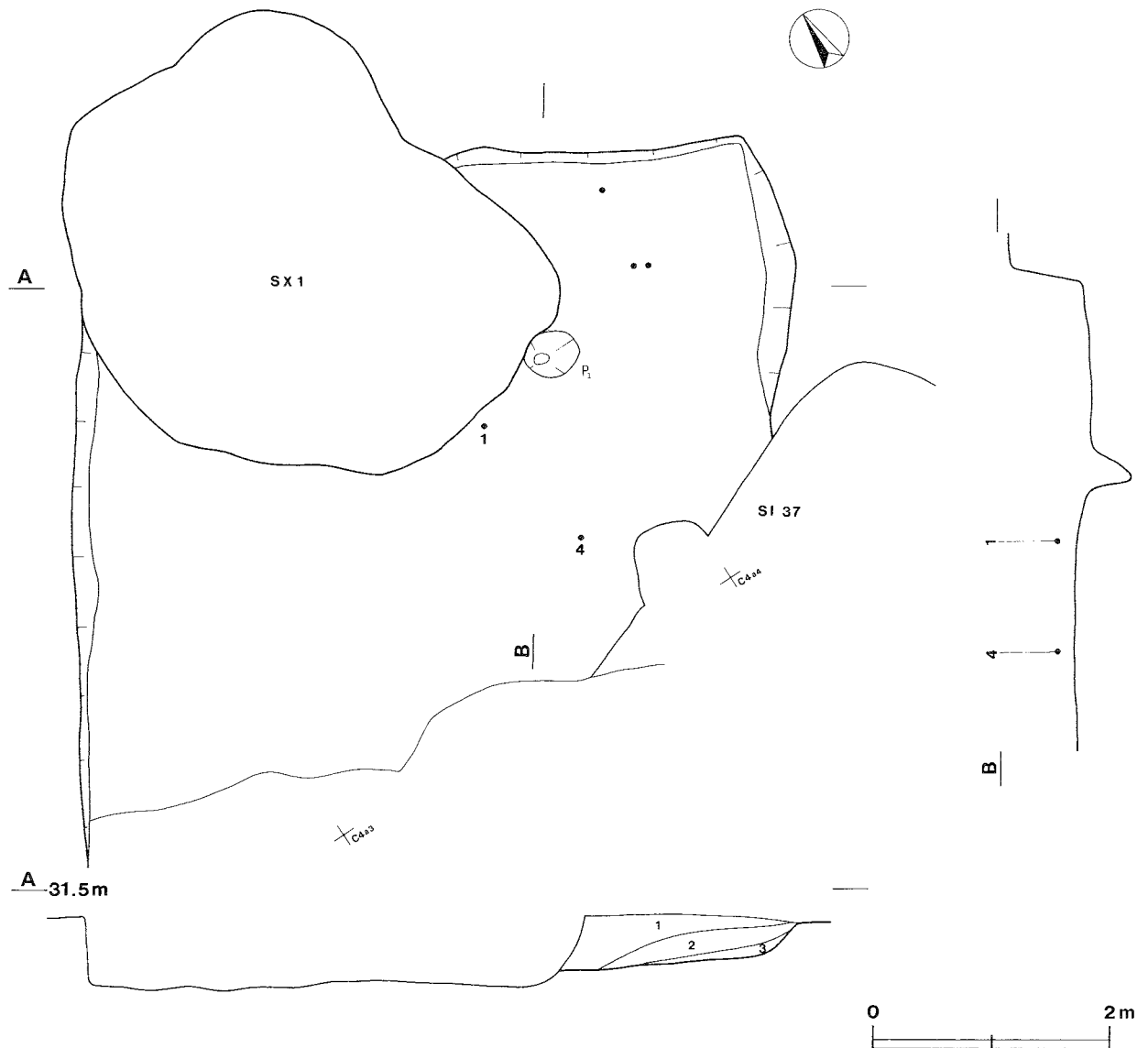
規模と平面形 第37号住居跡と第1号竪穴遺構に掘り込まれているため規模は不明であるが，一辺約6.0mの隅丸方形と推定される。

壁 東壁・西壁・北壁の一部が残存している。壁高は最大で26cmで，傾斜して立ち上がる。

床 平坦で，全体的に踏み締まりがある。

ピット 1ヶ所。P<sub>1</sub>は，長径46cm・短径30cmの楕円形で，深さ40cmである。P<sub>1</sub>は，支柱穴と考えられる。

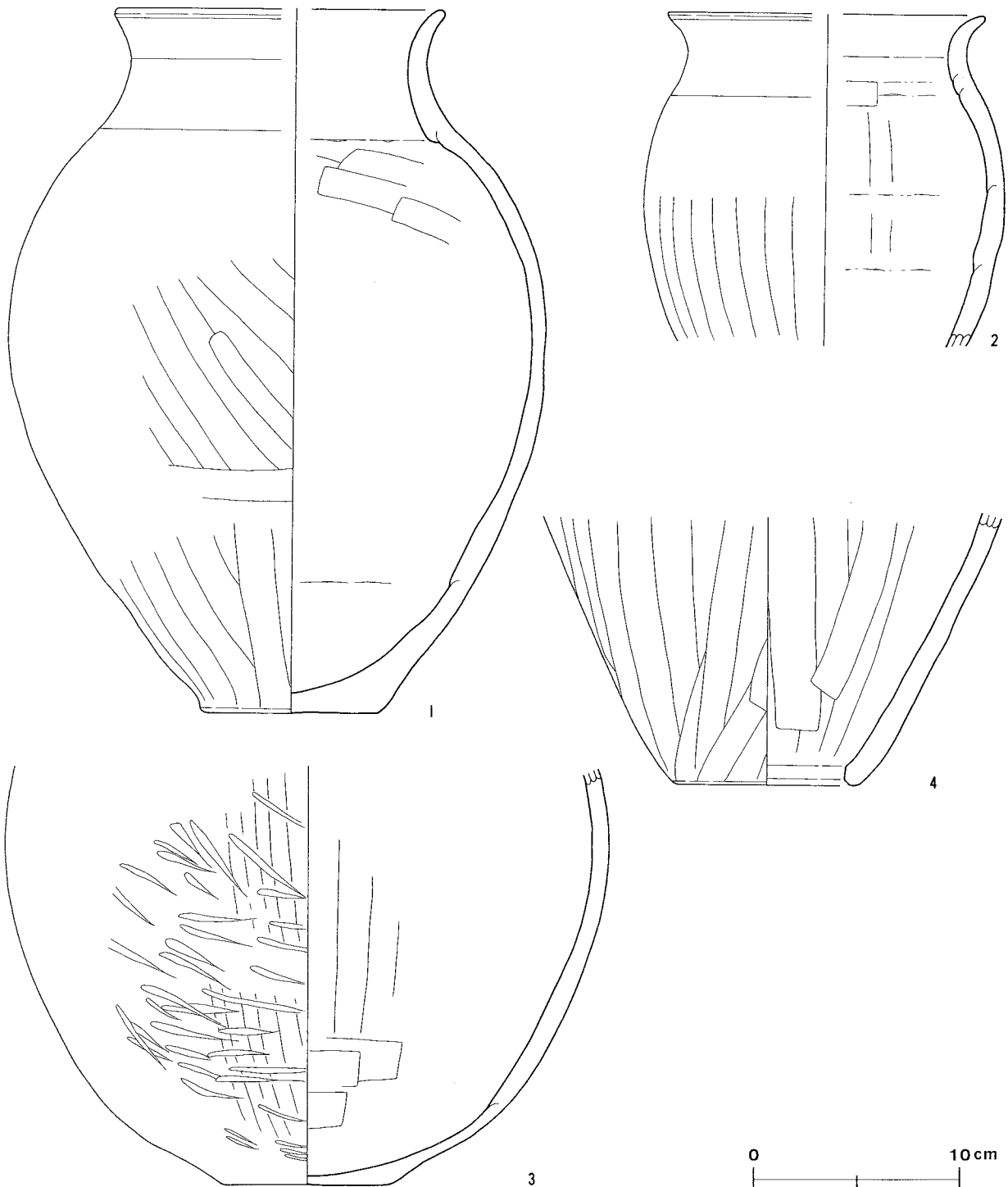
覆土 3層からなる。第1層は，炭化物を中量，ローム粒・礫粒を微量含む暗褐色土。第2層は，ロームブロック・ローム粒・礫粒を多量に含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・礫粒を多量，炭化物を微量含む暗褐色土である。



第68図 第29号住居跡

遺物 本跡から、土師器片127点、須恵器片1点が出土している。第69図1～3の甕は覆土から、4の甗はP<sub>1</sub>覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第69図 第29号住居跡出土遺物

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	甕 土師器	A[14.6] B 34.5 C 8.6	体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部は内傾し、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P13380% 覆土



図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	甕 土師器	A(15.4) B(16.3)	体部上半部破片。体部は倒卵形で、体部上半部に最大径がある。頸部は外反し、そのまま口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母にぶい橙色普通	P134 20% 覆土
3	甕 土師器	B(20.4) C 8.4	平底。体部は球形で、内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。	石英・長石明赤褐色普通	P135 25% 覆土
4	甗 土師器	B(13.0) C 8.6	無底式。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	雲母・砂粒明褐色普通	P136 30% P <sub>1</sub> 覆土 SX1-1の甗と同一個体

### 第30号住居跡（第70図）

位置 調査区の中央部，C5g<sub>3</sub>～C5h<sub>3</sub>区。

確認状況 遺物包含層である第IIb層上面で確認する。

規模と平面形 長軸6.50m・短軸6.0mの隅丸方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は最大で36cmで、傾斜して立ち上がる。

床 大半は関東ローム層下部の第IX～XI層を床面に行っているが、南西部は遺物包含層である第IIc層を床面に行っている。南側に向かってわずかに傾斜し、平坦で中央部に踏み締まりがある。

ピット 5ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径26～34cmの楕円形で、深さ20～42cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、径25cmの円形で、深さ43cmである。P<sub>5</sub>は、位置から補助柱穴と考えられる。

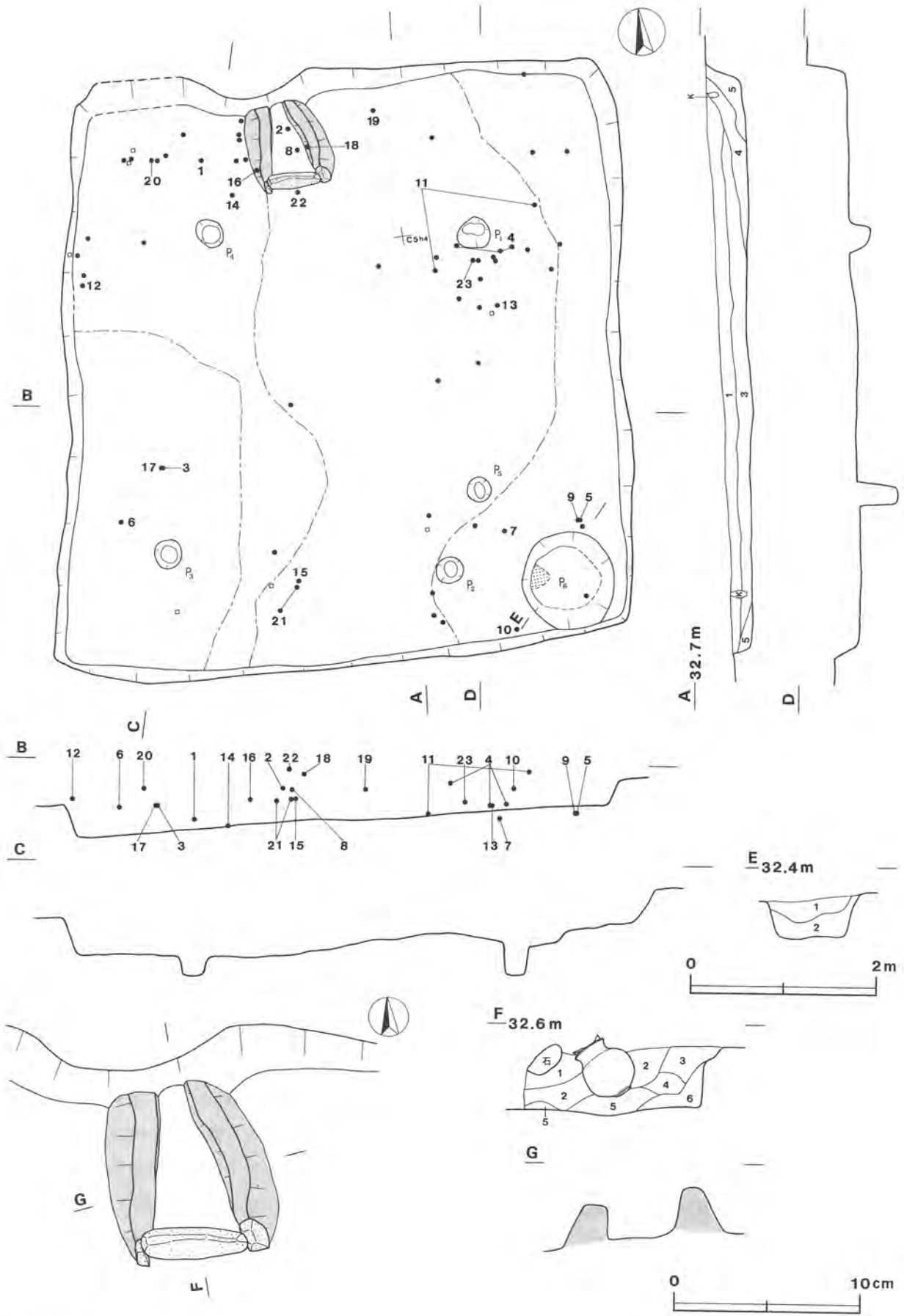
貯蔵穴 南東コーナー付近に付設する（P<sub>6</sub>）。P<sub>6</sub>は、長径106cm・短径99cmの楕円形で、深さ46cmである。底面はほぼ平坦で、壁は傾斜して立ち上がる。覆土は2層からなる。第1層は、ローム粒・灰白色粘土粒・焼土粒を中量含む黒褐色土。第2層は、ローム粒・灰白色粘土粒・炭化物を少量含む黒褐色土である。

竈 北壁に付設する。遺存状態は良好である。焚口部は、径14～34cmの角柱状花崗岩を両側に立て、その上に径17～43cmの角柱状花崗岩を乗せ構築している。焚口の内径は、幅108cm、高さ36cmである。両袖部は、灰白色粘土で造られており、壁から外開きに延びている。煙道は壁外に延びておらず、竈を付設した壁面は内彎している。火床面は床面と一致する。覆土は6層からなる。第1層は、焼土粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第2層は、焼土粒・ローム粒を中量、礫粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・礫粒を中量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・礫粒を中量含む褐色土。第5層は、焼土ブロック・ロームブロックを多量含む暗赤褐色土。第6層は、ロームブロックを多量含む褐色土である。焚口部に堆積する第5層は火床部にあたり、第6層上面が煙道底面となる可能性がある。

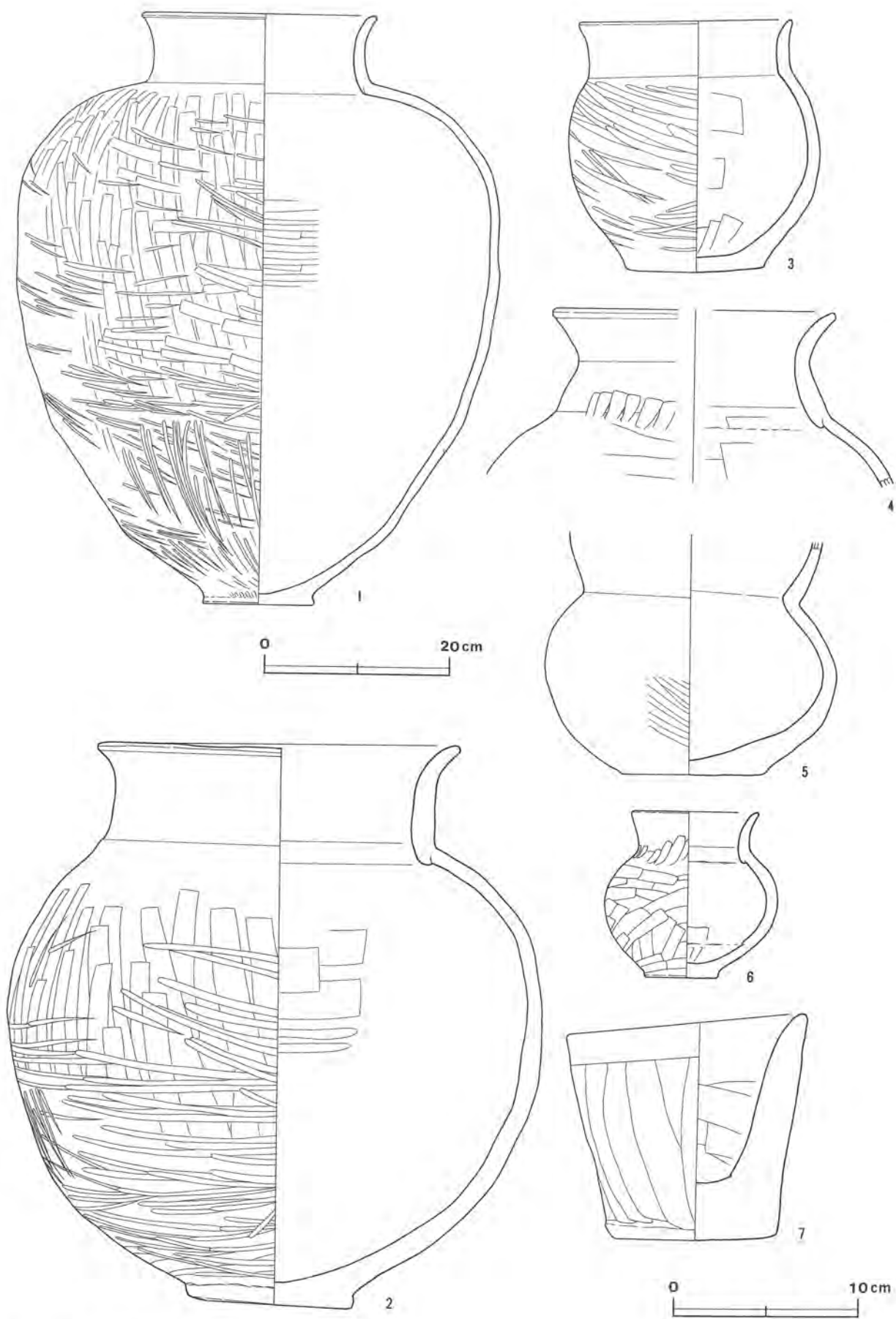
覆土 5層からなる。第1層は、ローム粒・焼土粒を微量含む褐色土。第2層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第3層は、炭化物を中量、ローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・灰白色粘土粒・炭化物を中量含む極暗褐色土。第5層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む暗褐色土。

遺物 本跡から、縄文土器片5点、弥生土器片75点、土師器片1279点、須恵器片1点、平安時代の土師器片1点が出土している。第71図2の甕は竈に設置された状態で出土し、第72図8の甗は2の甕に寄せられた状態で出土している。第71図4の甕、5の壺、7の鉢、第72図9の甗、10の鉢、14～16・18・20・21の坏は、床面から出土している。縄文土器片と弥生土器片と平安時代の土師器片は、混入したものである。

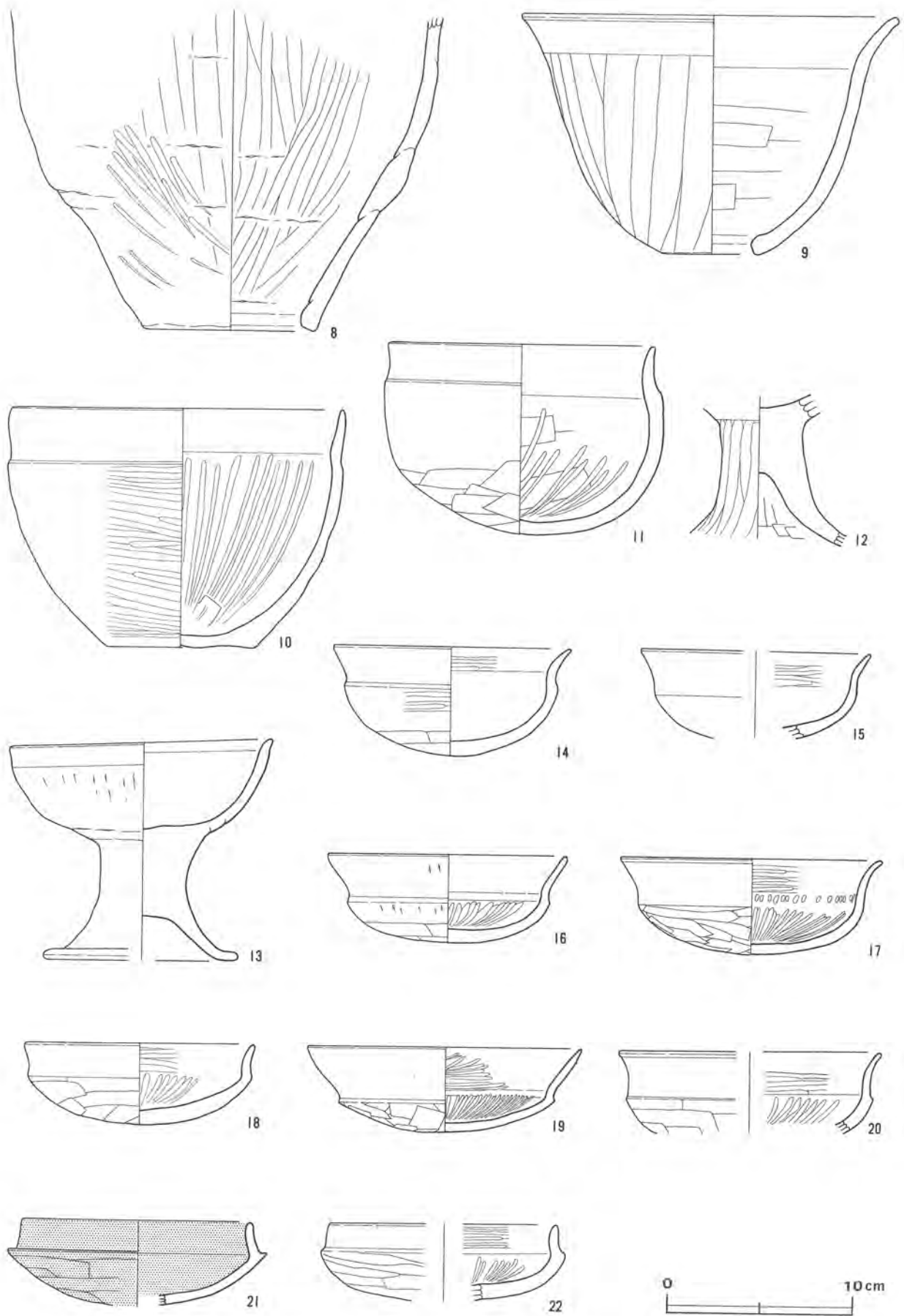
所見 本跡は、竈の焚口を角柱状の花崗岩で構築している住居跡である。本跡の時期は、第72図14～16・18・20・21の坏が床面から出土していることから6世紀前葉と考えられる。



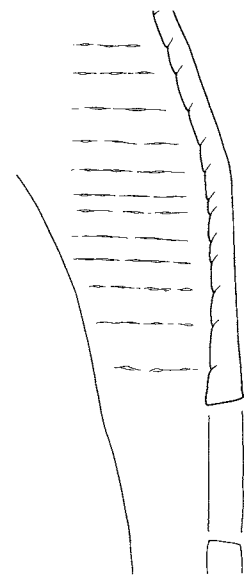
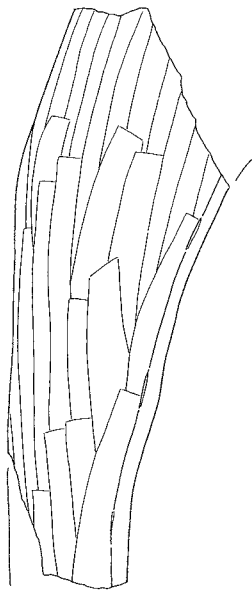
第70图 第30号住居跡



第71図 第30号住居跡出土遺物(1)



第72図 第30号住居跡出土遺物(2)



23



第73図 第30号住居跡出土遺物(3)

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	甕 土師器	A 25.6 B [64.8] C 12.0	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ	石英・長石・雲母 褐色 普通	P149 90% 第4層
2	甕 土師器	A 19.8 B 30.8 C 8.8	平底で、底部が突出する。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する	体部外面ヘラナデ後、磨き。内面ヘラナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石 明褐色 良好	P159 100% 甕第5層
3	甕 土師器	A 11.7 B (14.0) C 7.5	平底で、底部が突出する。体部は球形で、体部中位に最大径がある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 良好	P150 100% 覆土
4	甕 土師器	A [15.2] B (9.5)	口頸部破片。頸部は内傾し、口縁部は外反する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	P151 10% 床面
5	壺 土師器	B (13.3) C 7.5	平底。体部は横長の楕円形で、体部中位に最大径がある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。	長石・砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P152 60% 床面
6	壺 土師器	A 6.9 B 9.1 C 4.0	平底で、底部が突出する。体部は球形で、体部中位に最大径がある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒 にぶい黄橙色 良好	P160 30% 覆土
7	鉢 土師器	A (12.5) B [12.5] C 8.8	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P146 95% 床面
第72図 8	甑 土師器	B (17.3) C 9.0	無底式。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P155 40% 2の甕の上部
9	甑 土師器	A 20.5 B 13.1 C 5.0	無底式。体部は外傾して立ち上がり口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P154 85% 床面
10	鉢 土師器	A 18.3 B 13.2 C 8.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒にぶい 橙色 普通	P144 90% 床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
11	碗 土師器	A 14.5 B 10.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ削り。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒にぶい褐色普通	P145 80% 第3層
12	高 土師器	B(8.1)	脚部破片。脚柱は円柱形で、裾部は「ハ」の字状に広がる。	脚部内・外面ヘラナデ。	石英・雲母・砂粒明赤褐色普通	P148 20% 第4層
13	高 土師器	A 14.4 B 12.2 C 10.7	脚柱は円柱形で、裾部は「ハ」の字状に広がる。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母赤褐色普通	P147 80% 覆土
14	坏 土師器	A 12.9 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、横位の磨き。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。	砂粒・スコリア赤褐色普通	P137 100% 床面
15	坏 土師器	A[12.6] B(4.8)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外面ナデ後、横位の磨き。	石英・砂粒明赤褐色普通	P141 40% 覆土
16	坏 土師器	A 13.2 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	石英・砂粒放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。	赤褐色普通	P138 85% 覆土
17	坏 土師器	A[14.4] B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。	砂粒・スコリア赤褐色良好	P158 100% 第5層
18	坏 土師器	A 12.6 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。内・外面一部黒色処理。	石英赤褐色普通	P285 70% 覆土
19	坏 土師器	A[15.0] B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後磨き。口縁部内面横位の磨き。口縁部外面横ナデ。	砂粒・スコリア明赤褐色良好	P157 100% 床面
20	坏 土師器	A[14.4] B(4.5)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横位の磨き。	砂粒・スコリア橙色普通	P142 20% 覆土
21	坏 土師器	A[12.6] B(4.7)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア明赤褐色普通	P139 70% 覆土
22	坏 土師器	A[12.4] B(4.3)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア明赤褐色普通	P140 30% 第1層
第73図 23	置 土師器	F(39.0)	焚口部破片。体部は内彎して立ち上がる。体部横位に2単位の円窓がある。	体部外面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石にぶい黄褐色普通	P156 15% 覆土

### 第31号住居跡（第74図）

位置 調査区の西部，B3c区。

確認状況 遺物包含層である第IIb層上面で確認する。

重複関係 本跡は，第2号住居跡・第19・66・67号土坑と重複している。第2号住居跡が本跡の覆土中を床面にし，第19・67号土坑が本跡を掘り込んでいるため本跡が古く，第66号土坑上面を貼床にしているため本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.72 m・短軸5.48 mの隅丸方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 南壁が第19号土坑に掘り込まれている以外は残存している。壁高は最大で40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁の一部で確認する。壁溝の床面側には高さ7cm程の高まりがある。壁溝は，上幅12cm・下幅5cmで，高まりからの深さ3cmである。

床 混礫粘土層である第Ⅶ・Ⅷ層を床面にしている。平坦で，全体的に踏み締まっている。

ピット 4ヶ所。P<sub>3</sub>は第67号土坑底面で確認する。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径22～44cmの楕円形で，深さ38～48cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，支柱穴と考えられる。

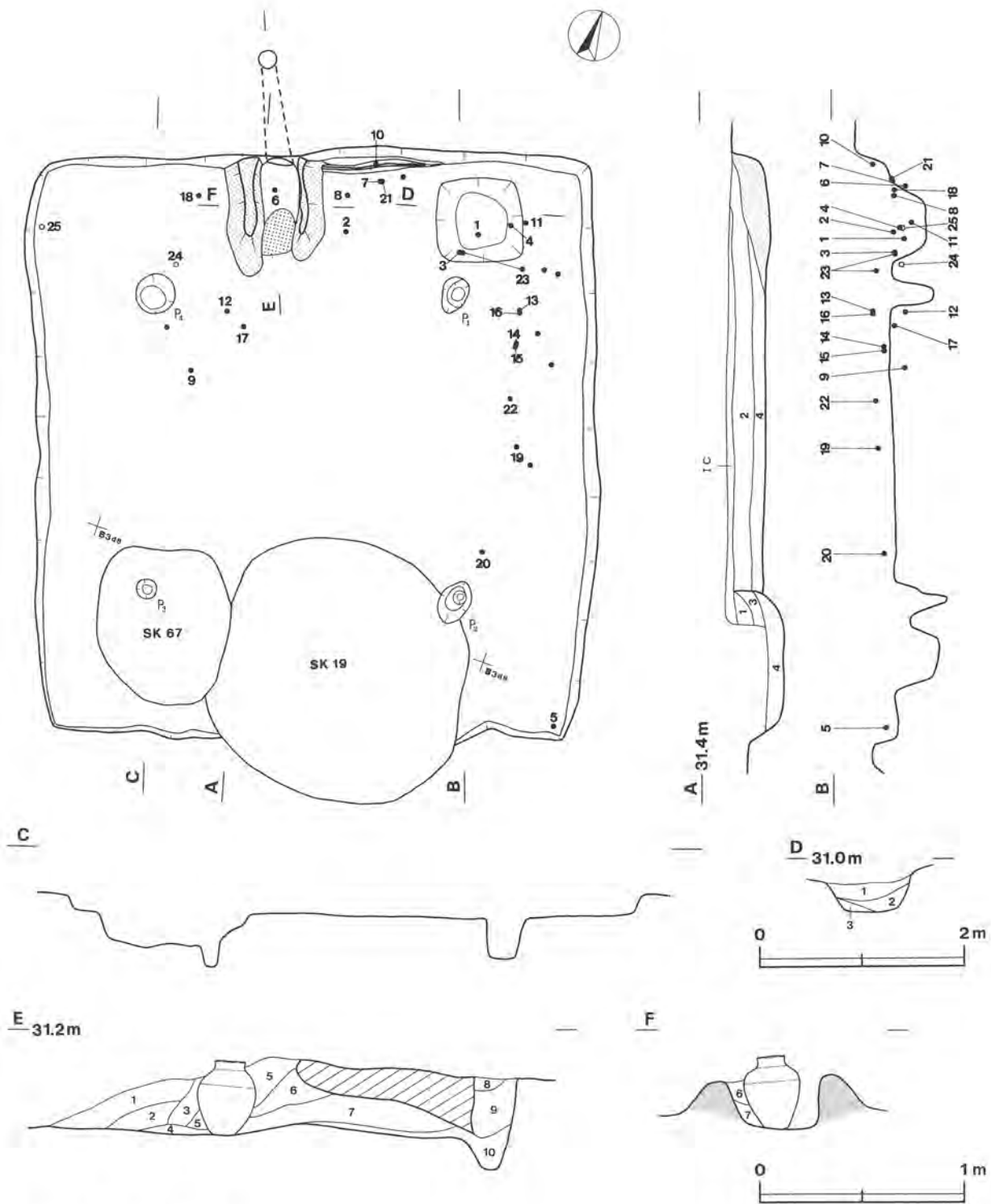
貯蔵穴 1ヶ所（P<sub>5</sub>）。北東コーナー付近に付設する。長軸84cm・短軸82cmの方形で，深さ35cmである。覆土は3層からなる。第1層は，礫粒を中量，ロームブロック・ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む黒褐色土。第2層は，ロームブロック・礫粒を中量，ローム粒・炭化物を少量含む極暗褐色土。第3層は，礫粒を多量，ローム粒を中量含むにぶい褐色土である。

竈 北壁に付設する。煙道は地山である第Ⅷ層をトンネル状に掘り込んで造り，遺存状態は良好である。両袖は礫粒を中量含む灰白色粘土を主に用いて造り，焚口の最大幅は46cmである。火床面は床面よりもやや掘りくぼめ，わずかに傾斜して煙道に至る。煙道部は，長さ110cm・径6～20cmで，竪坑と横坑を掘り連結させている。煙道の竪坑は，径22cm・深さ46cmである。火床面から煙道部は良く焼けており，最大で10cmが赤変硬化している。覆土は10層からなる。第1層は，焼土粒を少量，ローム粒を微量含む暗褐色土。第2層は，焼土ブロック・焼土粒を多量含む暗赤褐色土。第3層は，赤変硬化した暗赤褐色土。第4層は暗赤褐色焼土。第5層は，焼土粒を微量含む暗褐色土。第6層は，焼土粒を少量含む暗褐色土。第7層は，焼土ブロック・焼土粒を多量含む暗赤褐色土。第8層は，焼土粒を中量含む暗赤褐色土。第9層は，焼土ブロック・焼土粒を多量に含む暗赤褐色土。第10層は，焼土粒・炭化物を中量含む暗赤褐色土である。第3層は竈天井部で，第4層は火床部にあたる。

覆土 4層からなる。第1層は，礫粒を多量含む暗褐色土。第2層は，礫粒を中量，炭化物を微量含む黒褐色土。第3層は，ロームブロック・礫粒を多量含む暗褐色土。第4層は，礫粒を中量，炭化物を少量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片34点，土師器片2264点，須恵器片6点，土製品片20点，土鈴（第77図25），勾玉形土製模造品（第77図26），剣形石製模造品（第77図27）が出土している。第76図6の甕は，竈火床よりやや奥に正位の状態で出土している。第75図5の小型甕，7・11の甌，8・9の鉢，14・15・18・21の坏は，床面から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は，長い煙道部を持つ竈を北壁に付設する住居跡である。本跡の時期は，14・15・18・21の坏が床面から出土したことから6世紀後葉と考えられる。

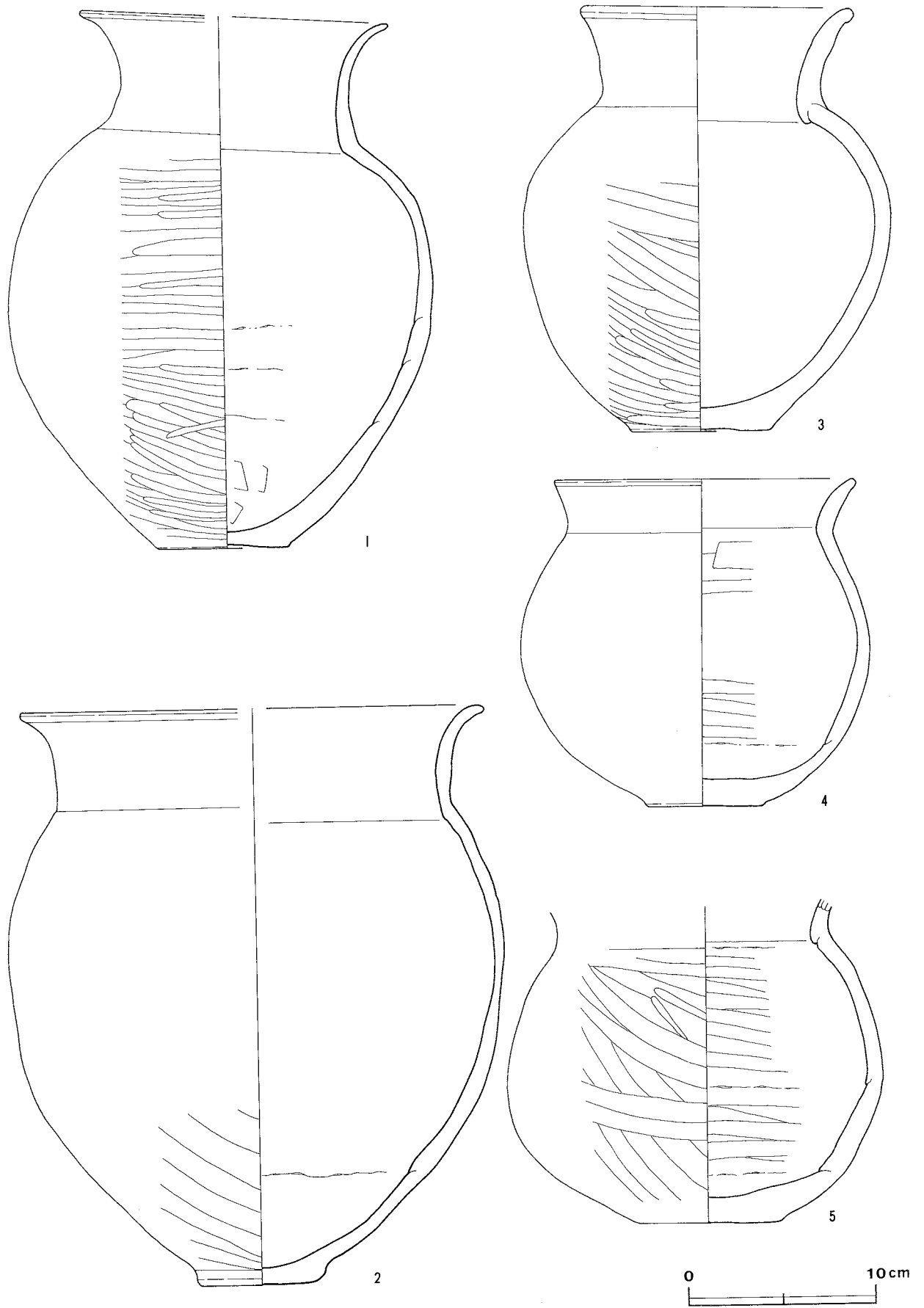


第74図 第31号住居跡

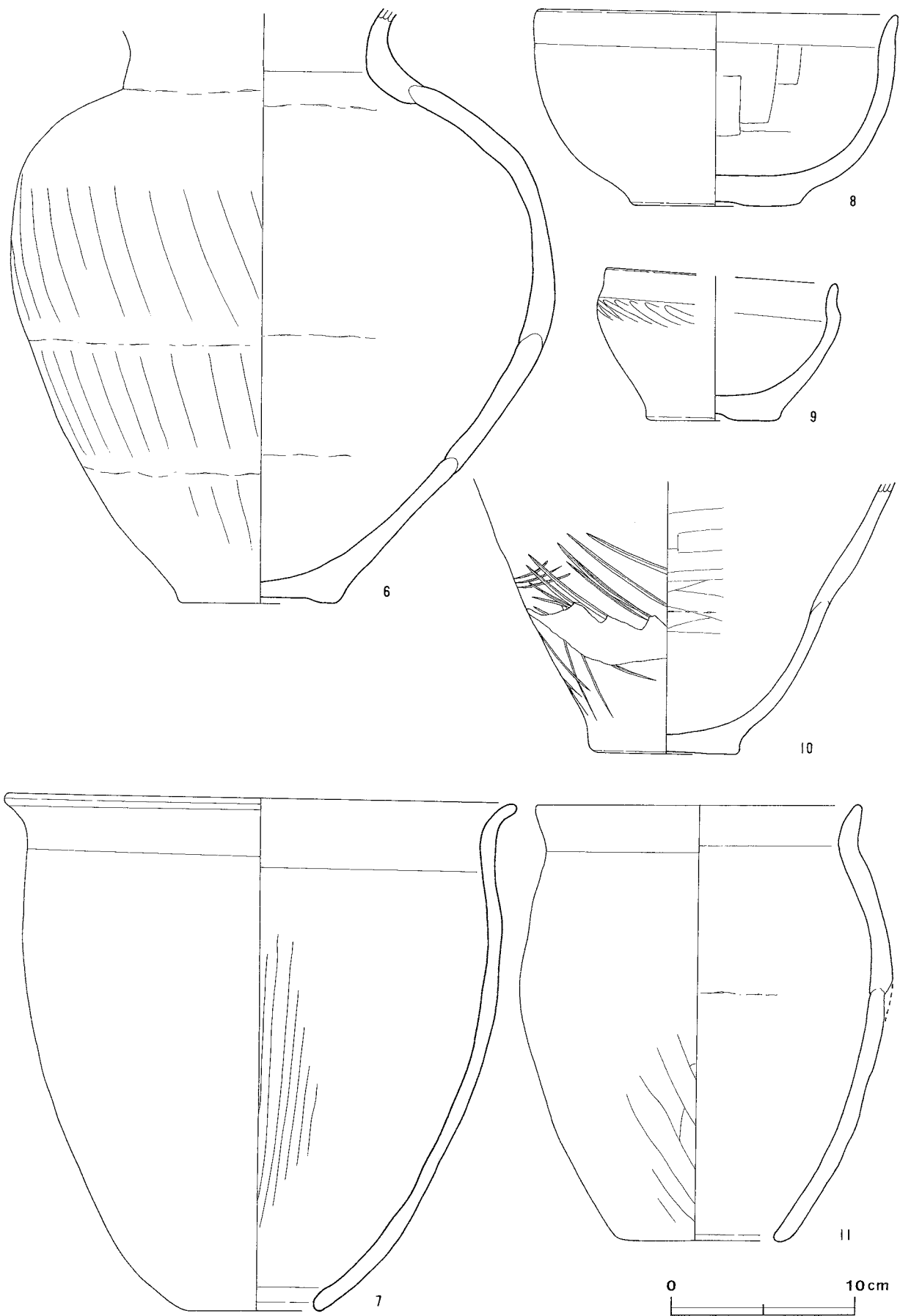
第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	甕 土師器	A[16.7] B 28.4 C 7.2	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ	雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P175 90% P <sub>1</sub> 第1層
2	甕 土師器	A[25.2] B 31.4 C 7.9	平底で、底部が突出する。体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外傾する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石・スコリア 明褐色 普通	P180 75% 床面

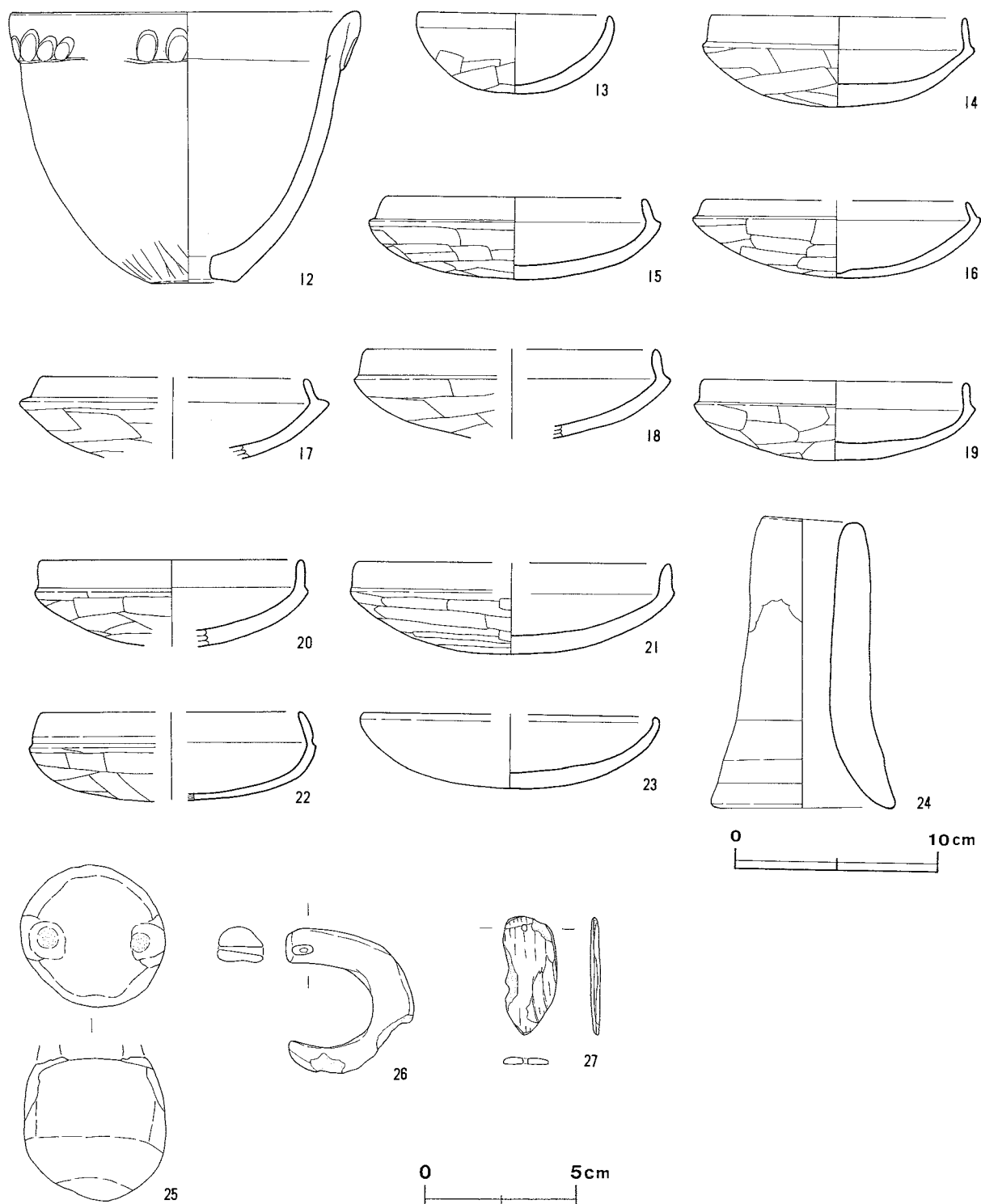




第75図 第31号住居跡出土遺物(1)



第76図 第31号住居跡出土遺物(2)



第77図 第31号住居跡出土遺物(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕 土師器	A 14.8 B (23.0) C 7.5	平底。体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 褐色 普通	P177 80% 覆土
4	小型甕 土師器	A [16.2] B (17.8) C 6.8	平底。体部は球形で、体部中位に最大径がある。頸部は「く」の字状に外反し、そのまま口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	P178 100% P.第1層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	小型甕 土師器	B(17.2) C 7.6	口縁部欠損。平底。体部は球形で、 体部中位に最大径がある。頸部は外 反して立ち上がる。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面 ナデ。	石英・長石・砂粒 赤褐色 普通	P179 60% 床面
第76図 6	甕 土師器	B(32.3) C 8.2	口縁部欠損。平底。体部は倒卵形で 体部上位に最大径がある。頸部はほ ぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。頸部 内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 橙色 普通	P174 90% 床面
7	甗 土師器	A(28.0) B(28.2) C 7.0	無底式。体部は直線的に外傾して立 ち上がり、そのまま口縁部に至る。 口縁部は短く外反する。	体部外面ナデ。体部内面ナデ後、ヘ ラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 褐色 普通	P182 95% 床面
8	鉢 土師器	A(19.6) B 10.4 C 9.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、 そのまま口縁部に至る。	体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 赤褐色 普通	P172 95% 床面
9	鉢 土師器	A[12.7] B 7.5 C 7.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に稜がある。口縁部は ほぼ直立する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナ デ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P173 80% 床面
10	甕 土師器	B(15.0) C 8.0	平底。体部は直線的に外傾して立ち 上がる。	体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。 体部外面に研ぎ溝があり、砥石とし て再利用している。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P181 40% 覆土
11	甗 土師器	A 17.8 B 23.8 C 9.5	無底式。体部は内彎して立ち上がり 頸部はわずかに外反する。口縁部は 短く直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナ デ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 茶褐色 普通	P183 65% 床面
第77図 12	甗 土師器	A(17.2) B 13.5 C 4.0	単孔式。体部は直線的に外傾して立 ち上がる。口縁部は複合口縁で、指 頭圧痕を施している。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。	長石・スコリア 黄褐色 普通	P184 85% 覆土
13	埴 土師器	A 9.6 B 4.1	体部は内彎して立ち上がり、そのま ま口縁部に至る。口縁部は直立する	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P171 90% 覆土
14	坏 土師器	A 12.7 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P162 100% 床面
15	坏 土師器	A[12.6] B(4.1)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒・スコリア 橙色普通	P163 100% 床面
16	坏 土師器	A[13.0] B 3.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ	長石・砂粒 橙色 普通	P164 85% P5底面
17	坏 土師器	A[13.0] B(4.1)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P166 40% 覆土
18	坏 土師器	A[14.4] B(4.5)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P165 40% 床面
19	坏 土師器	A[13.1] B 4.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色普通	P167 50% 覆土
20	坏 土師器	A[13.0] B(4.4)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に突出した稜がある。 口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒・スコリア 橙色 普通	P168 60% 覆土
21	坏 土師器	A[15.6] B(4.5)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に稜がある。口縁部は ほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ	雲母・砂粒・スコリア 黄褐色 普通	P161 50% 床面
22	坏 土師器	A[12.8] B(4.3)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に稜がある。口縁部は 内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P169 45% 覆土
23	坏 土師器	A[39.0] B 3.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 そのまま口縁部に至る。口縁部は直 立する。	体部内・外面ナデ。	長石・砂粒 橙色 普通	P170 50% 覆土

第33号住居跡（第78図）

位置 調査区の西部，B3a<sub>6</sub>区。

重複関係 本跡は，第6号溝と重複している。本跡は第6号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 本跡は南東コーナーだけが残存しており規模は不明であるが，平面形は隅丸方形と推定される。

壁 東壁と南壁の一部が残存している。壁高は最大で20cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

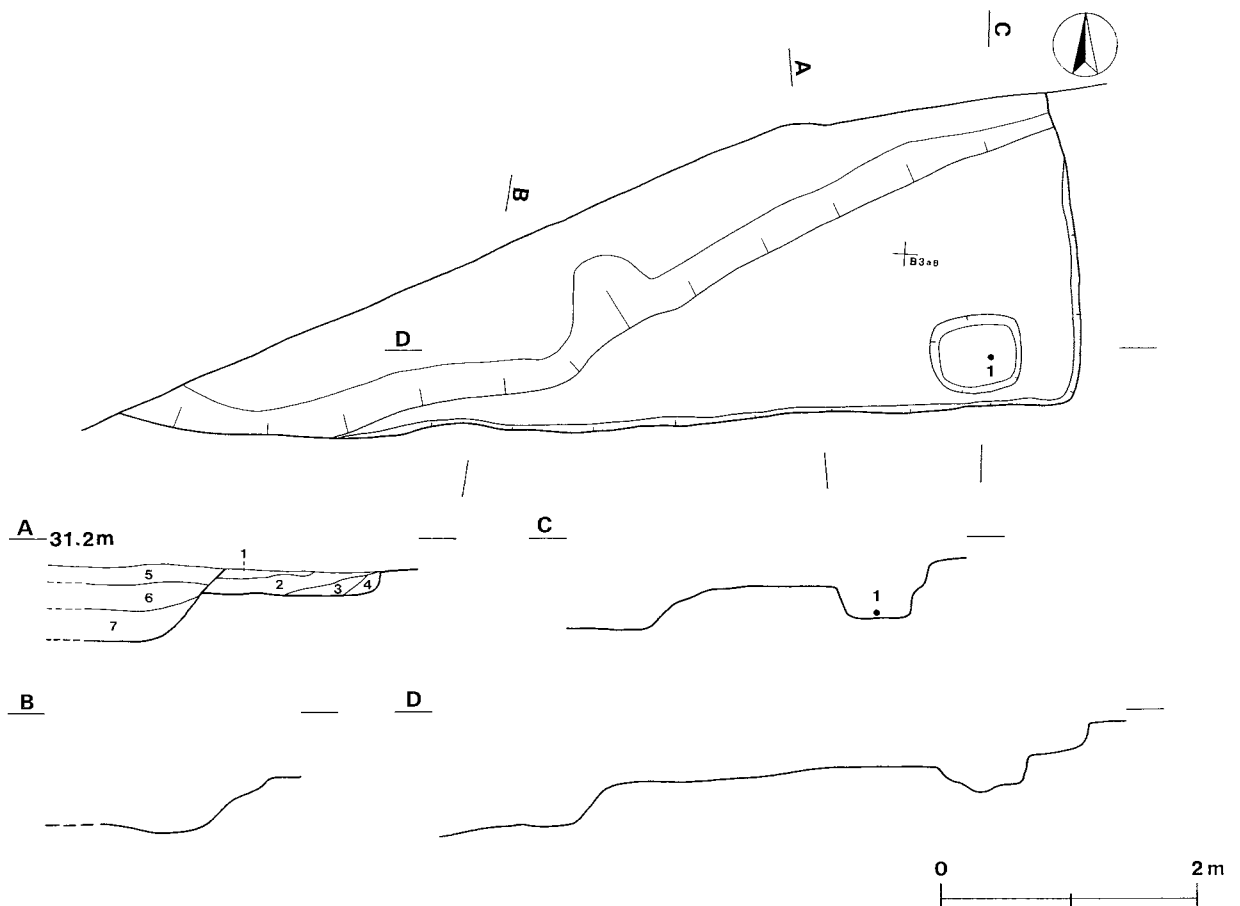
床 混礫粘土層である第Ⅷ層を床面にしており，平坦で踏み締まっている。

貯蔵穴 1ヶ所（P<sub>i</sub>）。南東コーナー際に付設する。長軸73cm・短軸62cmの長方形で，深さ24cmである。

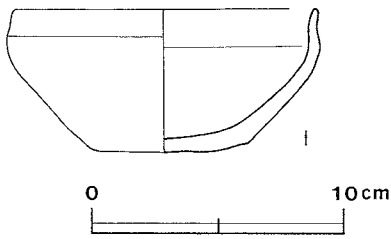
覆土 4層からなる。第1層は，ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む褐色土。第2層は，ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・焼土ブロック・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第4層は，ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片3点，土師器片61点，須恵器片1点，陶器片2点が出土している。第79図1の坏は，貯蔵穴であるP<sub>i</sub>の底面から出土している。弥生土器片と陶器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は，第79図1の坏が貯蔵穴底面から出土していることから5世紀末葉と考えられる。



第78図 第33号住居跡



第79図 第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	坏 土師器	A 12.2 B 5.7 C 6.5	平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境にわずかな稜がある。口縁部は短く、ほぼ直立する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリアにぶい赤褐色 普通	P185 95% P <sub>1</sub> 底面

第36号住居跡（第80図）

位置 調査区の中央部，B4j<sub>8</sub>～B4j<sub>9</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。本跡の南側は流失している。

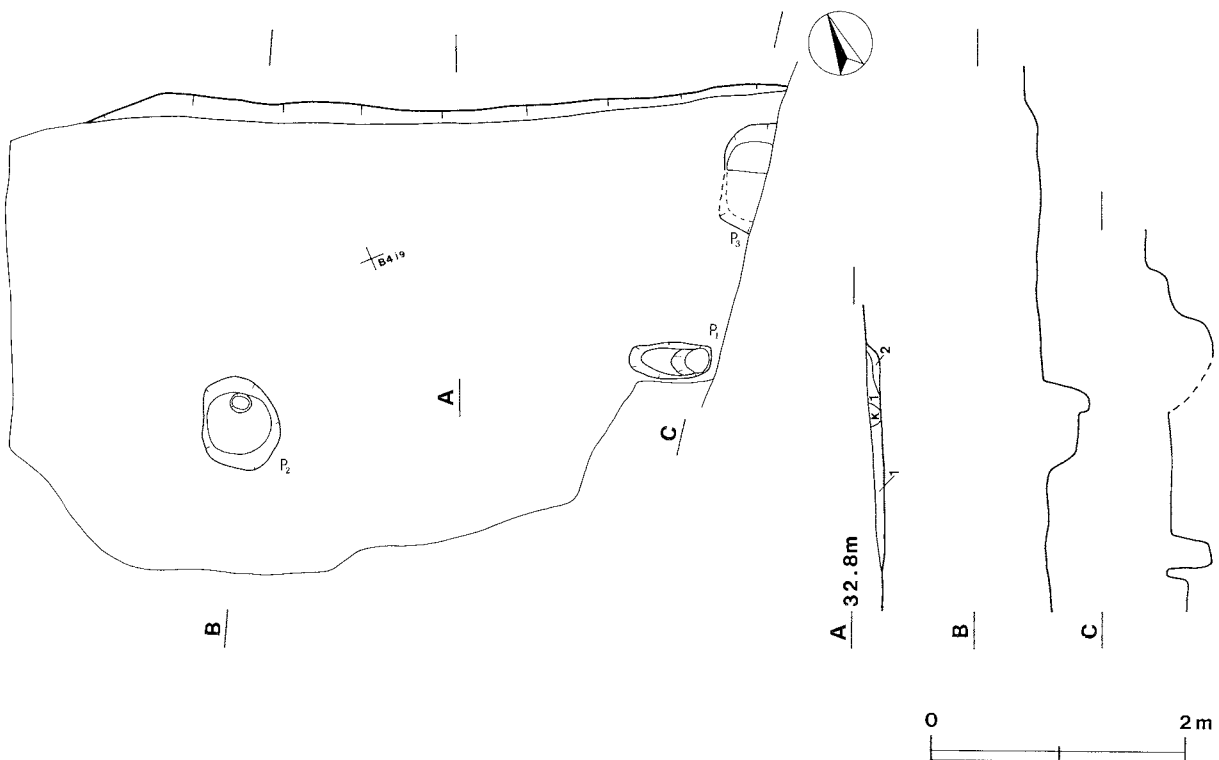
重複関係 本跡は，第34号住居跡と第2号溝状遺構と重複する。第34号住居跡は本跡の覆土中を床面としているため本跡が古く，本跡は第2号溝状遺構を掘り込んでいるため本跡が新しい。

規模と平面形 北側だけが残存しているため規模は不明であるが，平面形は隅丸方形と推定される。

壁 北壁の一部が残存している。壁高は最大で10cmで，傾斜して立ち上がる。

床 北側だけが残存しており，踏み締まりは弱い。

ピット 2ヶ所。P<sub>1</sub>は，長径66cm・短径28cmの楕円形で，深さ36cmである。P<sub>2</sub>は，長径78cm・短径62cmの楕円形で，深さ35cmである。いずれも断面は二段となる。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は，支柱穴と考えられる。



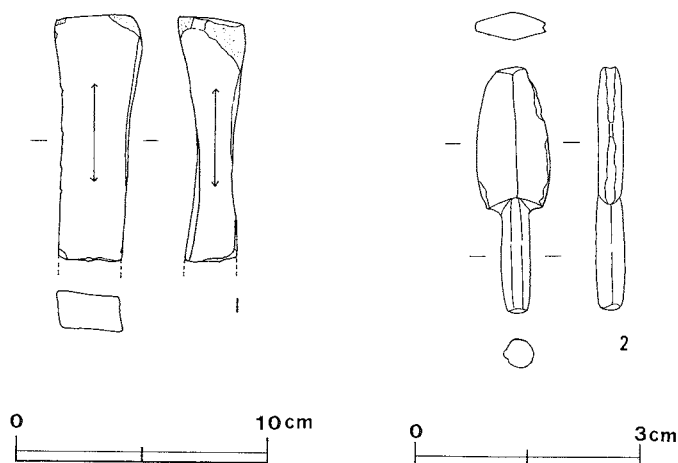
第80図 第36号住居跡

貯蔵穴 1ヶ所 (P<sub>3</sub>)。北東コーナー付近に付設する。平面形は一辺96cmの方形と推定され、深さは30cmである。覆土は、ローム粒・炭化物を中量含む暗褐色土である。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒を中量、焼土粒・炭化物を微量含む褐色土。第2層は、ローム粒を多量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、土師器片60点、須恵器片3点、砥石1点(第81図1)、銅鏃1点(第81図2)が出土している。2の銅鏃は、第1層から出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、本跡に伴う遺物がないため不明であるが、第34号住居跡より古く第2号溝状遺構より新しいことから古墳時代後期と考えられる。



第81図 第36号住居跡出土遺物

### 第37号住居跡 (第82図)

位置 調査区の中央部、B4a<sub>4</sub>区。

重複関係 本跡は、第29号住居跡・第61・68号土坑と重複する。本跡は第29号住居跡を掘り込んでいるため本跡が新しく、第61・68号土坑に掘り込まれているため本跡が古い。

規模と平面形 本跡は大半が第61・68号土坑に掘り込まれているため規模は不明であるが、平面形は一辺5.40mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-17°-W

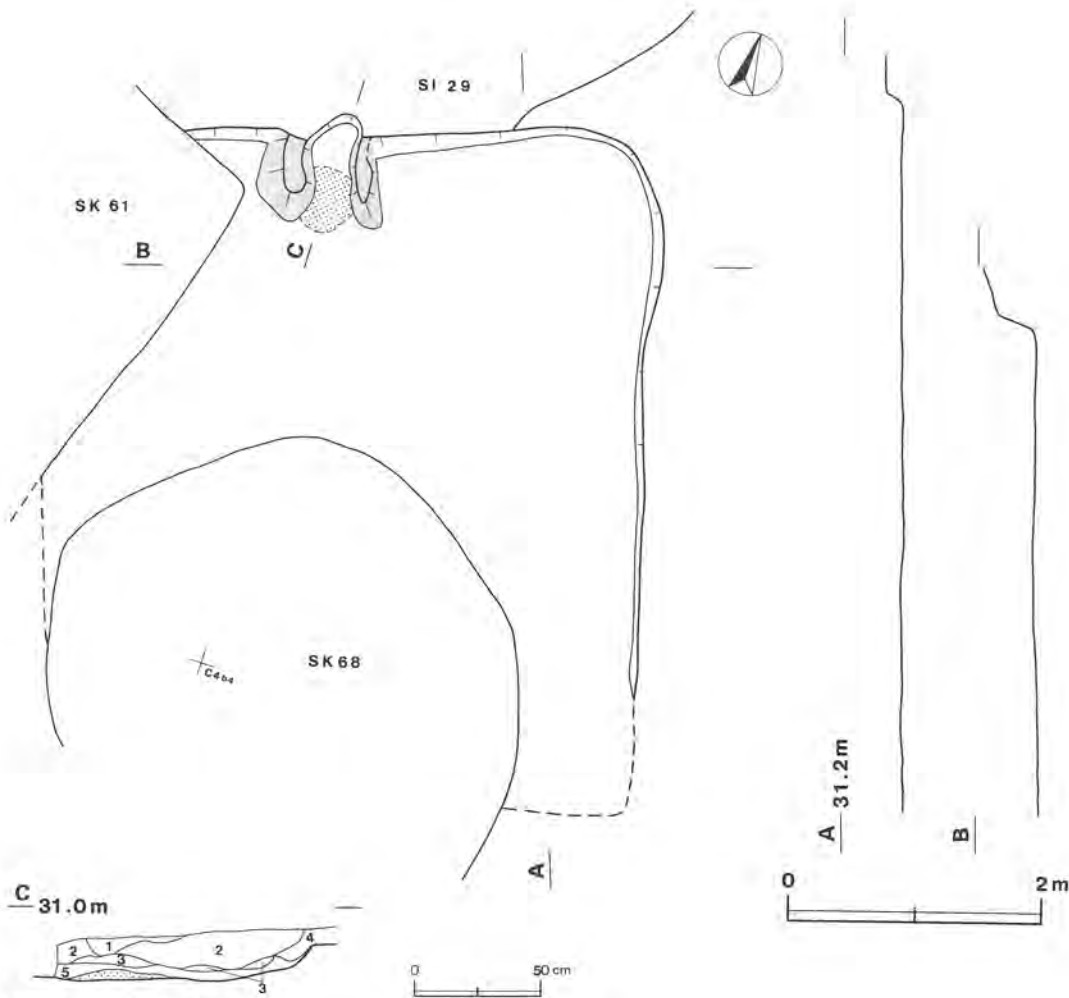
壁 東壁と北壁の一部が残存している。壁高は最大で29cmで、傾斜して立ち上がる。

床 平坦で、全体的に踏み締まっている。

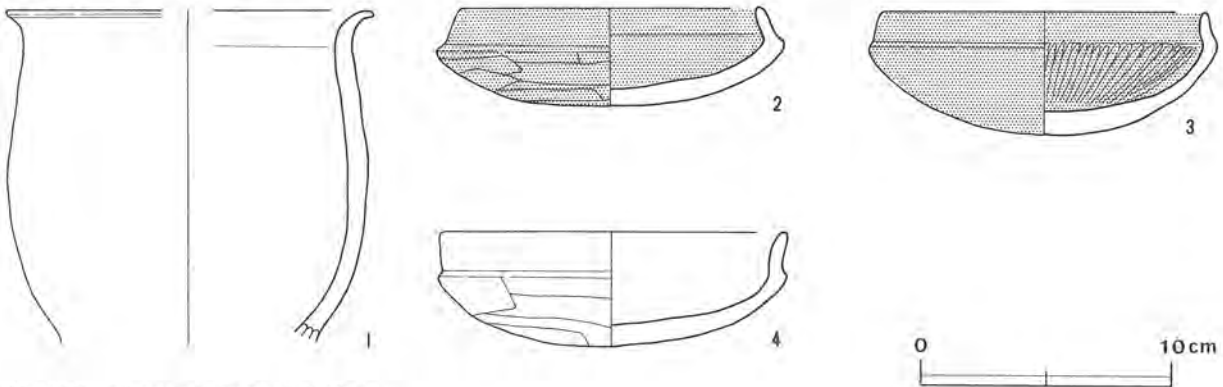
竈 北壁に付設し、煙道は壁外に16cm程突出している。両袖は、主に礫粒を多量含む灰白色粘土で構築している。火床面は床面と一致し、煙道はゆるやかに立ち上がる。覆土は6層からなる。第1層は、焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第2層は、礫粒を多量、ロームブロック・ローム粒を中量、炭化物を微量含む暗褐色土。第3層は、焼土ブロックを多量含む暗赤褐色土。第4層は、ロームブロック・ローム粒を中量含む暗褐色土。第5層は、焼土粒・炭化物を多量含む黒褐色土。第6層は暗赤褐色焼土である。第3層が竈天井部で、第6層が火床部である。

遺物 本跡から、土師器片8点が出土している。第83図1の甕と2~4の坏は、竈東側床面から出土している。

所見 本跡の時期は、第83図2~4の坏が床面から出土していることから6世紀後葉と考えられる。



第82図 第37号住居跡



第83図 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	甕 土師器	A[14.4] B 13.4	体部は卵形で、体部中位に最大径がある。頸部は外反し、口縁部は外側に強く開く。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒にぶい赤褐色普通	P186 25% 床面
2	坏 土師器	A 12.0 B 4.0	丸底。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリアにぶい橙色普通	P186 100% 床面
3	坏 土師器	A 13.0 B 5.0	丸底。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・雲母・スコリアにぶい黄橙色普通	P188 80% 床面



図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	坏 土師器	A 13.8 B 4.6	丸底。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へラ削り。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石・砂粒 明赤褐色 普通	P187 100% 床面

第39号住居跡（第84図）

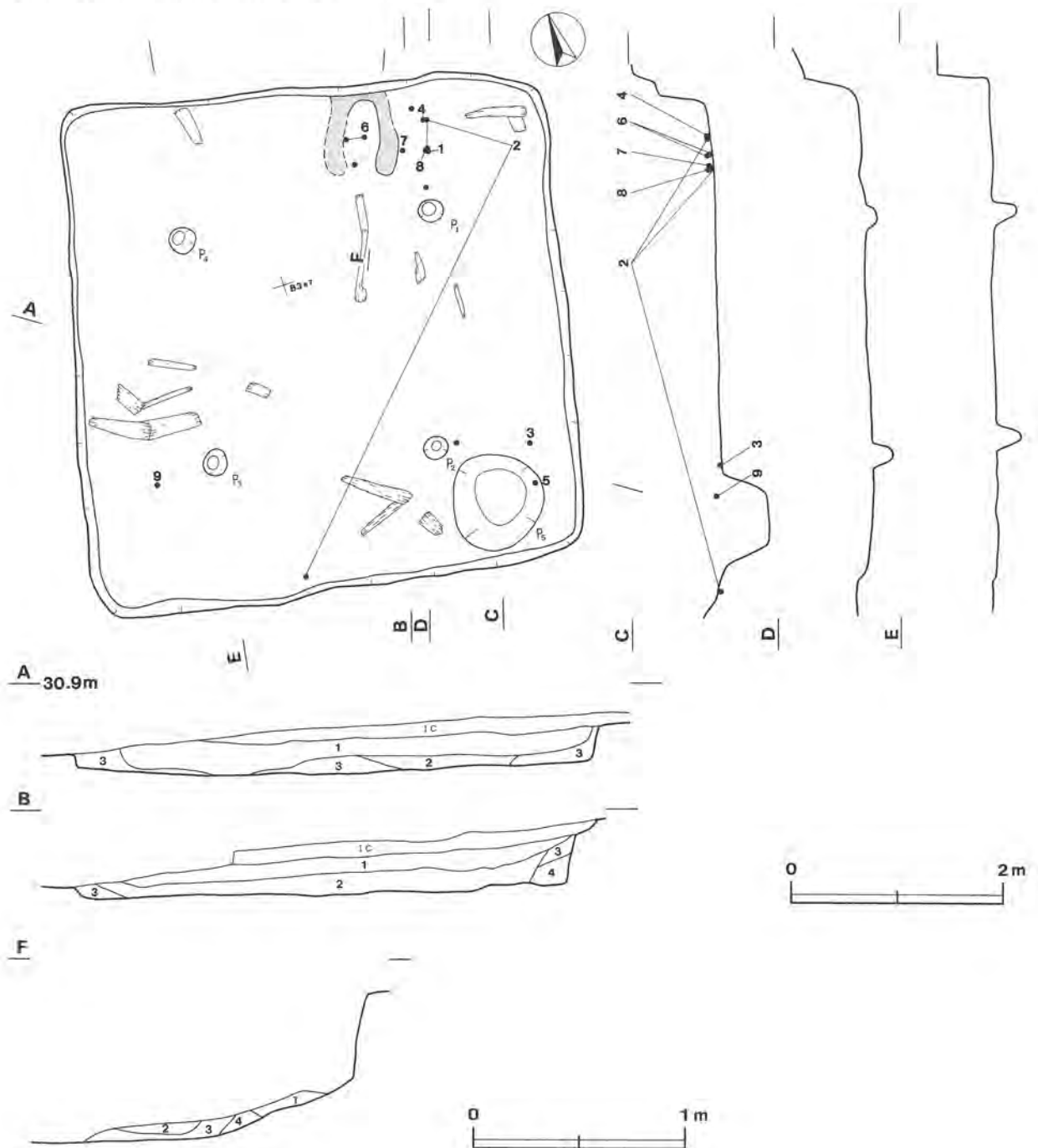
位置 調査区の西部，B3e<sub>6</sub>～B3e<sub>7</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。

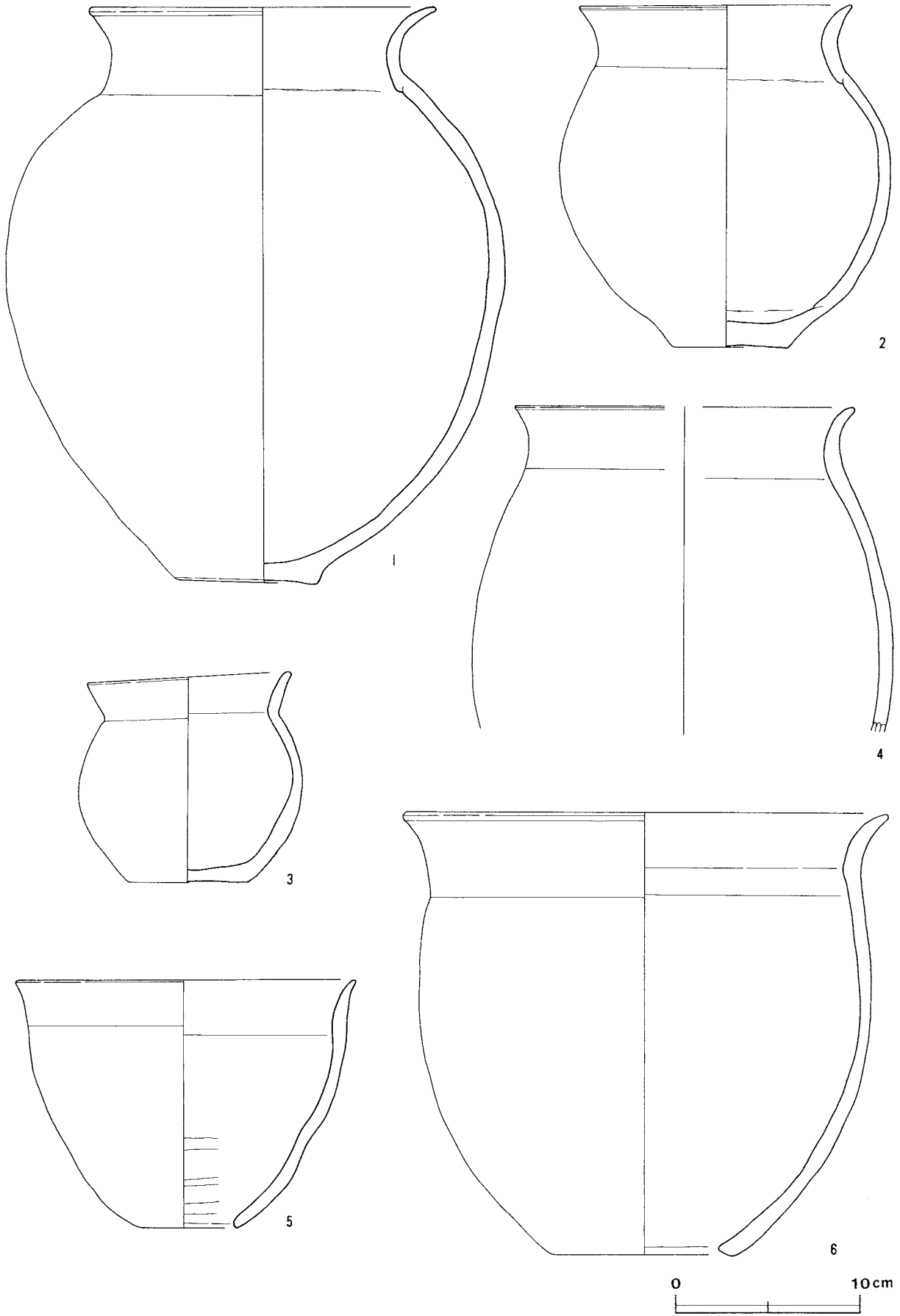
規模と平面形 長軸4.82 m・短軸4.72 mの隅丸方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は最大で44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第84図 第39号住居跡



第85図 第39号住居跡出土遺物(1)

床 混礫粘土層である第Ⅱ層を床面にしている。平坦で、踏み縮まりがある。

ピット 4ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径22~26cmの楕円形で、深さ15~24cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、支柱穴である。

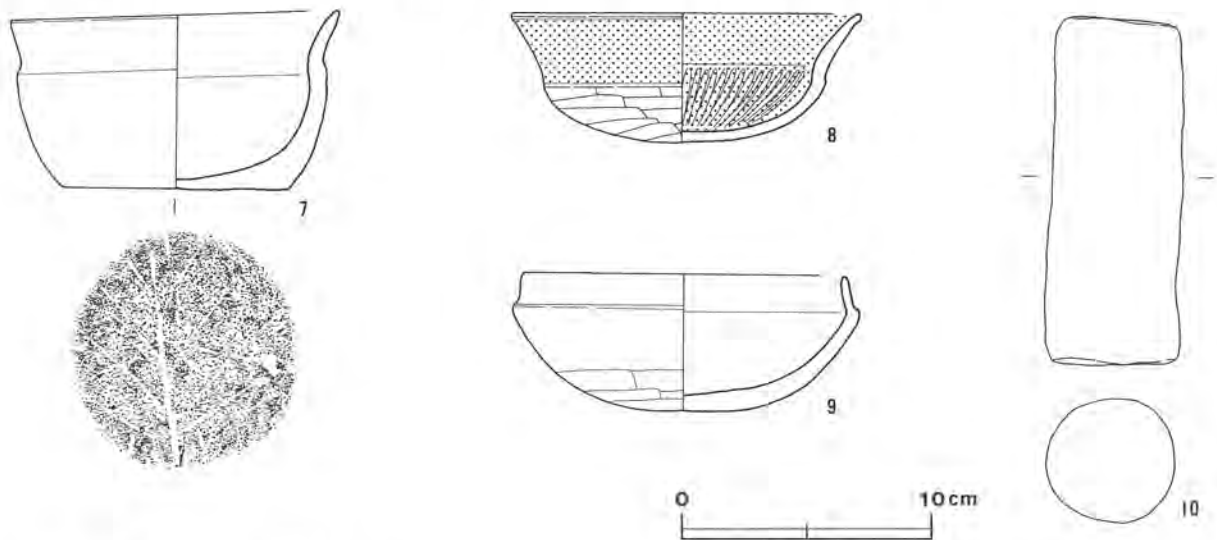
貯蔵穴 1ヶ所（P<sub>5</sub>）。南東コーナー際に付設する。径87~92cmの楕円形で、深さ40cmである。

竈 北壁に付設し、煙道は壁外にはなく袖部の一部と竈底面だけが残存している。袖部は、礫粒を多量に含む灰白色粘土で主に造られている。火床面は床面と一致し、煙道は緩やかに立ち上がり壁面に至る。覆土は4層からなる。第1層は、炭化物・礫粒を少量含む暗褐色土。第2層は、焼土ブロック・炭化物を多量含む暗赤褐色土。第3層は、焼土ブロック・炭化物を多量含む極赤暗褐色土。第4層は、焼土ブロックを多量含むにぶい赤褐色土である。

覆土 4層からなる。第1層と第2層は、ロームブロックと褐色土の混合土。第3層は、ロームブロック・炭化物を多量に含む暗褐色土。第4層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む褐色土である。床面上には、多量の炭化材・焼土が放射状に堆積している。

遺物 本跡から、弥生土器片22点、土師器片375点、土製支脚（第86図10）が出土している。第85図1~4の甕、6の甕、第86図7の鉢、8・9の坏は、床面から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は、床面上から多量の炭化材・焼土が堆積している状況から、焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、第86図8・9の坏が床面から出土していることから6世紀前葉と考えられる。



第86図 第39号住居跡出土遺物(2)

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	甕 土師器	A 19.0 B 31.5 C 7.8	平底。体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部は外反し、口縁部は強く開く。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P195 80% 床面
2	甕 土師器	A 14.9 B 18.7 C 6.2	平底。体部は球形で、体部上位に最大径がある。頸部は外反し、口縁部は開く。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 赤褐色 普通	P196 90% 床面
3	甕 土師器	A 11.1 B 11.5 C 6.6	平底。体部は球形で、体部中位に最大径がある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P197 95% 床面
4	甕 土師器	A [18.4] B (17.4)	平底。体部は倒卵形で、体部中位に最大径がある。頸部は外反し、口縁部は開く。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	P198 25% 床面

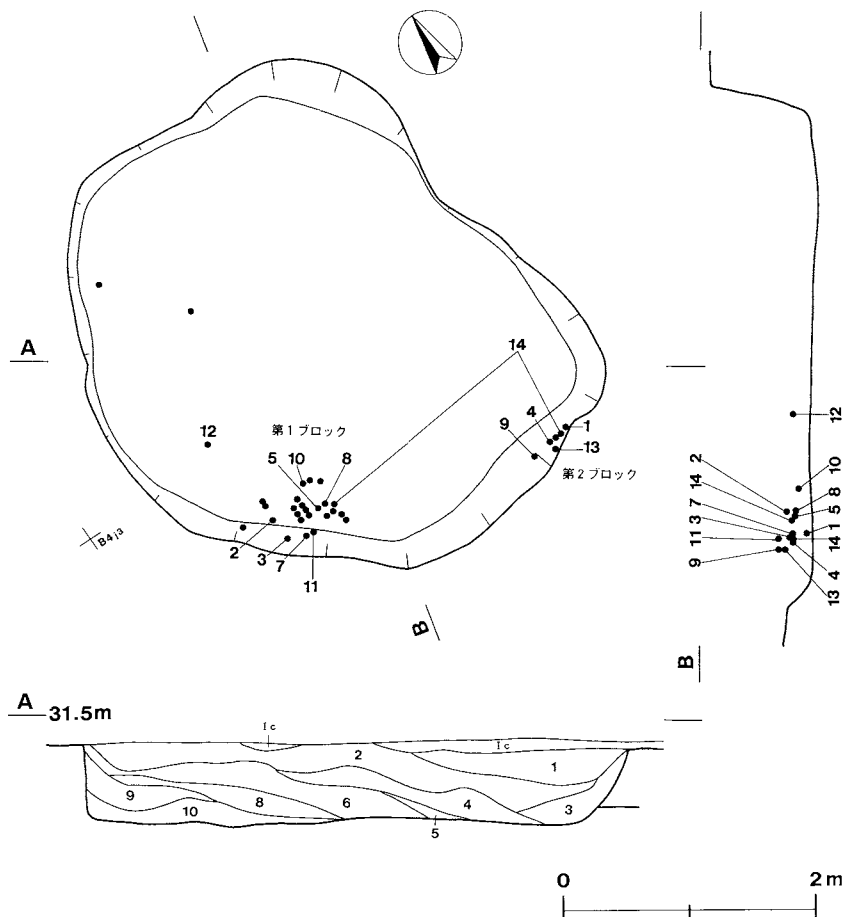
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	甗 土師器	A 18.6 B 13.5 C 5.3	無底式。体部は外傾して立ち上がりそのまま口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石にぶい褐色普通	P201 50% P。覆土
6	甗 土師器	A 26.6 B 24.0 C 10.0	無底式。体部は倒卵形で、体部上位に最大径がある。頸部は外反し、口縁部は開く。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P200 50% 床面
第86図 7	鉢 土師器	A 13.0 B 7.2 C 9.2	平底。体部は直線的に内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石にぶい褐色 100%	P194 100% 床面
8	坏 土師器	A 14.0 B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ後、放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部・内面赤彩。	石英・長石・スコリア 橙色 良好	P190 100% 床面
9	坏 土師器	A 13.0 B 5.5	体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 明褐色 普通	P191 95% 床面

## (2) 竪穴遺構

第32号住居跡・第15号住居跡として調査した遺構については、床面に踏み縮まりがないこと、柱穴と考えられるピットがないことから、居住を目的とした竪穴住居跡と区別できる。そのため、第32号住居跡を第1号竪穴遺構、第15号住居跡を第2号竪穴遺構と改称し、確認した遺構と遺物について記載する。

### 第1号竪穴遺構（第87図）

位置 調査区の中央部，B4i<sub>3</sub>～B4j<sub>3</sub>区。



第87図 第1号竪穴遺構

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。遺物包含層である第II a層上面から掘り込んでいる。

重複関係 本跡は、第29号住居跡と重複している。本跡は第29号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.10m・短軸3.40mの不整楕円形である。

長軸方向 N-12°-W

壁 壁高は最大で80cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み締まりはない。

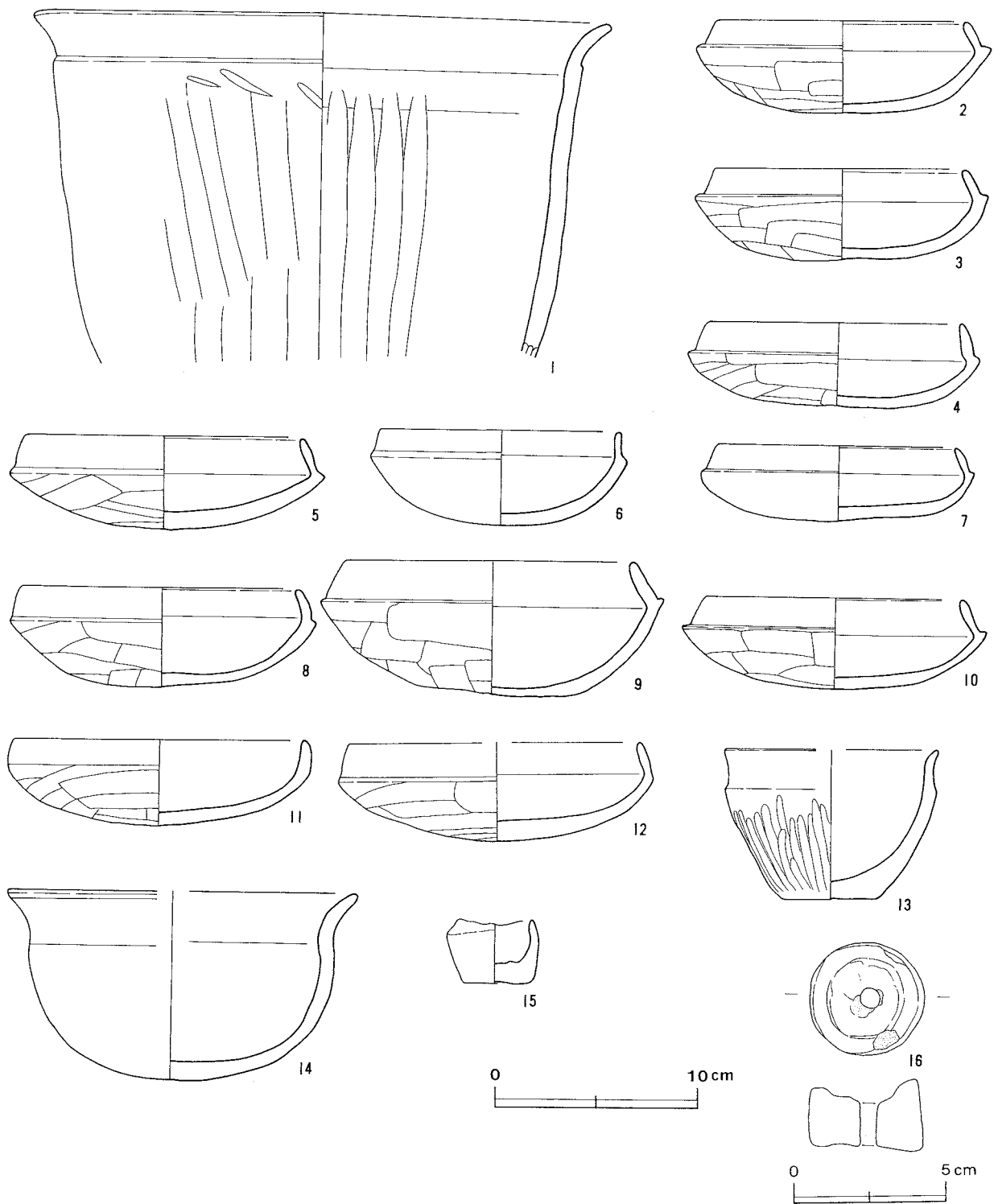
覆土 11層からなり、北西側から流れ込むように堆積している。第1層と第2層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第3層は、ローム粒・礫粒を少量、炭化物を微量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・礫粒を少量、炭化物を微量含む黒褐色土。第5層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第6層は、ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む黒褐色土。第7層は、礫粒を多量、ロームブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土。第8層は、ロームブロックと褐色土の混合土。第9層は、ロームブロック・礫粒を少量含む暗褐色土。第10層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む暗褐色土。第11層は、ローム粒を多量含むにぶい褐色土である。第1・2・5・8層の混合土は、一時期に堆積した層である。

遺物 本跡から、弥生土器片2点、土師器片652点、紡錘車1点(第88図16)、土師質土器片1点、陶器片1点が出土している。遺物は、2ヶ所に集中しており、西側を第1ブロック、東側を第2ブロックとした。第1ブロックからは、第88図2・3・5～8・10・11の坏が出土している。第2ブロックからは、第88図1の甑、4・9の坏、13の鉢が出土している。14の埴は、第1・2ブロックから出土しており、接合している。弥生土器片と土師質土器片と陶器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

第1号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	甑 土師器	A 28.6 B (17.4)	体部は直線的に外傾して上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤褐色 良好	P252 75% 第4層 Si-29の甑と 同一個体
2	坏 土師器	A 12.6 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P225 100% 第6層
3	坏 土師器	A 12.6 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P226 100% 第6層
4	坏 土師器	A 12.9 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	P227 100% 第4層
5	坏 土師器	A 13.8 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P228 100% 第6層
6	坏 土師器	A 12.0 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P230 100% 表土
7	坏 土師器	A 11.8 B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P233 100% 第6層
8	坏 土師器	A 13.8 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口唇部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P235 100% 第6層
9	坏 土師器	A 14.5 B 6.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P234 100% 第4層



第88図 第1号竪穴遺構出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	坏土器	A 13.0 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P237 95% 第6層
11	坏土器	A 14.3 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P229 100% 第6層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
12	坏土師器	A[14.5] B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 242 80% 表土
13	鉢土師器	A 10.6 B 7.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 赤褐色 普通	P 248 75% 第4層
14	碗土師器	A[17.3] B 9.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P 249 60% 第4・6層
15	ミチア器 土師器	A 3.7 B 3.4	平底。口縁部はわずかに内彎する。	体部内・外面ナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P 251 100% 表土

### 第2号竪穴遺構（第89図）

位置 調査区の東部，D5b<sub>5</sub>～D5c<sub>3</sub>区。

規模と平面形 長軸5.54 m・短軸4.28 mの隅丸長方形。

長軸方向 N-37°-W

壁 壁高は最大で60cmで、傾斜して立ち上がる。一部オーバーハングしているところがある。

床 ほぼ平坦であるが、踏み締めりはない。



第89図 第2号竪穴遺構

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒・炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・灰白色粘土粒を中量、炭化物・礫粒を少量含む黒褐色土。第3層は、ローム粒・灰白色粘土粒を多量、炭化物・礫粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・灰白色粘土粒・炭化物を多量、礫粒を少量含む暗褐色土である。

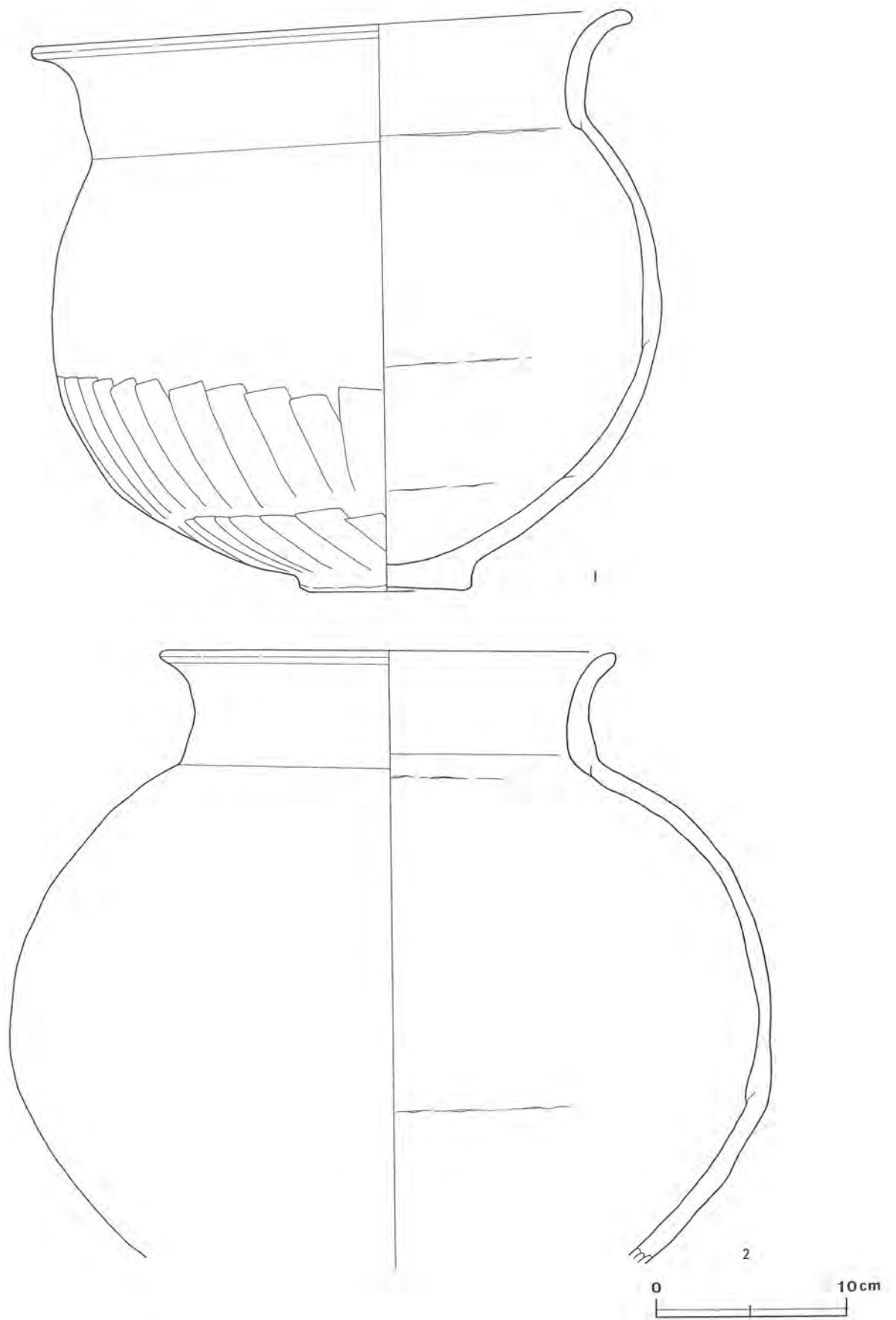
遺物 本跡から、弥生土器片90点、土師器片1916片が出土している。第90図1の甕は第4層上面から逆位に出土している。第95図27～30・第96図47の坏は、両端を2点正位に重ねて4つを連ねた状態で第4層上面から出土している。第96図46の置竈や甕や坏などは、大型の破片を投棄した状態で主に第2層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は、第90図1の甕と第95図27～30・47の坏の出土状態から祭祀行為が第4層堆積時に行われたことが考えられる。本跡が機能していた時期は、出土遺物から6世紀初頭と考えられる。

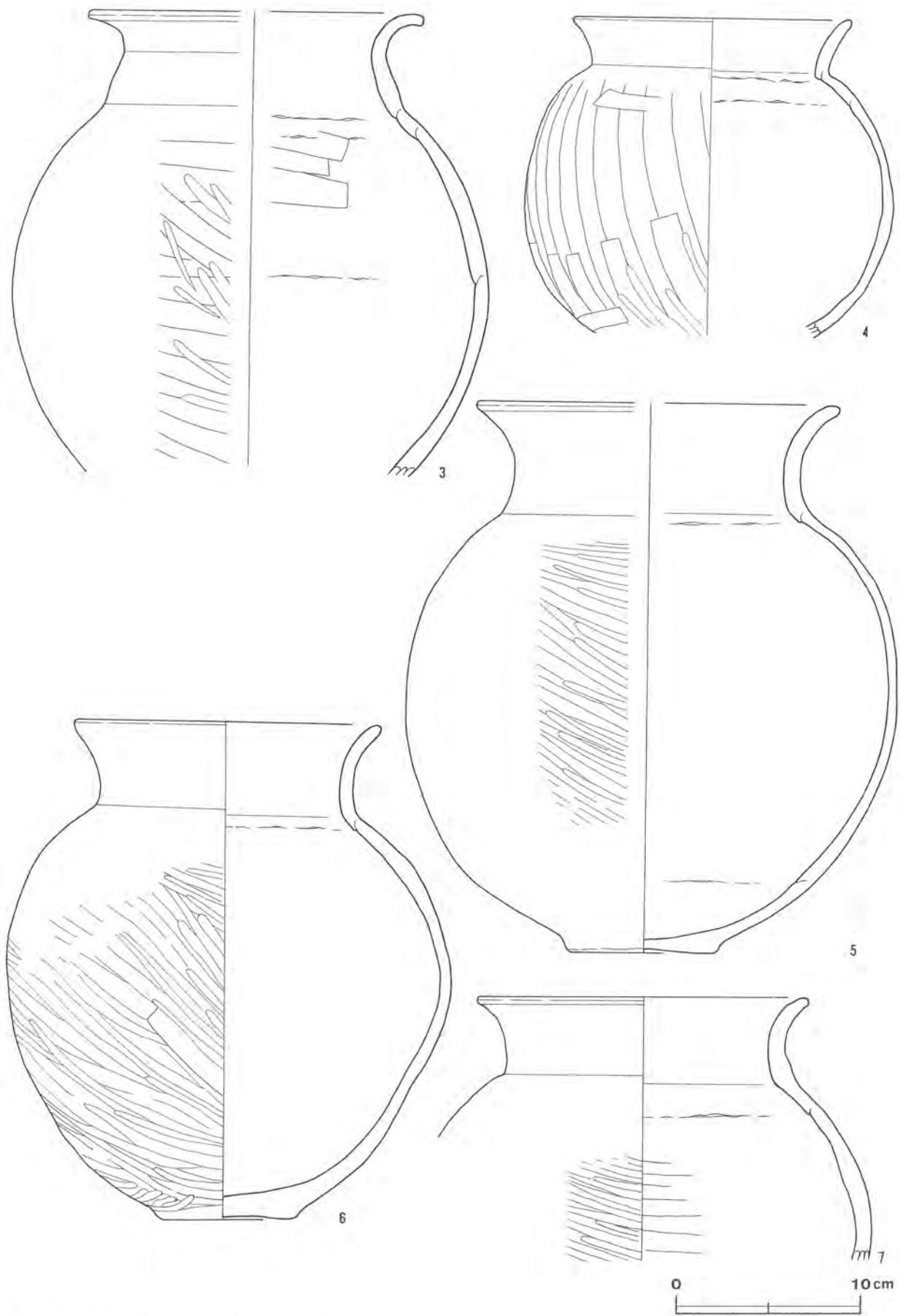
第2号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	甕 土師器	A 31.8 B 31.3 C 9.3	平底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ	石英・長石・砂粒 橙色 普通	P307 95% 第4層上面
2	甕 土師器	A 24.2 B (33.0)	体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は短く外傾する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石・スコリア 明褐色 普通	P308 75% 覆土
第91図 3	甕 土師器	A [18.4] B (25.4)	体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部は内傾し、口縁部は強く外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P313 40% 覆土
4	甕 土師器	A 15.0 B (17.4)	体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 赤褐色 良好	P319 90% 覆土
5	甕 土師器	A [19.6] B 30.2 C 8.0	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P314 60% 第4層
6	甕 土師器	A 16.6 B 27.5 C 7.6	平底。体部は倒卵形で体部上位に最大径がある。頸部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。内面ヘラナデ。頸部内・外面横ナデ。	石英・長石 茶褐色 良好	P317 60% 第4層
7	甕 土師器	A 17.9 B (14.4)	口縁部から体部上半部破片。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P315 30% 第4層上面
第92図 8	甕 土師器	A (19.8) B 32.8 C 8.5	平底。底部は突出する。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石 明赤褐色 普通	P309 90% 覆土
9	甕 土師器	A 28.6 B 30.9 C 8.0	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部は外反し、口縁部に至る。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P310 95% 覆土
10	甕 土師器	A 14.1 B 13.5 C 7.2	平底。体部上半部が直線的で、最大径が体部上位にある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P323 95% 覆土
11	甕 土師器	A 10.9 B 14.5 C 5.0	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P324 100% 覆土
12	甕 土師器	A 15.3 B 13.6 C 8.4	平底。底部は突出する。体部はつぶれた倒卵形である。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部に至る。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄色 普通	P325 100% 覆土
13	甕 土師器	A 13.7 B 12.3 C 8.2	平底。底部は突出する。体部はつぶれた倒卵形である。頸部は直立し、そのまま口縁部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 暗褐色 普通	P298 75% 覆土
第93図 14	甕 土師器	A [19.2] B 32.0 C 9.2	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P311 80% 第4層

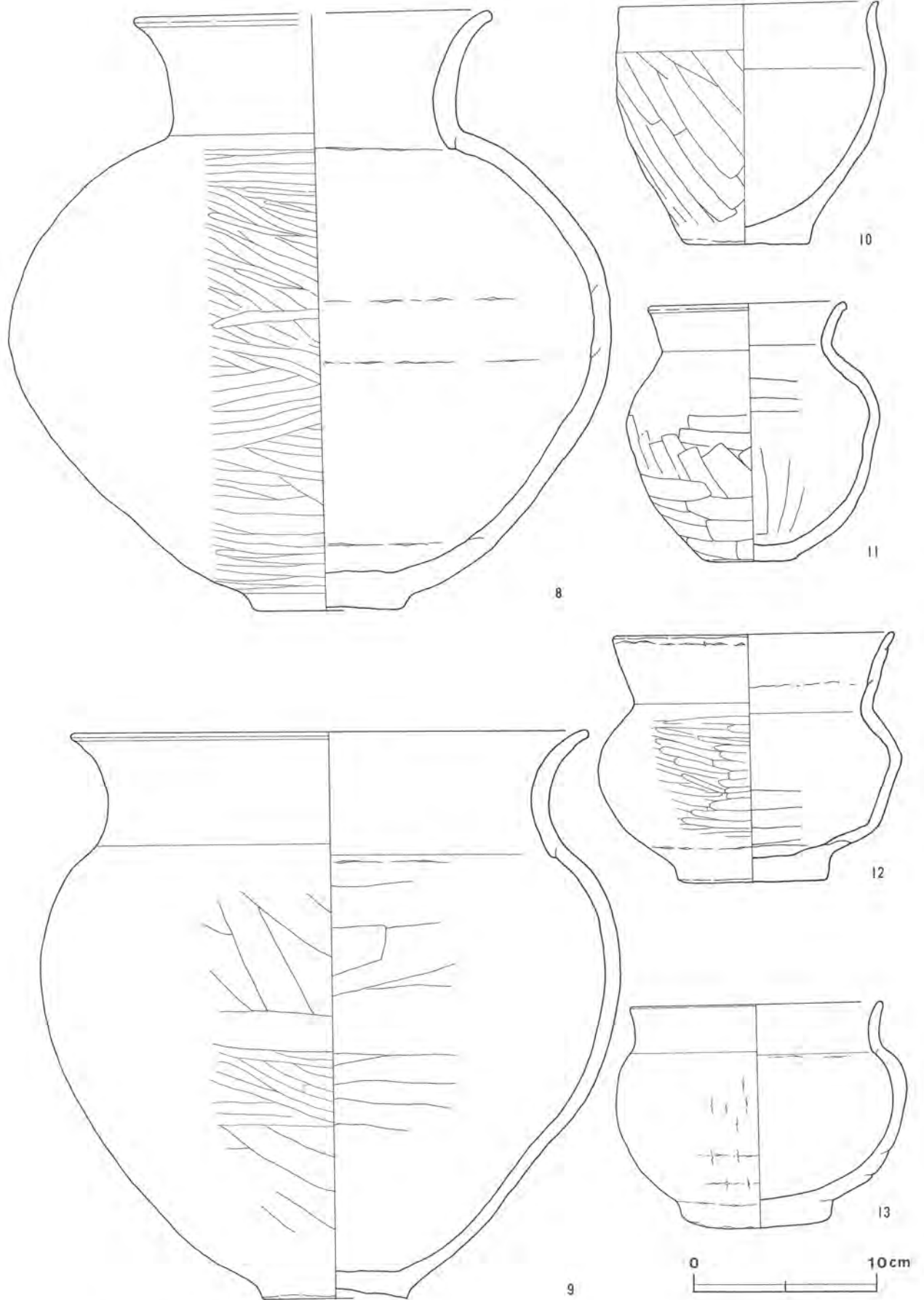




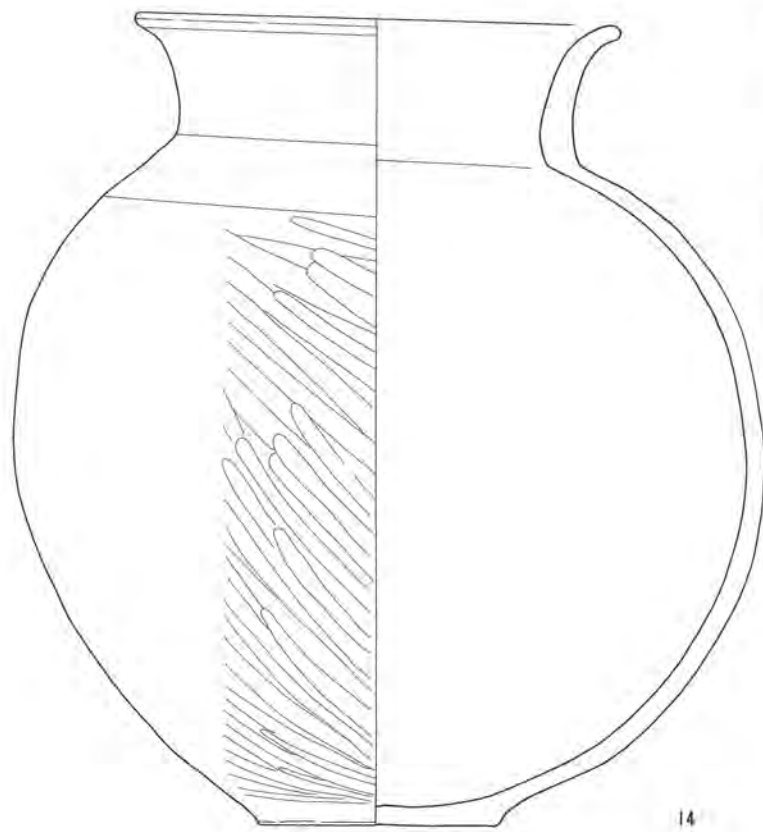
第90図 第2号竖穴遺構出土遺物(1)



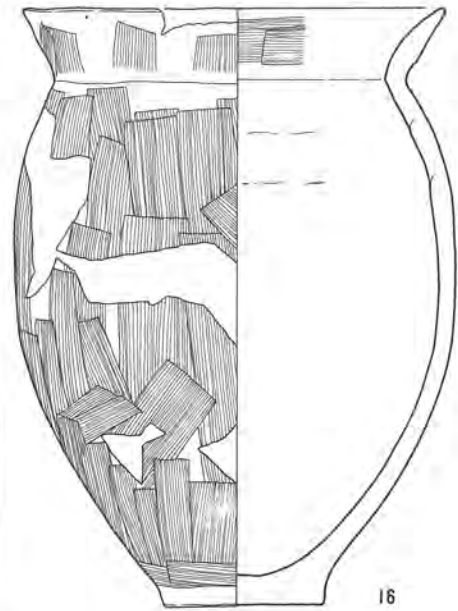
第91図 第2号竪穴遺構出土遺物(2)



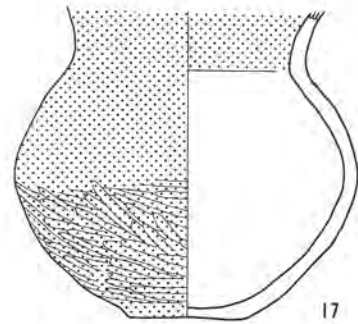
第92図 第2号竖穴遺構出土遺物(3)



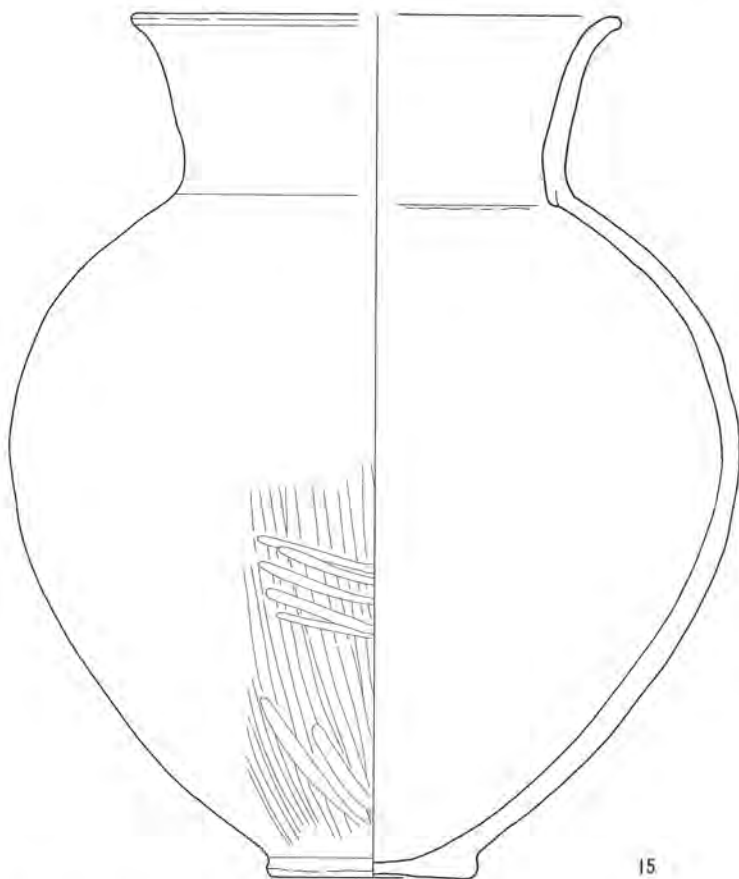
14



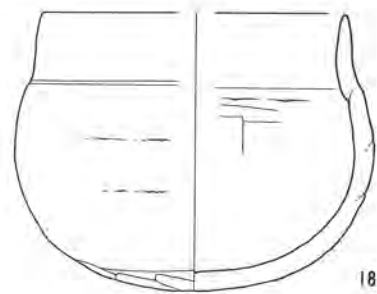
16



17



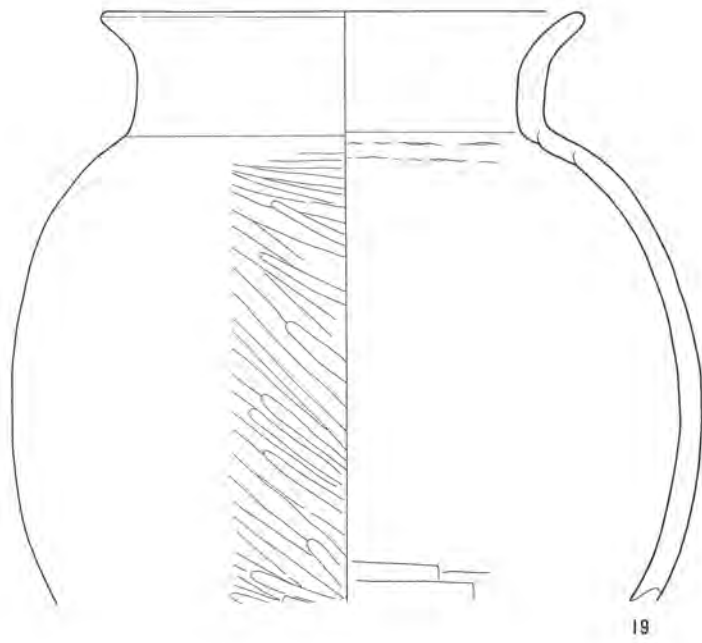
15



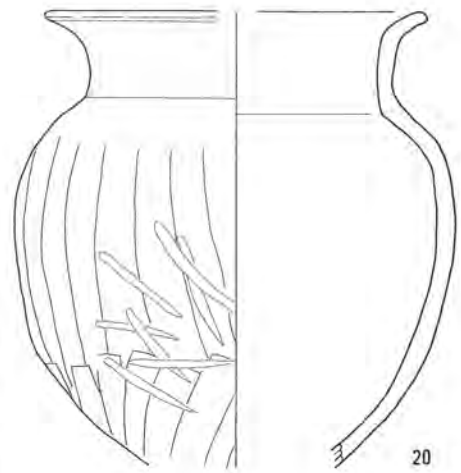
18



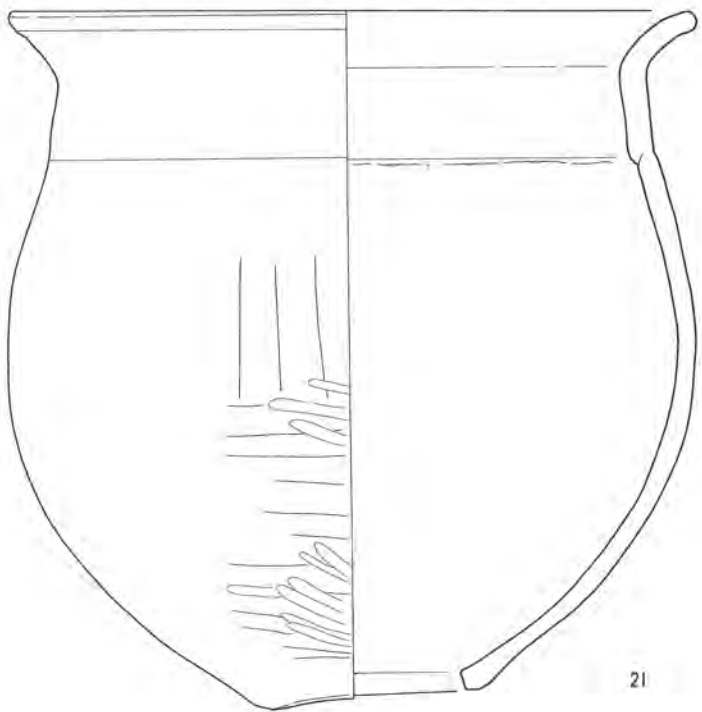
第93図 第2号竖穴遺構出土遺物(4)



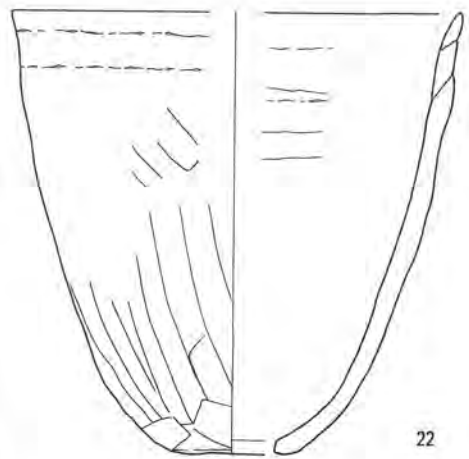
19



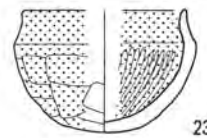
20



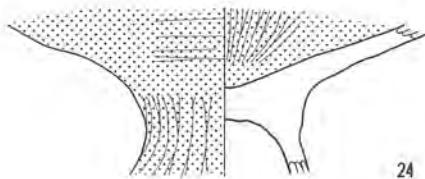
21



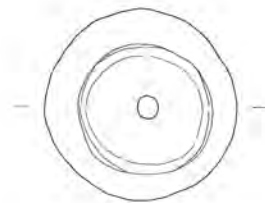
22



23



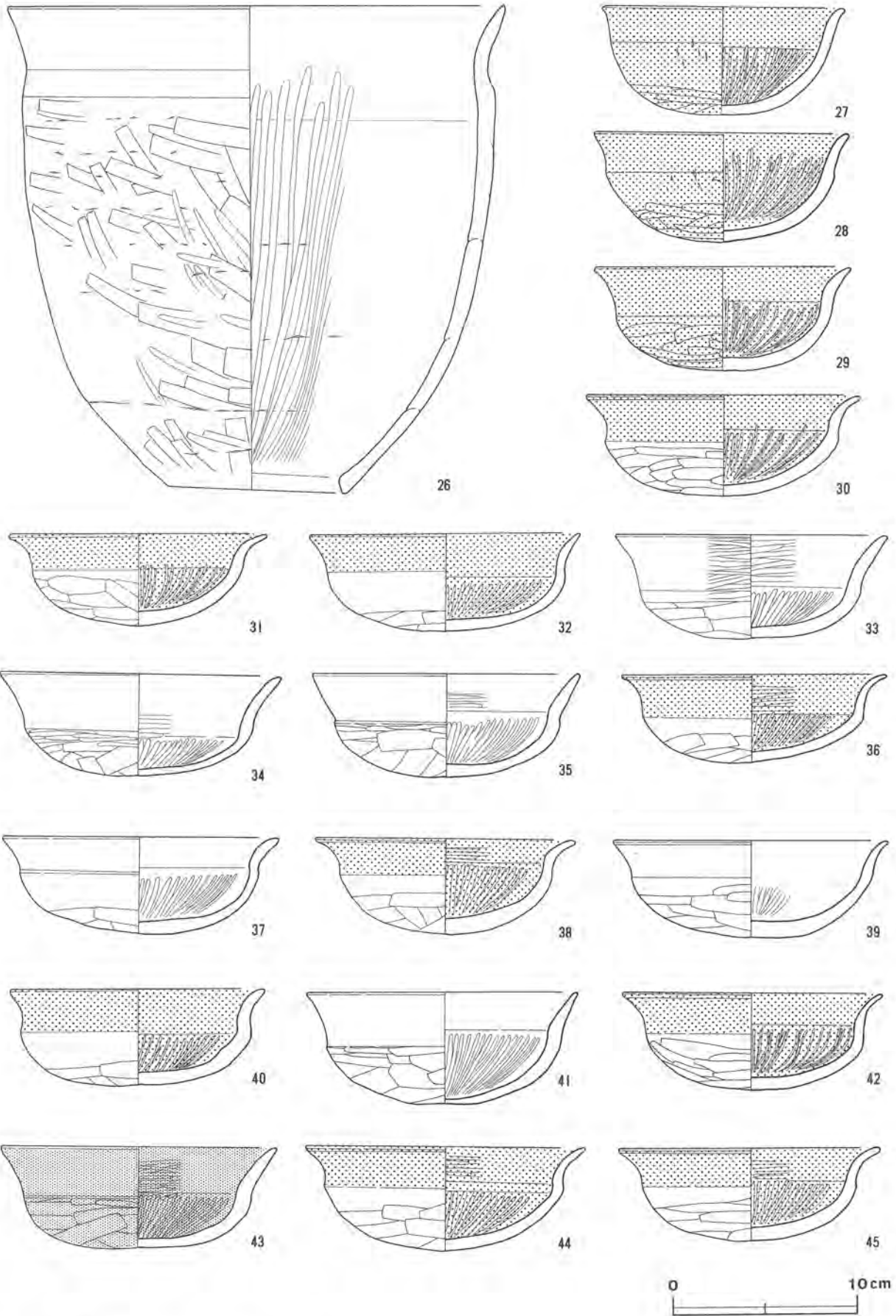
24



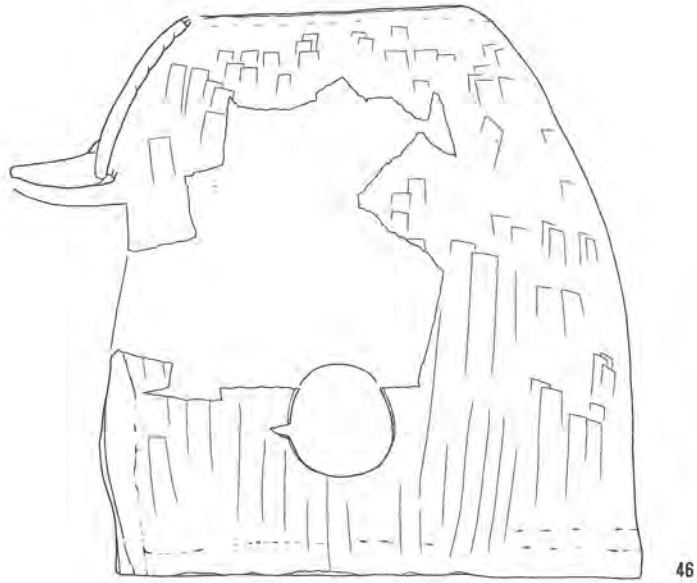
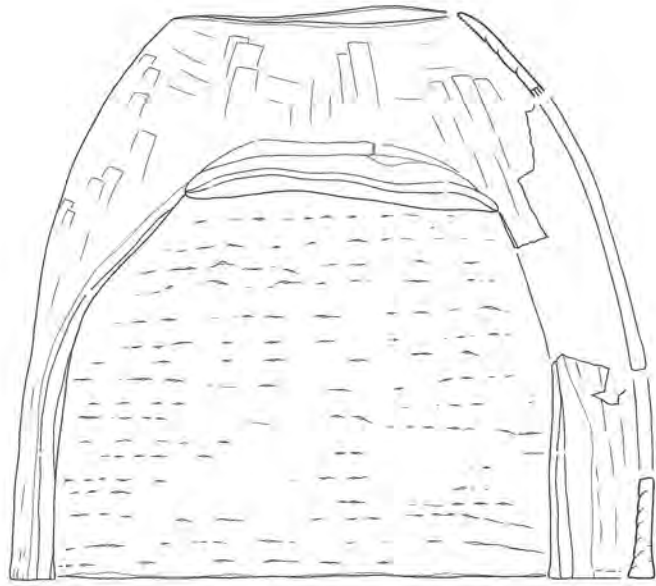
25



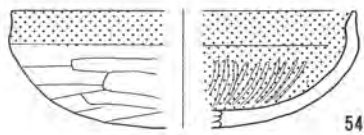
第94図 第2号竖穴遺構出土遺物(5)



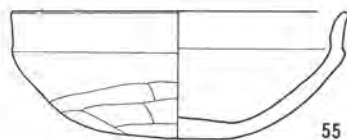
第95図 第2号竖穴遺構出土遺物(6)



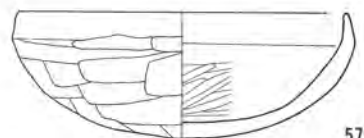
0 20 cm



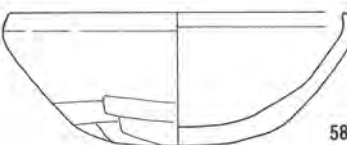
54



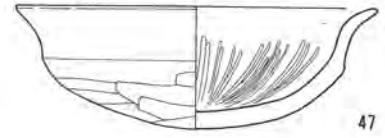
55



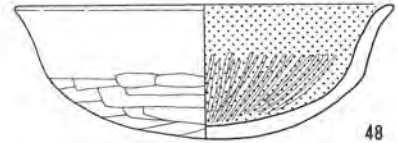
57



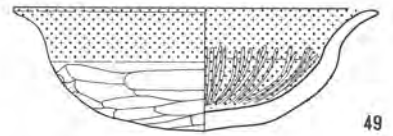
58



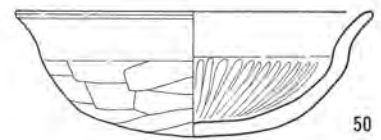
47



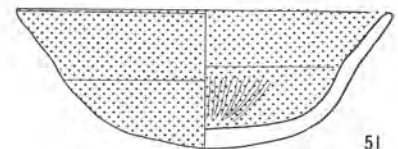
48



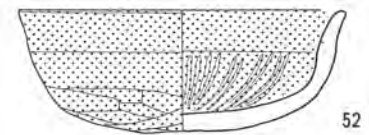
49



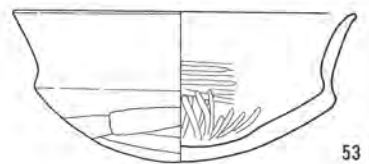
50



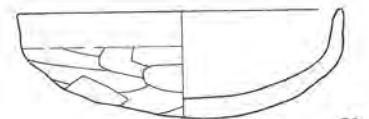
51



52



53



56



59

0 10 cm

第96図 第2号竪穴遺構出土遺物(7)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
15	甕 土師器	A[19.5] B 34.7 C 8.4	平底。底部は突出する。体部は倒卵形である。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P312 50% 覆土
16	甕 土師器	A 16.8 B 22.8 C 6.4	平底。体部は倒卵形で、最大径が体部上位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ハケ目。体部内面ナデ。口縁部内・外面ハケ目。	石英・長石 灰黄褐色 普通	P321 70% 覆土
17	甕 土師器	B[12.5] C 4.6	口縁部欠損。平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外傾する。	体部外面磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。内面口縁部赤彩。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P326 90% 覆土
18	短頸壺 土師器	A[12.3] B 11.1	丸底。体部は球形で、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	底面ヘラ削り。体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 赤褐色 普通	P299 40% 覆土
第94図 19	甕 土師器	A 19.0 B(24.4)	体部下半欠損。体部は球形で、最大径は体部上位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する。	体部外面磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P316 40% 覆土
20	甕 土師器	A[15.2] B(18.3)	底部欠損。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P320 85% 覆土
21	甕 土師器	A 27.4 B 28.2 C 8.3	無底式。体部は球形で、頸部は直立する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P327 80% 第4層
22	甕 土師器	A[17.9] B 17.6 C 5.0	無底式。体部は外傾して立ち上がりそのまま口縁部に至る。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P329 60% 覆土
23	碗 土師器	A[ 6.6] B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	石英 赤褐色 普通	P301 45% 覆土
24	高坏 土師器	D 6.2	坏体部下半から脚部の破片。脚部は短い円錐形で、「ハ」の字状に広がる。	脚部外面ヘラ削り。内面放射状の磨き。内・外面赤彩。	石英・長石 赤褐色 良好	P302 50% 覆土
第95図 26	甕 土師器	A 27.2 B 26.3 C 9.8	無底式。体部上半部が直線的で、最大径は体部上位にある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面磨き。口縁部横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	P328 90% 覆土
27	坏 土師器	A 13.2 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面下半ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	雲母・礫粒 赤褐色 良好	P253 85% 第4層上面
28	坏 土師器	A 13.9 B 6.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面下半ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。内・外面赤彩。	雲母・礫粒 明赤褐色 良好	P254 100% 第4層上面
29	坏 土師器	A 14.0 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。内・外面赤彩。	雲母・礫粒 明赤褐色 良好	P257 100% 第4層上面
30	坏 土師器	A 15.6 B 5.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・礫粒 橙色 普通	P256 100% 第4層上面
31	坏 土師器	A 14.0 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	礫粒 橙色 普通	P260 100% 覆土
32	坏 土師器	A 14.8 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	礫粒・スコリア 橙色 普通	P265 100% 覆土
33	坏 土師器	A 14.8 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面磨き。口縁部内・外面一部黒色処理。	礫粒・雲母 赤褐色 良好	P274 90% 覆土
34	坏 土師器	A 15.4 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面磨き。口縁部内・外面一部黒色処理。	礫粒・雲母 赤褐色 良好	P261 100% 覆土
35	坏 土師器	A 14.6 B 5.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内外面一部黒色処理。	礫粒・雲母 赤褐色普通	P266 95% 覆土



図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
36	坏土師器	A 14.5 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	礫粒・スコリアにぶい赤褐色普通	P277 70% 覆土
37	坏土師器	A 15.1 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒明褐色普通	P262 100% 覆土
38	坏土師器	A 14.3 B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・礫粒・スコリア明褐色普通	P267 70% 覆土
39	坏土師器	A 15.0 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒明赤褐色普通	P278 70% 覆土
40	坏土師器	A 14.0 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・礫粒赤褐色普通	P263 90% 覆土
41	坏土師器	A 14.9 B 6.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒赤褐色普通	P264 90% 覆土
42	坏土師器	A 14.2 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・礫粒・スコリア橙色普通	P268 70% 覆土
43	坏土師器	A 15.1 B 5.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	雲母・礫粒赤褐色普通	P270 85% 覆土
44	坏土師器	A 15.3 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・礫粒赤褐色普通	P272 70% 覆土
45	坏土師器	A 14.4 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。底面黒斑	礫粒・スコリア明赤褐色普通	P273 70% 第4層
第96図 46	置電土師器	A 23.0 B 46.0 C 52.0	体部は台形で、内彎して立ち上がる。口縁部上位に庇がつく。口縁部の両側に凹窓がある。	体部外面へらナデ。体部内面に輪轆み痕が残る。	石英・長石褐色普通	P330 60% 覆土
47	坏土師器	A 14.6 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒橙色普通	P255 100% 覆土
48	坏土師器	A 15.3 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面赤彩。	雲母・礫粒赤褐色普通	P258 95% 覆土
49	坏土師器	A 14.6 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	礫粒橙色普通	P259 100% 覆土
50	坏土師器	A 14.5 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒明赤褐色普通	P271 85% 覆土
51	坏土師器	A 15.2 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内外面赤彩。	長石・礫粒赤褐色良好	P284 70% 覆土
52	坏土師器	A 13.1 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石赤褐色良好	P286 95% 覆土
53	坏土師器	A 13.1 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア赤褐色良好	P281 95% 覆土
54	坏土師器	A[13.8] B(4.7)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	長石・スコリア赤褐色良好	P288 40% 覆土
55	坏土師器	A 13.5 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア赤褐色良好	P292 85% 覆土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
56	坏土師器	A 13.1 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	石英・スゴリア 赤褐色 良好	P290 85% 覆土
57	坏土師器	A 12.6 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へラ削り。体部内面磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 茶褐色 普通	P293 85% 覆土
58	坏土師器	A 13.6 B 5.3 C 3.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り。体部内面磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 暗褐色 普通	P294 90% 覆土
59	坏土師器	A 10.0 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へラ削り。体部内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒・スコリア 赤褐色 良好	P297 95% 覆土

### (3) 土坑

今回の調査では、古墳時代の土坑20基を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

#### 第8号土坑（第97図）

位置 調査区の西部、B3d<sub>3</sub>区。

重複関係 本跡は、第3号住居跡と重複する。本跡は第3号土坑を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.42m・短軸2.40mの瓢箪形である。

長軸方向 N-4°-E

壁 壁高は最大で40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底 ほぼ平坦であるが、北側は一段深くなる。北側部は、別な土坑の可能性はある。

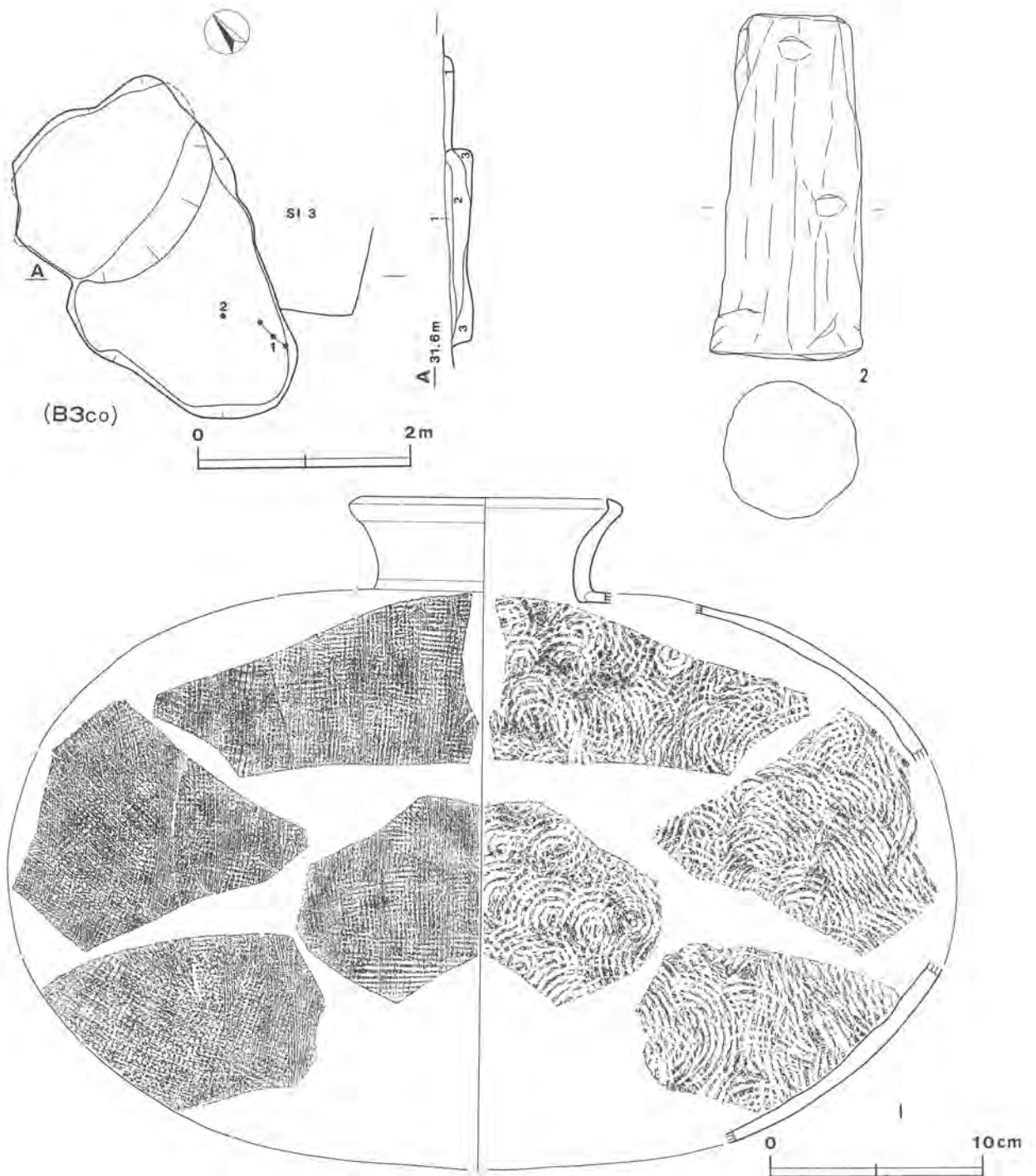
覆土 3層からなる。第1層は、礫粒を中量含む暗褐色土。第2層は、礫粒を中量、ロームブロック・ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロックを中量、礫粒を少量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片9点、土師器片281点、須恵器片2点、土製支脚（第97図2）が出土している。第97図1の須恵器横瓶は、南西壁際第3層から出土しており、第31号住居跡覆土出土破片と接合している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、第97図1の須恵器横瓶が第3層から出土していることから6世紀後葉と考えられる。

#### 第8号土坑遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	横瓶 須恵器	A 13.0 B [32.0]	口頸部と体部破片。体部は横長のつぶれた球形で、頸部は直角に外反する。口縁端部は短く内傾する。	体部外面平行タタキ目後、縦位のカキ目。体部内面同心円状の当て具痕。口頸部内・外面横ナデ。	石英・長石 褐灰色 良好	P337 20% 第3層



第97図 第8号土坑・出土遺物

第19号土坑（第98図）

位置 調査区の西部，B3d区。

重複関係 本跡は，第31号住居跡と重複する。本跡は第31号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 径2.50m～2.74mの楕円形である。

壁 壁高は最大で76cmで，傾斜して立ち上がる。北側の壁には段がある。

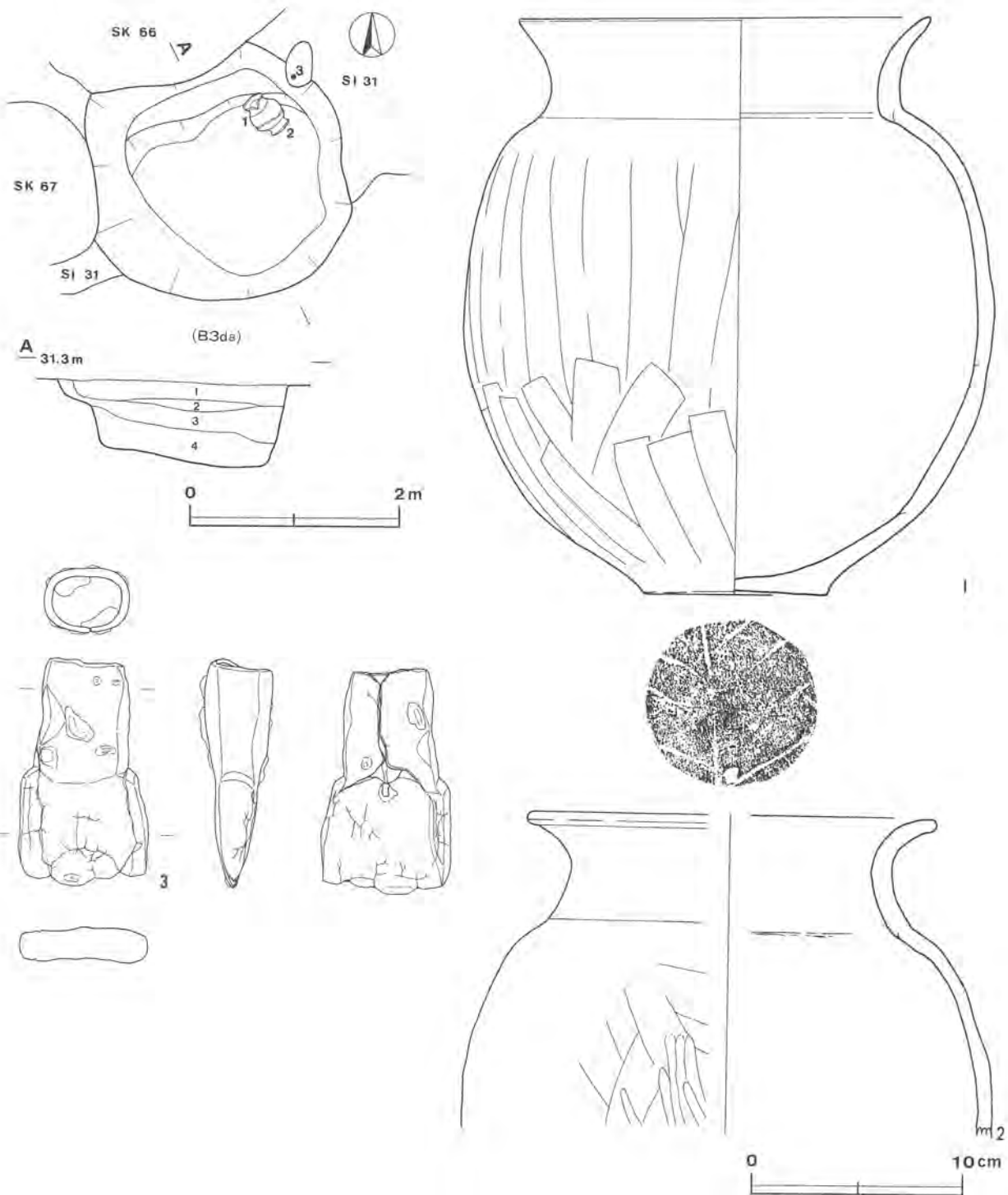
床 鍋底形で，多少の起伏がある。

覆土 4層からなる。第1層は，礫粒を中量含む暗褐色土。第2層は，ロームブロックと暗褐色土の混合土。

第3層は、ロームブロックを多量、礫粒を中量含む暗褐色土。第4層は、ロームブロック・礫粒を少量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片14点、土師器片135点、鉄斧1点（第98図3）が出土している。第98図1・2の甕は、入れ子状に第3層下部から出土している。鉄斧は北東壁際の第3層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第98図 第19号土坑・出土遺物

### 第19号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	甕 土師器	A 19.4 B 28.0 C 8.5	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部外面下部ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。底部木葉痕。	長石・礫粒にぶい褐色普通	P338 90% 第3層
2	甕 土師器	A[19.6] B(15.3)	体部下半欠損。頸部は内傾し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母明赤褐色普通	P339 30% 第3層

### 第20号土坑（第99図）

位置 調査区の東部，D6i区。

重複関係 本跡は、第25号住居跡と重複する。本跡が第25号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.14m・短径1.02mの楕円形。

壁 壁高は最大で24cmで、傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を中量、炭化物を微量含む黒褐色土。第2層は、ローム粒を多量、炭化物・礫粒を微量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、土師器片28点、石製紡錘車（第99図1）が出土している。第99図4の高坏と5・6の坏が、第2層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

### 第20号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 2	甕 土師器	A 28.7 B 29.7 C 10.4	体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒橙色普通	P343 90% 第2層
3	甗 土師器	A 21.0 B 26.9 C 7.8	無底式。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部は直立し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母明赤褐色普通	P344 90% 第2層
4	高坏 土師器	A 13.2 B 4.6	坏体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。脚柱は短い円錐形で、脚部は強く開く。	坏体部・脚部外面磨き。坏体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。脚部内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	石英・礫粒・スコリア赤褐色普通	P342 80% 第2層
5	坏 土師器	A 12.9 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア赤褐色普通	P341 80% 第2層
6	坏 土師器	A 14.4 B 6.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア橙色普通	P340 95% 第2層

### 第22号土坑（第100図）

位置 調査区の中央部，C5f<sub>3</sub>区。

規模と平面形 長径3.68m・短径3.34mの楕円形。

壁 壁高は最大で72cmで、傾斜して立ち上がる。

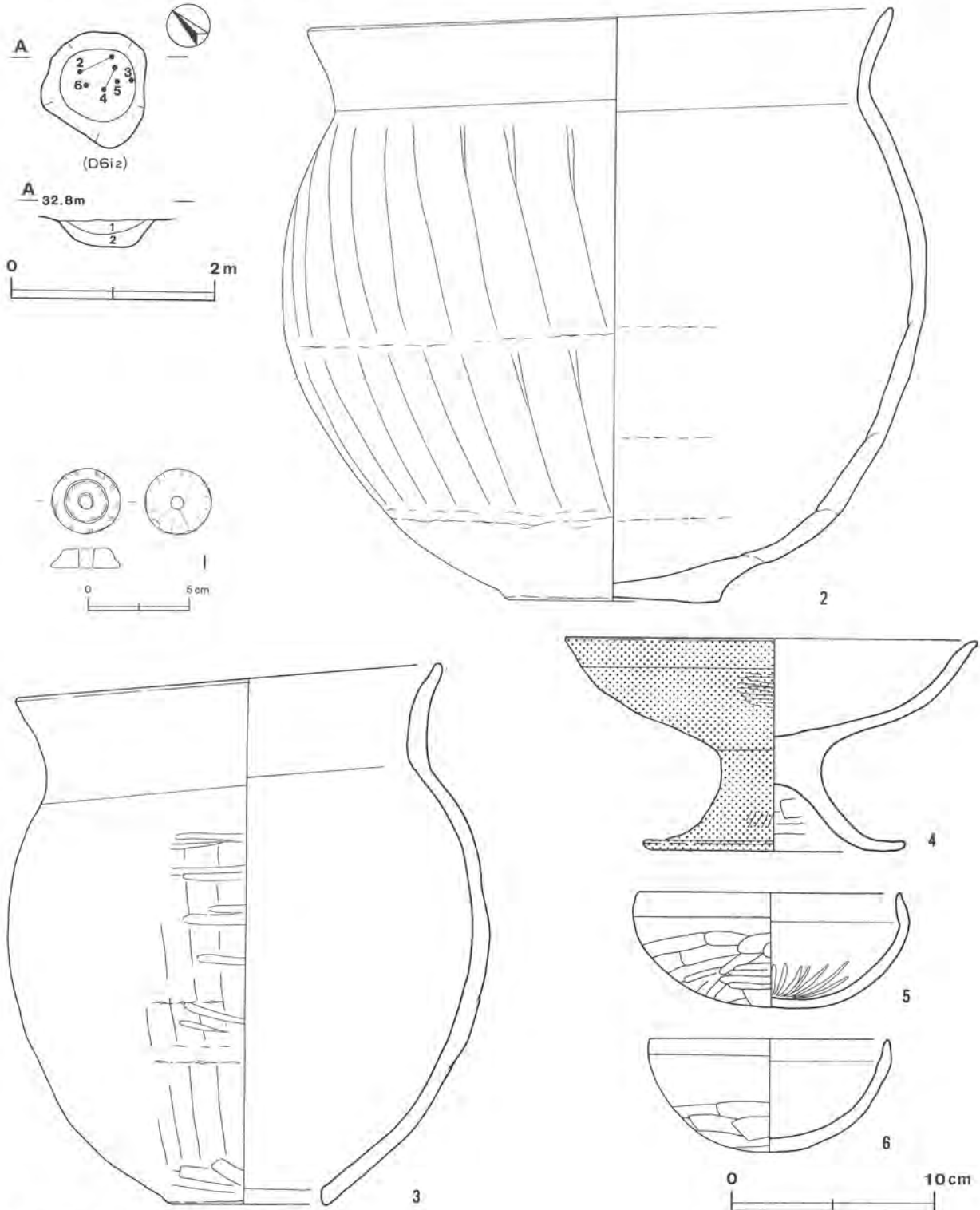
底 平坦。南側に長径95cm・短径88cmの楕円形で、深さ14cmのピットがある。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・焼土粒・炭化

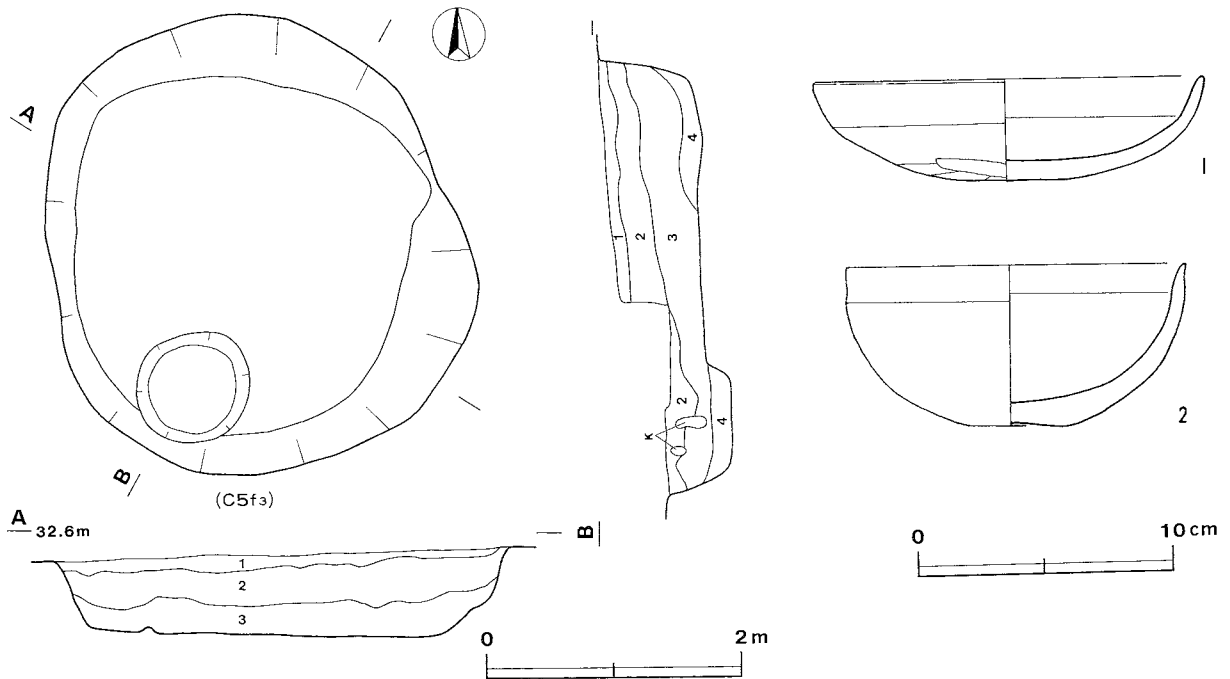
物を微量含む黒褐色土。第3層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を微量含む黒褐色土。第4層は、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片90点、土師器片139点が出土している。第100図1・2の坏は第2層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡は、底面南側にピットがある土坑である。本跡の時期は、本跡に伴う遺物は出土していないが、出土遺物から7世紀前葉と考えられる。



第99図 第20号土坑・出土遺物



第100図 第22号土坑・出土遺物

第22号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	坏 土師器	A 15.7 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外形する。	体部外面下部へラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・礫粒 黒褐色 普通	P 345 100% 第2層
2	坏 土師器	A 13.5 B 6.5 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P 346 60% 第2層

### 第23号土坑（第101図）

位置 調査区の中央部，C5i<sub>4</sub>区。

重複関係 本跡は，第24号土坑と重複している。本跡が第24号土坑を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形 径(1.90)～2.10mの楕円形。

壁 壁高は40cmで，傾斜して立ち上がる。

底 平坦。

覆土 2層からなる。第1層は，ローム粒・礫粒を少量，炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は，灰白色粘土粒・礫粒を中量，炭化物を微量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片1点，土師器片3点が出土している。第101図1の壺と2の坏が第1層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は，出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

### 第24号土坑（第101図）

位置 調査区の中央部，C5i<sub>4</sub>区。

重複関係 本跡は，第23号土坑と重複する。本跡は第23号土坑に掘り込まれているため，本跡が古い。

規模と平面形 本跡は，長径3.60m・短径3.04mの楕円形。

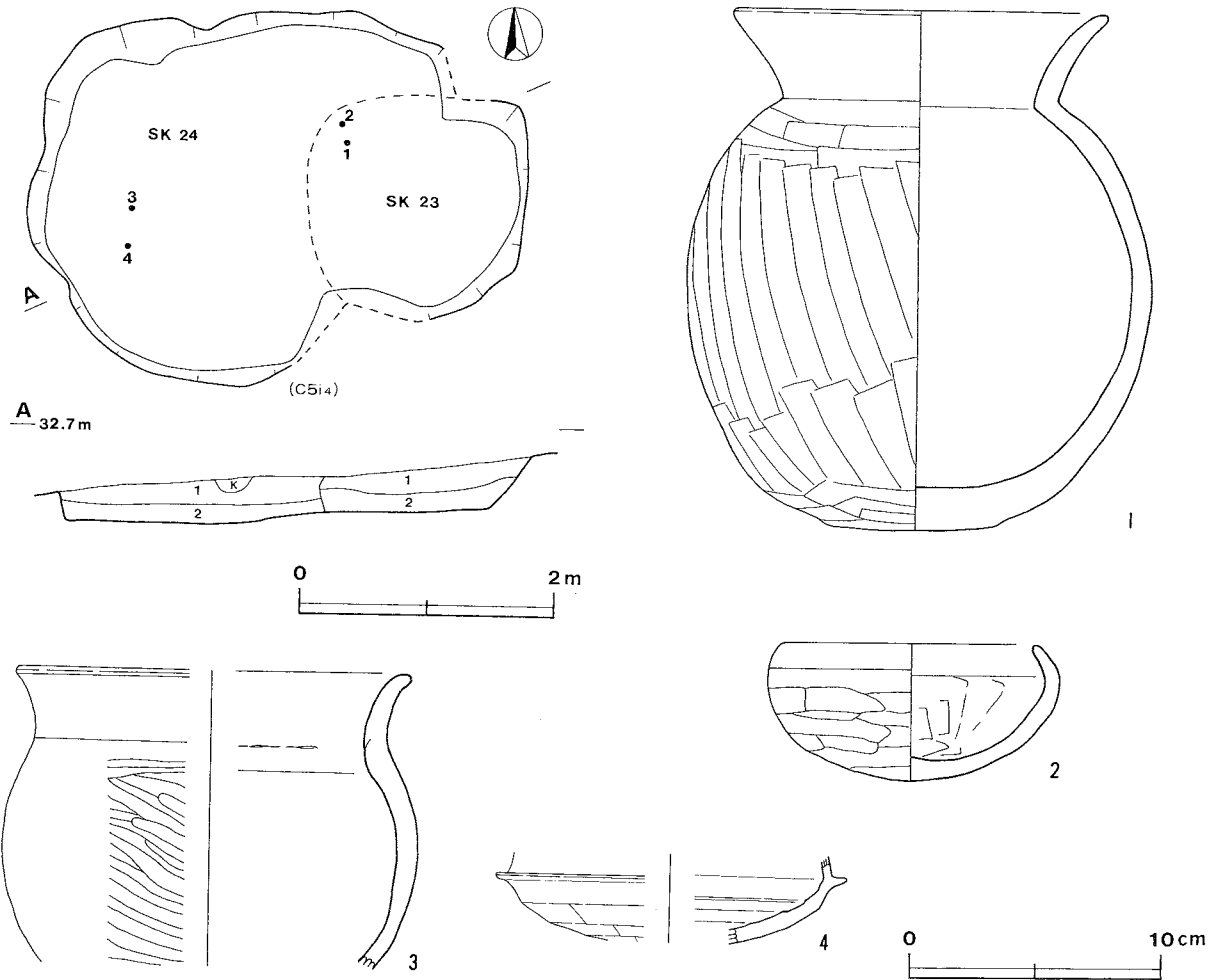
壁 壁高は26cmで、傾斜して立ち上がる。

底 平坦。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を中量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒・礫粒を多量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片8点、土師器片110点、須恵器片1点が出土している。第101図3の甕と4の須恵器坏が第1層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。



第101図 第23・24号土坑・出土遺物

第23・24号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	甕 土師器	A 14.8 B 20.8 C 6.6	扁平な丸底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒にぶい橙色普通	P348 100% 第1層
2	坏 土師器	A 10.0 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒赤褐色普通	P389 55% 第1層
第101図 3	甕 土師器	A [15.9] B (11.9)	口縁部から体部の破片。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部は外反し、口縁部は外傾する。	体部外面磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒・スコリア橙色良好	P353 25% 第1層
4	坏 須恵器	B ( 3.3)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部内・外面横ナデ。体部外面下部ヘラ削り。	長石・礫粒灰色良好	P355 15% 第1層



第30号土坑（第102図）

位置 調査区の中央部，C4c区。

確認状況 遺物包含層調査後の基底面（第Ⅱ層）で確認する。

規模と平面形 長径3.56m・短径3.24mの楕円形。

壁 壁高は最大で94cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で，わずかに起伏がある。

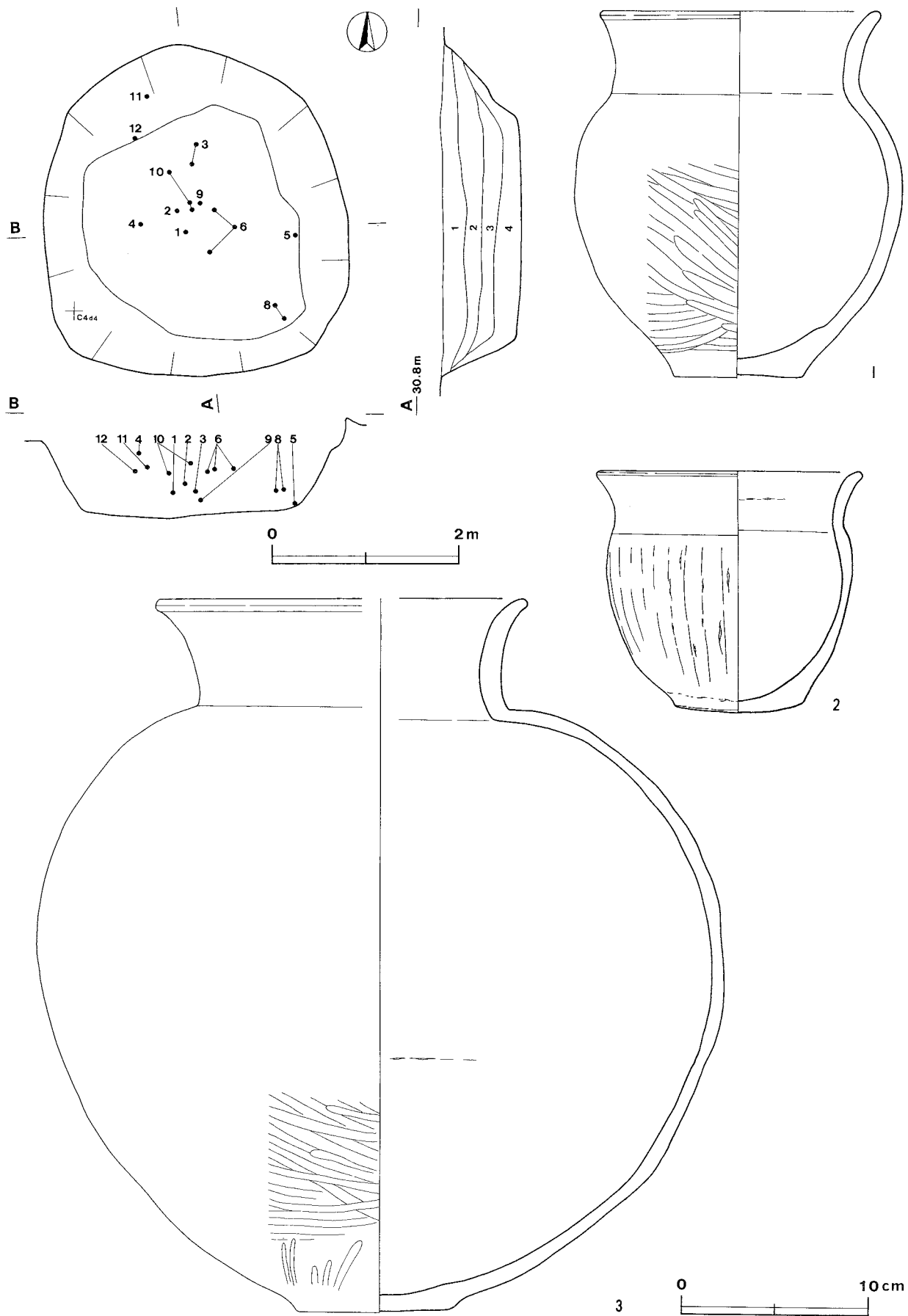
覆土 4層からなる。第1層は，ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む黒褐色土。第2層は，ローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・炭化物を中量含む暗褐色土。第4層は，灰白色ローム粒・礫粒を多量含む褐色土である。

遺物 本跡から，土師器片2835片，須恵器片3点が出土している。第103図5の小型甕は床面から，第104図9の高坏と10の埴は第4層から出土している。他の遺物のほとんどは，第2・3層から投棄された状態で出土している。

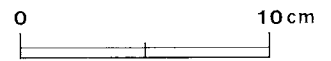
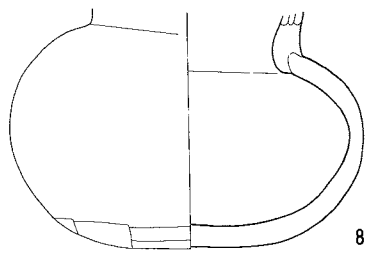
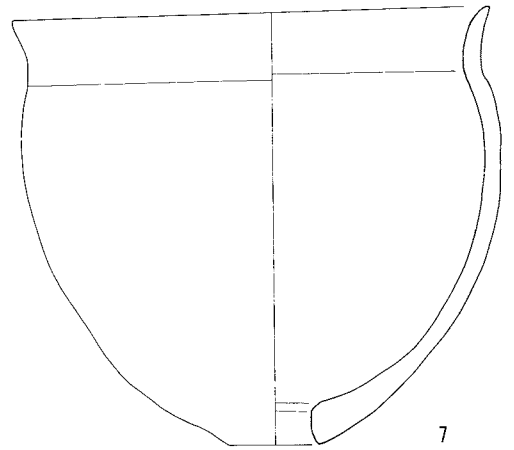
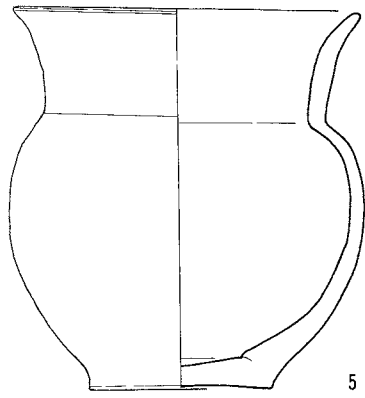
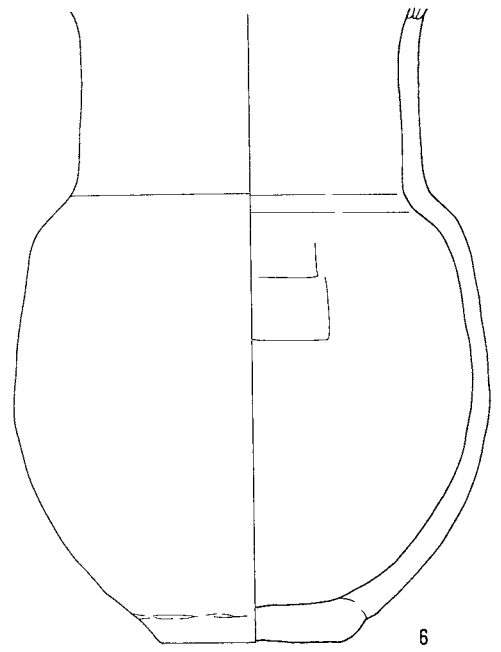
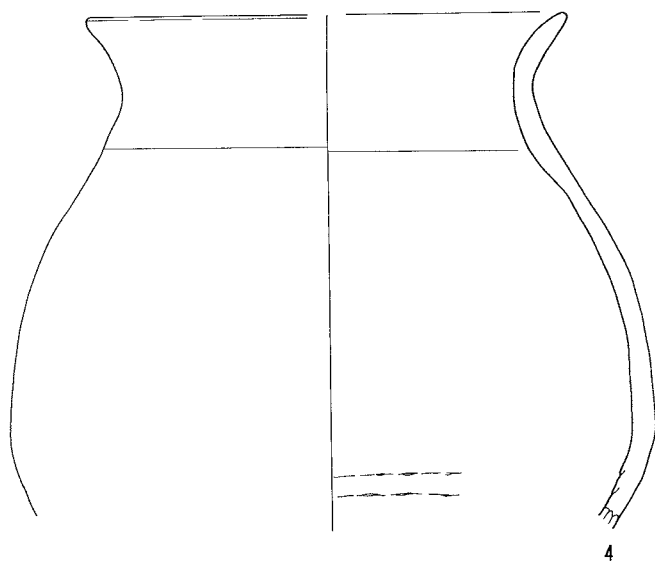
所見 本跡は，遺物包含層下に存在する土坑である。本跡の時期は，出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

第30号土坑出土遺物観察表

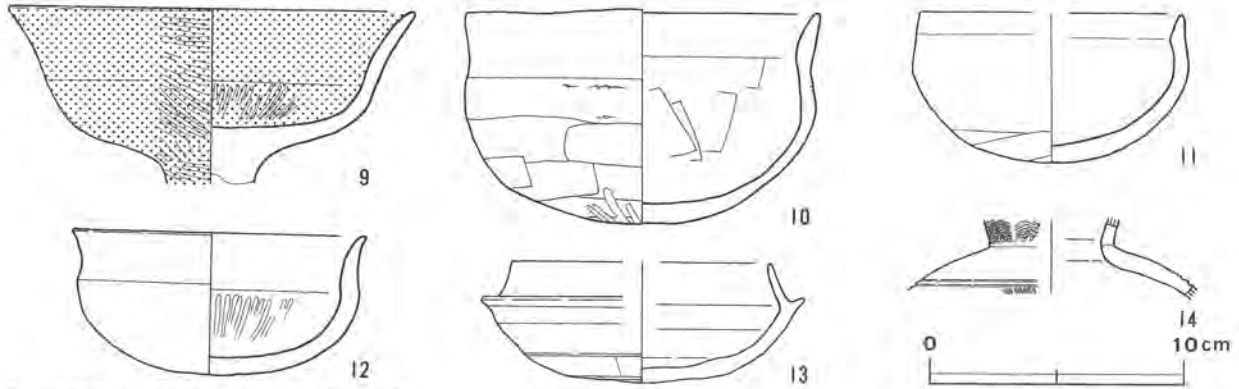
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	小型甕 土師器	A 15.2 B 19.8 C 7.2	平底。体部は倒卵形で，最大径は体部上位にある。頸部はほぼ直立し，口縁部はわずかに外傾する。	胴部外面ヘラナデ後，磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 明赤褐色 普通	P382 80% 第3層
2	小型甕 土師器	A 14.4 B 13.0 C 7.0	平底。体部は倒卵形で，最大径は体部上位にある。頸部はほぼ直立し，口縁部はわずかに外傾する。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 にぶい赤褐色 普通	P379 75% 第3層
3	甕 土師器	A 20.0 B 38.5 C 9.0	平底。体部は球形で，最大径は体部中位にある。頸部はほぼ直立し，口縁部はわずかに外傾する。	体部外面ヘラナデ後，磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P380 40% 第3層
第103図 4	甕 土師器	A[19.4] B(21.0)	口縁部から体部の破片。頸部は内傾し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 にぶい橙色 普通	P383 60% 第2層
5	小型甕 土師器	A 14.1 B 15.5 C 7.4	平底。体部は倒卵形で，体部上位に最大径がある。頸部はほぼ直立し，口縁部はわずかに外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P377 95% 底面
6	長頸壺 土師器	B(12.5) C 6.8	平底。体部は縦長の球形で，最大径は体部中位にある。頸部は長く，直立する。	体部内面ヘラナデ。頸部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P384 50% 第2層
7	甕 土師器	A 19.4 B 17.6 C 4.0	無底式。底径が小さく，体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ナデ。口縁部横ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P386 90% 第2層
8	埴 土師器	B(9.5)	口縁部欠損。丸底。体部はつぶれた球形で，最大径は体部中位にある。口縁部は外反する。	底面ヘラ削り。	長石・スコリア 橙色 普通	P375 80% 第4層
第104図 9	高坏 土師器	A 16.1 B(6.8)	脚部欠損。坏体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	坏体部外面磨き。体部内面ナデ後放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	P373 50% 第4層
10	埴 土師器	A 14.1 B 8.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 明褐色 良好	P371 100% 第2層
11	坏 土師器	A[10.4] B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部内面に稜がある。	体部内・外面ナデ。底面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P372 60% 第2層
12	坏 土師器	A 11.7 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。	体部外面ナデ。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒 明赤褐色 普通	P370 95% 第2層



第102图 第30号土坑出土遗物(1)

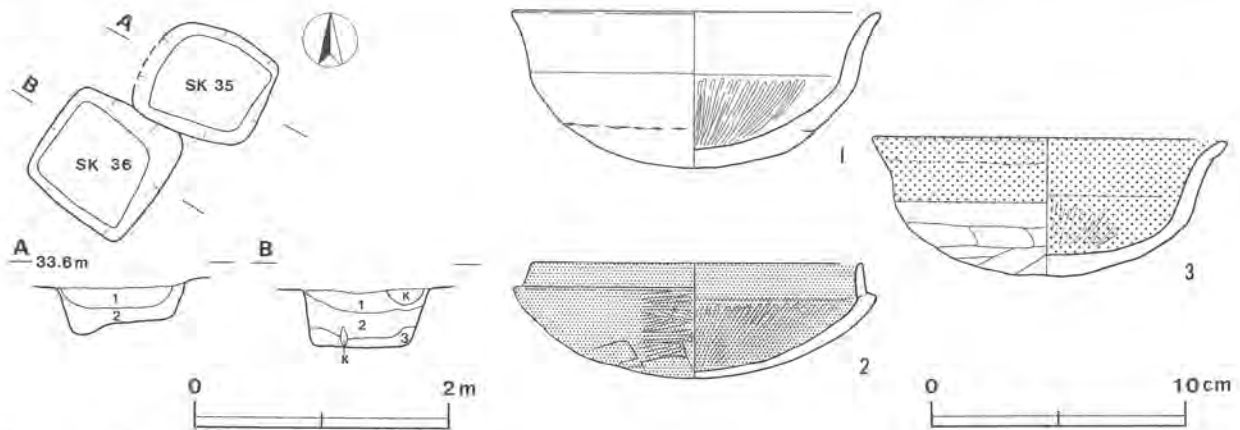


第103图 第30号土坑出土遺物(2)



第104図 第30号土坑出土遺物(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	杯 須恵器	A 10.4 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は外傾する。	底部回転ヘラ切り。体部内・外面横ナデ。	長石・礫粒 灰白色 普通	P 387 50% 覆土
14	甕 須恵器	B (3.9)	頸部から体部の破片。頸部は直角に外反する。	頸部は櫛歯状工具により波状文を施している。体部は2条の沈線下に櫛歯状工具の刺突文を施している。	長石 灰オリーブ色 良好	P 388 15% 覆土



第105図 第35・36号土坑・出土遺物

### 第35号土坑 (第105図)

位置 調査区の東部、C5d<sub>6</sub>区。

重複関係 本跡は、第11号住居跡と第36号土坑と重複する。本跡が第11号住居跡と第36号土坑を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸1.00 m・短軸0.90 mの方形。

壁 壁高が40cmで、傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で、ほぼ平坦である。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒・炭化物を微量含む黒褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片1点、土師器片9点が出土している。第105図1・2の杯は、第2層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀前葉と考えられる。

### 第35号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	坏 土師器	A 14.6 B 6.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面輪積み痕。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒 明褐色 普通	P393 95% 第2層
2	坏 土師器	A 13.0 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へら削り後、磨き。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	雲母 赤褐色 良好	P394 50% 第2層

### 第36号土坑（第105図）

位置 調査区の東部，C5d<sub>6</sub>区。

重複関係 本跡は，第11号住居跡と第36号土坑と重複する。本跡は第11号住居跡を掘り込んでいるため本跡が新しく，第35号土坑が本跡を掘り込んでいるため本跡が古い。

規模と平面形 長軸1.00 m・短軸0.98 mの方形。

壁 壁高が44cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で，ほぼ平坦である。

覆土 3層からなる。第1層は，ロームブロック・ローム粒を多量，炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は，ローム粒を中量，炭化物を微量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・炭化物を中量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片3点，土師器片38点が出土している。第105図3の坏は，第2層から出土している。弥生土器は混入したものである。

所見 本跡の時期は，出土遺物から6世紀前葉と考えられる。

### 第36号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 3	坏 土師器	A 14.2 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へら削り。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母・スコリア 赤褐色 普通	P396 65% 第2層

### 第37号土坑（第106図）

位置 調査区の東部，C6h<sub>1</sub>区。

規模と平面形 長径1.96 m・短径0.96 mの瓢箪形。

重複関係 本跡は，平面形が瓢箪形で底面までの深さが異なることから土坑が重複している可能性があるが，確認できなかった。

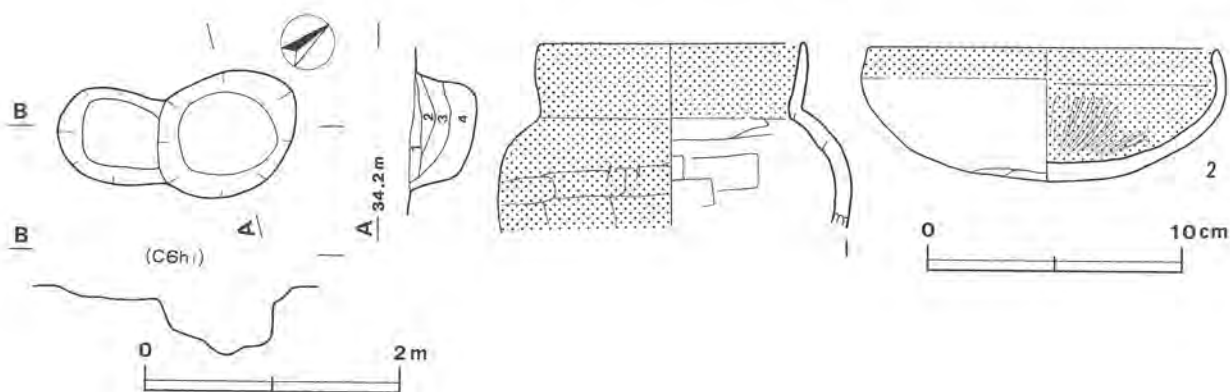
長径方向 N-38°-E

壁 壁高は最大で48cmで，傾斜して立ち上がる。南西側の張り出し部は浅く，底面まで8 cmである。

底 鍋底形。

覆土 5層からなる。第1層は，ローム粒を少量含む褐色土。第2層は，焼土ブロック・焼土粒を中量，ローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第3層は，ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第4層は，焼土ブロック・炭化物・ローム粒を少量含む暗褐色土。第5層は，ローム粒を多量含む褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片8点，土師器46点が出土している。第106図1の短頸壺と2の坏は，覆土から出土している。弥生土器片は混入したものである。



第106図 第37号土坑・出土遺物

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

第37号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	短頸壺 土師器	A 10.7 B (7.6)	口縁部から体部の破片。体部はつぶれた球形で、頸部は「く」の字状に外反する。口縁部は直立する。	体部外面へら削り。体部内面へらナデ。口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。内面口縁部赤彩。	スコリア 明赤褐色 良好	P398 30% 覆土
2	坏 土師器	A 13.8 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	底面へら削り。内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	石英・長石・雲母 赤褐色 良好	P397 80% 覆土

第45号土坑（第107図）

位置 調査区の西部、C6g7区。

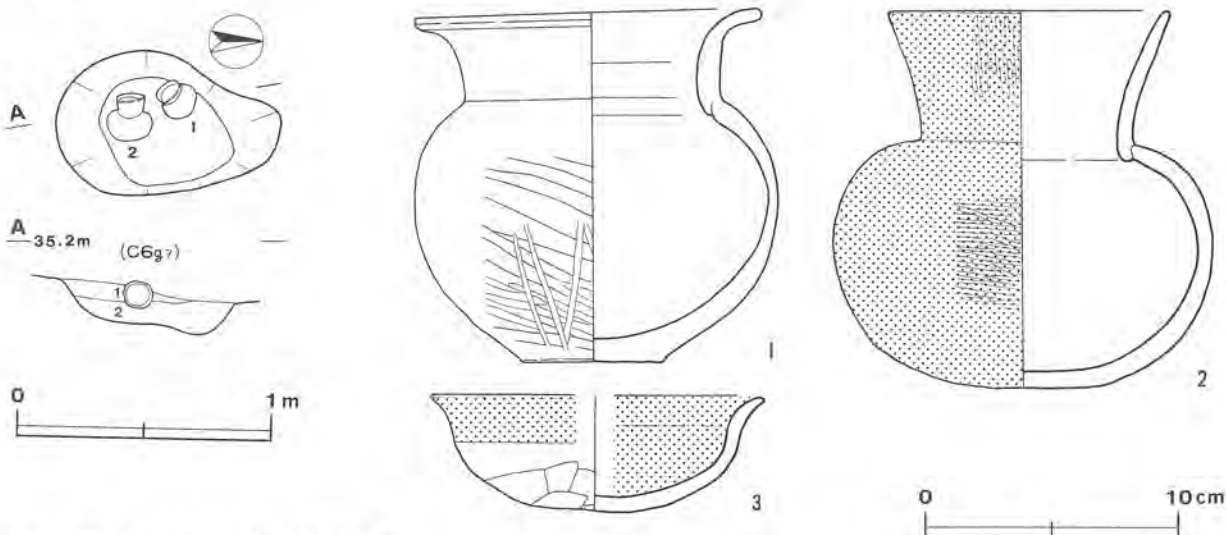
規模と平面形 長径0.86m・短径0.58mの楕円形。

長径方向 N-8°-E

壁 壁高は最大で14cmで、傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で、起伏がある。

覆土 2層からなる。第1層は、ローム粒を少量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む褐色土である。



第107図 第45号土坑・出土遺物

遺物 本跡から、土師器片5点が出土している。第107図1の壺が底面から出土し、2の埴と3の坏が第2層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

#### 第45号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	小型甕 土師器	A 13.8 B 14.1 C 5.6	平底。体部は球形で、頸部は直立する。口縁部は強く外傾する。	体部外面ヘラナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・礫粒にぶい橙色良好	P403 95% 底面
2	埴 土師器	A 11.9 B 15.1	丸底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する	口頸部縦位の磨き。体部外面横位の磨き。外面赤彩。	礫粒 橙色 良好	P402 90% 第2層
3	坏 土師器	A [13.3] B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部赤彩。内面赤彩。	雲母 赤褐色 普通	P400 50% 第2層

#### 第46号土坑（第108図）

位置 調査区の東部、C6h<sub>9</sub>区。

規模と平面形 長径1.58m・短径1.10mの長楕円形。

長径方向 N-48°-E

壁 壁高は最大で70cmで、傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で、起伏がある。

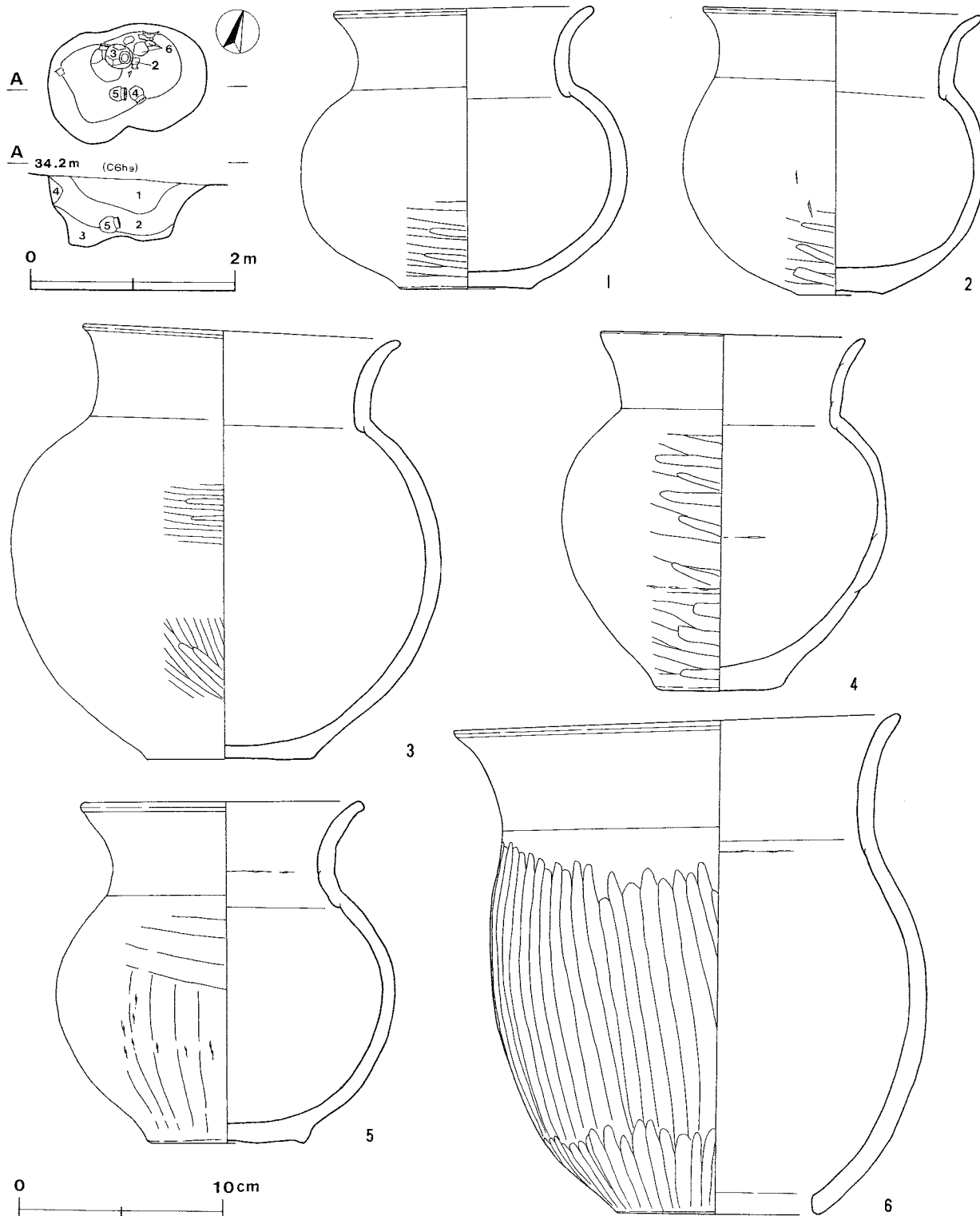
覆土 4層からなり、第4層は崩落土である。第1層は、ローム粒を少量含む黒褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒を中量含む黒褐色土。第3層は、ローム粒を中量、灰白色粘土ブロックを少量含む黒褐色土である。第4層は、黒褐色土粒を少量含む灰褐色粘土層である。

遺物 本跡から、土師器片60点が出土している。第108図1・2・4・5の小型甕は第3層から、3の小型甕と6の甑は第2層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

#### 第46号土坑出土遺物観察表

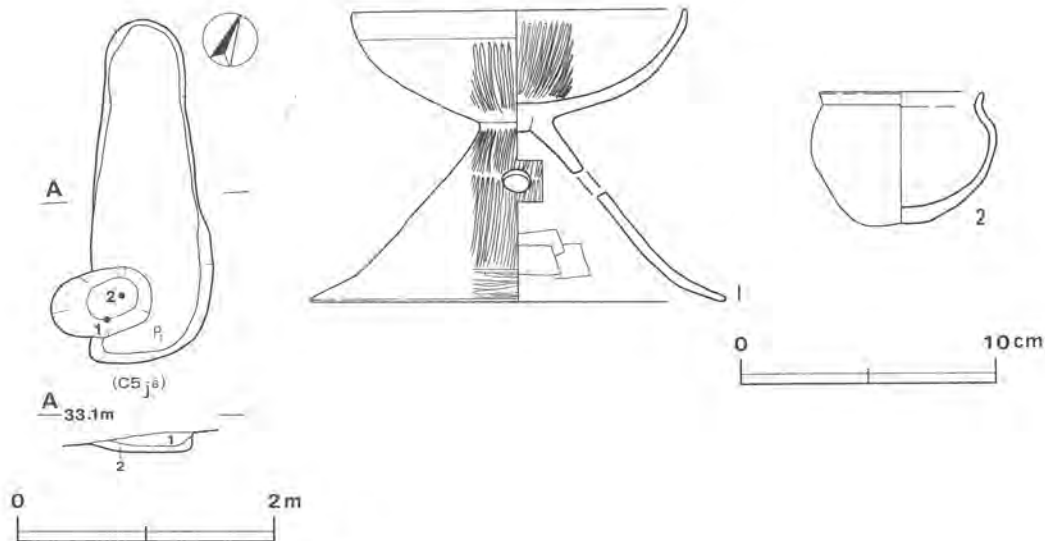
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	小型甕 土師器	A 12.7 B 14.1 C 6.3	平底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P407 95% 第3層
2	小型甕 土師器	A 13.7 B 14.4 C 4.2	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 明赤褐色 普通	P406 95% 第3層
3	小型甕 土師器	A 15.5 B 21.2 C 8.1	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P408 90% 第2層
4	小型甕 土師器	A 13.1 B 17.8 C 6.3	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面ナデ後、磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P404 95% 第3層
5	小型甕 土師器	A 14.2 B 16.9 C 7.8	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P405 95% 第3層



第108図 第46号土坑・出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	甗 土師器	A 22.4 B 24.8 C 9.6	無底式。体部は球形で、最大径は体部中位にある。口縁部は外反する。	体部外面へラ磨き。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P409 80% 第2層





第109図 第52号土坑・出土遺物

第52号土坑（第109図）

位置 調査区の西部，C5j<sub>6</sub>区。

規模と平面形 長径2.70m・短径0.76mの長楕円形。

長径方向 N-22°-W

壁 壁高は最大で15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁の一部は、流失して残存していない。

底 平坦。

ピット 1ヶ所（P<sub>1</sub>）。南壁際に位置するが、本跡とは別の遺構の可能性もある。長径80cm・短径52cmで、深さ37cmである。

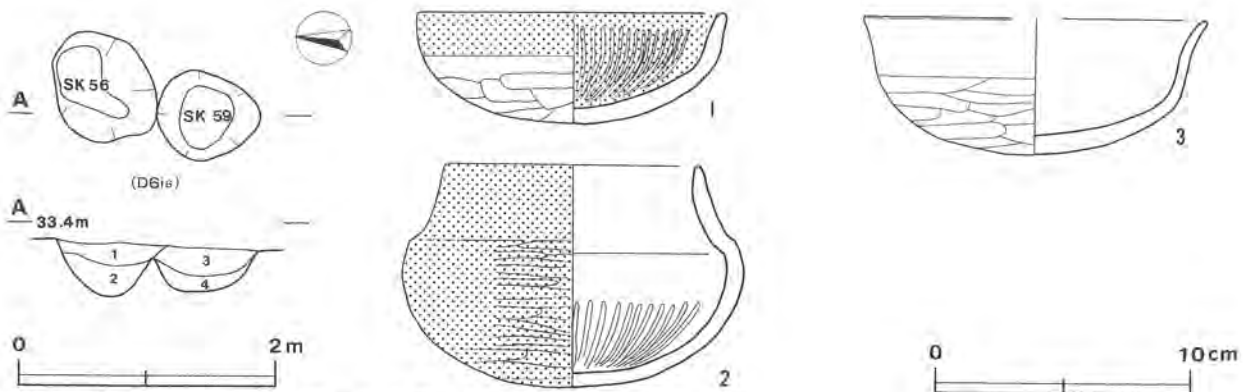
覆土 2層からなる。第1層は、ロームブロック・ローム粒を中量含む暗褐色土。第2層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む明褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片3点，土師器片18点が出土している。第109図1の高杯と2のミニチュア土器が、P<sub>1</sub>から出土している。弥生土器片は混入したものである

所見 本跡の時期は、出土遺物から4世紀中葉と考えられる。

第52号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 1	高杯 土師器	A 13.2 D 16.4 E 7.4	杯部は内彎して立ち上がる。脚部は長く、強く開く。脚部上位に3単位の円孔が付く。	体部内・外面ナデ後、磨き。脚部内外面ナデ後、磨き。脚部内面へラ削り後、ナデ。	石英・長石 明褐色 良好	P411 80% P <sub>1</sub> 覆土
2	ミニチュア壺 土師器	A 6.5 B 5.3 C 2.6	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外傾する。	体部内・外面ナデ。	石英・長石 茶褐色 普通	P410 100% P <sub>1</sub> 覆土



第110図 第56・59号土坑・出土遺物

### 第56号土坑（第110図）

位置 調査区の東部，D6i6区。

重複関係 本跡は，第59号土坑と重複している。本跡が第59号土坑を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.86 m・短径0.78 mの楕円形。

壁 壁高が42cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形。

覆土 2層からなる。第1層は，ローム粒を少量，焼土粒を微量含む暗褐色土。第2層は，灰白色粘土粒を中量，ローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から，弥生土器片3点，土師器片18点が出土している。第110図1の坏と2の短頸壺は覆土から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は，出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

### 第56号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	坏 土師器	A 12.3 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へら削り後，へら磨き。体部内面放射状の磨き。口縁部内・外面横ナデ。外面口縁部・内面赤彩。	雲母 暗褐色 良好	P412 75% 覆土
2	短頸壺 土師器	A 10.0 B 8.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は内傾する。	底面へら削り。体部外面磨き。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。外面赤彩。	雲母・スコリア 赤褐色 良好	P413 95% 覆土

### 第59号土坑（第110図）

位置 調査区の東部，D6i6区。

重複関係 本跡は，第56号と重複している。第56号土坑が本跡を掘り込んでいるため，本跡が古い。

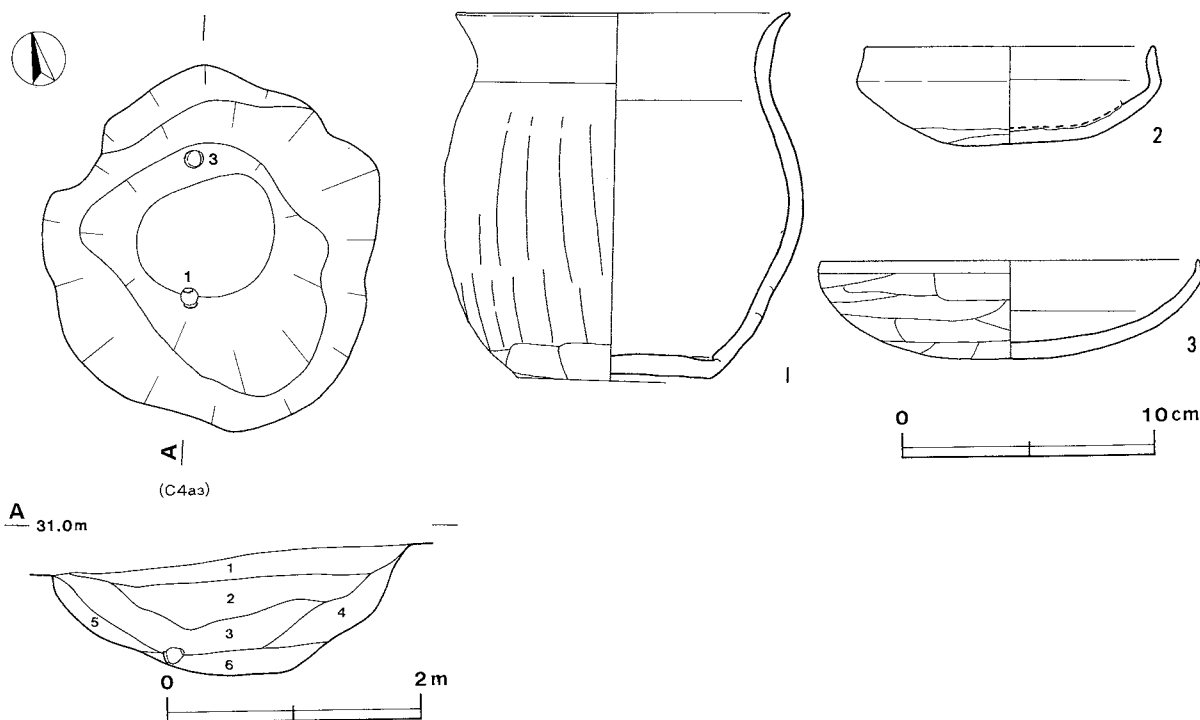
規模と平面形 長径0.80 m・短径0.70 mの楕円形。

壁 壁高が34cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形。

覆土 2層（第3・4層）からなる。第3層は，ローム粒・灰白色粘土粒・砂粒を少量含む褐色土。第4層は，ローム粒・灰白色粘土粒を中量，砂粒を少量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から，土師器片2点が出土している。第110図3の坏は，覆土から出土している。



第111図 第61号土坑・出土遺物

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

第59号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 3	坏 土師器	A 13.5 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒・スコリア 明褐色 普通	P414 60% 覆土

第61号土坑 (第111図)

位置 調査区の中央部, C4a<sub>3</sub>区。

重複関係 本跡は、第29・37号住居跡と重複する。本跡は第29・37号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長径2.92 m・短径2.70 mの楕円形。

壁 壁高は98cmで、緩やかに傾斜して立ち上がる。

底 常総粘土層である第 層を底面としている。鍋底形。

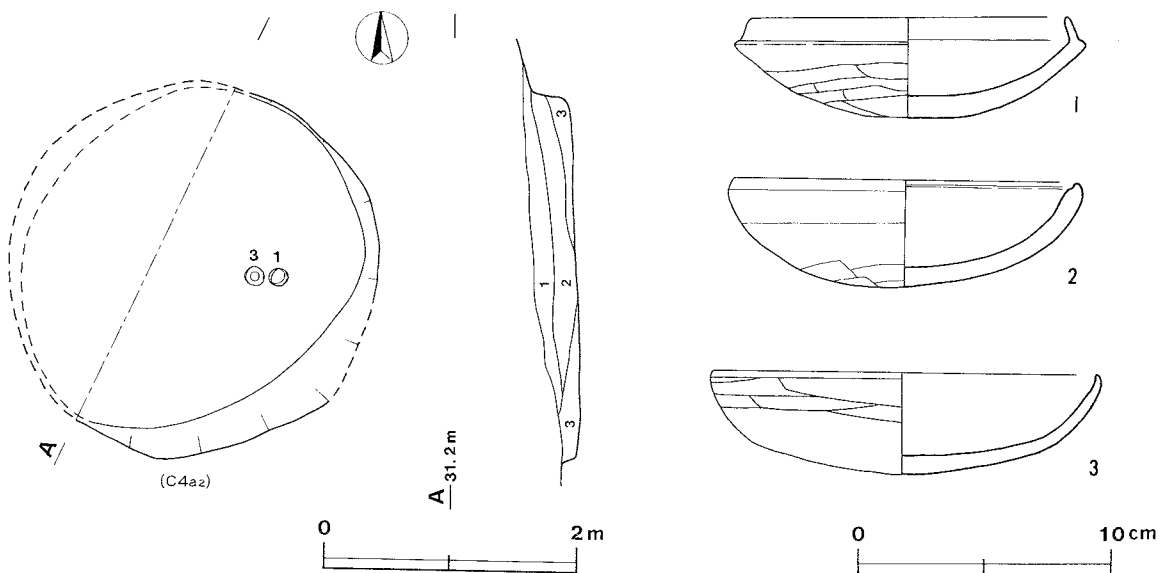
覆土 6層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を少量、炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・礫粒を少量、炭化物を微量含む黒褐色土。第3層は、灰白色粘土ブロック・ローム粒を多量、礫粒を少量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む黒褐色土である。第5層は、ローム粒、礫粒を少量含む暗褐色土。第6層は、灰白色粘土ブロック・ローム粒を多量、礫粒を少量含む黒褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片8点、土師器片65点が出土している。第111図1の甕と3の坏が、第6層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から7世紀前葉と考えられる。

第61号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	小型甕 土師器	A 13.3 B 14.9 C 7.5	平底。体部は球形で、最大径は体部 中位にある。頸部は直立し、口縁部 は外傾する。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P420 95% 第6層
2	坏 土師器	A 11.6 B 4.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に稜がある。口縁部は 直立する。	体部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 底面黒斑。	石英・長石 赤褐色 良好	P417 95% 覆土
3	坏 土師器	A 15.6 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁端部は尖る。	体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面 横ナデ。	雲母・礫粒 明褐色 良好	P418 80% 第6層



第112図 第62号土坑・出土遺物

第62号土坑 (第112図)

位置 調査区の中央部、C4a<sub>2</sub>区。

確認状況 第29号住居跡調査中に確認する。本跡は、遺物包含層である第IIb層下部から掘り込んでいる。

重複関係 本跡は、第29号住居跡と重複する。本跡は第29号住居跡を掘り込んでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 本跡の西側は未調査であるが、径3.0mの円形と推定される。

壁 壁高は最大で30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦であるが、わずかに起伏がある。

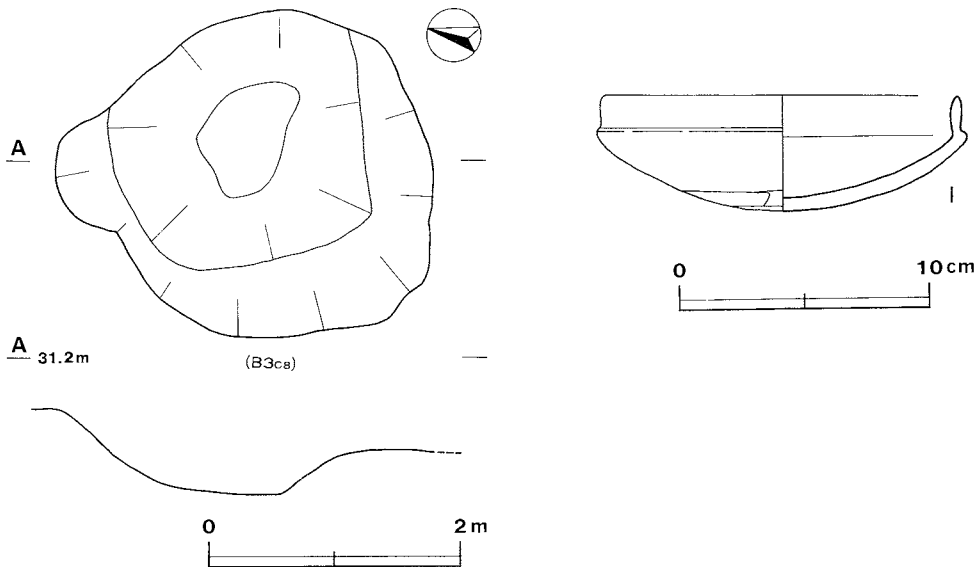
覆土 3層からなるが、第1層は遺物包含層である第IIb層の一部の可能性がある。第1層は、礫粒を少量含む黒褐色土。第2層は、礫粒を中量含む黒褐色土。第3層は、礫粒を多量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片8点、土師器片85点が出土している。第112図1・3の坏は、第2層から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物と本跡が第29号住居跡を掘り込んでいることから、7世紀前葉と考えられる。

第62号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	坏 土師器	A 12.8 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 明赤褐色 良好	P422 90% 第2層
2	坏 土師器	A 14.1 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。口縁端部内面に沈線が巡る。	礫粒 暗赤褐色 良好	P423 100% 覆土
3	坏 土師器	A 15.6 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面へら削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母・礫粒 褐色 良好	P421 95% 第2層



第113図 第66号土坑・出土遺物

第66号土坑（第113図）

位置 調査区の西部，B3c区。

重複関係 本跡は，第31号住居跡と重複する。第31号住居跡が本跡の覆土上を貼床としていることから，本跡が古い。

規模と平面形 長径3.00 m・短径2.64 mの楕円形である。

壁 壁高は70cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形。

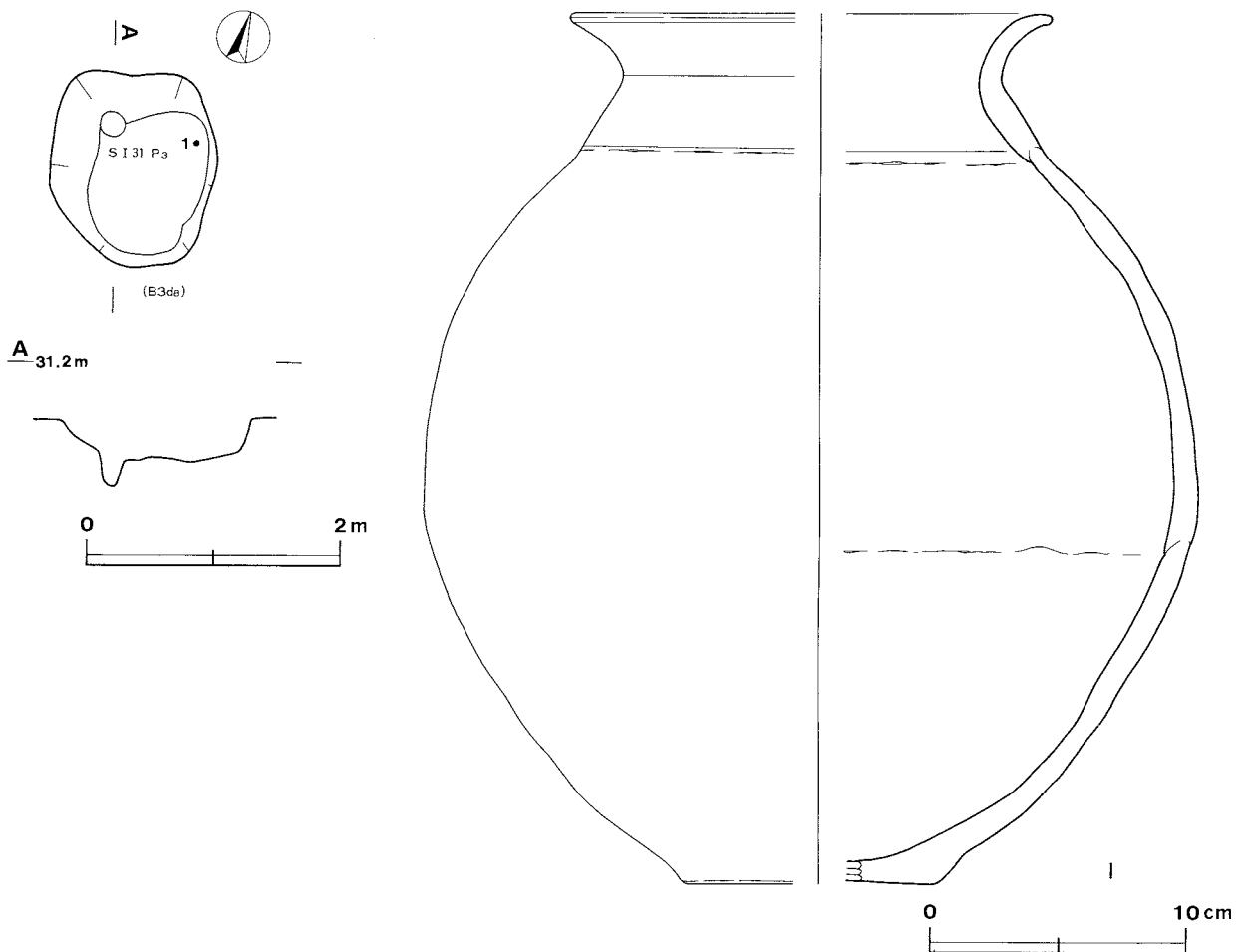
覆土 自然堆積。

遺物 本跡から，土師器片67点が出土している。第113図1の坏は，覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

第66号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	坏 土師器	A 14.4 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は直立する。	体部外面へらナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	礫粒・スコリア 橙色 普通	P424 80% 覆土上層



第114図 第67号土坑・出土遺物

第67号土坑（第114図）

位置 調査区の西部，B3d区。

重複関係 本跡は，第31号住居跡と重複する。第31号住居跡床面に貼床が確認できなかったことから，本跡が新しい。本跡は第19号土坑と接しているが，重複関係は不明である。

規模と平面形 長径1.50m・短径1.30mの楕円形。

壁 壁高は最大で30cmで，傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で，起伏がある。

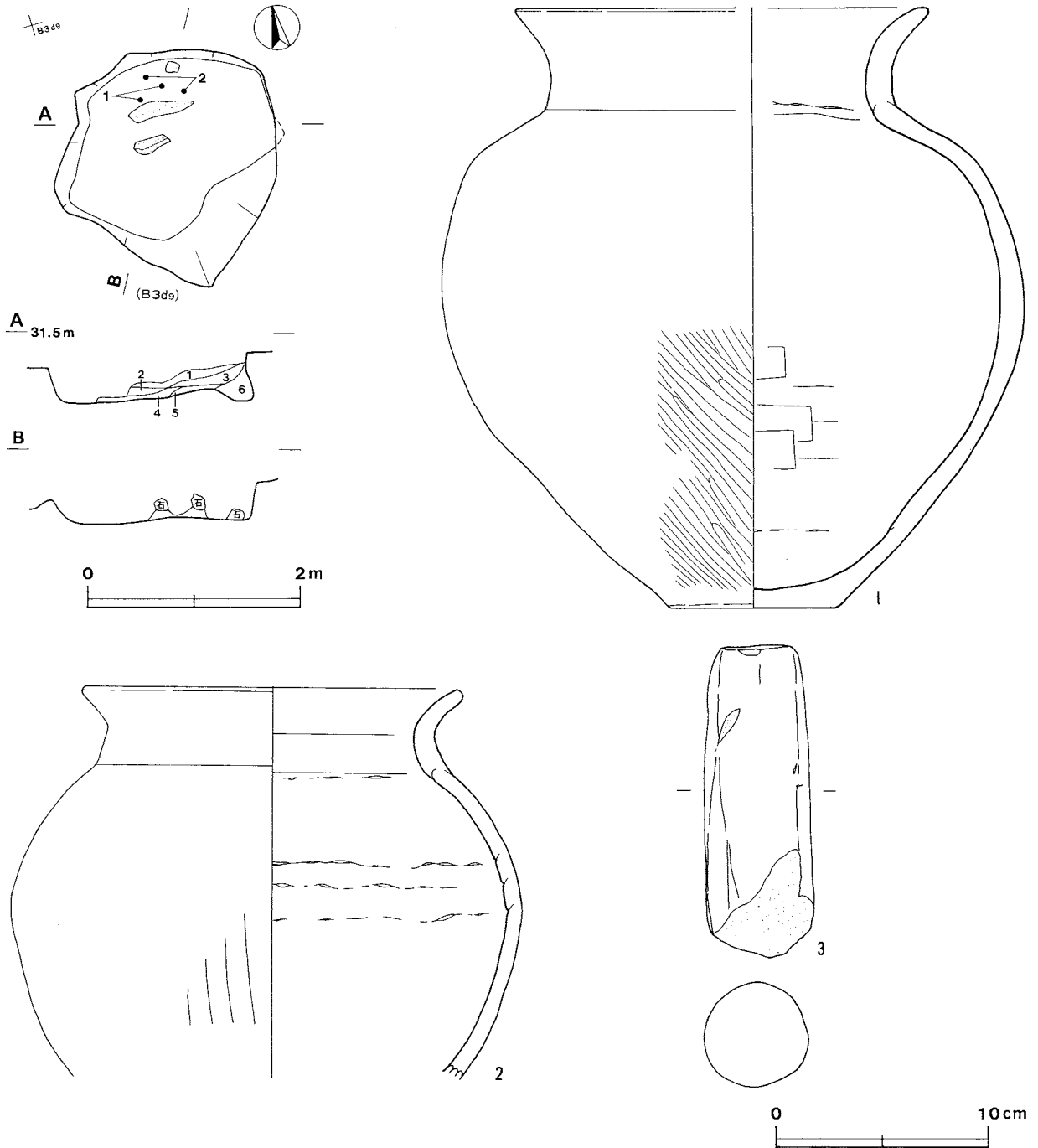
覆土 自然堆積。

遺物 本跡から，土師器片13点が出土している。第114図1の甕は覆土から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

第67号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	坏 土師器	A[18.9] B 34.5 C[10.2]	平底。体部は縦長の球形で，頸部は内傾し，口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P 426 50% 覆土



第115図 第69号土坑・出土遺物

第69号土坑（第115図）

位置 調査区の西部，B3d区。

重複関係 本跡は，第2号住居跡と重複する。第2号住居跡は本跡の覆土上面を床面としており，本跡が古い。

規模と平面形 長径2.30m・短径2.14mの楕円形。

壁 壁高は最大で36cmで，傾斜して立ち上がる。東壁の一部は，オーバーハングしている。

底 鍋底形で起伏があり，東側がピット状になっている。

覆土 6層からなる。第1層は，焼土粒・炭化物・礫粒を少量含む黒褐色土。第2層は，焼土粒・炭化物を中量，礫粒を少量含む暗褐色土。第3層は，ロームブロック・ローム粒を多量，礫粒を少量含む暗褐色土。第4

層は、焼土粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第5層は、ロームブロック・ローム粒を多量含む暗褐色土。第6層は、炭化物を多量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、縄文土器片2点、弥生土器片2点、土師器片625点、須恵器片3点、陶器片1点が出土している。第115図1・2の甕は、北側底面に潰れた状態で出土している。縄文土器片と弥生土器片と陶器片は、混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

#### 第69号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	甕 土師器	A[19.5] B(28.7)	平底。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。頸部は直立し、口縁部は外反する。	体部外面磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・礫粒 明赤褐色 普通	P428 70% 底面
2	甕 土師器	A 18.0 B(18.0)	体部下半欠損。体部は倒卵形で、最大径は体部上位にある。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P429 60% 底面

#### (4) 井戸

今回の調査では、古墳時代の井戸を1基を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

##### 第1号井戸（第116図）

位置 調査区の中央部、C4a<sub>s</sub>区。

重複関係 本跡は、第5号溝状遺構と重複する。本跡が第5号溝を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.82m・短径.76mの楕円形。

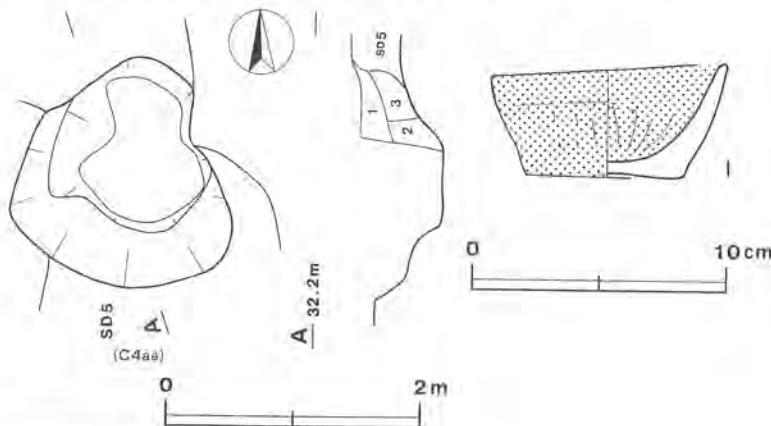
壁 壁高は最大で72cmで、傾斜して立ち上がる。

底 鍋底形で、第Ⅲ層とした混礫砂層まで掘り込んでいる。

覆土 3層からなる。第1層は、ローム粒・ロームブロックを中量、炭化物を微量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・ロームブロックを微量含む黒褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土である。

遺物 第116図1のミニチュア土器は、第1層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第116図 第1号井戸・出土遺物



## 第1号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	ミチアヒ器 土師器	A 9.4 B 6.1	平底。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・礫粒 明赤褐色 普通	P432 100% 第1層

### (5) 溝状遺構

第2・3・5号溝として調査した遺構については、覆土の堆積後に遺物包含層である第II a～d層が形成されること、標高の低い所に堆積している覆土はローム粒と褐色土の混合土が多いこと、標高の低い所の底面には流水痕があり流路の可能性があること、第5号溝は第1号井戸と重複していることから水場としての機能が想定できることから、区画や境界の性格を持つ溝と区別できる。そのため第2・3・4号溝状遺構と改称し、以下確認した遺構と遺物について記載する。

#### 第2号溝状遺構（第117・118図）

位置 調査区の中央部，B4i<sub>9</sub>～C4d<sub>9</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。

重複関係 本跡は、遺物包含層と重複している。本跡の覆土の堆積後に遺物包含層が形成されることから、本跡が古い。

規模と断面形 本跡の北側は調査区外に延びるため、長さは不明である。上幅は最大で6.54 m、下幅は最大で3.54 mで、深さは最大で0.70 mである。断面形は皿底で、底面は南側に傾斜し、深さは南側になるにつれ浅くなる。

覆土 4層からなる。第1層は、灰白色粘土粒を多量、ローム粒・礫粒を少量含む黒褐色土。第2層は、ローム粒・礫粒を微量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第4層は、灰白色粘土粒・ローム粒・礫粒を少量含む暗褐色土である。

所見 本跡は、南側に傾斜する溝状遺構である。本跡の時期は出土遺物がないため不明であるが、重複関係から遺物包含層より古いことが判明している。

#### 第3号溝状遺構（第117・118図）

位置 調査区の中央部，C4a<sub>0</sub>～C4d<sub>0</sub>区。

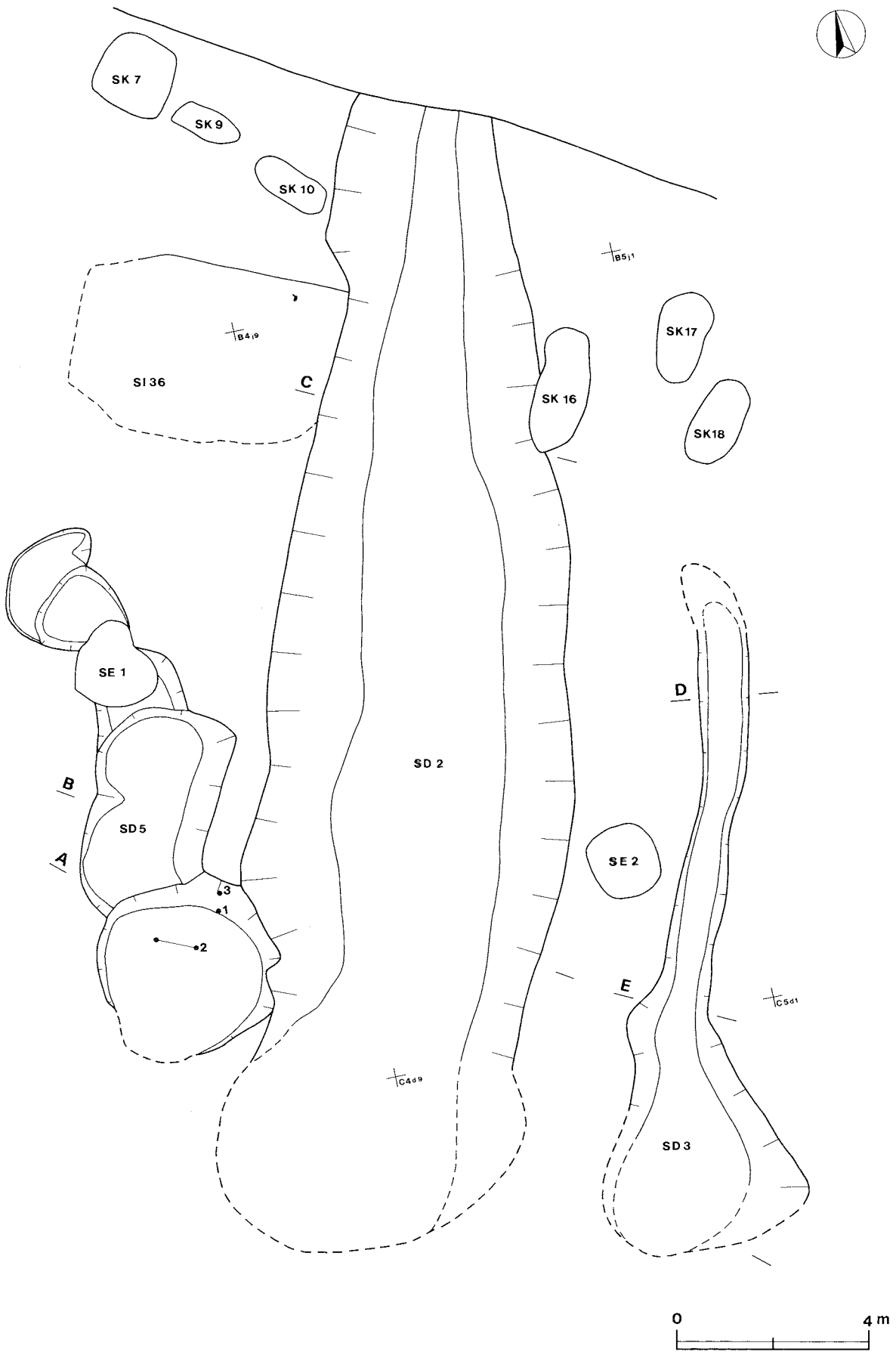
確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。

重複関係 本跡は、遺物包含層と重複している。本跡の覆土堆積後に遺物包含層が形成されることから、本跡が古い。

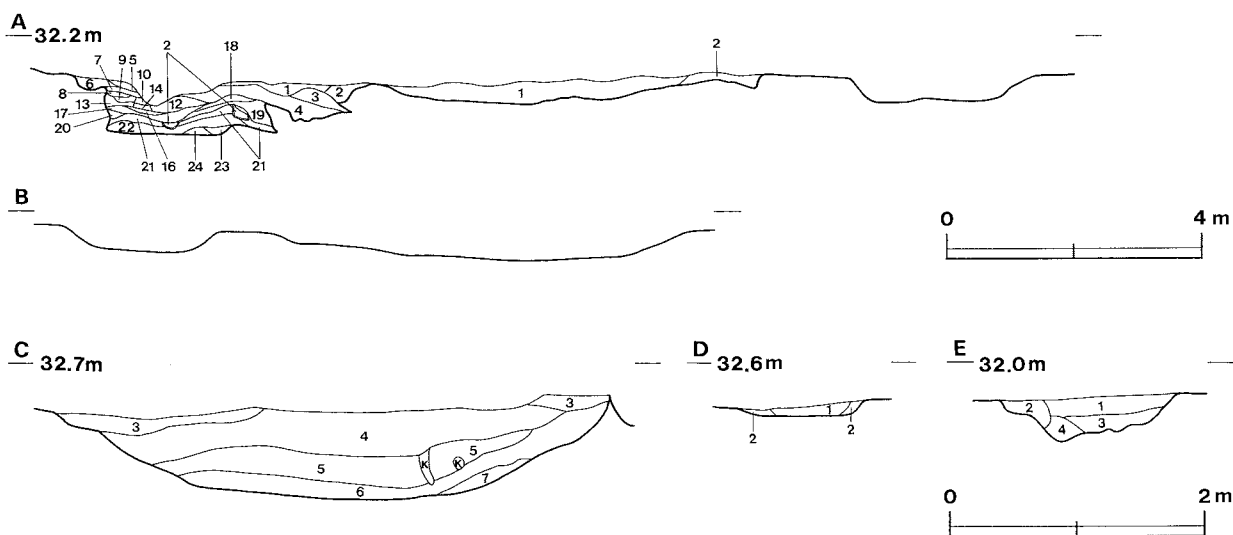
規模と断面形 本跡の南端部と北端部は不明瞭であるが、長さ14.50 mと推定される。北側は上幅が最大1.08 m・下幅が最大0.68 mで直線的に延び、南側は上幅が最大4.06 m・下幅が最大2.54 mで末広がり状になる。断面形は鍋底形で、深さは最大で34 cmである。底面は、南側に傾斜している。

覆土 4層からなる。第1層は、ローム粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒を少量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒を少量、礫粒を微量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒を中量、灰白色粘土粒・礫粒を少量含む暗褐色土である。

遺物 第119図1の長頸壺と勾玉形石製模造品（第119図2）は、共判して覆土から出土している。

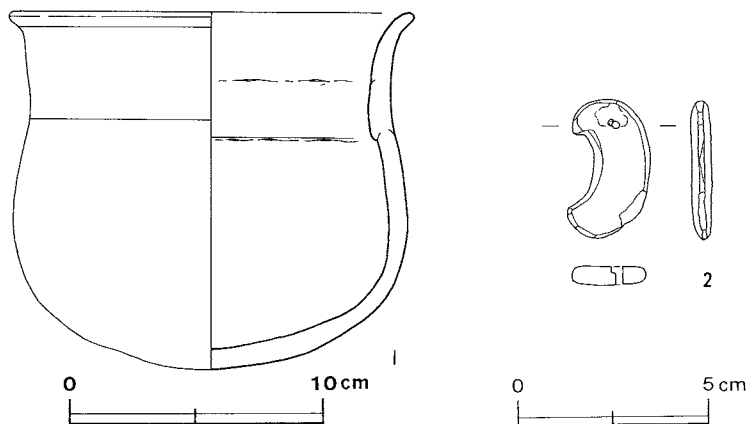


第117図 溝状遺構(1)



第118図 溝状遺構(2)

所見 本跡は、南側に傾斜する溝状遺構である。本跡の時期は、出土遺物と遺物包含層より古いことから5世紀末葉と考えられる。



第119図 第3号溝状遺構出土遺物

第3号溝状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	長頸壺 土師器	A 16.1 B 14.3	丸底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。頸部は直立し、口縁部はわずかに外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・雲母にぶい赤褐色普通	P431 90% 覆土

### 第5号溝状遺構(第117・118図)

位置 調査区の中央部, C4a<sub>8</sub>~C4c<sub>8</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。

重複関係 本跡は、第1号井戸と遺物包含層と重複している。本跡は第1号井戸に掘り込まれ、本跡の覆土の堆積後に遺物包含層が形成されることから、本跡が古い。

規模と断面形 長さ11.30mで、上幅が最大で3.60m、下幅が最大で3.24mである。短軸方向の断面形は鍋底形で、深さは最大で70cmである。長軸方向の断面形は、南側に向かって階段状に深くなっている。

覆土 24層からなる。第1~4層は暗褐色土であるが、第5~24層は暗褐色土層と混合土が互層となる。第1

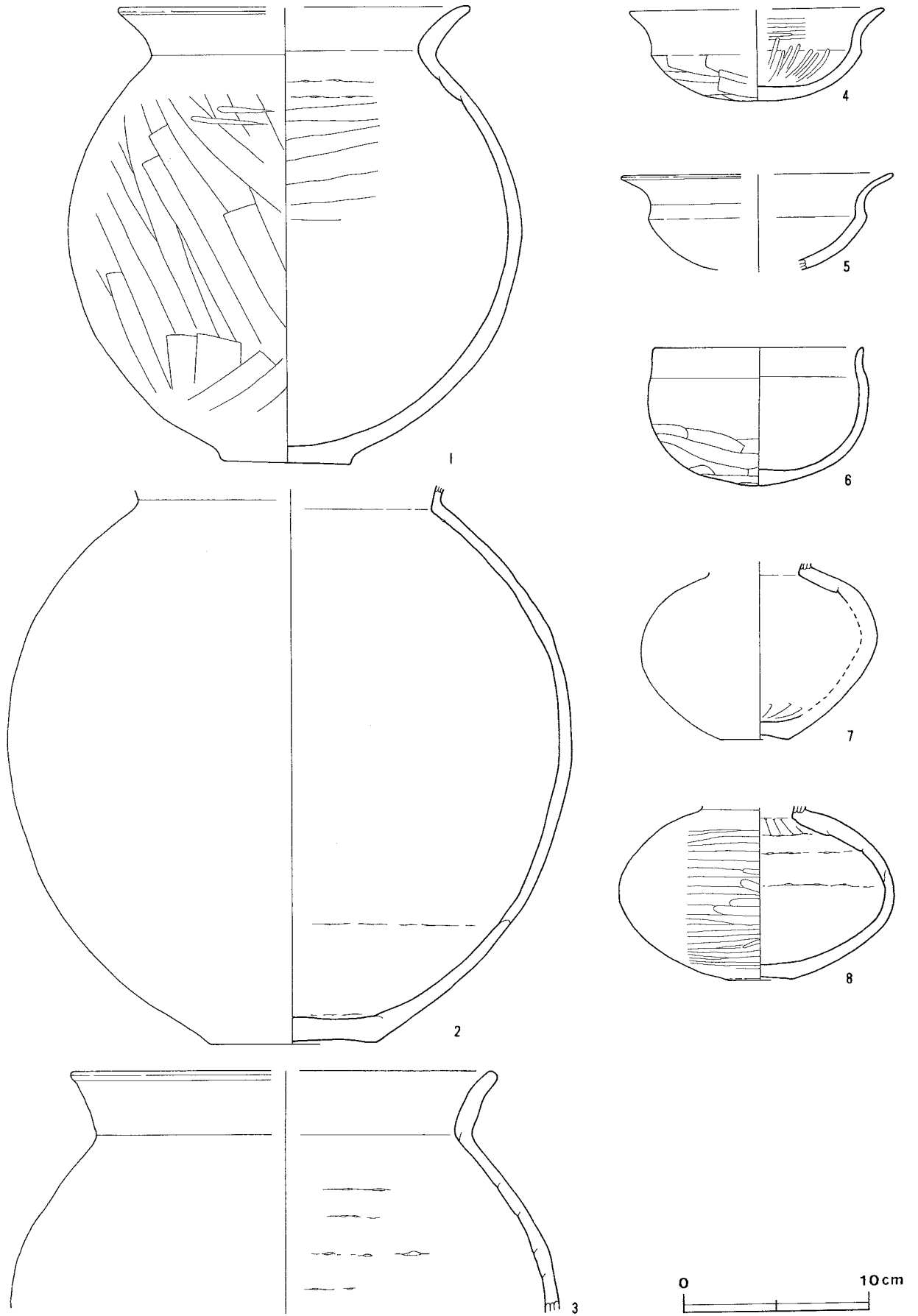
層は、ロームブロック・灰白色粘土ブロック・小礫を多量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・ロームブロックを多量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒・ロームブロック・灰白色粘土ブロックを多量含む暗褐色土。第4層は、ローム粒・ロームブロック・灰白色粘土ブロックを少量含む黒褐色土。第5層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第6層は、ローム粒・礫粒を中量含む黒褐色土。第7層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第8層は、ロームブロック・灰白色粘土ブロックを中量含む暗褐色土。第9層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第10層は、ローム粒・礫粒を微量含む黒褐色土。第11層は、ローム粒・礫粒を少量含む黒褐色土。第12層は、ロームブロックと灰白色粘土ブロックの混合土。第13層は、常総粘土層の崩落土。第14層は、ロームブロック・礫粒を微量含む暗褐色土。第15層は、ローム粒・礫粒を少量含む暗褐色土。第16層は、ロームブロックと暗褐色土の混合土。第17層は、ロームブロックを多量含む暗褐色土。第18層は、ロームブロックと灰白色粘土ブロックの混合土。第19層は、ローム粒・灰白色粘土粒を微量含む黒褐色土。第20層は、礫粒を多量に含む浅黄色土。第21層は、ロームブロックと褐色土の混合土。第22層は、礫粒を多量、ローム粒を微量含む暗褐色土。第23層は、ロームブロックと灰白色粘土ブロックと暗褐色土の混合土。第24層は、ロームブロック・灰白色ロームブロック・礫粒を少量含む暗褐色土である。

遺物 第120図2の甕は、第22層から出土している。他の遺物は、覆土上層から出土している。

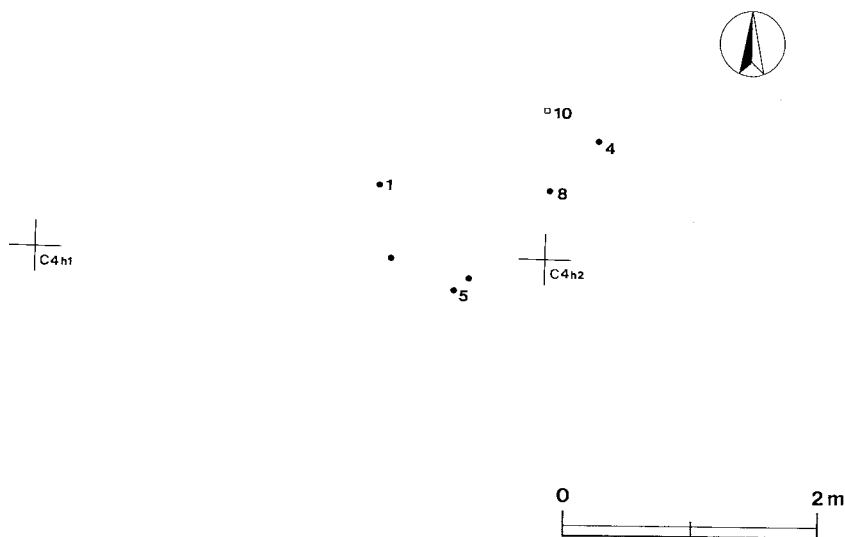
所見 本跡は、南側に向かって階段状に深くなる溝状遺構である。本跡の時期は、出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。

第5号溝状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	甕 土師器	A 19.0 B 24.9 C 7.0	平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外反する。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・砂粒 明赤褐色 普通	P212 70% 覆土上層
2	甕 土師器	B(30.3) C 9.0	頸部から底部の破片。平底。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は「く」の字状に外反する。	体部内・外面ナデ。	石英・長石 暗褐色 普通	P214 40% 第22層
3	甕 土師器	A[23.2] B(13.3)	口縁部から体部上半部破片。頸部は「く」の字状に外反する。口縁部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 橙色 普通	P217 20% 覆土上層
4	坏 土師器	A[13.8] B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面放射状の磨き。口縁部横ナデ。	石英・雲母 橙色 普通	P203 50% 覆土上層
5	坏 土師器	A[14.7] B(5.3)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。	長石・スコリア 赤褐色 普通	P205 40% 覆土上層
6	碗 土師器	A 11.3 B 7.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P358 70% 覆土上層
7	埴 土師器	B(9.5) C 4.2	平底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。	体部内・外面ナデ。	石英・長石・スコリア 黄褐色 普通	P208 70% 覆土上層
8	埴 土師器	B(9.4) C 3.4	平底。体部はつぶれた球形で、最大径は体部中位にある。	体部外面磨き。体部内面ナデ。	長石・雲母 橙色 普通	P359 70% 覆土上層



第120図 第5号溝状遺構出土遺物



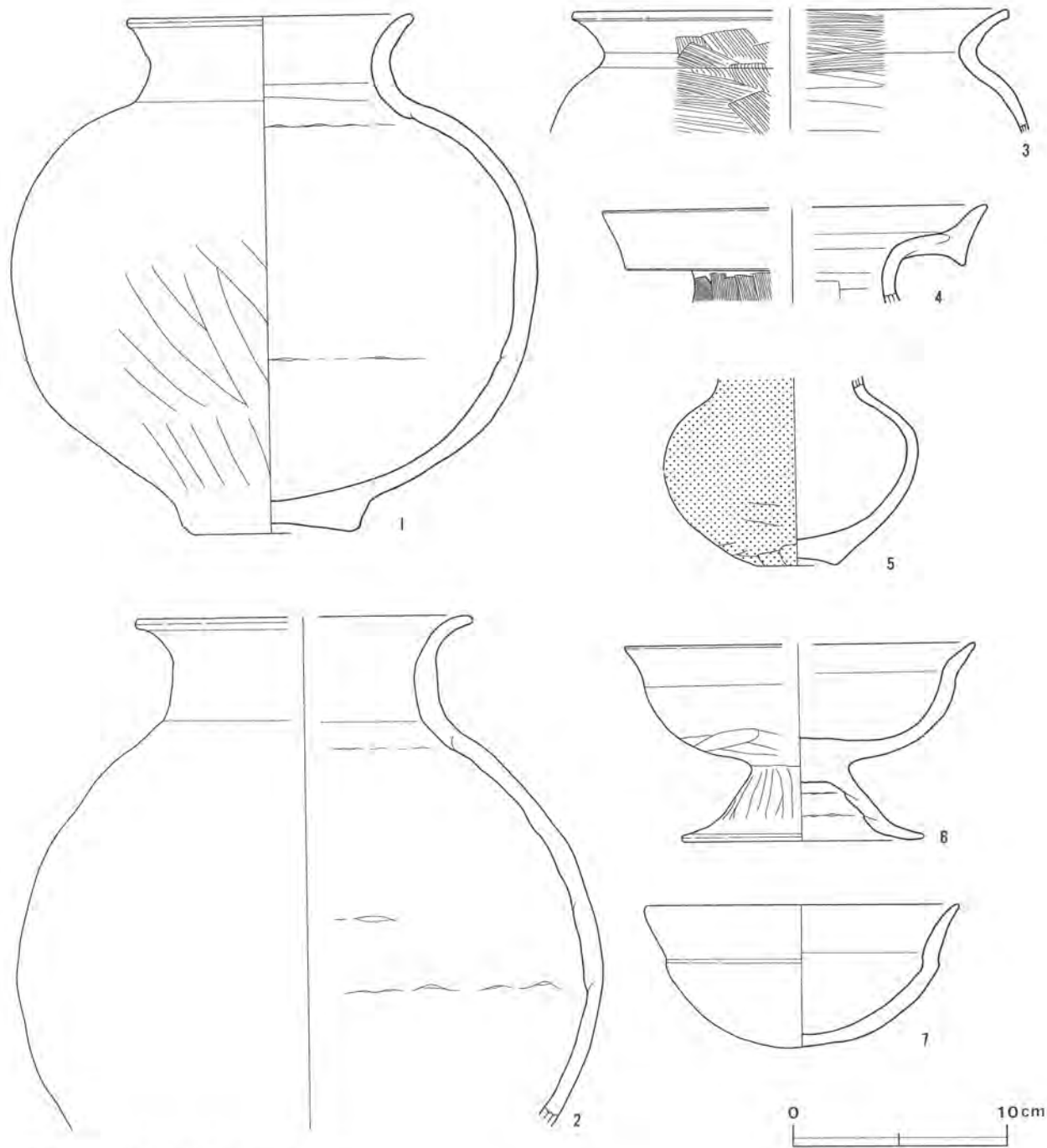
第121図 遺物包含層

(6) 遺物包含層 (第32・121図)

今回の調査では、遺物包含層を標高の低い調査区の南西部 (B 3・C 4・D 5 区付近) に確認した。遺物包含層は暗褐色土を基調とし、第 II a～d 層の 4 層からなる。第 II a・d 層は調査区中央部 C 4 区付近にのみ堆積し、第 II b・c 層は調査区南西部に堆積している。遺物包含層の時期は、5 世紀末葉から 6 世紀前葉の遺物を主体に包含していること、遺物包含層の下位から 5 世紀末葉の第 30 号土坑と第 3・5 号溝状遺構が確認されたことから、5 世紀末葉以降に堆積したと考えられる。層毎の遺物量は、第 II b 層が最も多く、第 II c・d・a 層の順で少なくなる。遺物包含層から出土した土器はほとんどが破片であるが、C4g<sub>1</sub>～C4h<sub>2</sub> 区の第 II b 層からは略完形に復元できる第 122 図 1 の甕や 8 の置竈がつぶれた状態で集中して出土している。第 122 図 3 の甕と 4 の壺は古墳時代前期の外來系土器で、凹石 (第 123 図 10) は混入したものである。

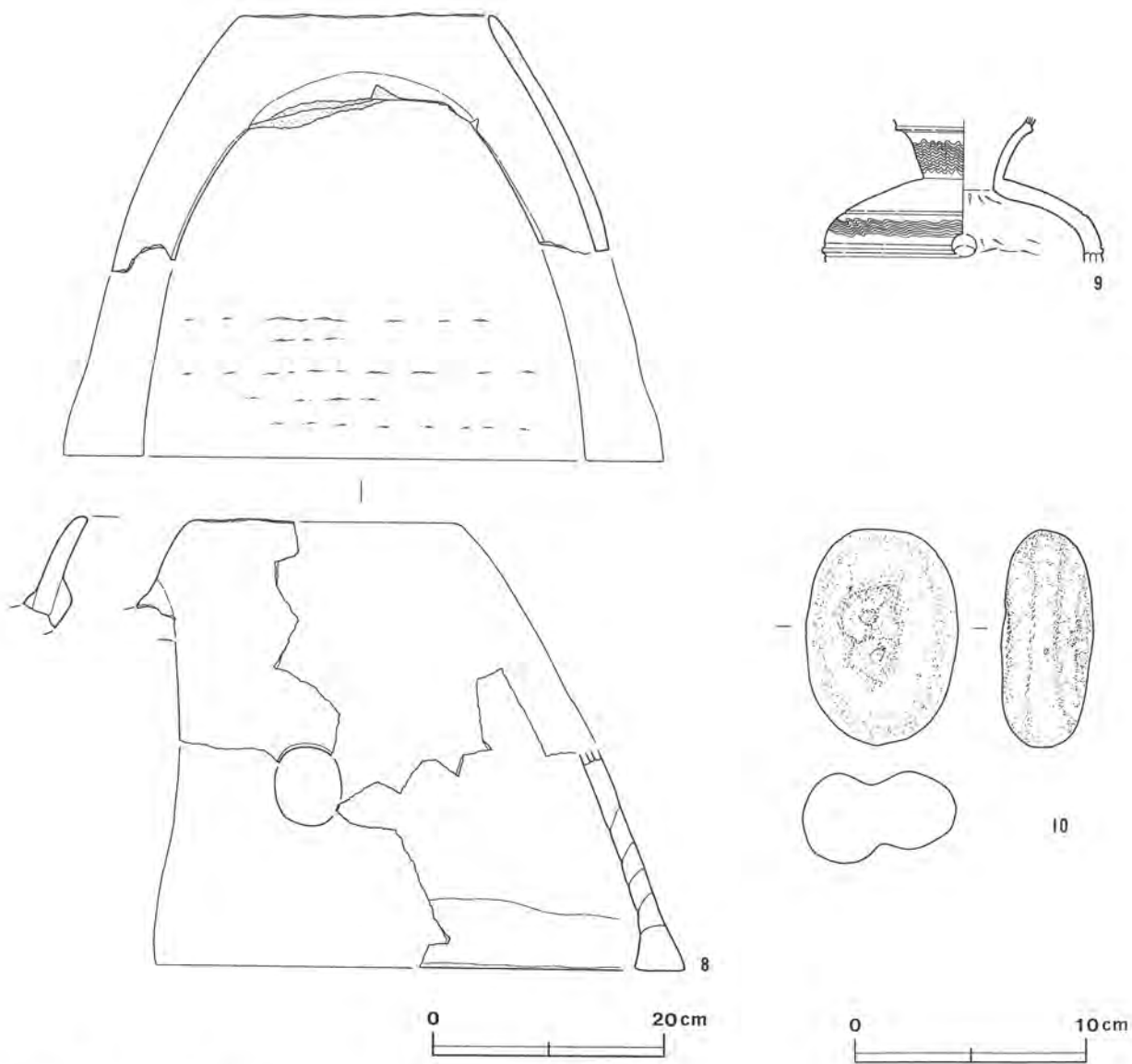
遺物包含層出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	甕 土師器	A 13.6 B 24.7 C 8.6	平底で、底部は突出する。体部は球形で、最大径は体部中位にある。頸部は外反し、口縁部に至る。	体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・スコリア 橙色 普通	P213 95% 第II b層
2	甕 土師器	A[16.2] B(24.3)	口縁部から体部の破片。体部は球形で、頸部はほぼ直立する。頸部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 赤茶褐色 普通	P215 40% 第II b層
3	甕 土師器	A[20.4]	口縁部破片。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。口縁部端部は平坦である。	体部外面ハケ目。体部内面ヘラナデ 口縁部内・外面ハケ目。	長石・雲母 黒褐色 良好	P219 5% 第II b層
4	壺 土師器	A[18.1]	口縁部破片。頸部はわずかに外反し口縁部は有段口縁である。	頸部外面ハケ目。頸部内面ヘラナデ 口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 赤褐色 普通	P211 10% 第II b層
5	壺 土師器	B[ 9.0] C 3.9	口縁部から頸部欠損。体部はつぶれた倒卵形で、最大径は体部上位にある。	体部外面下半部ヘラ削り。体部内面ナデ。外面赤彩。	石英・長石 赤褐色 普通	P209 60% 第II b層
6	高 土師器 坏	A[16.6] B 9.4 C 11.5	坏体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。脚部は短い円錐形で「ハ」の字状に強く広がる。	坏体部外面ヘラ削り後、ナデ。口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラ削り。脚部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石 褐色 普通	P207 50% 第II b層



第122図 遺物包含層出土遺物(1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	坏土師器	A 14.8 B 6.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・スコリア 褐色 普通	P 202 95% 第II b層
第123図 8	置甕土師器	A[22.0] B[38.4] C[52.0]	体部は台形で、内傾して立ち上がる。口部上位に庇がつく。	体部外面ナデ。体部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石 褐色 普通	P 223 40% 第II b層
9	感須恵器	F 12.2	頸部から体部破片。体部の最大径は体部上位にあり、頸部は「く」の字状に外反する。	頸部と体部上位に櫛歯状工具に波状文を施している。	長石・スコリア 灰色 良好	P 433 30% 第II b層



第123図 遺物包含層(2)



### 3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡を3軒確認した。その内1軒はAとBに分けることができ、それを含めると4軒となる。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第1 A・B号住居跡 (第124図)

位置 調査区の西部, B3c<sub>0</sub>~B3d<sub>0</sub>区。

確認状況 遺構確認時に北側のAだけを確認する。Bは, Aの調査中に確認する。

重複関係 本跡は, 第1号土坑と第4号溝と重複する。本跡は, 第1号土坑の覆土上部を床面になっているため本跡が新しく, 第4号溝に掘り込まれているため本跡が古い。本跡はAとBからなり, AがBを掘り込んでいたためAが新しい。

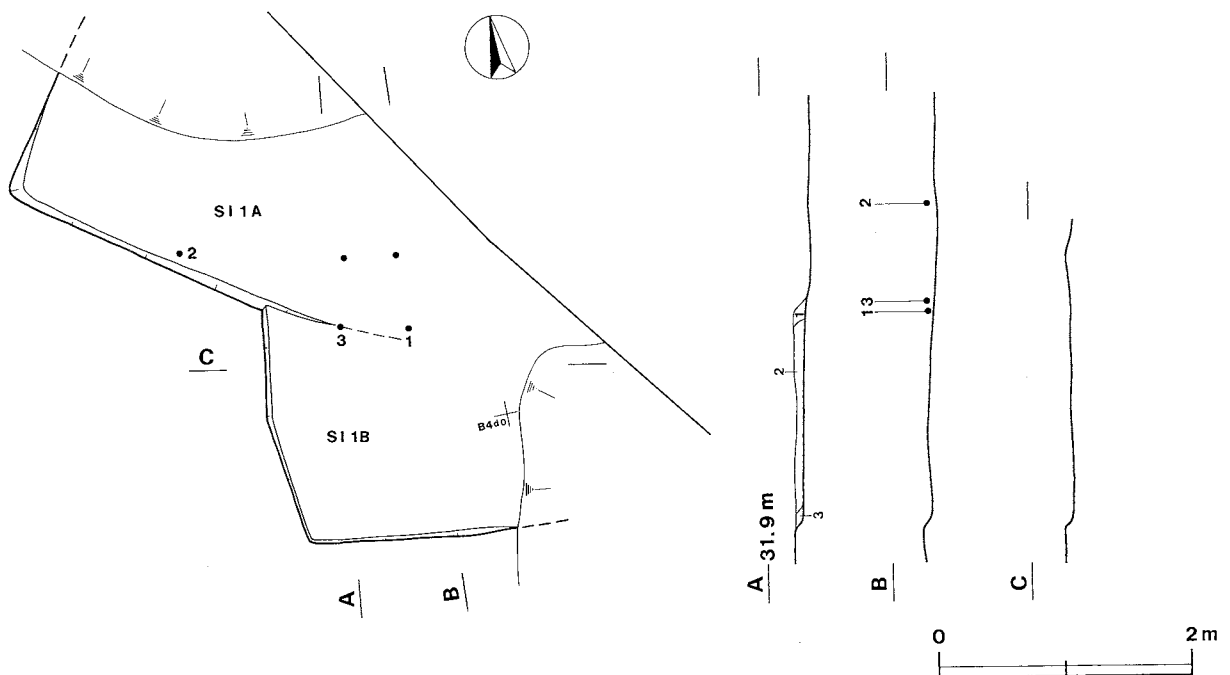
規模と平面形 AとBは, いずれも南西コーナー付近だけが残存するのみで規模は不明であるが, 長方形と推定される。

壁 AとBは, いずれも西壁と南壁の一部が残存し, 壁高は最大で11cmで傾斜して立ち上がる。

床 AとBは床面が一致し, いずれも平坦で踏み締まりは弱い。

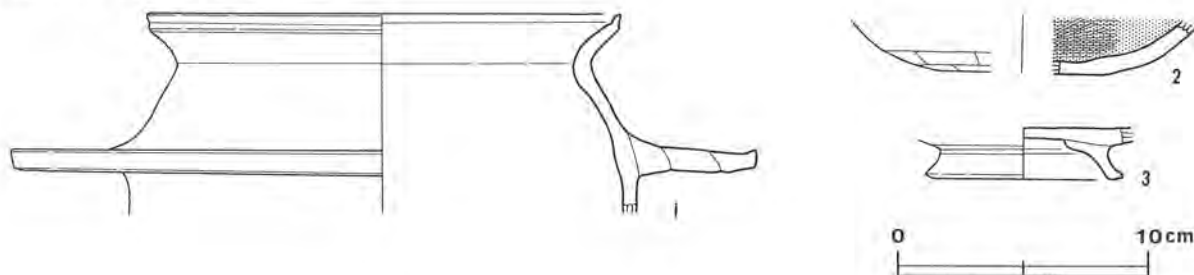
覆土 Aは1層からなる。第1層は, ローム粒を少量含む暗褐色土である。Bは3層からなる。第1層は, ローム粒を少量含む褐色土。第2層は, ローム粒を少量含む褐色土。第3層は, ローム粒を少量含む褐色土である。

遺物 本跡から, 弥生土器片1点, 土師器片187点, 須恵器片1点, 陶器片1点が出土している。Aからは, 第125図1の羽釜と2・3の坏が床面から出土している。Bからは遺物は出土していない。弥生土器片と陶器片は混入したものである。



第124図 第1号住居跡

所見 本跡は、AとBの2軒の住居跡が重複する遺構である。AとBは床面が一致することから、時期差が少ないことが考えられる。Aの時期は、第125図1の羽釜と2・3の坏が床面から出土していることから、9世紀後葉と考えられる。



第125図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	羽釜 土師器	A 19.0 B〔7.9〕	口縁部から頸部の破片。頸部は外反し、口縁端部は上方につまみ上げている。体部上位に鏝が付く。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・礫粒にぶい橙色 普通	P 4 20% 床面
2	坏 土師器	B〔2.2〕 C〔6.8〕	体部から底部破片。平底。	底部回転ヘラ切り。体部外面下端ヘラ削り。内面磨き。体部内面黒色処理。	長石・礫粒・スコリアにぶい橙色 普通	P 2 10% 床面
3	高台付坏 土師器	D〔7.9〕 E 1.3	底部破片。「ハ」の字状に開く高台が付く。	底部回転ヘラ切り。高台部内・外面横ナデ。	長石・雲母・スコリアにぶい褐色 普通	P 1 10% 床面

### 第17号住居跡（第126図）

位置 調査区の東部、C6h<sub>7</sub>区。

確認状況 遺構確認調査で、床面の一部を確認する。

重複関係 本跡は、第16号住居跡と重複する。第16号住居跡が本跡の覆土上を床面としているため、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.70m・短軸4.56mの隅丸方形である。

主軸方向 N-14°-E

壁 壁高は最大で17cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁と北壁の一部を除き、全周する。上幅8~28cm・下幅3~13cmで、床面からの深さは最大で10cmである。

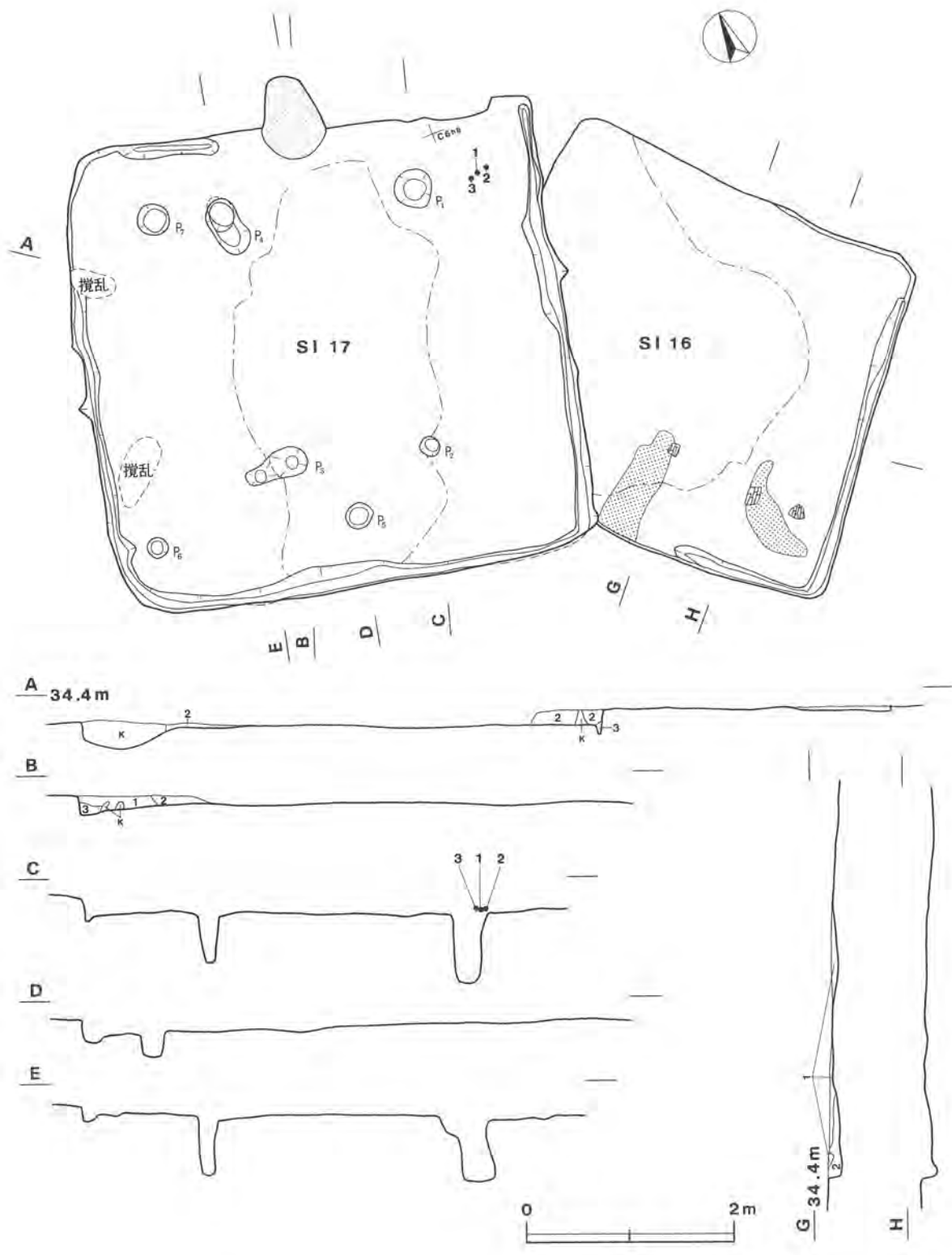
床 西側には攪乱があるが、平坦で中央部に踏み縮まりがある。

ピット 7ヶ所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径20~38cmの楕円形で、深さ45~68cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、規模や配置から支柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は平面形が瓢箪形で、柱穴を立て直している。P<sub>3</sub>は南壁寄り中央に位置し、径25~28cmの楕円形で、深さ26cmである。P<sub>5</sub>は、出入り口ピットと考えられる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は壁コーナー付近に位置し、径20~30cmの円形である。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は、補助柱穴と考えられる。

竈 火床部だけを確認し、遺存状態は不良である。火床面は床面と一致し、被熱範囲は火床面下10cmに及ぶ。

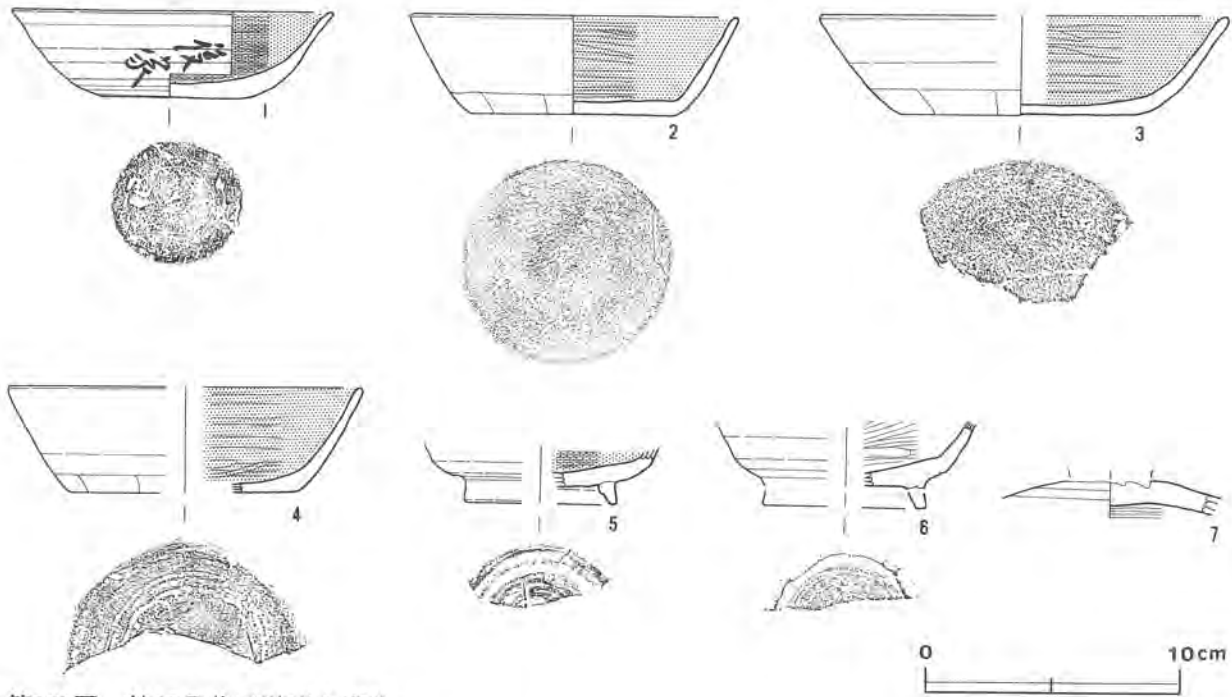
覆土 3層からなる。第1層は、ローム粒を多量に含む褐色土。第2層は、ローム粒を中量含む褐色土。第3層は、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片10点、土師器片109点、須恵器片10点が出土している。第127図1・2の坏は、北



第126図 第16・17号住居跡

東コーナー付近床面から正位の状態で出土している。3の坏は、1の坏の上に重ねた状態で出土している。  
 所見 本跡の時期は、第127図1・2の坏が床面から出土していることから、9世紀前葉と考えられる。



第127図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 1	坏 土師器	A 12.7 B 4.3 C 5.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	雲母・スコリア 橙色 普通	P8320% 体部横位墨書 床面
2	坏 土師器	A 13.1 B 4.1 C 8.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	礫粒・スコリア 橙色 普通	P84 60% 床面
3	坏 土師器	A [16.2] B 4.0 C 10.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	雲母・スコリア 橙色 普通	P85 30% 1の坏の上
4	坏 土師器	A [14.2] B 4.3 C [ 9.0]	口縁部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	石英・礫粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P86 20% 覆土
5	高台付坏 土師器	D 6.0 E 0.9	底部破片。平底に、短い高台が付く	底部回転ヘラ切り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	スコリア 橙色 普通	P87 10% 覆土
6	高台付坏 土師器	B ( 2.6)	底部破片。高台部欠損。平底に、短い高台が付く。	底部回転ヘラ切り。体部内面磨き。	雲母・礫粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P88 10% 覆土
7	蓋 土師器	A ( 7.2) B ( 1.1)	つまみ部付近の破片。つまみ部欠損。	くまみ部に凹み状の接合痕がある。内面磨き。	石英・礫粒・スコリア 明褐色 普通	P89 10% 覆土

第21号住居跡（第128図）

位置 調査区の東部，D6b<sub>7</sub>～D6c<sub>7</sub>区。

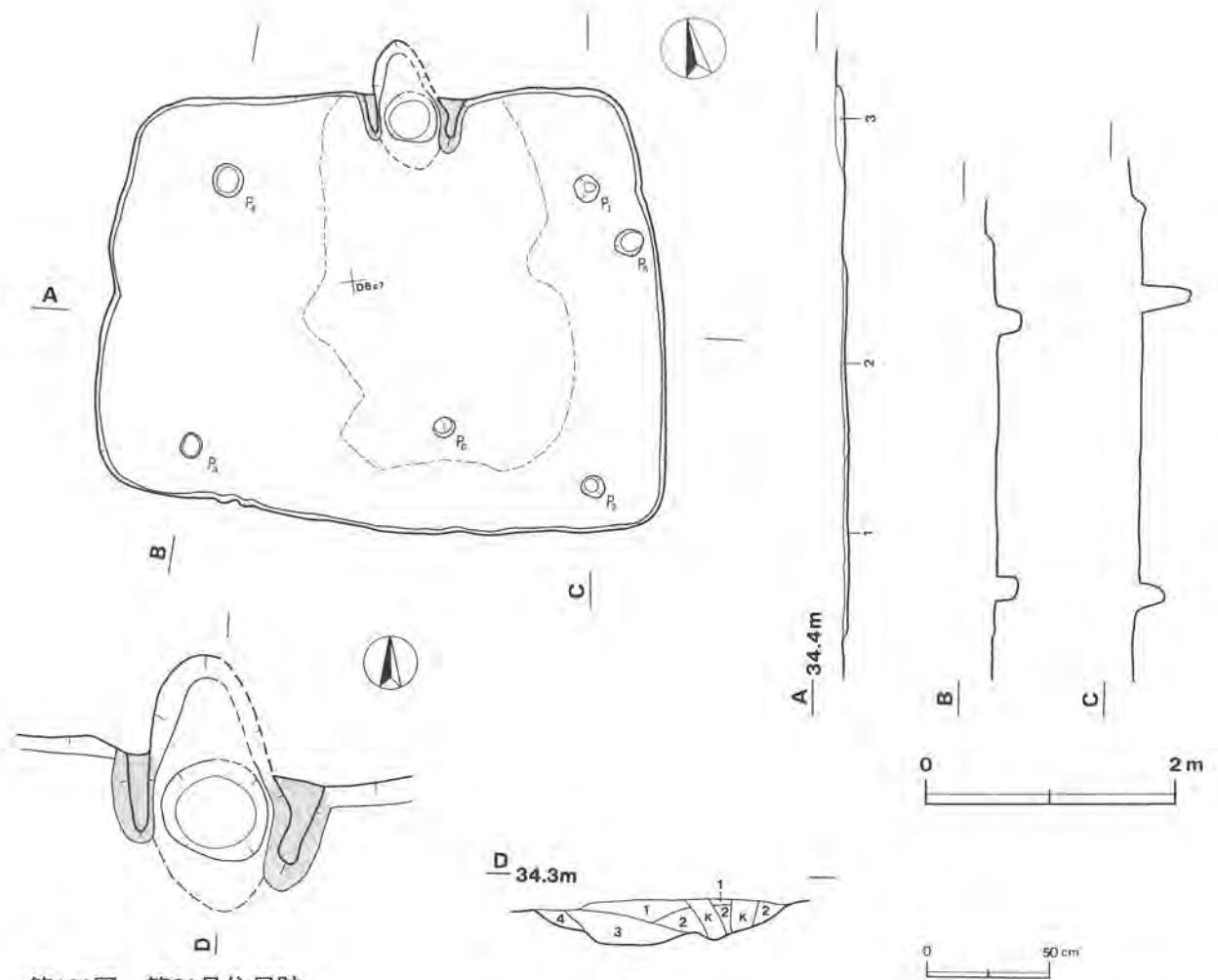
規模と平面形 長軸4.60m・短軸3.60mの隅丸長方形。

主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は最大で5cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部に踏み締まりがある。

ピット 6ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は、径18～28cmの楕円形で、深さ18～36cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は、規模や配置から支柱



第128図 第21号住居跡

穴と考えられる。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、径18~22cmの楕円形で、深さ10cmである。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は補助柱穴と考えられるが、壁寄り中央に位置するため出入り口ピットの可能性もある。

竈 北壁中央に付設され、竈下部だけが残存している。両袖は、砂粒を多量含む灰白色粘土で内傾して造っている。火床部は径44cmの円形で、床面から14cm掘りくぼめている。煙道は、壁外に44cm程突出させている。覆土は、4層からなる。第1層は、焼土粒・ローム粒・炭化物を中量含む暗褐色土。第2層は、焼土ブロック・焼土粒・ローム粒を中量含む暗褐色土。第3層は、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む黒褐色土。第4層は、焼土粒・ローム粒を多量含む褐色土である。

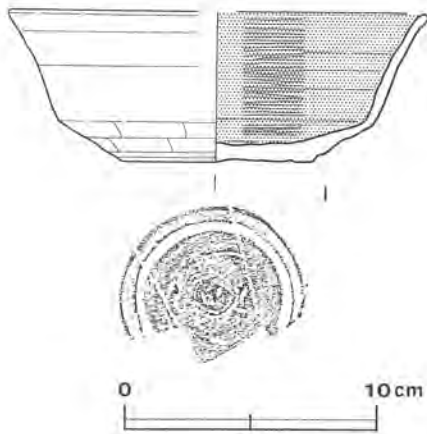
覆土 3層からなる。第1層は、ローム粒を中量、焼土粒を中量含む褐色土。第2層は、ローム粒を中量、焼土粒を少量含む褐色土。第3層は、ローム粒を中量含む暗褐色土である。

遺物 本跡から、弥生土器片4点、土師器片35点、須恵器3点が出土している。第129図1の坏は、覆土から出土している。弥生土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 1	坏 土師器	A [16.6] B 6.1	平底。体部下部に稜があり口縁部は外傾する。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部回転ヘラ削り。体部内面磨き。体部内面黒色処理。	雲母・スコリア 橙色 普通	P109 40% 覆土



第129図 第21号住居跡出土遺物

#### 4 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期不明の竪穴住居跡が5軒、土坑41基、溝3条が確認された。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

##### (1) 竪穴住居跡

##### 第9号住居跡（第130図）

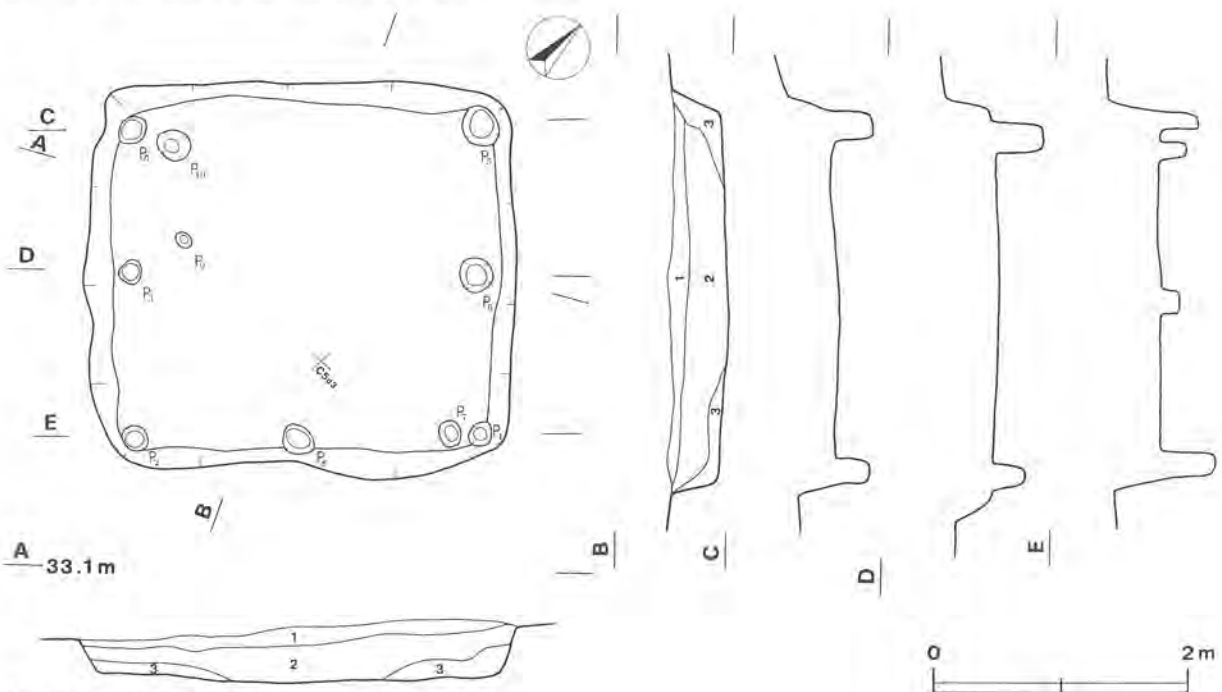
位置 調査区の中央部，C5c<sub>2</sub>～C5d<sub>2</sub>区。

規模と平面形 長軸3.42 m・短軸3.20 mの隅丸方形。

長軸方向 N-47°-E

壁 壁高は最大で40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、全体的に踏み締まりがある。



第130図 第9号住居跡

ピット 10ヶ所。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は、径18～30cmの楕円形で、深さ26～42cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は、主柱穴と考えられる。P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>は、径10～24cmの楕円形で、深さ14～22cmである。P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>は、補助柱穴と考えられる。

覆土 3層からなり、いずれもロームブロックと褐色土の混合土である。第3層は、粘性が強い。

遺物 本跡から、弥生土器片7点、土師器片120点、須恵器片1点が出土している。遺物はほとんどが小破片で、主に第1層からの出土である。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は形態から中世の竪穴住居跡と考えられるが、明確な時期は本跡に伴う遺物がないため不明である。

#### 第16号住居跡（第126図）

位置 調査区の東部、C6h<sub>3</sub>区。

確認状況 遺構確認調査で床面を確認する。

重複関係 本跡は、第17号住居跡と重複する。本跡は第17号住居跡覆土上面を床面としており、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.70m・短軸3.58mの隅丸方形である。

壁 北東壁の一部が残存している。壁高は、最大で4cmである。

壁溝 南東壁と南西壁下の一部に残存している。上幅8～18cm・下幅3～8cmで、深さ1～4cmである。

床 平坦であるが、踏み締まりは弱い。

覆土 2層からなる。第1層は、焼土粒・炭化物・ローム粒を多量含む暗褐色土。第2層は、ローム粒・焼土粒を少量含む褐色土である。南壁側の床面には、床面中央から放射状に炭化物及び焼土が堆積している。

遺物 本跡から、弥生土器片4点、土師器片31点、須恵器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、炭化物及び焼土の状況から焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、本跡に伴う遺物がないため不明である。

#### 第34号住居跡（第131図）

位置 調査区の中央部、B4j<sub>3</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。東側はトレンチ調査のため確認できなかった。本跡は、遺物包含層である第IIa層上面から掘り込んでいる。

重複関係 本跡は、第36号住居跡と重複する。本跡は第36号住居跡の覆土中を床面にしていることから、本跡が新しい。

規模と平面形 東西方向の長さは不明であるが、南北2.44mの長方形と推定される。

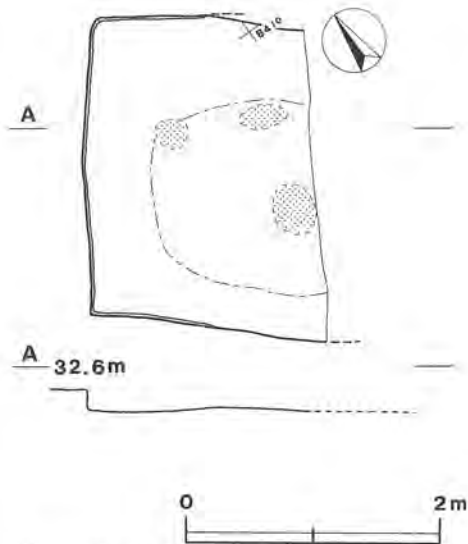
壁 壁高は最大で16cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部に踏み締まりがある。

炉 3ヶ所で、いずれも径24～42cmの楕円形である。炉床面は床面と一致し、赤変硬化している。覆土は、微量の焼土が堆積している。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、不明である。



第131図 第34号住居跡

第35号住居跡（第132図）

位置 調査区の中央部，C4b<sub>8</sub>区。

確認状況 遺物包含層のトレンチ調査で確認する。本跡は，遺物包含層である第II a層上面から掘り込んでいる。

重複関係 本跡は，第2・5号溝状遺構と重複している。本跡は第2・5号溝状遺構の覆土上を床面としているため，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸は推定で3.80 m・短軸2.64 mの長方形である。

主軸方向 N-54°-W

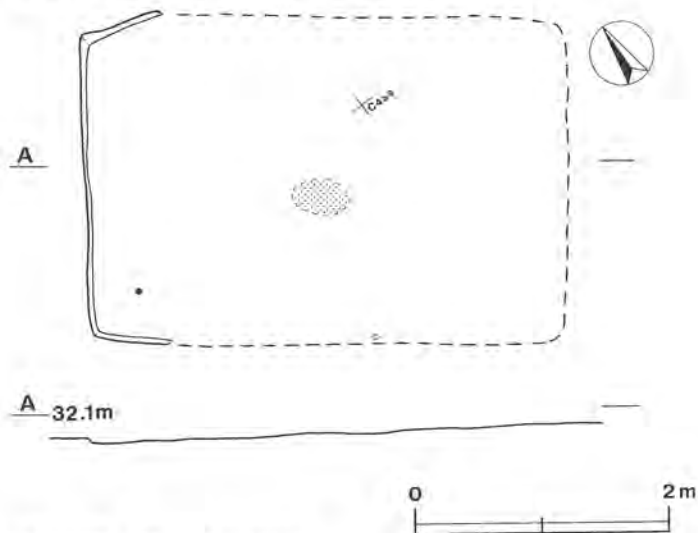
壁 壁高は，最大で5 cmである。

床 平坦であるが，踏み縮まりは弱い。

炉 床面中央に，1ヶ所ある。長径44cm・短径29cmの楕円形で，炉床面は床面と一致している。覆土は，微量の焼土が上面に堆積しているだけである。

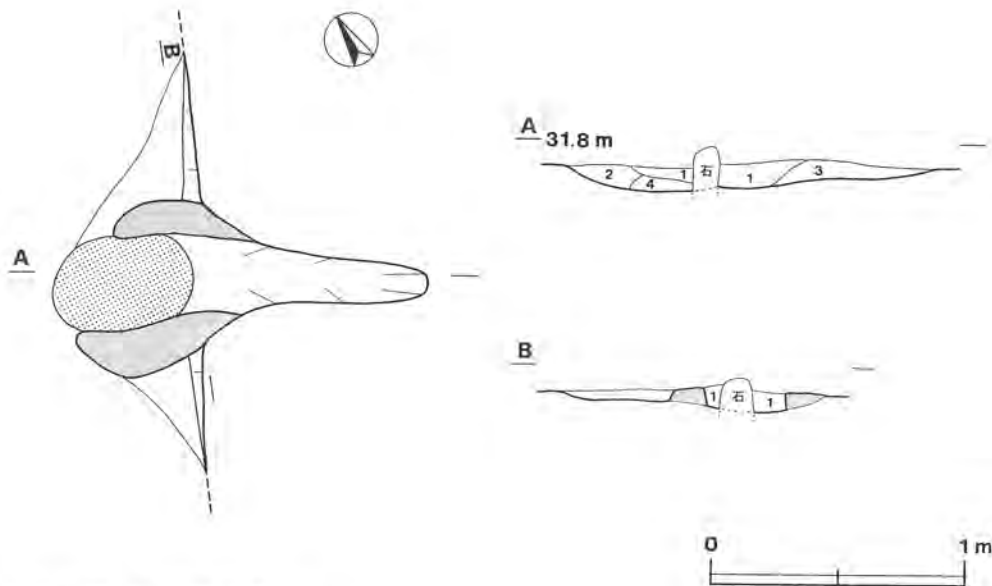
遺物 本跡から，土師器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は，不明である。



第132図 第35号住居跡





第133図 第40号住居跡

第40号住居跡（第133図）

位置 調査区の中央部，B4i<sub>s</sub>区。

確認状況 遺構確認調査で，竈下部だけを確認する。

重複関係 本跡は，第6号住居跡と重複する。本跡は第6号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

主軸方向 N-118°-E

壁 東壁の一部が残存している。壁高は，最大で3cmである。

竈 東壁に付設する。遺存状態は不良である。両袖は灰白色粘土で造られ，焚口の最大径は36cmである。火床面は床面より9cm掘りくぼめ，火床面奥部に支脚に利用したと考えられる円柱状の自然石を設置している。煙道は，壁外に約90cm突出させている。覆土は，4層からなる。第1層は，焼土ブロック・焼土を少量，炭化物を微量含む褐色土。第2層は，焼土粒・ローム粒を含む褐色土。第3層は，焼土ブロック・焼土粒を多量含む暗褐色土。第4層は，焼土ブロック・灰白色粘土ブロックを多量含む暗褐色土である。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は，不明である。

表3 八幡前遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設				伊・電	覆土	出土遺物	備考	
						床面	主柱穴	貯蔵穴	ピット					入口
2	B3d <sub>a</sub>	N-126°-E	不整形	4.58 × 4.20	10	平坦	-	-	-	-	1	自然	土師器	古墳(7世紀前葉) 第31号住居跡・第69号土坑と重複
3	B3d <sub>b</sub>	N-46°-W	長方形	[3.60] × 4.40	10	平坦	-	-	-	-	-	自然	土師器	古墳(6世紀前葉) 第8号土坑と重複
4	B3e <sub>9</sub>	N-112°-E	隅丸長方形	[4.20] × [3.60]	16	平坦	-	-	-	-	1	自然	土師器	古墳(7世紀前葉)
5	B4f <sub>3</sub>	-	[隅丸方形]	-	10	平坦	-	-	1	-	2	自然	土師器(置竈)	古墳(7世紀前葉)
6	B4j <sub>6</sub>	N-12°-W	隅丸長方形	10.20 × 7.30	36	平坦	4	1	-	1	1	自然	土師器, 支脚, 管玉	古墳(6世紀後葉) 第7・40号住居跡と重複
7	B4j <sub>6</sub>	N-2°-E	隅丸長方形	4.42 × 4.04	20	平坦	4	-	1	1	1	自然	土師器	古墳(6世紀末葉) 第6号住居跡と重複
8	C5b <sub>9</sub>	N-3°-W	隅丸長方形	3.66 × 2.76	11	平坦	-	-	1	-	-	自然	土師器	古墳(6世紀後葉)
11	C5e <sub>9</sub>	N-16°-E	[隅丸方形]	-	10	平坦	2	-	-	-	1	自然	土師器	古墳(5世紀末葉) 第12号住居跡と重複
12	C5f <sub>9</sub>	N-1°-E	[隅丸方形]	6.76 × -	16	平坦	3	-	-	-	1	自然	土師器	古墳(5世紀末葉) 第11・13号住居跡と重複
13	C5g <sub>9</sub>	N-18°-E	[隅丸長方形]	-	6	平坦	4	-	-	-	-	自然	土師器	古墳(5世紀末葉) 第12号住居跡と重複 焼失家屋

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				戸・竈	覆土	出土遺物	備考
							主柱	貯蔵穴	ピット	入口				
18	C6g <sub>3</sub>	—	[隅丸方形]	6.84 × —	7	平坦	—	—	1	—	—	自然	土師器	古墳(6世紀初頭) 北東側調査区外
19	C6j <sub>0</sub>	—	隅丸方形	[7.60] × —	10	平坦	3	—	—	—	—	自然	土師器, 須恵器(隠)	古墳(5世紀末葉) 東側調査区外
20	C6j <sub>1</sub>	N-4°-E	隅丸方形	[5.50] × —	4	平坦	3	1	—	—	1	自然	土師器	古墳(5世紀末葉)
22	C5j <sub>0</sub>	N-7°-E	隅丸方形	[6.18] × [5.74]	18	平坦	4	—	—	—	1	自然	土師器, 須恵器(隠)	古墳(5世紀末葉)
23	D5a <sub>8</sub>	N-37°-E	隅丸方形	[7.60] × —	10	平坦	4	—	—	—	1	自然		古墳(6世紀)
24	D5f <sub>0</sub>	—	隅丸方形	[4.30] × [4.30]	11	平坦	4	—	—	—	—	自然	土師器	古墳(5世紀末葉)
25	D6h <sub>1</sub>	—	隅丸方形	5.86 × 5.68	8	平坦	4	—	—	—	—	自然	土師器	古墳(5世紀)
27	C4a <sub>6</sub>	N-30°-E	方形	[3.10] × —	18	平坦	—	1	9	—	1	自然	土師器	古墳(7世紀前葉)
28	B4g <sub>2</sub>	—	隅丸方形	[5.60] × —	45	平坦	2	—	—	1	—	自然	土師器(置竈)	古墳(6世紀初頭) 第1号溝と重複
29	B4i <sub>3</sub>	—	隅丸方形	[6.0] × —	26	平坦	1	—	—	—	—	自然	土師器	古墳(6世紀後葉) 第37号住居跡と第1号竈穴遺構と重複
30	C5g <sub>3</sub>	N-10°-E	隅丸方形	6.50 × 6.0	36	平坦	4	1	1	—	1	自然	土師器(置竈)	古墳(6世紀前葉)
31	B3c <sub>0</sub>	N-22°-W	隅丸方形	5.72 × 5.48	40	平坦	4	1	—	—	1	自然	土師器, 羽口	古墳(6世紀後葉) 第2号住居跡と第19・66・67号土坑と重複
33	B3a <sub>6</sub>	—	隅丸方形	—	20	平坦	—	1	—	—	—	自然	土師器	古墳(5世紀末葉) 第6号溝と重複
36	B4j <sub>3</sub>	—	[隅丸方形]	—	10	平坦	2	1	—	—	—	自然	砥石, 銅鏝	古墳(後期) 第34号住居跡と第2号溝状遺構と重複
37	B4a <sub>1</sub>	N-17°-W	隅丸方形	[5.40] × —	29	平坦	—	—	—	—	1	自然	土師器	古墳(6世紀後葉) 第29号住居跡と第61・68号土坑と重複
39	B3e <sub>0</sub>	N-18°-E	隅丸方形	4.82 × 4.72	44	平坦	4	1	—	—	1	自然	土師器	古墳(6世紀前葉) 焼失家屋
1	B3c <sub>0</sub>	—	長方形	—	11	平坦	—	—	—	—	—	自然	土師器(羽釜)	平安(9世紀後葉) AとBが重複
17	C6h <sub>7</sub>	N-14°-W	隅丸方形	4.70 × 4.56	17	平坦	4	—	2	1	1	自然	土師器(墨書土器)	平安(9世紀前葉) 第16号住居跡と重複
21	D6b <sub>7</sub>	N-13°-E	隅丸長方形	4.60 × 3.60	5	平坦	4	—	2	—	1	自然	土師器	平安(9世紀前葉)
9	C5c <sub>0</sub>	N-47°-E	隅丸方形	3.42 × 3.20	40	平坦	6	—	4	—	—	自然		時期不明(中世か)
16	C6h <sub>8</sub>	—	隅丸方形	3.70 × 3.58	4	平坦	—	—	—	—	—	自然		時期不明 第17号住居跡と重複 焼失家屋
34	B4j <sub>3</sub>	—	[長方形]	— × [2.44]	16	平坦	—	—	—	—	3	自然		時期不明 第36号住居跡と重複
35	C4b <sub>8</sub>	—	長方形	[3.80] × 2.64	5	平坦	—	—	—	—	1	自然		時期不明 第2・5号溝状遺構と重複
40	B4i <sub>3</sub>	N-118°-E	—	—	3	—	—	—	—	—	1	自然		時期不明 第6号住居跡と重複

## (2) 土坑 (第134・135・136・137図)

今回の調査では、時期不明の土坑42基を確認した。土坑については、一覧表で記載する。第6・7・15・17・21・28・29・47・58土坑については、欠番である。

表4 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考
1	B4d <sub>1</sub>	N-55°-W	不整形	3.82 × 2.74	90	傾斜	平坦	自然	土坑が重複している可能性あり。
2	B3d <sub>0</sub>	—	不整形	2.78 × 2.50	20	傾斜	平坦	自然	
3	B4e <sub>1</sub>	N-44°-E	楕円形	1.88 × 1.42	22	傾斜	平坦	自然	
4	B4g <sub>3</sub>	N-53°-E	長楕円形	1.56 × 1.14	40	傾斜	鍋底	自然	
5	B4g <sub>5</sub>	—	楕円形	1.44 × 1.28	94	垂直	鍋底	自然	
9	B4i <sub>0</sub>	N-54°-W	長楕円形	1.44 × 0.64	36	垂直	平坦	自然	
10	B4j <sub>0</sub>	N-52°-W	長方形	1.62 × 0.68	52	垂直	平坦	自然	
11	C5c <sub>0</sub>	—	楕円形	1.66 × 1.50	42	垂直	平坦	自然	
12	C6f <sub>2</sub>	N-14°-E	長楕円形	2.10 × 1.55	22	傾斜	鍋底	自然	
13	C9f <sub>0</sub>	—	円形	0.84 × 0.80	27	傾斜	鍋底	自然	
14	C6g <sub>9</sub>	N-83°-W	楕円形	1.16 × 0.96	19	傾斜	鍋底	自然	S I 18を掘り込む。
16	B4j <sub>0</sub>	N-23°-E	長方形	2.56 × 1.12	67	垂直	平坦	人為	墓壇の可能性あり。
18	C5a <sub>1</sub>	N-40°-E	長方形	1.90 × 1.08	48	垂直	平坦	人為	墓壇の可能性あり。
25	C5e <sub>0</sub>	—	楕円形	2.18 × 2.04	22	傾斜	平坦	自然	
26	C5e <sub>7</sub>	N-78°-W	楕円形	1.08 × 0.70	24	傾斜	平坦	自然	

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考
27	C5f <sub>8</sub>	—	楕円形	1.78 × 1.72	16	傾斜	平坦	自然	
31	C5e <sub>0</sub>	N-3°-W	楕円形	0.78 × 0.58	16	傾斜	平坦	自然	
32	C5f <sub>9</sub>	—	楕円形	1.42 × 1.20	18	傾斜	平坦	自然	
33	D5b <sub>0</sub>	—	楕円形	2.02 × 1.76	40	傾斜	平坦	自然	
34	C6f <sub>3</sub>	—	円形	2.23 × 2.18	30	傾斜	平坦	自然	
38	C6i <sub>3</sub>	N-48°-E	楕円形	1.86 × 1.47	23	垂直	平坦	自然	
39	C6i <sub>4</sub>	N-67°-W	長楕円形	1.32 × 0.86	30	傾斜	平坦	自然	
40	C6i <sub>4</sub>	—	楕円形	0.76 × 0.66	14	傾斜	鍋底	自然	
41	C6h <sub>4</sub>	—	楕円形	1.05 × 0.98	30	傾斜	平坦	自然	
42	C6h <sub>5</sub>	—	楕円形	0.84 × 0.72	16	傾斜	平坦	自然	
43	C6g <sub>5</sub>	—	楕円形	2.12 × 2.08	24	傾斜	平坦	自然	
44	D6f <sub>3</sub>	N-72°-W	不整形	2.74 × 2.00	22	傾斜	平坦	自然	S K 72と重複。
48	C6j <sub>7</sub>	—	円形	1.98 × 1.80	26	傾斜	鍋底	自然	
49	C6j <sub>8</sub>	—	方形	2.32 × 2.14	46	傾斜	平坦	自然	S K 60を切る。底面が踏み縮まる。
50	D6b <sub>5</sub>	—	方形	2.76 × 2.48	32	傾斜	平坦	自然	
51	D6b <sub>5</sub>	N-78°-E	長方形	2.82 × 2.40	42	傾斜	平坦	自然	底面が踏み縮まる。
53	D6f <sub>3</sub>	N-22°-W	不整形	2.58 × 2.10	28	傾斜	平坦	自然	
54	D6i <sub>5</sub>	N-6°-E	長楕円形	2.36 × 0.76	21	傾斜	鍋底	自然	
55	D6i <sub>5</sub>	N-42°-E	楕円形	0.78 × 0.66	22	傾斜	鍋底	自然	
57	C6j <sub>9</sub>	—	楕円形	1.16 × 1.08	26	傾斜	平坦	自然	S I 19を掘り込む。
60	C6j <sub>5</sub>	—	方形	2.20 × (2.14)	40	傾斜	平坦	自然	S K 49と重複。底面が踏み縮まる。
63	C6j <sub>4</sub>	N-48°-W	楕円形	1.82 × 1.56	38	傾斜	平坦	自然	
64	C5j <sub>5</sub>	—	円形	2.36 × 2.24	30	傾斜	平坦	自然	
65	C6h <sub>8</sub>	N-9°-E	長楕円形	1.58 × 0.94	46	傾斜	平坦	自然	
68	C4a <sub>4</sub>	N-48°-W	楕円形	4.18 × 3.64	28	傾斜	平坦	自然	S I 37を掘り込む。
70	C5j <sub>5</sub>	N-14°-W	楕円形	3.20 × 2.38	26	傾斜	平坦	自然	
72	D6e <sub>2</sub>	N-16°-E	長方形	(1.30) × 0.86	24	傾斜	平坦	自然	S K 44と重複。

土坑土層解説

第1号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・焼土粒・炭化物少量
- 2 褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 褐色 粘土粒・焼土粒・炭化物少量
- 4 褐色 粘土粒中量, ローム粒・焼土粒少量
- 5 褐色 粘土粒中量, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化物微量

第2号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量
- 2 黒褐色 ローム粒微量
- 3 暗褐色 ローム粒少量
- 4 極暗褐色 ローム粒少量
- 5 極暗褐色 ローム粒微量

第3号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒多量

第9号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒多量, ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒多量

第10号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量
- 2 褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 4 明褐色 ローム粒多量

第11号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒中量
- 4 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量

第14号土坑

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒・炭化物少量
- 2 明褐色 ローム粒・ロームブロック多量

第16号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・砂粒多量
- 3 褐色 ロームブロック・砂粒多量

第25号土坑

- 1 褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒・粘土粒・炭化物少量
- 4 明褐色 ローム粒多量, ロームブロック少量

第26号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・焼土粒・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒・炭化物少量
- 3 褐色 ローム粒少量, 焼土粒微量

第27号土坑

- 1 褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 2 明褐色 ローム粒多量

第32号土坑

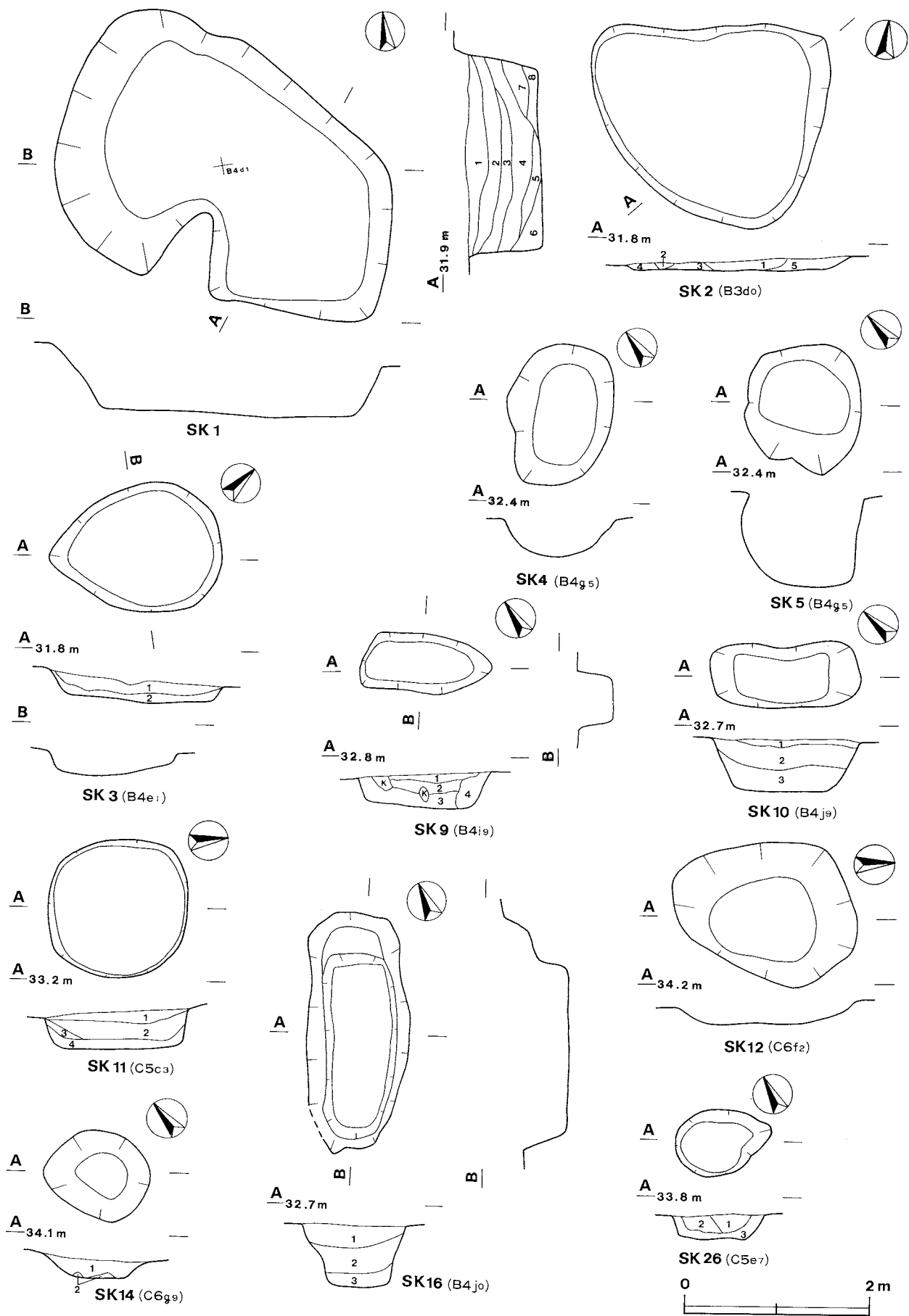
- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒少量
- 4 明褐色 ローム粒多量

第33号土坑

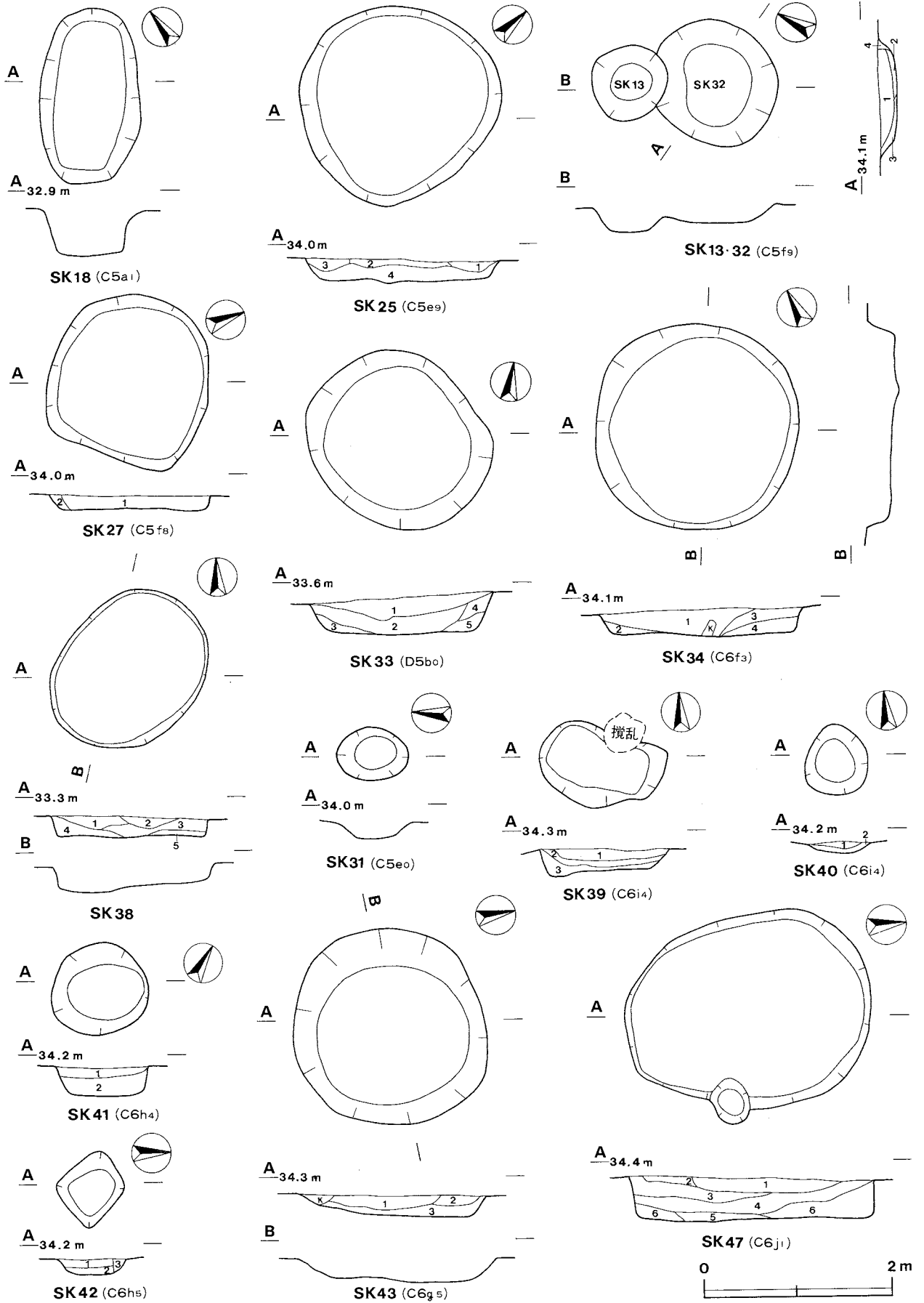
- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒中量, 炭化物少量
- 3 明褐色 ローム粒多量
- 4 極暗褐色 ローム粒少量
- 5 褐色 ローム粒中量

第34号土坑

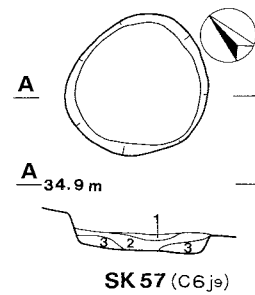
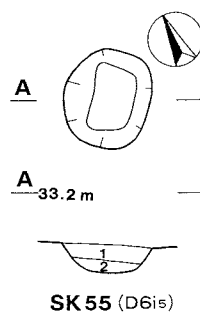
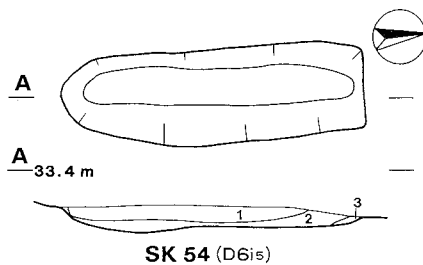
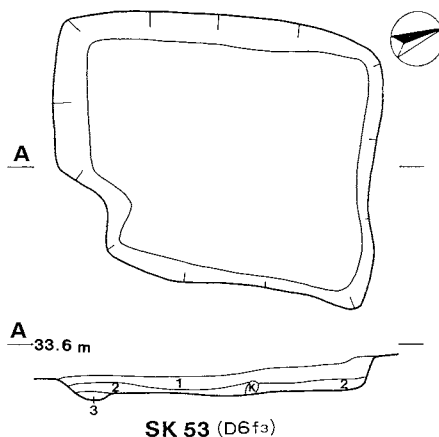
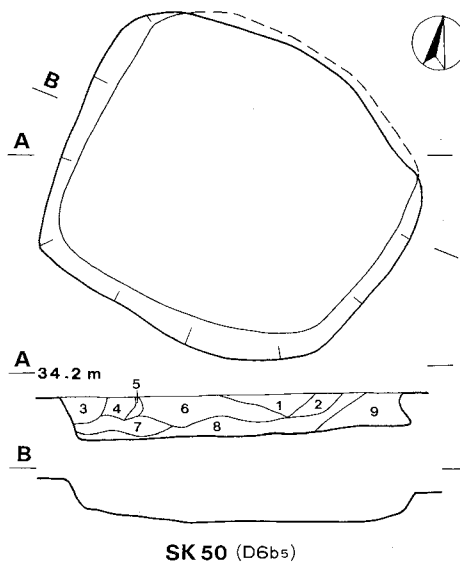
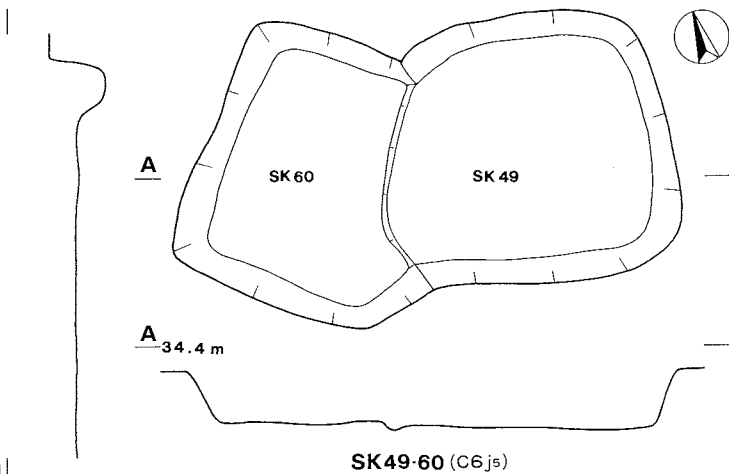
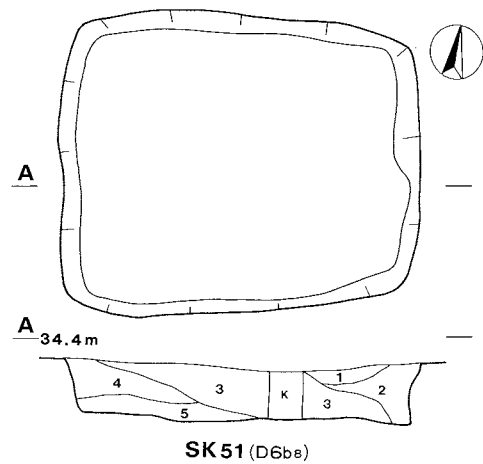
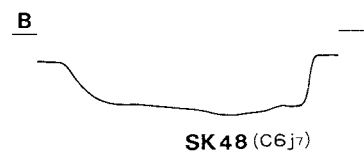
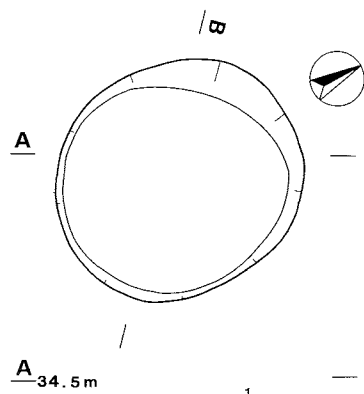
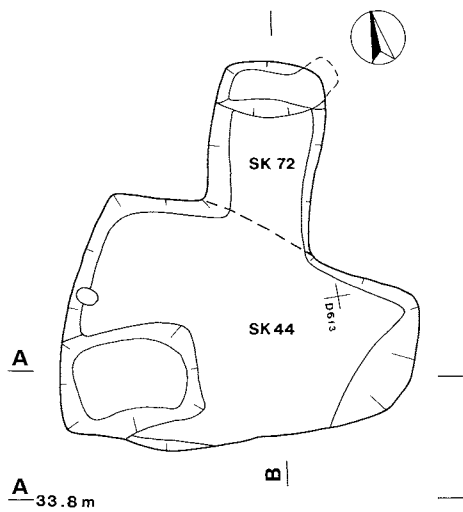
- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒中量, ロームブロック・鹿沼バミス少量
- 4 暗褐色 ローム粒中量



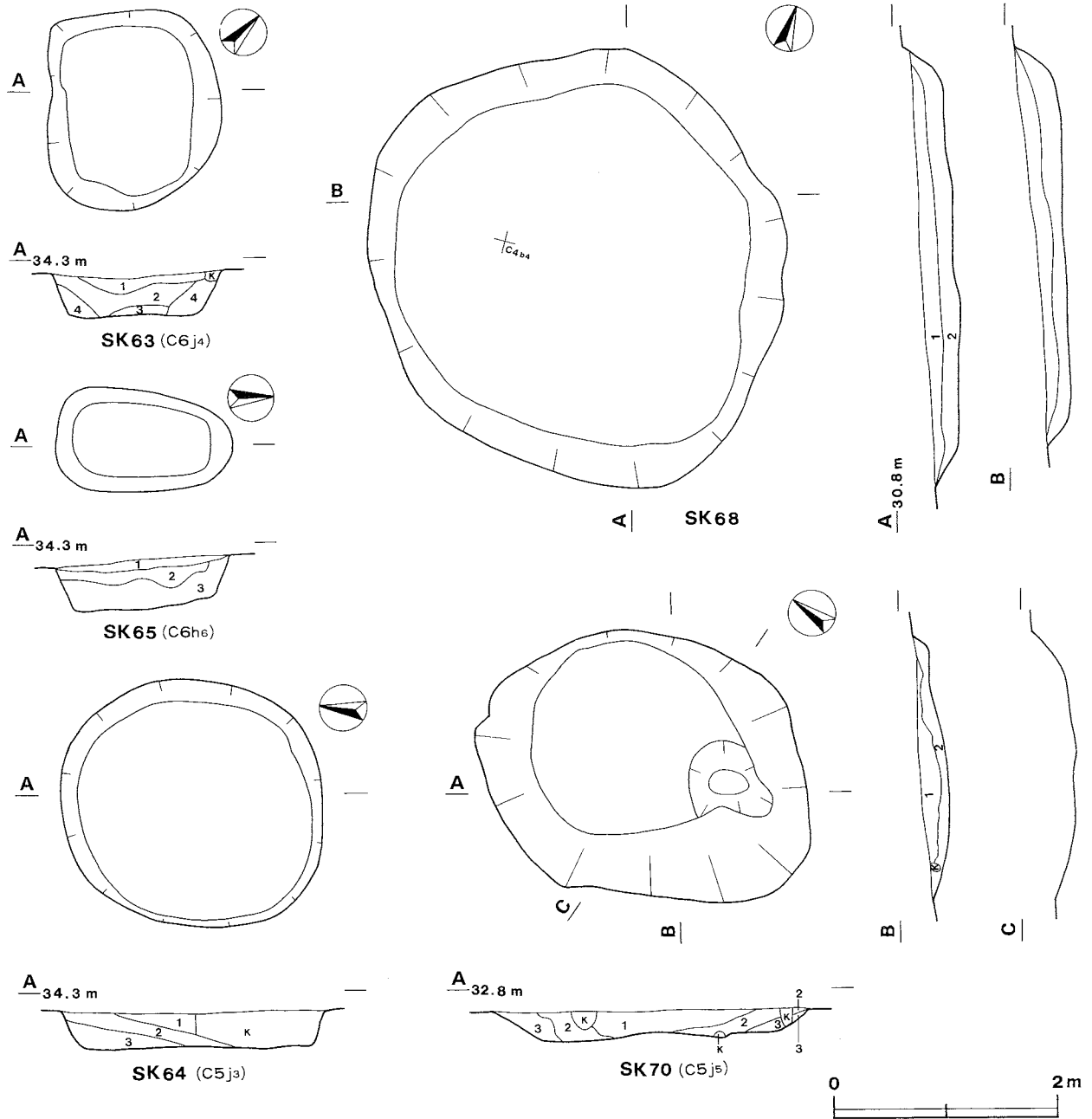
第134图 土坑(1)



第135图 土坑(2)



第136图 土坑(3)



第137図 土坑(4)

第38号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒少量
- 4 暗褐色 ローム粒少量
- 5 明褐色 ローム粒多量

第39号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒・粘土粒少量
- 3 褐色 ローム粒中量

第40号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒中量
- 2 明褐色 ローム粒多量

第41号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒中量
- 2 明褐色 ローム粒多量, 鹿沼バミス中量

第42号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 3 明褐色 ローム粒多量

第43号土坑

- 1 褐色 ローム粒・ロームブロック多量
- 2 褐色 ローム粒・ロームブロック多量
- 3 褐色 ローム粒多量, ロームブロック中量, 炭化物少量

第48号土坑

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, ローム粒少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック多量, ローム粒中量
- 3 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多量
- 4 明褐色 ローム粒多量

第50号土坑

- 1 褐色 ローム粒中量
- 2 褐色 ローム粒少量
- 3 明褐色 ローム粒多量
- 4 褐色 ローム粒多量
- 5 褐色 ローム粒中量
- 6 褐色 ローム粒多量, 焼土粒・炭化物微量
- 7 明褐色 ローム粒多量, ロームブロック少量
- 8 褐色 ローム粒多量
- 9 褐色 ローム粒多量

第51号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒多量, ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒・ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒・ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒・ロームブロック多量

第53号土坑

- 1 褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒中量, 炭化物少量
- 3 明褐色 ローム粒多量

第54号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 3 明褐色 ローム粒多量

第55号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック・粘土粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒・粘土粒中量

第57号土坑

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, ローム粒少量
- 2 褐色 ロームブロック多量, ローム粒少量
- 3 褐色 ローム粒・ロームブロック中量

第63号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒中量
- 4 暗褐色 ローム粒少量

第64号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒中量, ロームブロック・炭化物
- 3 暗褐色 ローム粒中量, ロームブロック少量

第65号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色 炭化物中量, ローム粒・ロームブロック
- 3 褐色 ローム粒・ロームブロック中量

第68号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量
- 2 褐色 ローム粒少量

第70号土坑

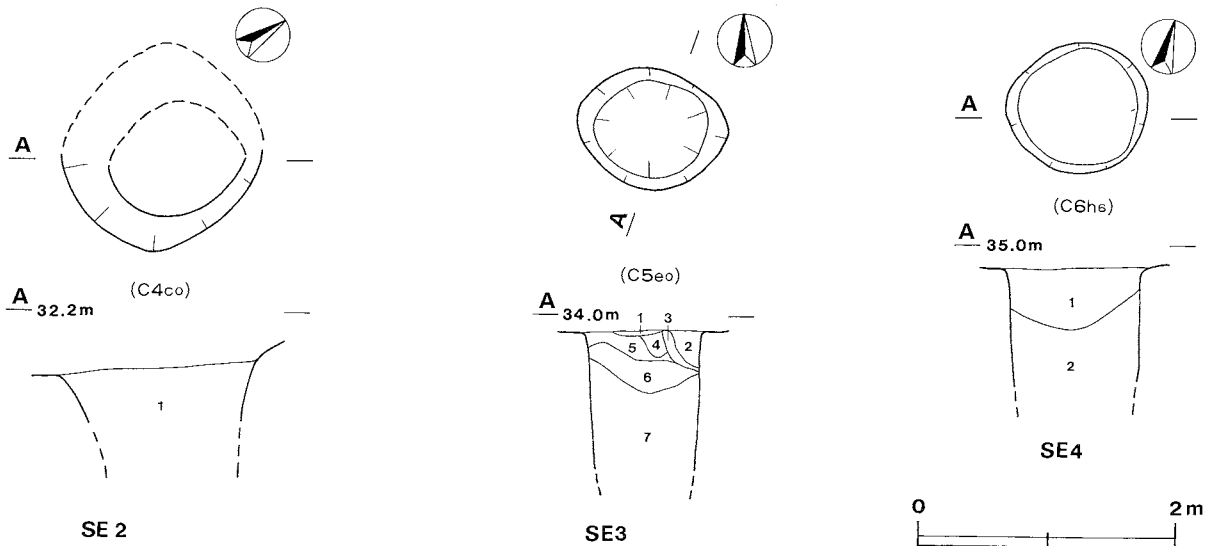
- 1 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多量

(3) 井戸

今回の調査では、時期不明の井戸3基を確認した。井戸については、一覧表で記載する。

表5 井戸一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考
2	C4c <sub>0</sub>	—	楕円形	1.54 × 1.40	不明	垂直	不明	自然	
3	C5e <sub>0</sub>	—	楕円形	1.20 × 0.96	不明	垂直	不明	自然	
4	C6h <sub>0</sub>	—	楕円形	1.12 × 1.04	不明	垂直	不明	自然	



第138図 井戸

井戸土層解説

第2号井戸

- 1 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量

第3号井戸

- 1 褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒多量
- 3 暗褐色 ローム粒中量, 焼土粒・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒少量, 焼土粒・炭化物微量
- 5 極暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒・ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒少量

第4号井戸

- 1 黒褐色 粘土粒・粘土ブロック中量, ローム粒・炭化物少量
- 2 極暗褐色 粘土粒・粘土ブロック・砂粒多量, ローム粒少量



#### (4) 溝

今回の調査では、時期不明の溝3条を確認した。以下、確認した遺構について記載する。

##### 第1号溝（第31・139図）

位置 調査区の西部，B3i<sub>9</sub>～B4e<sub>2</sub>区。

確認状況 本跡は遺構確認調査時にひとつの遺構と考えたが，東側のAと西側のBに分けることができる。

重複関係 本跡は第5・28号住居跡と重複する。本跡は第5・28号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

AとBについては，AがBを掘り込んでおりAが新しい。

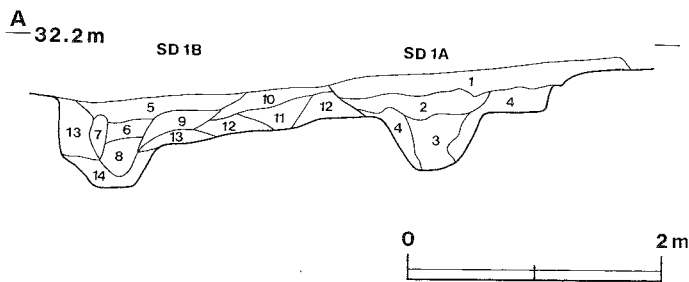
規模と形状 全長25mで，北側は調査区外に延びている。AとBを合わせた最大幅は4.0mで，Aの幅は0.5～1.3m，Bの幅は0.8～1.6mである。深さは最大で80cmで，南側になるにつれ浅くなる。断面形は「U」字状である。

方向 Aは，B3i<sub>9</sub>区から北東方向（N-42°-E）に延びている。Bは，B3h<sub>9</sub>区から北東方向（N-42°-E）に延び，B4e<sub>2</sub>区で北西方向（N-38°-W）に屈折している。

覆土 Aは4層（第1～4層），Bは10層（第5～14層）からなる。第1層は，ロームブロックを中量，ローム粒・炭化物を少量含む灰褐色土。第2層は，ローム粒・礫粒。炭化物を中量含む褐色土。第3層は，ローム粒・ロームブロックを中量含む暗褐色土。第4層は，砂粒・粘土ブロックを中量含む灰褐色土。第5層は，ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む灰褐色土。第6層は，ローム粒・礫粒・炭化物を少量含む暗褐色土。第7層は，砂粒を中量，ローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土。第8層は，ローム粒・ロームブロックを中量，炭化物を少量含む暗褐色土。第9層は，ローム粒・砂粒を中量，炭化物を少量含む褐色土。第10層は，小礫・砂粒を多量，ローム粒を少量含むにぶい褐色土。第11層は，小礫・砂粒を中量，ローム粒を少量含む灰褐色土。第12層は，小礫・砂粒を多量，ローム粒を中量含む明褐色土である。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は，不明である。本跡は，形態から道路状遺構の可能性もある。



第139図 第1号溝

##### 第4号溝（第31図）

位置 調査区の西部，B3b<sub>9</sub>～B3b<sub>0</sub>区。

重複関係 本跡は，第1号住居跡と重複する。本跡は第1号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と形状 本跡の大部分は調査区外にあるため，規模は不明である。深さは最大で50cmで，断面形は「U」字状である。

方向 B3c<sub>6</sub>区から南西方向（N-63°-W）に延びている。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については、不明である。

#### 第6号溝（第31・78図）

位置 調査区の西部，B3a<sub>7</sub>区。

重複関係 本跡は、第33号住居跡と重複する。本跡は第33号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と形状 本跡の大部分は調査区外にあるため、規模は不明である。深さは最大で110cmで、断面形は緩やかな「U」字状である。

方向 B3a<sub>7</sub>区から北東方向（N-63°-E）に延びている。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については、不明である。

#### (5) 焼土遺構

今回の調査では、時期不明の焼土遺構1基を確認した。以下、確認した遺構について記載する。

#### 第1号焼土遺構（第140図）

位置 調査区の中央部，C5e<sub>1</sub>区。

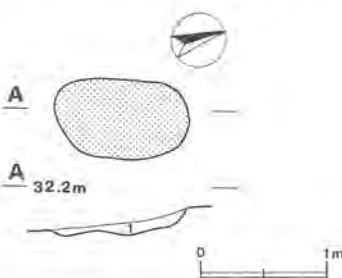
確認状況 遺物包含層である第II b層上面で確認する。

規模と平面形 長径1.10 m・短径0.63 mの楕円形。

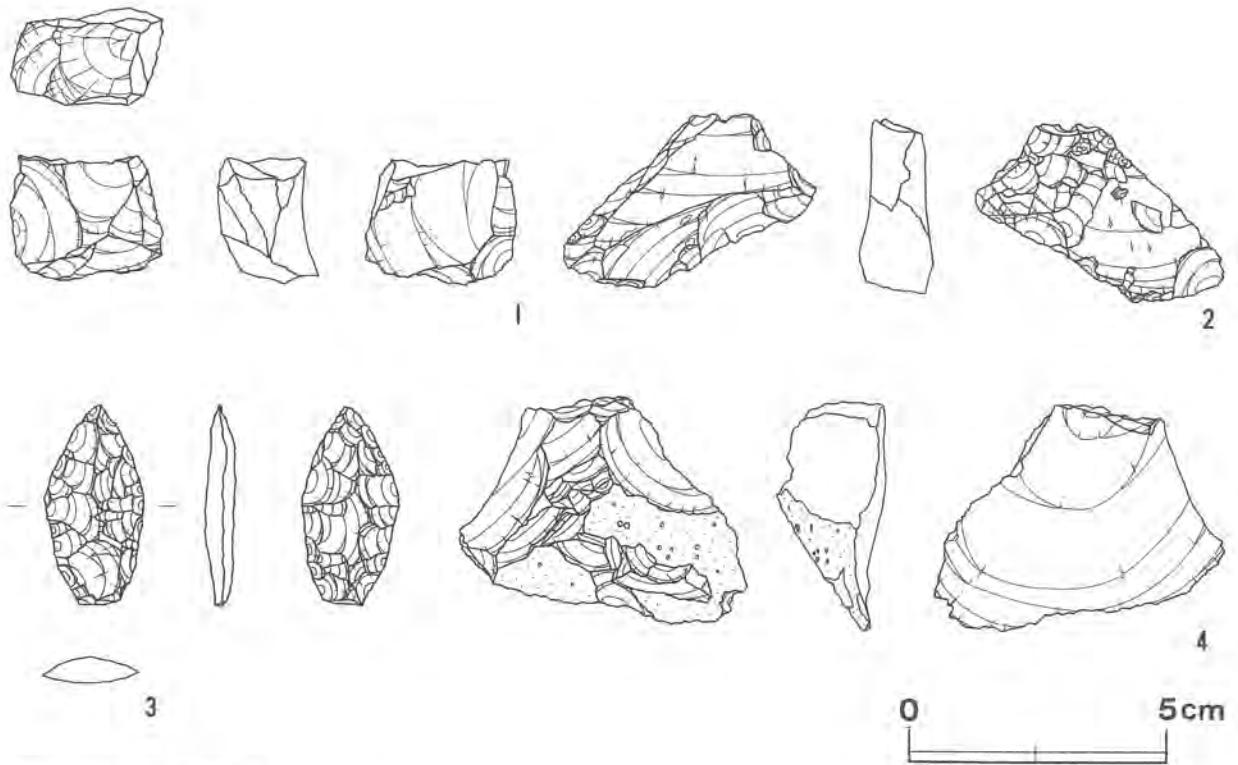
覆土 1層からなる。第1層は、焼土ブロック・焼土粒を多量、炭化物・骨片を少量含む暗赤褐色土で、最大10cmの厚さで堆積している。骨片は、細片で遺存状態が不良であるため、同定できなかった。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期や性格については、不明である。



第140図 第1号焼土遺構



第141図 遺構外出土遺物(1)

### 5 遺構外出土遺物

本跡からは、遺構外から旧石器時代から中世にかけての遺物が出土している。出土遺物は、遺構の覆土に流れ込んだと判断できたものは遺構外に含め、時代ごとに掲載した。

#### 旧石器時代（第141図1～4）

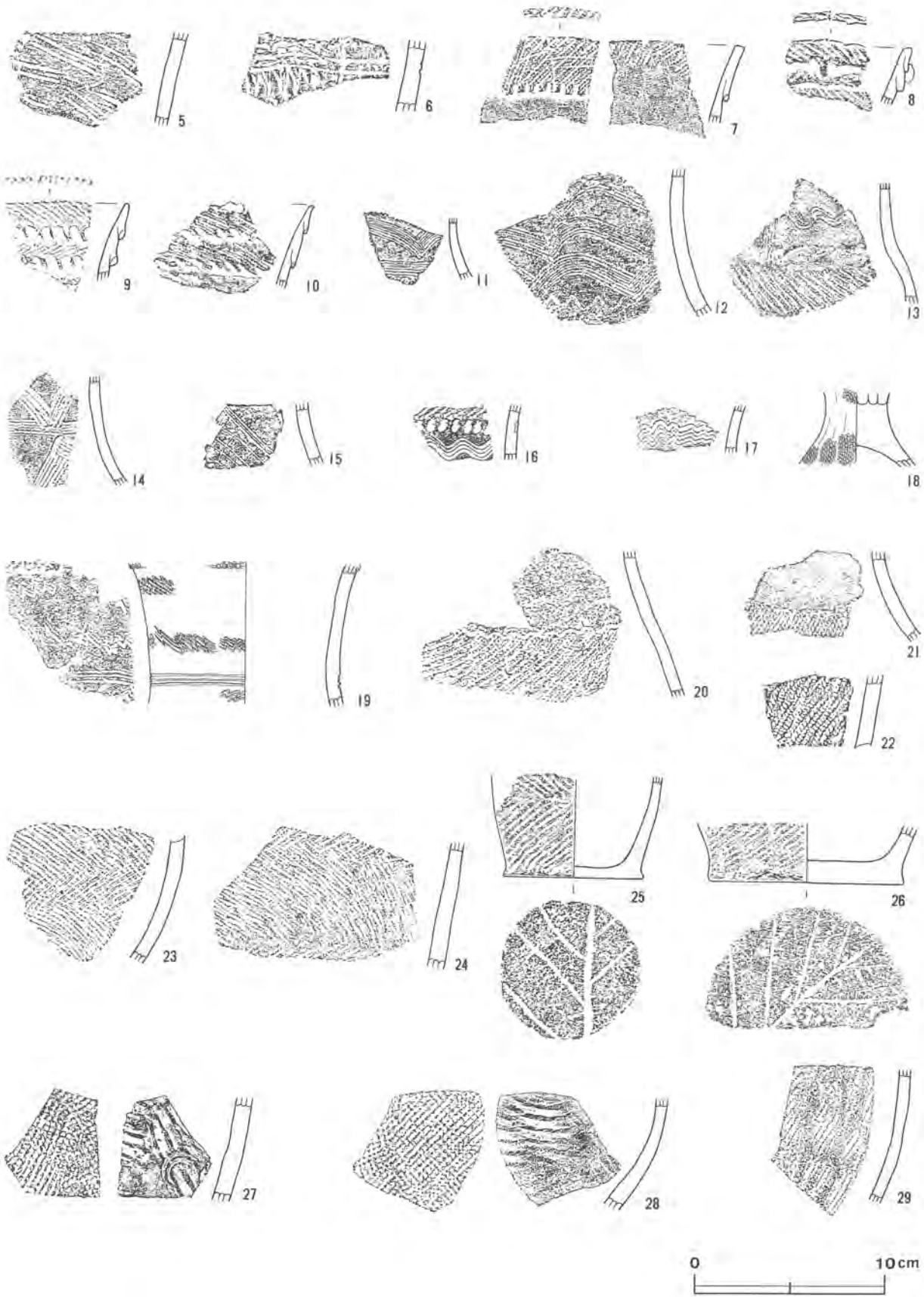
1は、石核である。石材は頁岩で、礫の節理面を調整して打面を作り出している。剥片剥離は、打面側と側縁から行っている。2は、2次加工のある剥片である。石材は黒曜石で、横長剥片を素材にしている。2次加工は裏面の左側縁を抉状に調整している。3は、尖頭器である。石材はチャートで、器長に対して器幅がある。押圧剥離による両面調整を施している。4は、円礫を素材とする剥片である。石材はメノウで、表面に残された打撃方向は裏面と一致する。

#### 縄文時代（第142図5・6）

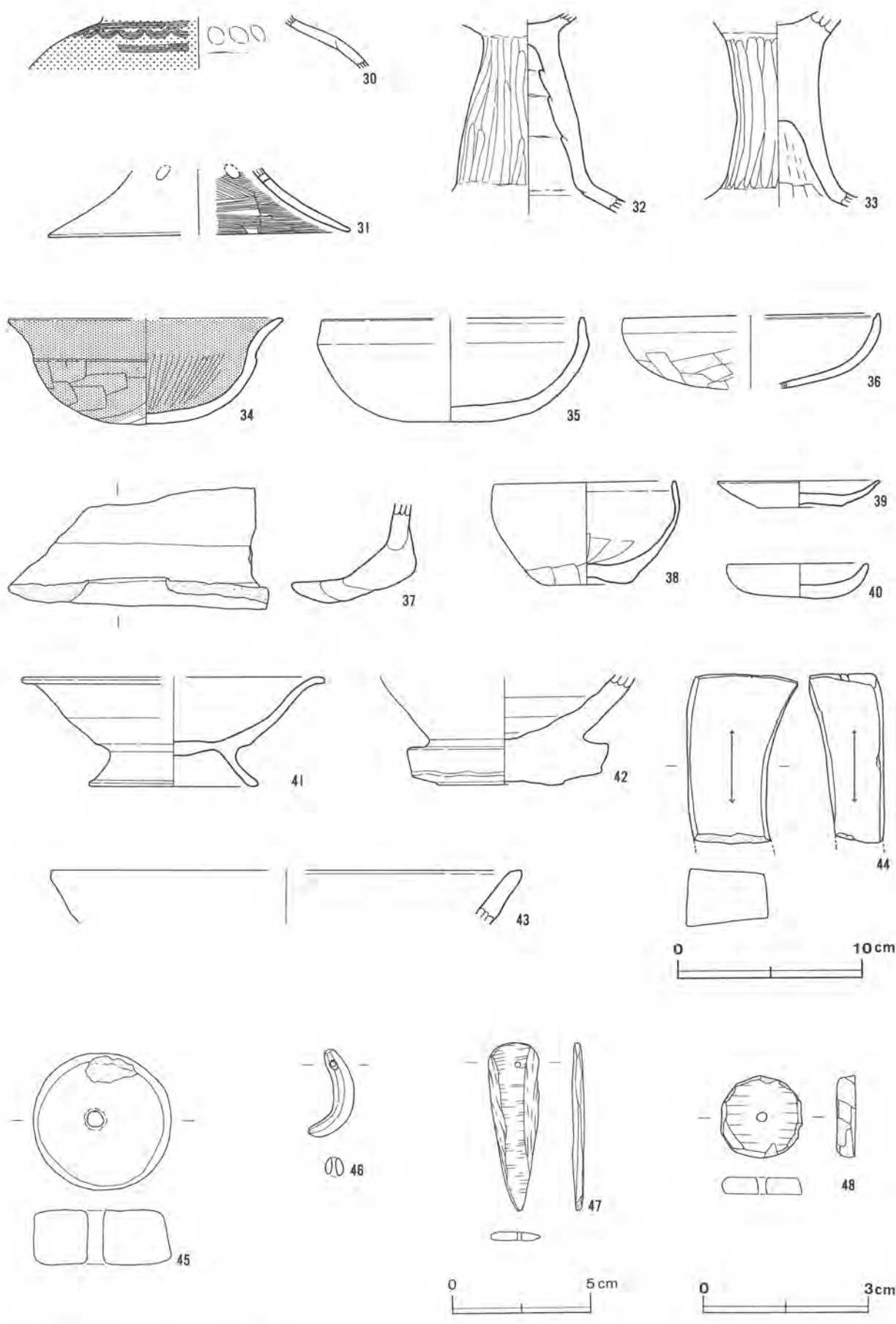
5と6は前期後葉の土器である。5は、半截竹管の凹面で短い平行沈線を施している。6は平行沈線を施文後、肋のない貝殻腹縁による鋸歯状文を施している。5は浮島I式土器、6は浮島II式土器である。

#### 弥生時代（第142図7～26、第143図45）

7～15は、口縁部が複合口縁となる後期中葉の土器である。7は、附加条1種（附加2条）の縄文で口縁部と内面上端部に施している。複合口縁の段部には刺突状の刻みを施している。8～10は、2段の複合口縁となるものである。8は口縁部の段部に突起状の貼瘤をつけ、9・10は段部に刺突状の刻みを施している。11～15は頸部破片で、櫛歯状工具で文様を施すものである。11・12は連弧文を施している。13は縦位の区画後、波



第142図 遺構外出土遺物(2)



第143図 遺構外出土遺物(3)

状文を施している。14は横位に区画後、山形文を施している。15は、1本単位の細沈線で文様を施すものである。平行沈線の区画内に格子目文を施している。

16・17・19は、後期後葉の土器である。16は単純口縁の口頸部破片で、口縁部下端に縄文原体の刺突を施すものである。頸部には、櫛歯状工具による波状文を施している。17は頸部の波状文を施している。19は口頸部破片で、頸部径が比較的小さい。口縁部下端が段となり、刺突文を施している。頸部は、中央に3条の平行沈線を巡らして頸部文様帯を上下に分け、櫛歯状工具により波状文を施している。

20・21は、頸部から胴部の破片である。胴部は附加条1種（附加2条）の縄文を施し、頸部は無文である。

22～24は、胴部破片である。22は附加条の縄文を、23・24は附加条1種（附加2条）の縄文を施している。

25・26は、底部破片である。胴部に附加条1種（附加2条）の縄文を施し、底面には木葉痕がある。

18は、高坏の脚部破片である。脚柱部は短く、脚部は強く開いている。脚部外面には、LRの単節縄文を施している。

45は、紡錘車である。器厚があり、無文である。弥生時代以降の可能性もある。

#### 古墳時代（第142図27～29、第143図30～38）

第143図30・31は、前期の土師器である。30は、外面を赤彩するパレストタイプ壺の肩部破片である。櫛歯状工具により平行線文と連続弧文を施している。31は、高坏の脚部破片である。脚部は強く開き、穿孔がある。外面はハケ目調整後にナデ状の磨きを、内面はハケ目調整を施している。

第143図32・33は中期から後期の土師器で、高坏の脚部破片である。32は脚柱が円錐形で、33は脚柱が円筒形である。

第142図27～29は、後期の須恵器である。いずれも甕の体部破片で、27には内面に29には外面に自然釉が付着している。27・28は、外面に格子目状のタタキを施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。29は外面に平行タタキを施している。

第143図34～36は後期の土師器で、坏である。34は口縁部が外反し、内・外面ともに黒色処理を施している。35・36はともに口縁部が直立し、35が口縁端部が尖り、36が口縁端部に沈線を持つ。

第143図37は置竈の焚口部破片である。焚口上部には庇を付けている。

第143図38は碗である。平底で、体部外面下端はヘラ削りが施されている。古墳時代以降の可能性もある。

第143図46は土製模造品、第143図47・48は滑石製の石製模造品である。46は勾玉形、47は剣形、48は有孔円板である。

#### 平安時代（第143図41・44）

41は高台が「ハ」の字状に開く坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、口縁部は強く開いている。44は砥石である。各面とも研磨しており、上端面には縦横方向の研ぎ溝が残る。

#### 中世（第143図39・40・42・43）

39・40は土師質土器で、皿である。39は平底で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。40は丸底である。42は陶器で、突出した円盤状の台を付けたような底部破片である。43は常滑産の鉢で、口縁部破片である。口縁部は外傾している。

## 第4節 まとめ

八幡前遺跡の調査成果を時代ごとにまとめておきたい。

### 旧石器時代

石核・2次加工のある剥片・尖頭器・剥片が表土から出土している。今回の調査区は傾斜地であるため、関東ローム中部層まで流失している。剥片は、縄文時代以降の所産である可能性がある。

### 縄文時代

縄文時代の遺構は確認していない。前期後葉の浮島Ⅰ・Ⅱ式土器が表土から出土している。

### 弥生時代

2期に分けることができる。

#### 第1期（後期中葉）

第7号土坑が本期に属する。広口壺は有段口縁で、1段のものと2段のものがある。2段の有段口縁となるものには、1段目下に貼瘤を持つものと段部に刺突状の刻みを施すものがある。頸部には櫛歯状工具による連弧文・波状文・山形文を施している。第7号土坑出土土器は、頸部と胴部の境に貼瘤を巡らしている。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文を施している。本期の土器は、2段の複合口縁のものがあること、櫛状工具による連弧文を施すものがあること、附加条1種（附加2条）の縄文が施されることから、栃木県井頭遺跡5区1号住居跡・5区36号住居跡出土土器<sup>(1)</sup>と同じ時期の二軒屋式土器であり、鈴木編年のⅡ段階と位置付けることができる。

#### 第2期（後期後葉）

本期の遺構は確認していない。広口壺は単純口縁で、頸部に櫛歯状工具により波状文を施すものと細かい波状文を施すものがある。本期は、鈴木編年のⅢ段階に位置付けられる。遺構外出土の第142図19については、口縁部下端に隆帯状の痕跡があり頸部が複段化することから、鈴木編年のⅣ段階に位置付けることができる。

### 古墳時代

本遺跡の中心となる時代で、9期に分けることができる。

#### 第1期（4世紀中葉）

第52号土坑の時期である。本跡からは、脚が「ハ」の字状に開く高坏とミニチュア土器が出土している。

#### 第2期（4世紀後葉）

遺物包含層から有段口縁の壺が出土し、遺構外からパレストタイプの壺が出土している。

#### 第3期（5世紀後葉）

第33号住居跡、第23・24・30号土坑、第3・5号溝状遺構の時期である。第33号住居跡は、大半が調査区外にあり竈の有無は不明である。第30号土坑が遺物包含層の基底面で確認したことから、遺物包含層は本期から堆積する。土器の組成は、甕・甑・長頸壺・短頸壺・高坏・埴・坏・埵・須恵器坏・須恵器甃である。土師器の坏と埵は器高があり、口縁部が内彎するものと口縁部の断面が三角形で内面に稜があるものがある。赤彩率は少なく、第33号住居跡出土の坏は平底である。第24・30号土坑出土の須恵器坏は混入したものであり、陶

邑編年のMT15からTK10に併行する時期のものである。本期は、陶邑編年のTK208からTK23に併行する時期と考えられる。

#### 第4期（5世紀末葉）

第12・13・19・20・22・24号住居跡，第20・37・45・46・56・59号土坑の時期である。第12・20・22号住居跡には竈があり，竈は壁内に付設している。土器の組成は，甕・甑・短頸壺・坏・埴・須恵器甕である。甕は小型甕の割合が多くなる。高坏は脚柱が太くて短くなる。坏の内面にある稜は緩やかになり，口縁部は外傾し体部内面に放射状の磨きが施されるものが多くなる。赤彩率は，増加する。須恵器の甕は器厚が薄く，頸部に施された波状文は均整がとれている。本期は，TK23からTK47に併行する時期と考えられる。

#### 第5期（6世紀初頭）

第18・28号住居跡，第2号竪穴遺構の時期である。土器の組成は，甕・坏・埴に大型の坏・鉢・置竈が加わる。坏は，体部と口縁部との境に稜を持ち口縁部が外反するものが主体となる。赤彩率が高く，黒色処理された坏が出現する。本期は，MT15に併行する時期と考えられる。

#### 第6期（6世紀前葉）

第30・39号住居跡，第35・36号土坑の時期である。第30・39号住居跡の竈は壁内にあり，第30号住居跡の竈口部は円柱状の花崗岩を組み合わせて構築している。土器の組成は，甕・甑・高坏・鉢・坏・埴で，埴はなくなる。甑は大型と小型があり，大型の鉢形甑が出現する。坏は，体部と口縁部との境に突出した稜を持ち口縁部が内傾する須恵器模倣坏が組成に加わる。本期は，TK10に併行する時期と考えられる。

#### 第7期（6世紀後葉）

第6・8・29・31・37号住居跡，第1号竪穴遺構，第8・19・66・67・69号土坑の時期である。土器の組成は，甕・甑・坏・埴・ミニチュア土器・須恵器横瓶である。坏は体部と口縁部との境に突出した稜をもち口縁部が直立するものが主体となり，黒色処理される割合が高い。本期は，TK43に併行する時期と考えられる。また，第31号住居跡からは羽口が出土していること，第19号土坑からは鉄斧が出土していることから，製鉄が本遺跡で行われていた可能性がある。土製品は，第31号住居跡から土鈴が出土している。

#### 第8期（6世紀末葉）

第7号住居跡の時期である。土器の組成は，甕・坏・埴である。甕は，口縁部が短く外反するものである。坏は，器高が低く口縁部が短く直立するものが組成に加わる。本期は，TK209に併行する時期と考えられる。

#### 第9期（7世紀前葉）

第5・27号住居跡，第22・61・62号土坑の時期である。土器の組成は，甕と坏である。縦位の突帯を持つ置竈が第5号住居跡から出土しているが，本期の土器組成となるかどうかは不明である。本期は，TK217からTK46に併行する時期と考えられる。

### 平安時代.

2期に分けることができる。

#### 第1期（9世紀前葉）

第17・21号住居跡の時期である。第17号住居跡からは，「後家」と墨書された坏が出土している。

#### 第2期（9世紀後葉）

第1号住居跡の時期である。本跡からは，坏と高台付坏の他に羽釜が出土している。



## 中世

中世の遺構は確認されていないが、時期不明とした第9号住居跡が該当する可能性がある。遺物は、表土から土師質土器の皿や常滑産の鉢が出土している。

## 註・参考文献

- (1) 大金宣亮・橋本澄朗 『井頭遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第14集 栃木県教育委員会 1974年3月
- (2) 鈴木正博 「『十王台式』理解のために(1)」 『常総台地』 7 1976年3月
- (3) 鈴木正博 「栃木「先史土器」研究の課題(一)」 『古代』 第89号 1990年3月
- (4) 長谷川厚 「土師器の編年 関東」 『古墳時代の研究』 第6巻 土師器と須恵器 雄山閣 1991年5月
- (5) 檜村宣行 「茨城県南部における鬼高式土器について」 『研究ノート』 2号 茨城県教育財団 1993年7月
- (6) 浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(II)」 『研究ノート』 2号 茨城県教育財団 1993年7月



# 付 章 自然科学分析

## 八幡前遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 大久保浩二

### 1 はじめに

八幡前遺跡は、茨城県真壁町に所在する遺跡である。今回は、八幡前遺跡の調査で出土し、赤色顔料が塗彩された古墳時代土器片を観察する機会に恵まれた。その赤色顔料について、粒子形状の観察と成分の分析を行い、顔料の同定を試みたのでここに報告する。

一般に赤色顔料の種類には、ベンガラと水銀朱が考えられる。ベンガラの主成分は酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、水銀朱の主成分は硫化水銀 ( $\text{HgS}$ ) であり、それぞれ顔料粒子の形状に特徴が見られる。今回は、主にEDSによるX線分析(成分分析)で検出される元素をもとに、赤色顔料の同定を試みた。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡(低真空タイプLV-SEM)とエネルギー分散型X線分析装置(EDS)である。

### 2 試料

八幡前遺跡の調査で遺構から出土した、古墳時代土器片5点に塗彩された赤色顔料。土器片については、小破片のため掲載していない。試料1と試料2、試料3と試料4については、内外面塗彩された土器片を、外面と内面からそれぞれ採取した試料である。

### 3 SEM像の観察

試料2は、もやもやとした形状の不明確なものが観察される(写真1)。試料3には、中空のパイプ状をした粒子が観察された。口径が $1\sim 2\mu\text{m}$ で、長さは $5\sim 20\mu\text{m}$ 程である(写真2)。試料4は、パイプ状らしい粒子が観察されるが、細片状のものが散在している。試料1・5~7についても、特徴的な粒子は観察されなかった。

### 4 X線分析

X線分析は、加速電圧20kV、有効時間100秒、取り出し角度 $26.57^\circ$  作動距離20.0mmの測定条件で行った。分析の結果、すべての試料からFeが顕著なピークとして検出された。AlやSiなどのピークも検出されているが、これらは土器の胎土や土壌からの汚染であると考えられる。(図1に試料2、図2に試料3のX線分析スペクトル図を示す。)

### 5 まとめ

赤色顔料の種類は、すべての試料からFeのピークが検出されたことから、酸化第二鉄を主成分とするベンガラであることが考えられる(表1)。特に、試料3は、ベンガラの「パイプ状粒子」が検出されたことは興味深い。また、試料1・4~7の細片状のものは、このパイプ状粒子を細かく粉碎したものと考えられるが、明確にはできなかった。

パイプ状粒子は、その生成過程などに不明な点が多く、注目されている粒子である。鹿児島県では、縄文時

代早期後葉から比較的良好に検出される粒子であるが、茨城県内の状況はいかがであろうか。今後、茨城県内出土資料の赤色顔料分析が増加することを望みたい。

個体番号	試料番号	遺構	時期	塗彩の状況	X線分析	粒子の形状	顔料の種類	備考
1	1	S I 18	6世紀初頭	内外面塗彩	Fe		ベンガラ	外面分析
	Fe					ベンガラ	内面分析	
2	3	S I 19	5世紀末葉	内外面塗彩	Fe	パイプ状	ベンガラ	外面分析
	Fe					ベンガラ	内面分析	
3	5	S I 12	5世紀末葉	内外面塗彩	Fe		ベンガラ	内面分析
4	6	S X 2	6世紀初頭	内外面塗彩	Fe		ベンガラ	外面分析
5	7	S X 2	6世紀初頭	不明瞭	Fe		ベンガラ	外面分析

表1 赤色顔料分析試料一覧表

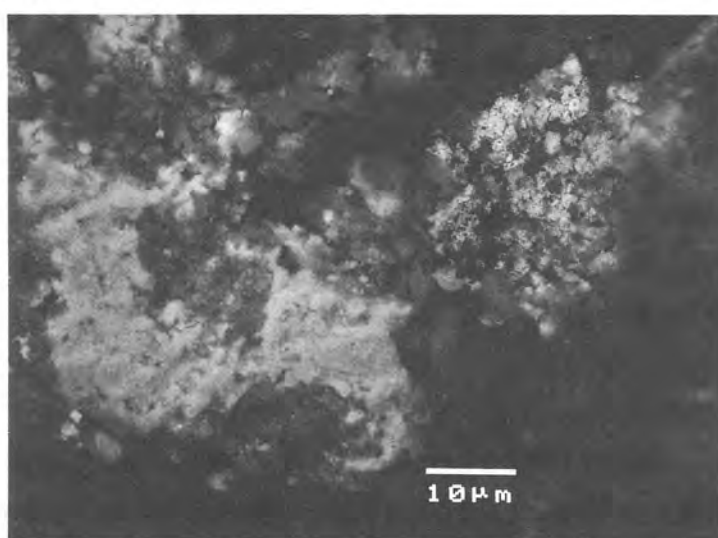


写真1 試料2のSEM像(反射電子像)

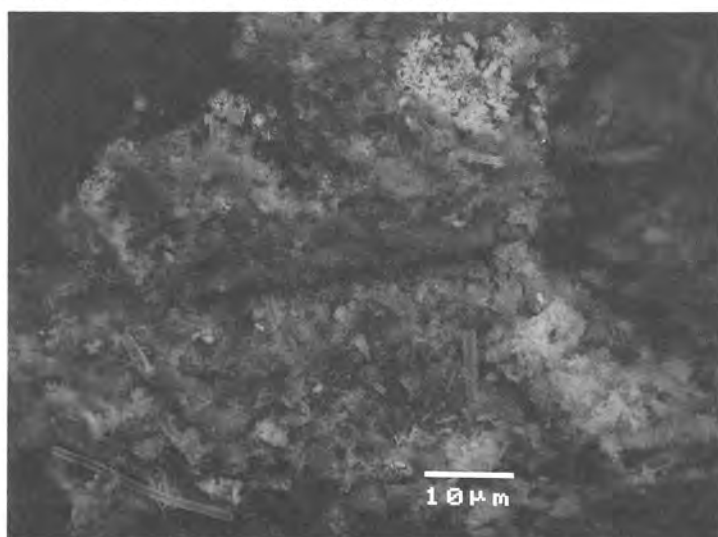


写真2 試料3のSEM像(反射電子像)

フルスケール 8k

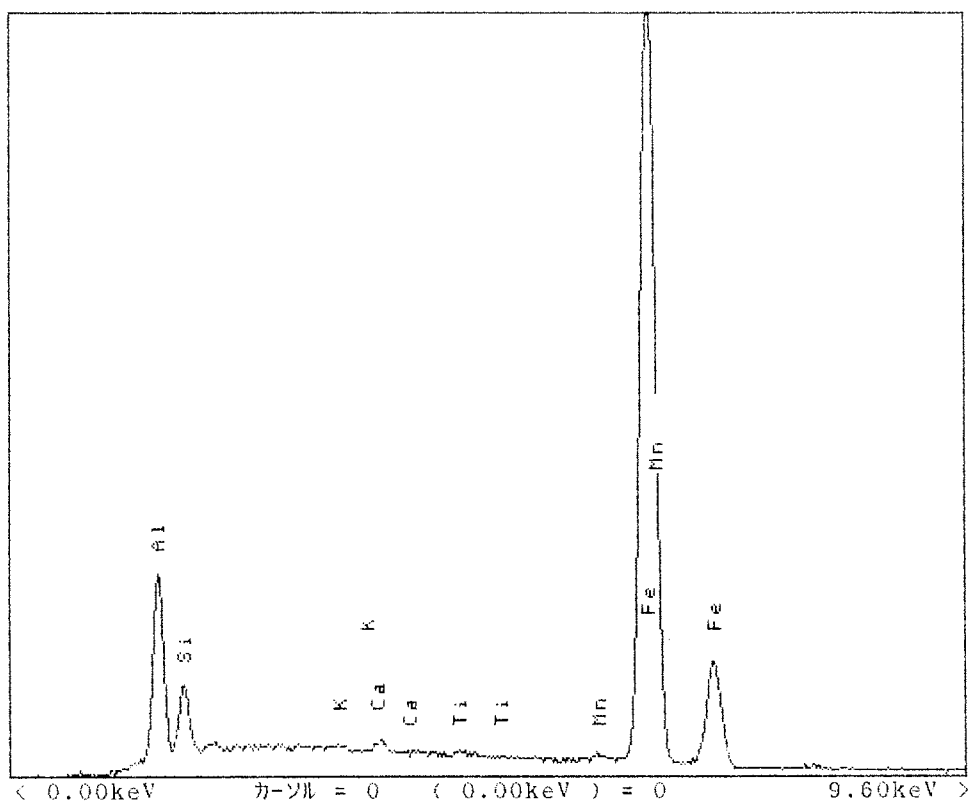


図1 試料2のX線分析スペクトル図

フルスケール 8k

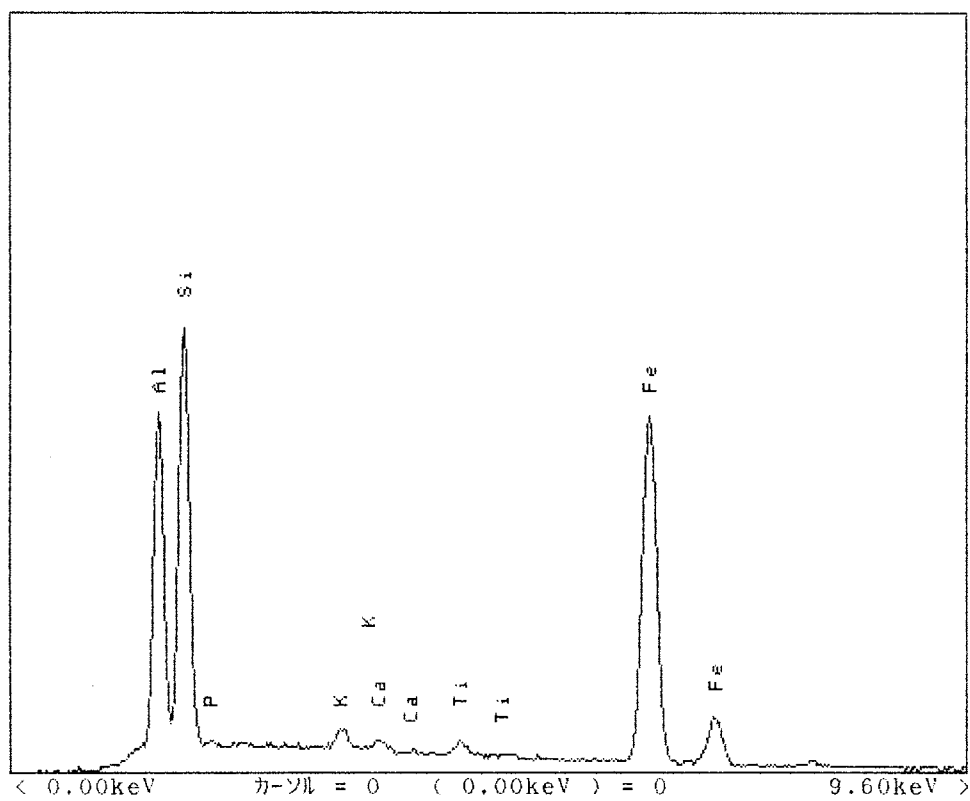


図2 試料3のX線分析スペクトル図

写 真 图 版

小 山 遺 跡  
八 幡 前 遺 跡



遺跡周辺航空写真



〈上〉 小山遺跡遠景(北から), 〈下〉 小山遺跡全景





〈上〉第1号住居跡全景，〈下〉第2号住居跡全景

PL 4



〈上〉第3号住居跡全景，〈下〉第4号住居跡全景



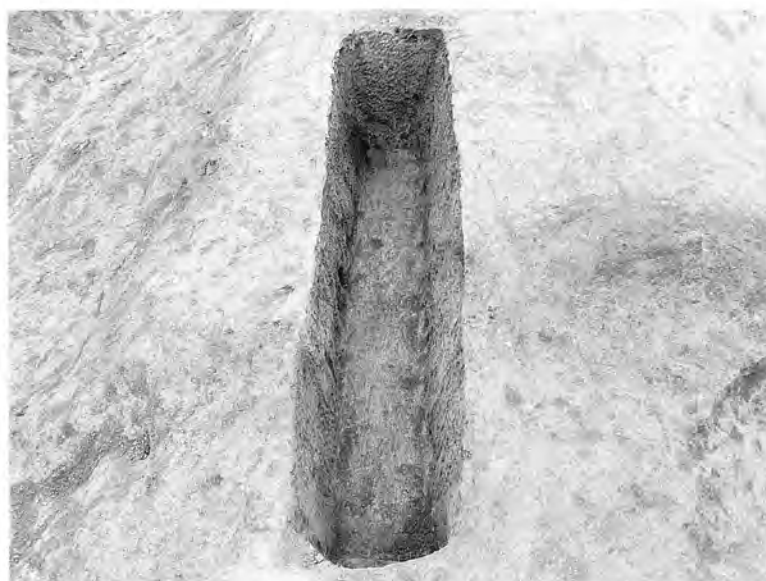
〈上〉 第 5 号住居跡全景, 〈下〉 第 6 号住居跡全景



〈上〉第7・8号住居跡全景, 〈下〉第1号墳周溝



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 5 号土坑全景



第 3 号土坑遺物出土狀況



SI2-1



SI6-4



SK3-3



SII-1



SK3-1



SK3-2

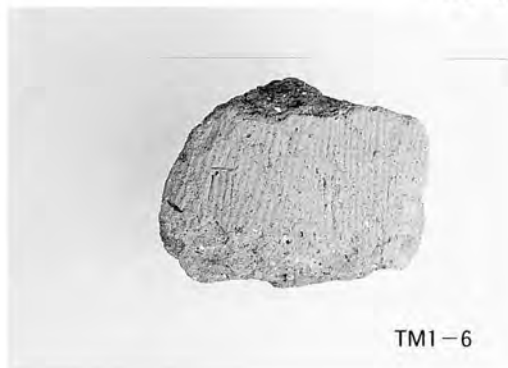


遺構外-73



SK3-4

第1・2・6号住居跡，第3号土坑，遺構外出土遺物



第6・7・8号住居跡，第1号墳出土遺物



〈上〉 八幡前遺跡全景(西から), 〈下〉 八幡前遺跡全景(東から)

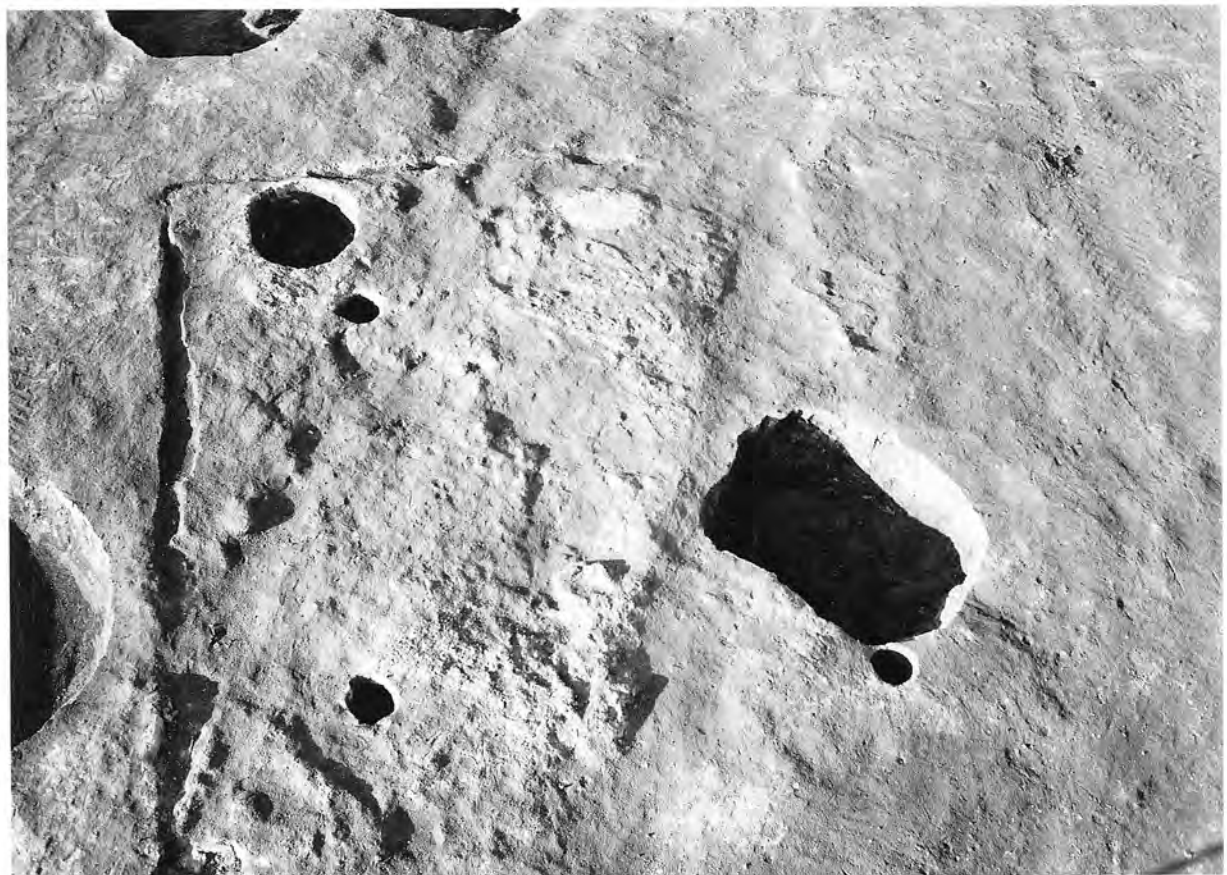




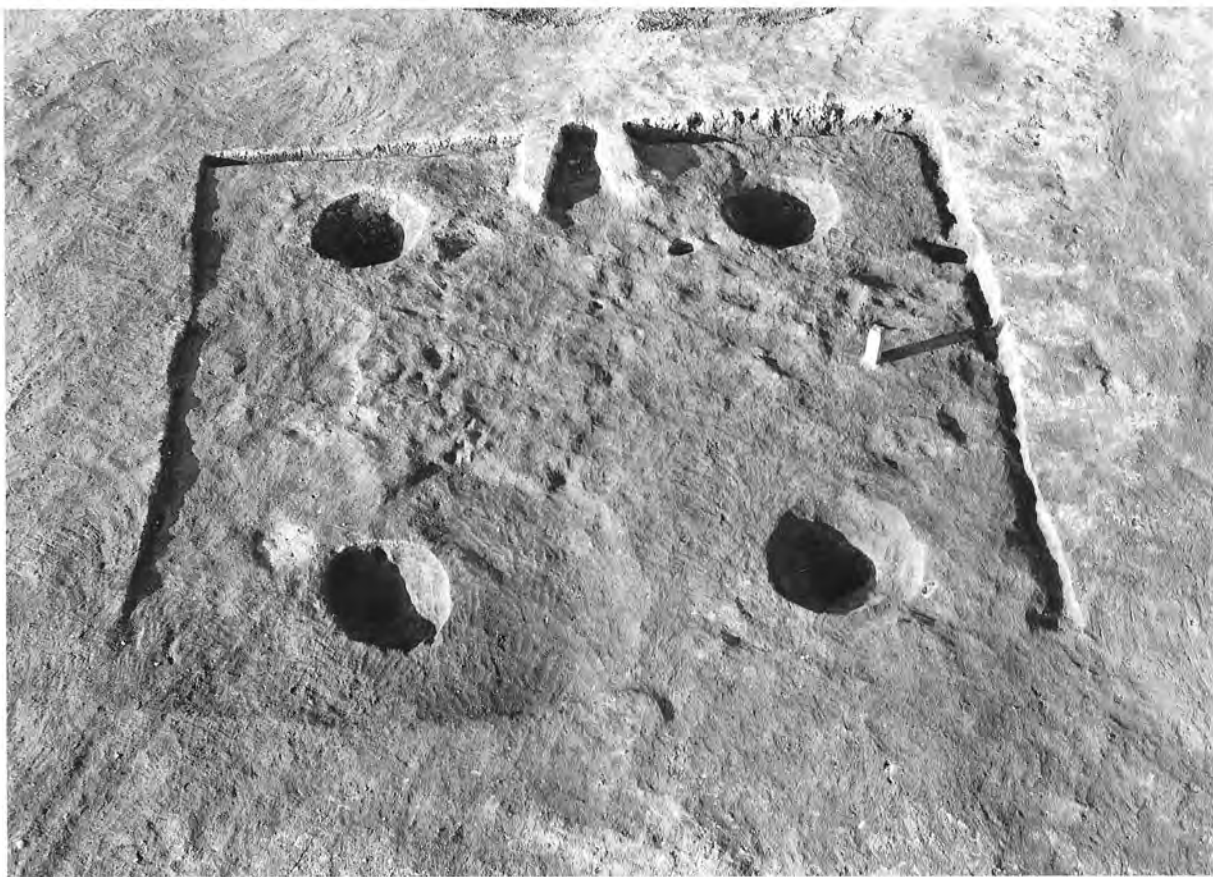
〈上〉 遺物包含層土層断面, 〈下〉 第5号住居跡全景



〈上〉第6・7号住居跡全景, 〈下〉第6号住居跡P<sub>1</sub>遺物出土状況



〈上〉 第19号住居跡全景, 〈下〉 第20号住居跡全景



〈上〉 第22号住居跡全景, 〈下〉 第24号住居跡全景



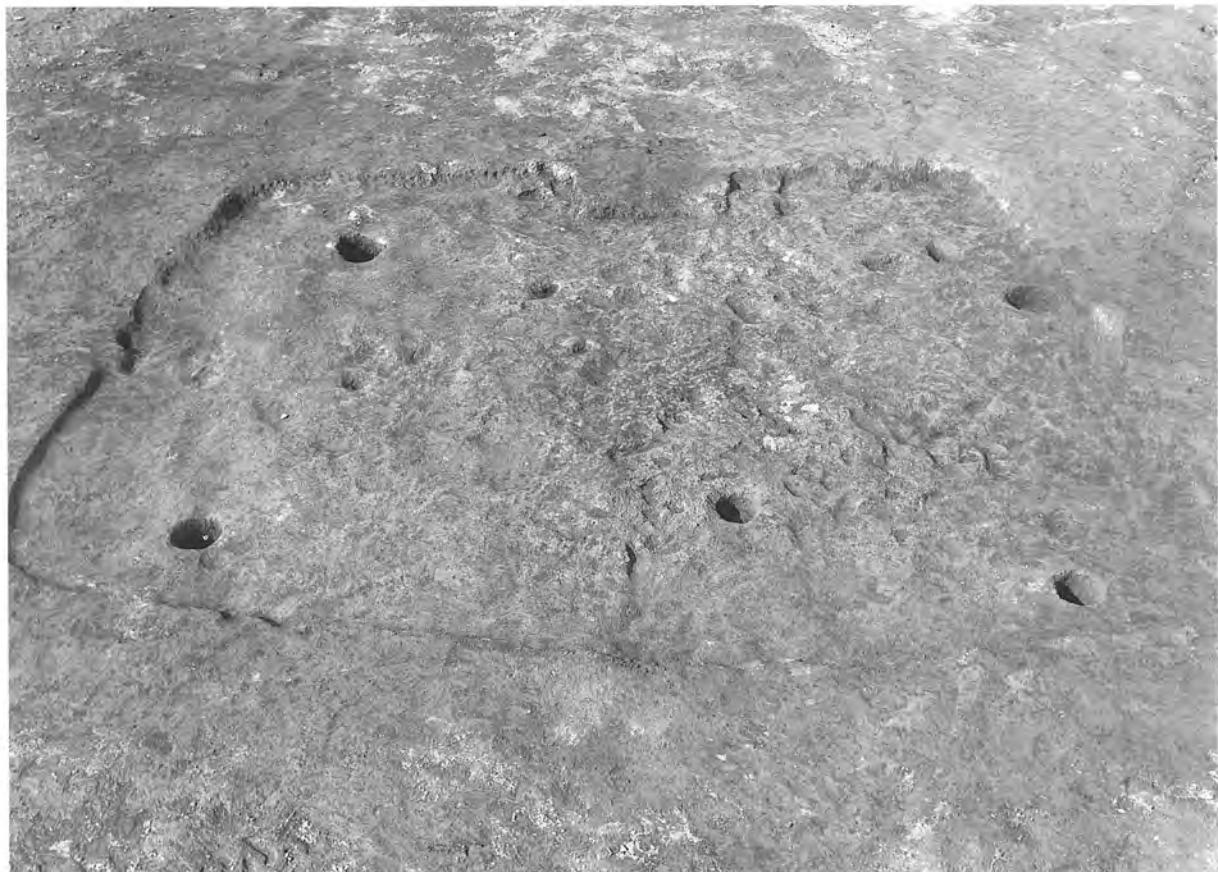
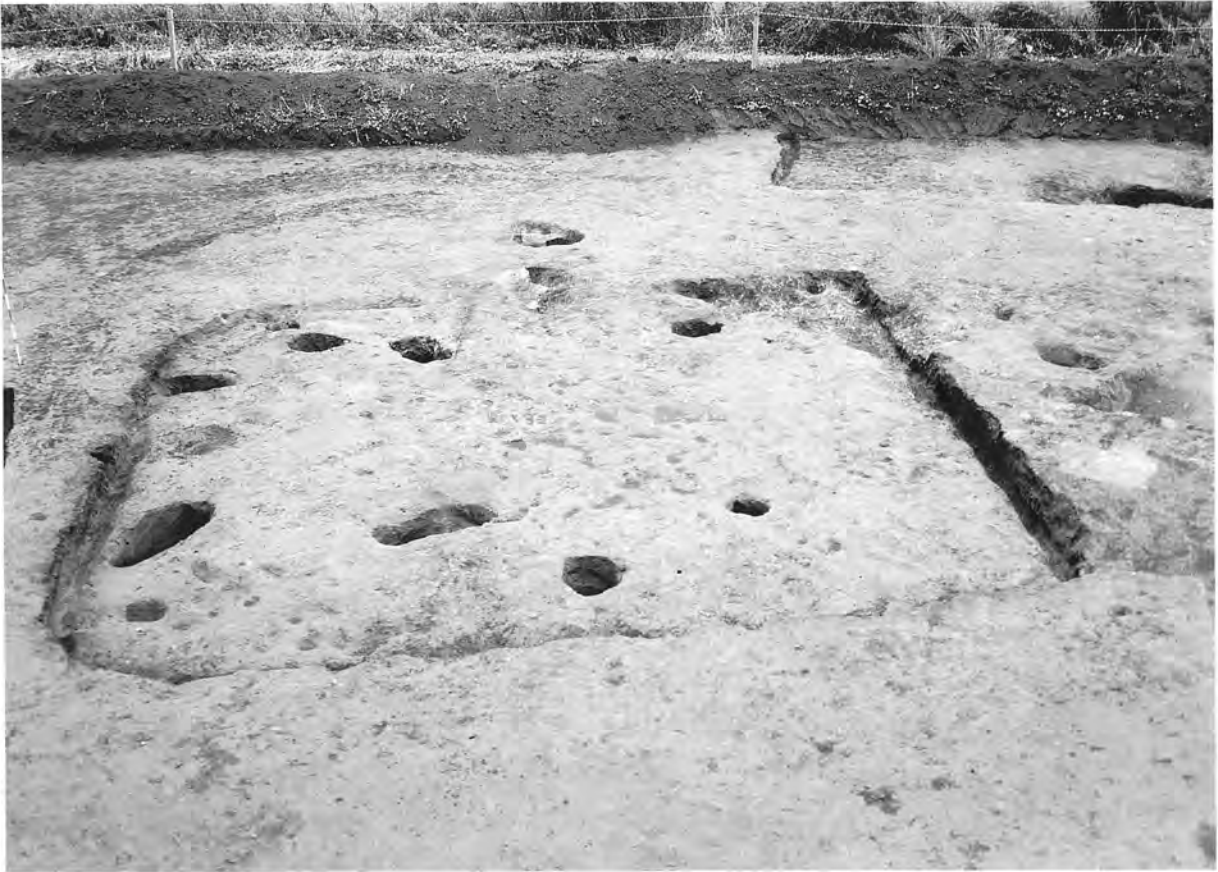
〈上〉 第25号住居跡全景, 〈下〉 第28号住居跡全景



〈上〉 第30号住居跡全景, 〈下〉 第30号住居跡 竈



〈上〉第31号住居跡全景, 〈下〉第31号住居跡 竈



〈上〉 第17号住居跡全景, 〈下〉 第21号住居跡全景





〈上〉 第9号住居跡全景, 〈下〉 第2号竖穴遺構全景



〈上・下〉 第1号竖穴遺構遺物出土状況



第2号竖穴遺構遺物  
出土状況



第2号竖穴遺構遺物  
出土状況



第2号竖穴遺構遺物  
出土状況



〈上〉 第19号土坑遺物出土状況, 〈下〉 第30号土坑遺物出土状況



〈上〉 第46号土坑遺物出土状況，〈下〉 第16号土坑土層断面



第 8 号土坑遺物出土狀況



第35・36号土坑土層断面



第49・60土坑全景



〈上〉 第2号溝状遺構, 〈下〉 第5号溝状遺構



第7号土坑，第6·8·18·19·20号住居跡出土遺物





第6・19・22・28・30号住居跡出土遺物





SI30-1



SI30-19



SI31-24



SI31-25

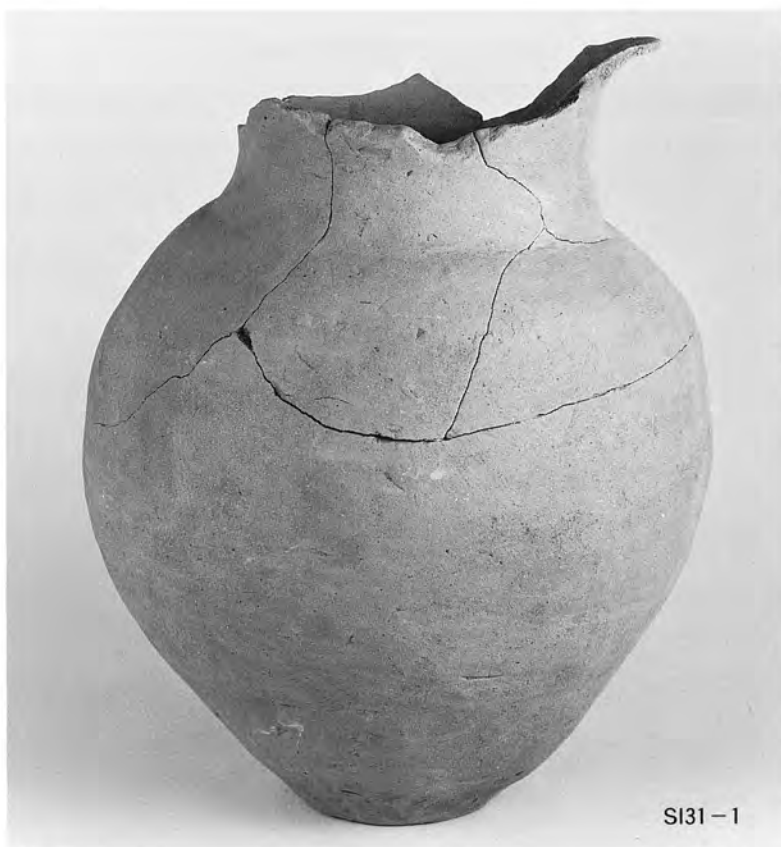


SI28-2



SI30-9





第31・37・39号住居跡出土遺物



第31号住居跡，第1号竖穴遺構出土遺物



SI39-1



SX1-4



SX1-5



SX1-8



SI39-6



第1・2号竖穴遺構出土遺物





SX2-6



SX2-29



SX2-30



SX2-31



SX2-8



SX2-4



SX2-32



SX2-34



SX2-37



SX2-41



SX2-47



SX2-49



SX2-16



SX2-48



第 2 号 豎 穴 遺 構 出 土 遺 物



SK23-1



SK30-5



SK45-2



SK30-8



SK30-10



SK30-12



SK30-13



SK35-1



SK45-1



SK56-2



SK62-3



SK46-5



SK52-2



SK19-3

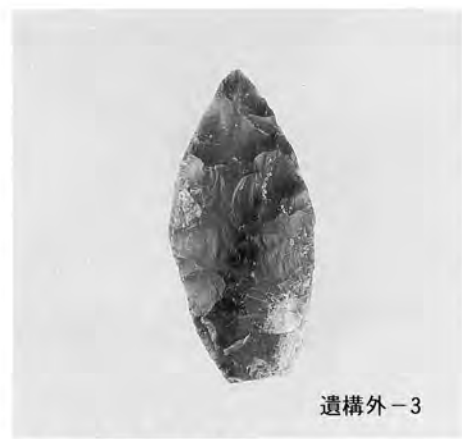


SK52-1



SD5-8

第19·45·46·52·56·62土坑，第5号溝出土遺物



第3・5号溝状遺構，遺物包含層，第1・17号住居跡，第1号井戸，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第99集  
(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

小 山 遺 跡  
八 幡 前 遺 跡

平成7 (1995) 年3月24日 印刷  
平成7 (1995) 年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番地2  
T E L 0292-25-6587

印刷 (有) ミツギ印刷社  
T E L 0292-52-8481

